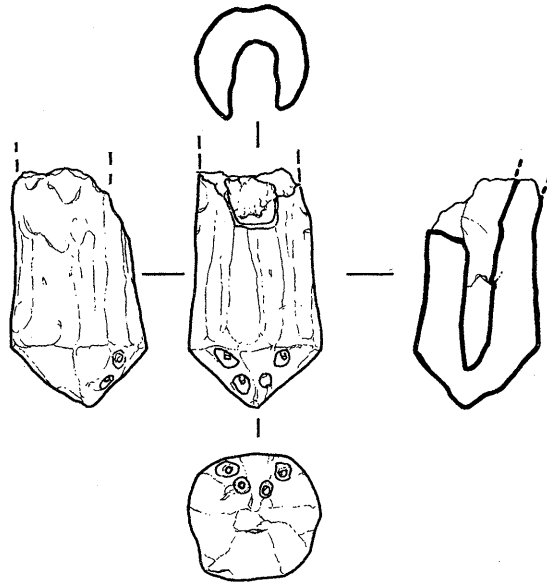


太宰府・佐野地区遺跡群14

佐野土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
前田遺跡第4・5・6次調査

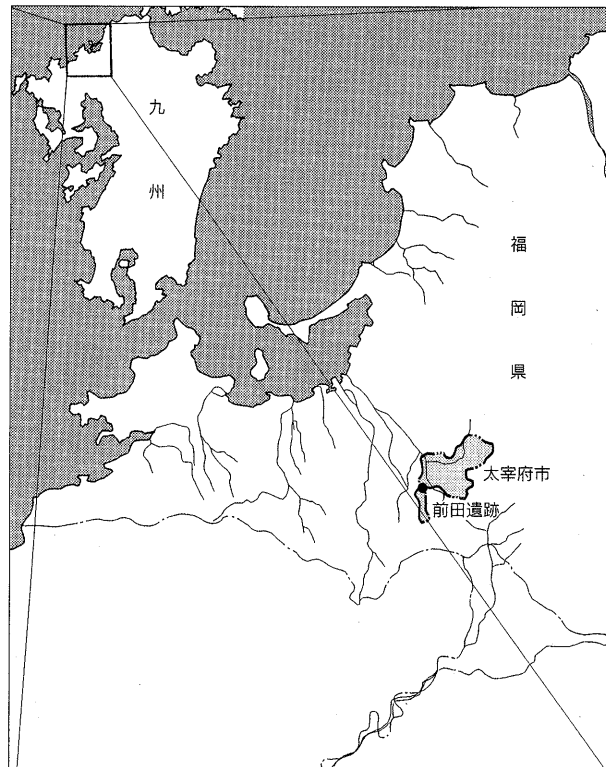


2002

太宰府市教育委員会

太宰府・佐野地区遺跡群14

佐野土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
前田遺跡第4・5・6次調査



2002

太宰府市教育委員会



1 前田遺跡 古代官道



2 前田遺跡4次調査 古代墳墓4ST115



3 前田遺跡6次調査 竪穴式住居6SI030出土土器群



4 前田遺跡5次調査 古代官道側溝出土土器

序

前田遺跡第4、5、6次調査は、佐野地区土地区画整理事業に伴って実施した埋蔵文化財の発掘調査です。

調査地は「買地券」が出土した大宰府官人の葬送の地として知られる宮ノ本遺跡の東側に位置し、調査地内では鴻臚館から大宰府政庁をつないでいた古代官道が発見されています。今回の発掘調査では弥生時代の住居や平安時代の墳墓をはじめ、道路、建物、など当時の生活空間を知る上で貴重な成果を得ることができ、大宰府の歴史的な解明にとって大きな手がかりになるものと考えられます。

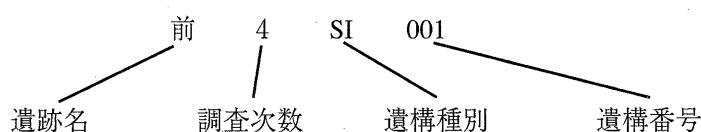
本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財調査に対してご協力頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成14年3月
太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例 言

- 1.本書は、太宰府市教育委員会が平成元年から平成2年度に実施した前田遺跡第4・5・6次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2.本書に掲載した資料の調査に関わる経緯については、第1章に記載している。
- 3.本書に掲載した資料の整理は、平成13年度に実施した。
- 4.周辺調査区の配置については平成11年度に刊行した『太宰府・佐野地区遺跡群X』を参照されたい。
- 5.遺構および遺物の実測及び図の浄書は、調査、整理担当者の他、山本麻里子・松隈里恵子・森部順子・阿部浩子・境一美・島純子・小串房子がおこなった。
- 6.遺物の写真撮影は山村がおこなった。
- 7.出土した金属製品の保存処理は、狭川麻子・下川可容子が担当した。
- 8.本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、SB掘立柱建物跡、SA柵列跡、SI住居跡、SK土坑、ST墳墓、SD溝、SX その他の遺構 などであり詳細は『佐野地区遺跡群I』に記載している。



- 9.本書の執筆・編集は山村がおこなった。また、前田遺跡の弥生時代後期の住居から出土した炭化米の分析、考察について佐賀大学農学部の和佐野喜久生、牛嶋覚両先生にご寄稿いただいた。この原稿は巻末の特論で掲載した。
- 10.出土遺物および図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。
- 11.本書で用いる分類や技法の詳細は以下の文献に記載されている。

弥生前期土器

太宰府市教育委員会（1998）『太宰府・佐野地区遺跡群VIII』p55～57

弥生後期土器

太宰府市教育委員会（2001）『太宰府・佐野地区遺跡群XI』p80（本書p52で一部修正）

土師器・須恵器

太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡II』

太宰府市教育委員会（1992）『宮ノ本遺跡I—窯跡篇—』

陶磁器

太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡XV』

製塩土器

森田勉「焼塩壺考」（1983）『大宰府古文化論叢』下巻（1995『大宰府陶磁器研究』再録）

目次

第1章 調査環境	1
1. 調査の概要	
2. 整理作業の体制	
第2章 調査の概要	3
(1) 前田遺跡4次調査	3
1. 調査の状況	
2. 遺構	
3. 遺物	
(2) 前田遺跡5次調査	56
1. 調査の状況	
2. 遺構	
3. 遺物	
(3) 前田遺跡6次調査	73
1. 調査の状況	
2. 遺構	
3. 遺物	
第3章 考察	133
a 遺跡の時間的空間的推移	
b 古代官道について	
c 古代の墳墓について	
第4章 特論	135
前田遺跡の炭化米粒特性と稲作起源 (和佐野喜久生・牛嶋覚・山村信榮)	

第1章 調査環境

1. 調査の概要

前田遺跡4・5・6次調査は市施行の「佐野地区土地区画整理事業」に伴って発掘調査を実施したもので、既に報告している前田遺跡1・7・11次調査に隣接する一連の調査である。特に本報告の3地点については隣接するうえに、調査期間も連続ないし重複しておこなった調査であり、本書で一括して報告するものである。

調査の概要を以下に列挙する。

前田遺跡4次調査

所在地 大字向佐野字前田452、453-1、455-1、457番地

調査面積 1,450平方メートル

調査期間 1989年8月24日～1989年9月8日

調査担当者 狭川真一、城戸康利、中島恒次郎、緒方俊輔、山村信榮

調査補助員 山田富美 瀬口慎司（現滋賀県文化財保護協会）

調査参加者 出口直美

調査協力者 木下良、日野尚志（佐賀大学）、奥村俊久（筑紫野市教育委員会）、田崎博之（愛媛大学）

前田遺跡5次調査

所在地 大字向佐野字前田454、455-2

調査面積 1,370平方メートル

調査期間 1989年8月3日～1989年11月20日

調査担当者 狭川真一、城戸康利、中島恒次郎、緒方俊輔、山村信榮

調査補助員 山田富美

前田遺跡6次調査

所在地 大字向佐野字前田403、420-1

調査面積 1,520平方メートル

調査期間 1989年11月17日～1990年2月5日

調査担当者 狭川真一、中島恒次郎、山村信榮、

調査補助員 山田富美

調査協力者 武末純一（現福岡大学）、藤沢典彦（現大谷女子大学）

また、本報告の発掘調査に係わる体制は以下の通りである。

（平成元／1989年度）

総括	教育長	藤 壽人（～元年6月30日） 長野治己（元年8月8日～）
庶務	教育部長	西山義則
	社会教育課長	関岡 勉
	文化財係長	鬼木富士夫
	主 事	岡部大治 白水伸司

調査	技 師	山本信夫 狭川真一（発掘調査担当） 城戸康利（発掘調査担当） 緒方俊輔（発掘調査担当） 山村信榮（発掘調査担当）
	技師（嘱託）	中島恒次郎（発掘調査担当） 狭川麻子（2年1月5日～）（保存処理担当）

（平成2／1990年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	西山義則
	社会教育課長	関岡 勉
	文化財係長	鬼木富士夫
	主任主事	岡部大治
	主 事	白水伸司
調査	主任技師	山本信夫 狭川真一（発掘調査担当） 城戸康利（2年7月1日～）（発掘調査担当）
	技 師	城戸康利（～2年6月30日） 緒方俊輔 山村信榮（発掘調査担当）
	技師（嘱託）	中島恒次郎 狭川麻子（保存処理担当）

また、現場業務の遂行にあたっては、1／50スケールの全体図作成についてアジア航測（株）に業務委託しヘリコプター（実機）及び気球による写真測量を行いそのデータから作成した。

2. 整理作業の体制

本報告の整理に係わる体制は以下の通りである。

（平成13／2001年度）

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	神原 稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮（整理報告担当） 中島恒次郎 井上信正 高橋 学 宮崎亮一

技師（嘱託） 下川可容子（保存処理担当）
森田レイ子
佐藤道文

この他、調査に対して関係期間の方々、作業員さんにはたいへんなご配慮をいただき、ご苦勞をおかけしました。また、佐賀大学の和佐野喜久生、牛嶋覚両先生にはご多忙のところ、本遺跡出土の炭化米についてご考察いただきました。お礼申し上げます。

整理の流れや分類基準に関する参考文献については詳細に既述しており、以下の文献をご参照いただきたい。

『太宰府・佐野地区遺跡群I』1989 太宰府市教育委員会

『太宰府条坊跡XV』陶磁器分類編 2000 太宰府市教育委員会

なお、調査から12年の時間が経過し、記憶のみならず一部の遺物の所在がわからなくなっているものがあり、資料として本書に掲載できなかつたものがある。

3. 地形・基盤層・遺構検出状況

調査区は大佐野川北岸、宮ノ本丘陵の東裾にあり、7,11次調査地点の西側に高く3次調査地点の東方向に低くなっている。地盤となる土壌の堆積状況は地表面近くでは調査区の西側=山側（西側）から供給された基盤層の花崗岩岩盤が風化、流出した土砂とその上面にたい積した八女粘土層、烏栖ローム層（第4紀層）に由来する粘土質と砂質の堆積地盤からなり、ボーリングデータではさらにその深層では6mに花崗岩岩盤とその上に砂、粘土層からなる堆積層に挟まれて第4紀層と考えられる粘土層が東に傾斜して堆積している。

遺構の検出環境は表土である灰色の旧耕作土（灰色土）下の遺物包含層（茶褐色土）を除去した時点で大半の遺構プランが認識された。

参考文献

『太宰府・佐野地区遺跡群VIII』1998 太宰府市教育委員会（前田遺跡7次）

『太宰府・佐野地区遺跡群IX』1999 太宰府市教育委員会（前田遺跡8,9,10,11次）

『太宰府・佐野地区遺跡群X』2000 太宰府市教育委員会（前田遺跡1次遺構編）

『太宰府・佐野地区遺跡群XI』2001 太宰府市教育委員会（前田遺跡1次遺物編）

『宮ノ本遺跡』1980 太宰府市教育委員会

『宮ノ本遺跡II』1992 太宰府市教育委員会

『太宰府市史考古資料編』1993 太宰府市

第2章 調査の概要

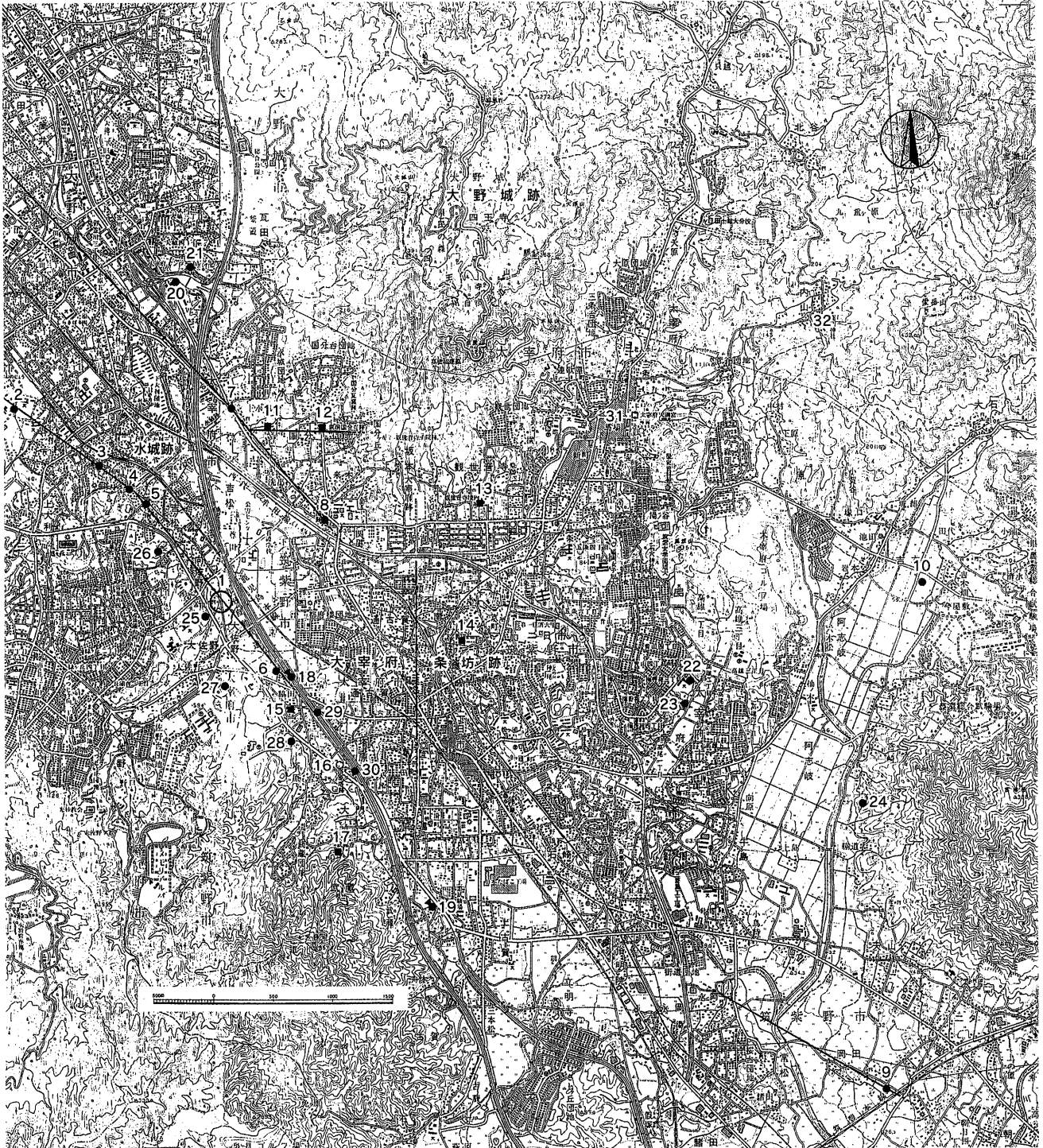
(1) 前田遺跡4次調査

1. 調査の状況

4次調査は1次調査において古代官道の側溝と考えられる溝を発見したため、その北西延長部分を延伸して調査したもので、1次調査後半の作業と重複して実施している。遺跡が形成された地盤は西側の花崗岩風化土地盤から供給された土砂と粘土、第4紀層に由来する粘土が茶褐色、黄色、白色と様々な色を織り成す2次的に堆積した脆弱なものである。土坑などの深い遺構は機能途中で壁面が崩落して埋没している土層を示すものが見られる。

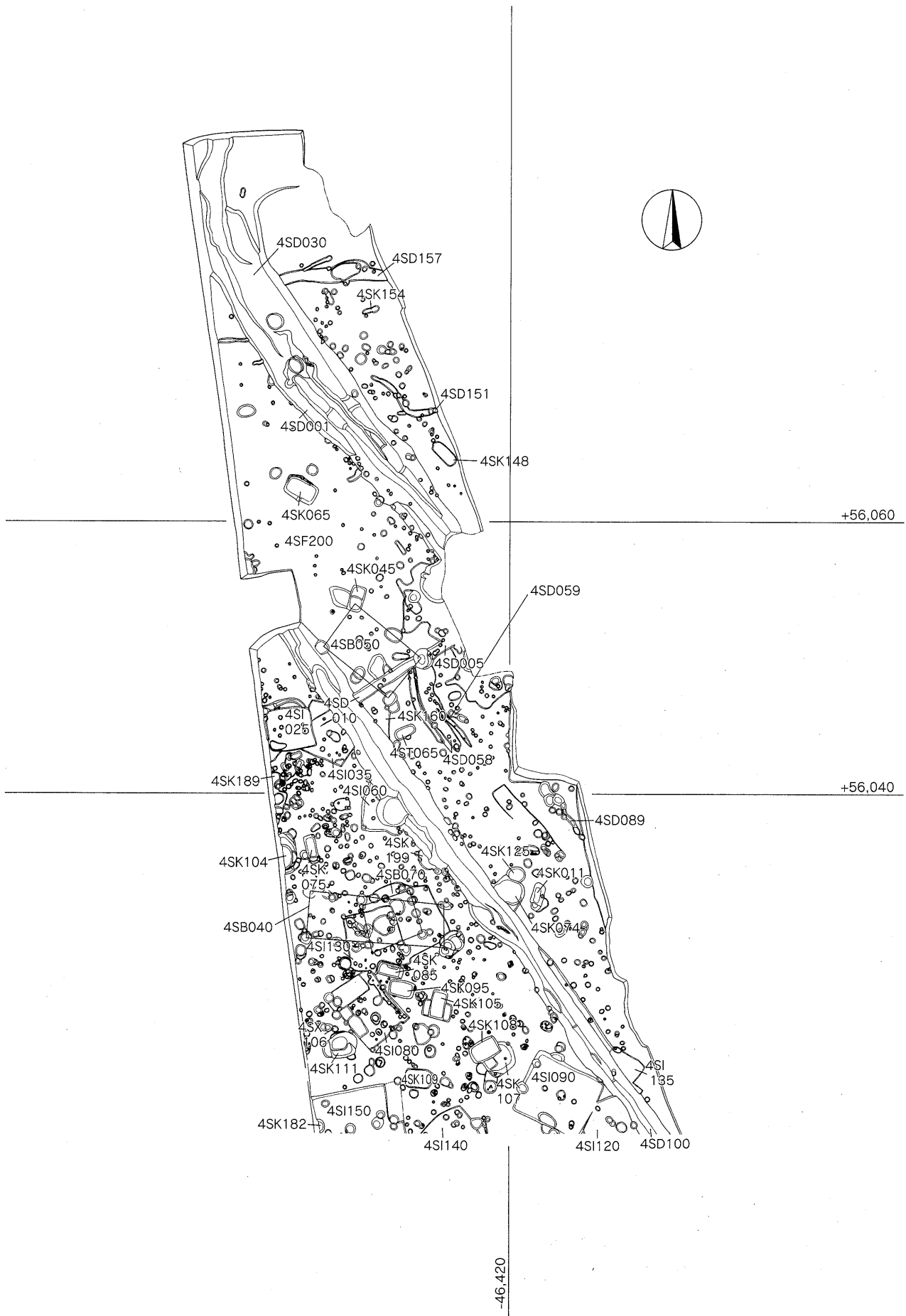
遺構の内容は7次調査区に中心を持つ弥生時代前期の住居と土坑（貯蔵穴）からなる集落跡、1次調査区に中心を持つ弥生時代後期の住居を主体とする集落跡、古墳時代の奈良時代の掘立柱建物、土坑、溝（古代官道側溝を含む）、平安時代の溝と墳墓などが確認されている。

2. 遺構



第1図 前田遺跡の周辺遺跡

- 古代官道関連遺跡
 1 前田遺跡 2 池田遺跡 3 谷川遺跡 4 水城西門 5 島本遺跡 6 糸坊99次 7 水城東門 8 試掘地点 9 岡田遺跡
 10 御笠地区遺跡群A区(蘆城駅家想定地)
- 古代寺院関連遺跡
 11 筑前国分尼寺 12 国分寺 13 観世音寺 14 般若寺跡 15 杉塚廃寺 16 塔ノ原廃寺(塔心礎) 17 武蔵寺 31 安楽寺天満宮
 32 竈門山寺
- 前期古墳関連
 18 剣塚古墳 19 原口古墳 20 成屋形古墳 21 笹塚古墳 22 菖蒲浦古墳 23 下高尾古墳 24 阿志岐古墳群
- 古代墳墓関連遺跡
 25 宮ノ本遺跡 26 篠振遺跡 27 殿城戸遺跡 28 脇田遺跡 29 唐人塚遺跡 30 桶田山遺跡



第2図 前田4次調査全体図 (1/400)

掘立柱建物

4SB040（第3図、図版2-2~4-2） 1×3間の掘立柱建物で、調査区の南側、4SB070に重複して検出された。柱痕の土層観察から直径20~30cmの柱材を使用していたことがわかる。柱cとeから須恵器片が出土し、eのものは8世紀代の皿aと考えられることから、遺構の埋没時期の下限はそこに置かれる。

4SB050（第3図、図版2-1~5-4） 1×2間の掘立柱建物で、調査区の中央で検出された。

柱の掘り方は楕円から隅丸方形を呈し、1m近くの深さで残存していた。柱痕の土層観察から直径30cm前後の柱材を使用していたことがわかる。柱間は短辺3.8m、長辺6.6m(2.8+3.8m)で1:1.7の比を成す。柱掘方から弥生前期の土器片と黒曜石フレークが出土し、柱fから板付II式相当の甕の口縁部が出土しており、遺構の埋没時期の下限はそこに置かれる。板付式期の遺物を持つ土坑4SK045に柱aが切られる。前期集落の中心は本調査区西側の7次調査区にあり、竪穴式住居跡と土坑（貯蔵穴）が直径30mほどの円弧を描くように展開し、本掘立柱建物はその円弧の北西側の低位部に位置している。

4SB070（第4図、図版2-2,3-1） 2×2間の総柱の倉庫型の掘立柱建物で、調査区の南側、4SB040に重複して検出された。柱痕の土層観察から直径15~20cmの柱材を使用していたことがわかる。柱cとgから須恵器の小蓋1片が出土しており、古墳時代後期の埋没と考えられ、方位が近似する竪穴式住居4SI140と同時期のものと考えられる。

竪穴式住居

4SI025（第4図、図版6-1,2） 暗灰褐色土、黒灰褐色土の順に堆積する。黒灰褐色土中に平安時代の墳墓4ST115が掘込まれていたが、調査当初にはこのプランが確認できず、この土層中に平安時代の遺物が混入している。弥生前期板付II式期の甕片が出土しており、埋没は前期前半から中ごろと考えられる。床面で2つの小ピットを確認したが、7次調査での同タイプの竪穴式住居の典型例（7SI065）のような支柱穴、炉跡が確認されなかった。平面規模においては典型例と遜色無いが、火床がないなど居住施設としては欠落する要素もあり、本格的な住居とは機能差がある可能性がある。

4SI035（第4図、図版6-3） 4SI025に切られる方形堀方の施設で、中央に直径40cmほどの支柱穴とそれに炉跡と考えられる窪みaが附随して確認され、7SI065例から弥生前期の竪穴式住居と判断される。弥生後期遺構のピットなどの切り合いがあることなどから、遺物の混入が見られる。堀方は4SI025とほぼ同規模である。

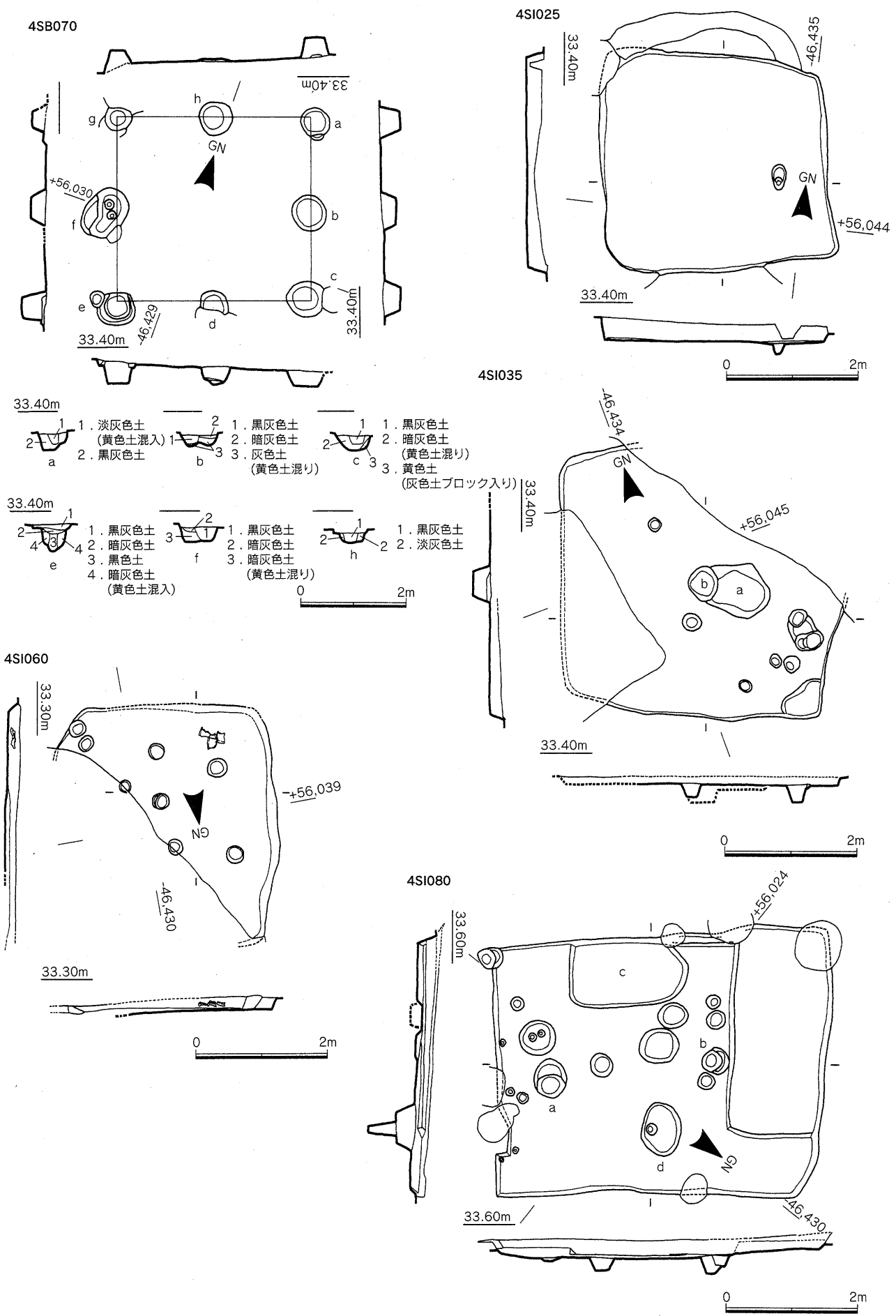
4SI060（第4図、図版7-1） 古代の溝4SD100に大半が切られる方形堀方の遺構で、4SI025に埋没土が近似することなどから、同遺構と土壌環境に近い時期に埋没したものと考えられる。4SI025同様に明確な支柱穴などが判明していない。板付式期の甕が出土している。

4SI080（第4図、図版7-2,3） 調査区の南側で検出された長方形の平面プランを持つもので、北西角に作り付けのベット状遺構を持っている。支柱穴は長辺方向に2つ（a,b）と見られ、西壁際にくぼみcが掘られる。

4SI090（第5図、図版3-2） 調査区の南側で検出された黒灰色土で埋没した正方形に近い長方形プランの遺構で、南東部を4SI120に切られる。埋没土層中で中央から南側の箇所では破砕した土器片群が検出された。床面中央には浅い窪みがあり、それを挟んで支柱穴と思われる1対のピットがある。南側中央には楕円形の土坑状の窪みがある。土層観察からは床面機能時には開いていたものと考えられる。

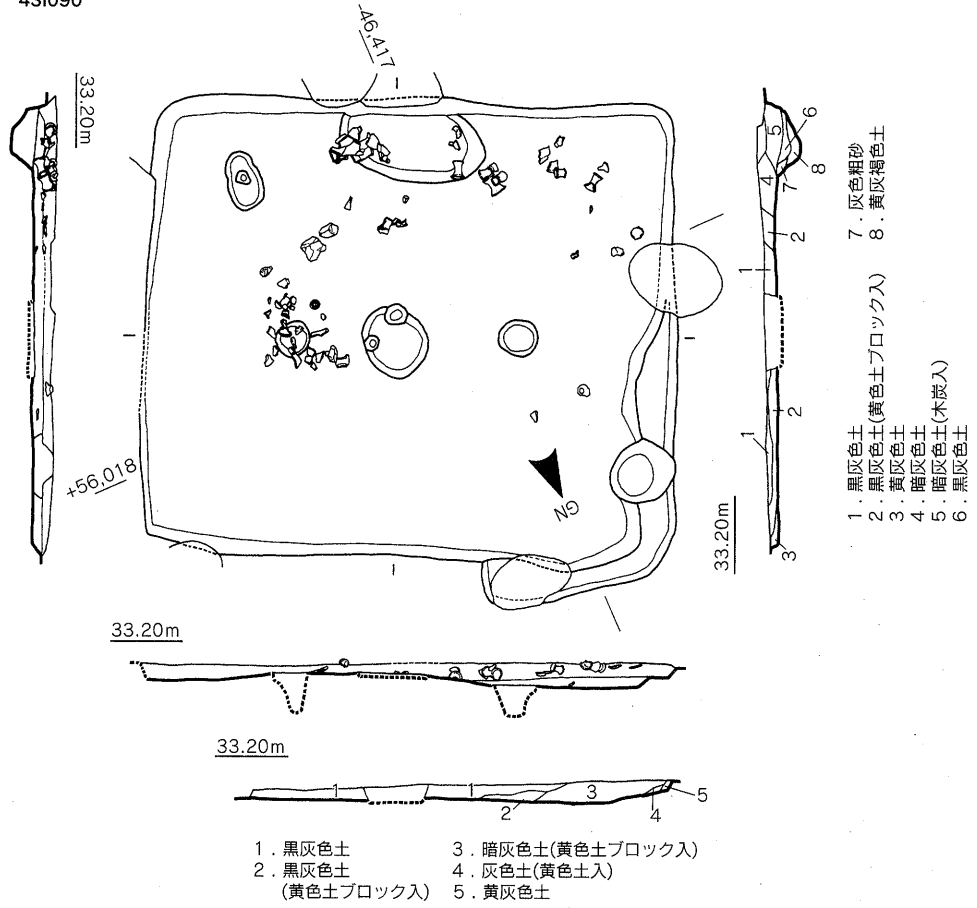
4SI120（第5図、図版8-1,2） 調査区の南側で検出された方形の堀方を持つ遺構で、茶褐色土で埋没する。埋没過程で土器片群が検出された。東西方向で1対のピットとその中央には浅い窪みがある。南側の壁際に「屋内土坑」と呼ばれる窪みcが検出されている。東側は奈良時代の溝4SD100に切り取られる。

4SI130（第5図） 調査区の中央やや南側で検出された正方形の堀方を持つ遺構で、南西角を4SI080に切られ、黒色土で埋没する。上面からの小ピットの切り込みが激しく、主要な柱などは特定できなかった。



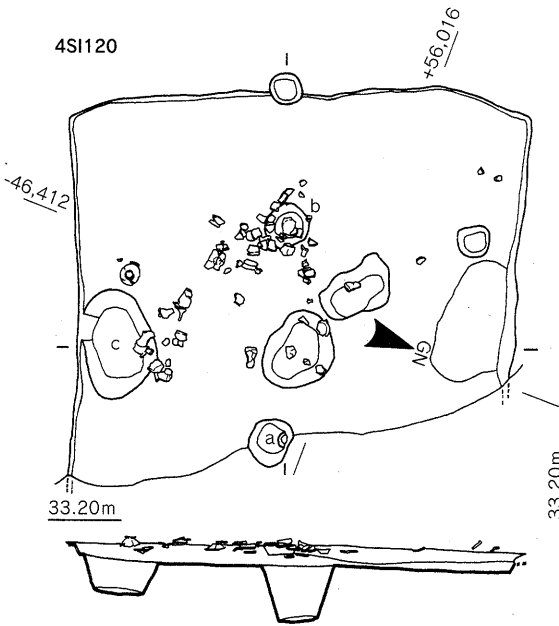
第4図 前田4次SB070,SI025,SI035,SI060,SI080遺構実測図 (070は1/100、他は1/80)

4SI090



- 1. 黒灰色土
- 2. 黒灰色土(黄色土ブロック入)
- 3. 暗灰色土(黄色土ブロック入)
- 4. 灰色土(黄色土入)
- 5. 黄灰色土
- 6. 黒灰色土
- 7. 灰色粗砂
- 8. 黄灰褐色土

4SI120

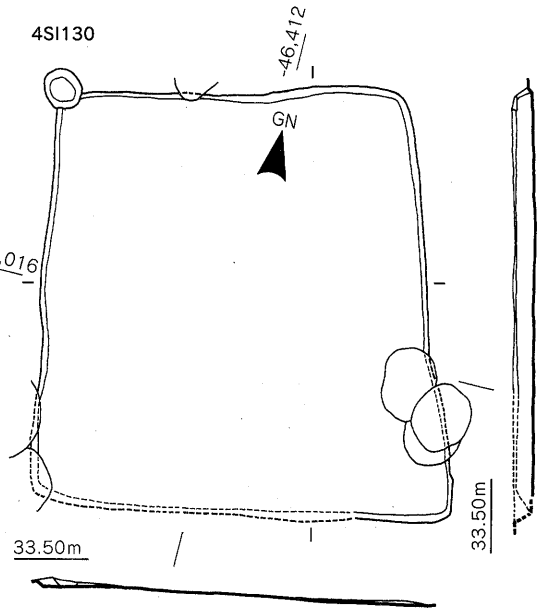


33.20m



- 1. 暗灰色土
- 2. 灰色土
- 3. 暗灰色粗砂土

4SI130



33.50m



第5図 前田4次SI090,SI120,SI130遺構実測図 (1/80)

4SI135 (第6図、図版3-2) 調査区南西の溝4SD100に切られる小規模な方形プランの遺構で、床面中央に焼けた痕跡(淡茶褐色の焼土)が見られる。弥生後期と考えられる土器片が覆土中から出土しているが、遺構は中央に浅い炉があるなど周辺に展開する弥生前期の住居のパターンに似ている。

4SI140 (第6図、図版8-3,9-1) 調査区の南側で検出され4SI145を切る正方形を呈す遺構で、黒灰色土の覆土から須恵器の小坏や小蓋が出土していることから、古墳時代後期に埋没したものと考えられる。床面に複数のピットがあるが、4本柱を想定している。

4SI145 (第6図、図版3-1) 4SI140に切られる長方形を呈す浅い遺構で、床面にはピットがあるものの堀方に対して良好な位置を示すものを抽出できない。

4SI150 (第6図、図版9-2) 調査区南西角にある長方形プランの遺構で北東角に灰色土で形成した作り付けのベット状遺構がある。南東角は矩形に掘り残される。遺構全体は暗灰色土で覆われ、床面では東西方向にa,b一対の支柱穴が、南壁際中央では隅丸長方形の土坑が検出された。調査時に4SK181と切り合い関係を誤認したため覆土中遺物には須恵器片などが混入しているが、それを除けば弥生後期中ごろ以降の所産と考えられる。

4SI180 (第6図、図版9-3) 4SI145の下層で検出された長方形を呈する遺構支柱穴や炉跡などは確認できなかった。床面の北西側に若干深いピットが見られる。弥生前期中ごろの板付II式期の甕片が出土している。

土坑

4SK011 (第7図、図版3-2) 調査区中央やや東寄り検出された南北に長い方形の遺構で、南側に若干の段差を持つ。

4SK045 (第7図、図版10-1) 調査区中央で検出された南北に長い長方形の遺構で、4SB050aの堀方を切って形成されている。遺構は土層観察から2度ほど掘り返されたことが想定できる。掘り返しの土層ラインはルーズである。板付I式期の土器片を含むが、4SB050自体にはII式期の土器片が含まれるため、それ以降の所産と考えられる。弥生前期の貯蔵穴に比定している遺構からすると浅く、別の用途が考えられる。

4SK055 (第7図、図版10-2,3) 4SK045の北西約6m付近で検出された方形プランの遺構で、土層観察から、緩慢な堆積によって埋没していることが分かる。覆土中に板付II式期の土器片を含み、それ以降の所産と考えられる。4SK045同様に浅く、プランとしては貯蔵穴とは一線を画す。

4SK074 (第7図、図版11-1,2) 調査区の中央やや南の4SD100に切られた形で検出された楕円形を呈する遺構で、床面は凹凸が著しい。黒灰色土で埋没するが、初期の堆積層には地山の黄色土のブロックが混じる。須恵器の甕片が出土しているが、出土土器の大半は弥生後期後半の土器片で占められている。埋没時期は弥生後期後半から古墳時代後期の幅で考えざるを得ない。

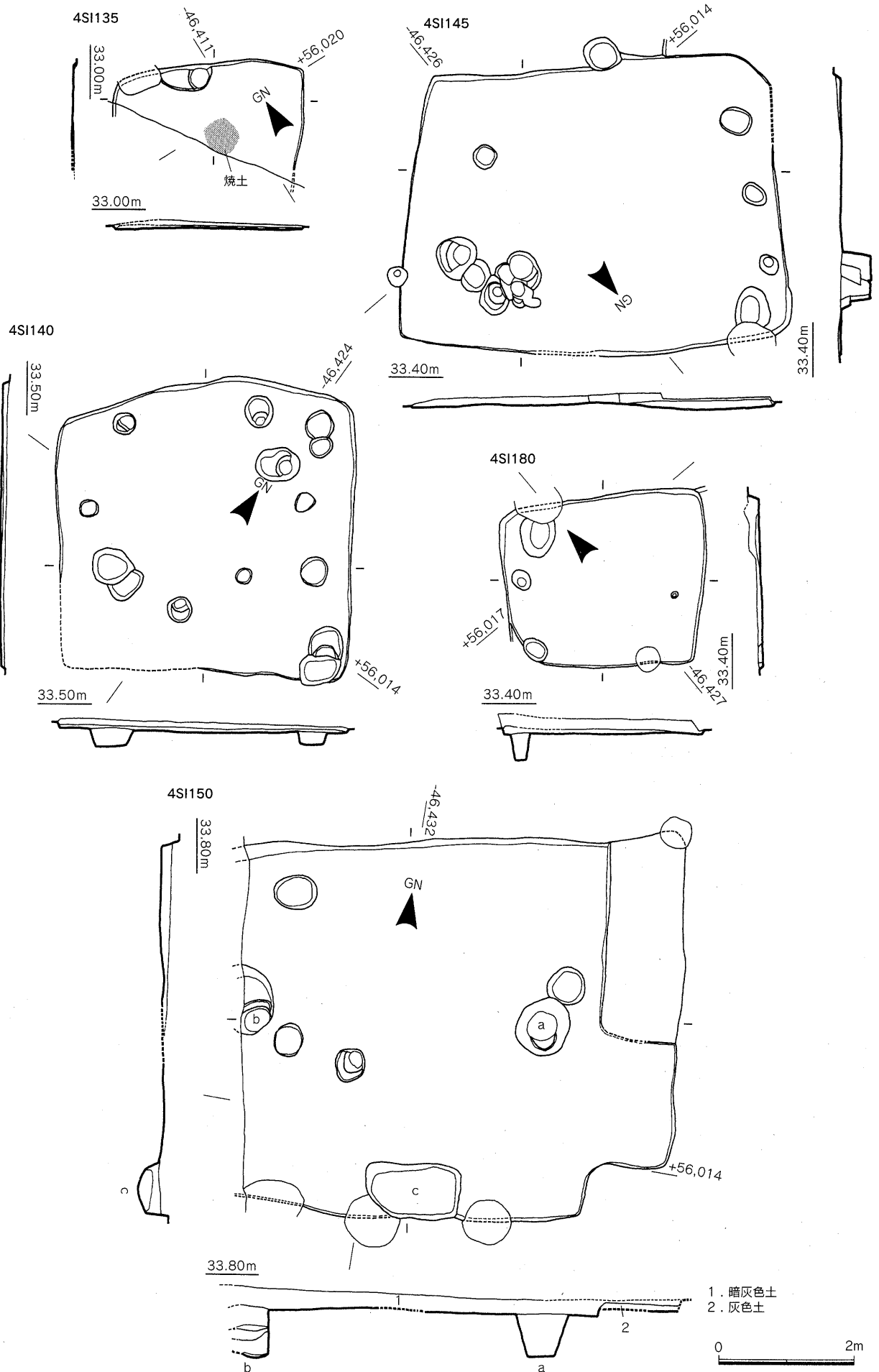
4SK075 (第7図、図版11-3) 調査区中央やや南東よりで検出された。南北に長い長方形を呈す。壁は直線的で深い堀方を持つ。土器片しか出土していないが、遺構が深めの状況から弥生前期に遡る可能性も考えられる。

4SK085 (第7図、図版12-1) 調査区中央やや南よりで検出された。長方形のプランを呈し、床面北側中央には溝状の窪みが見られる。土器が出土していないが、4SK105などと方位が近いことなどから、弥生前期に遡る可能性も考えられる。

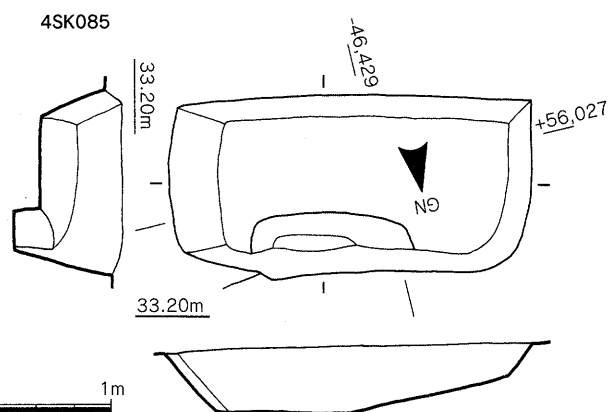
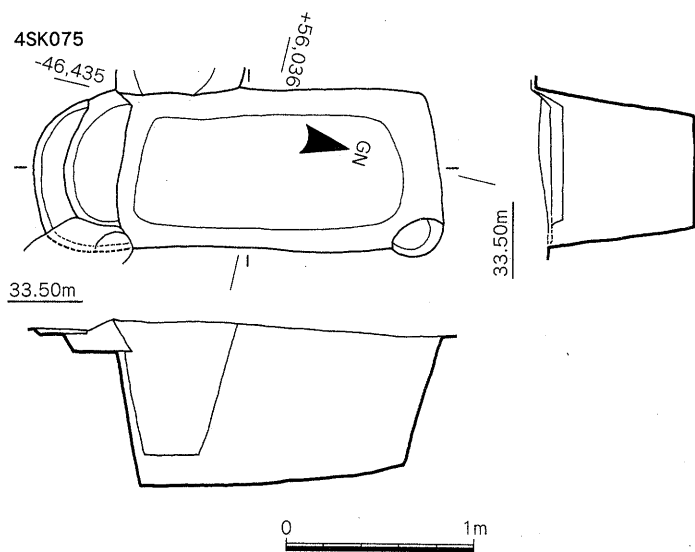
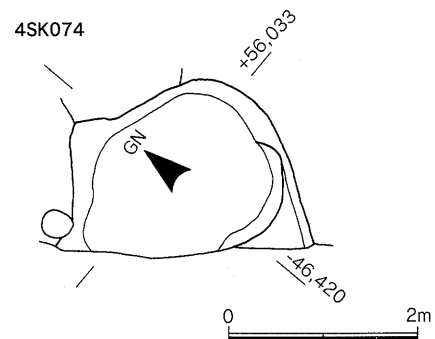
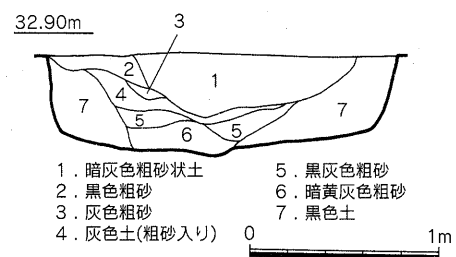
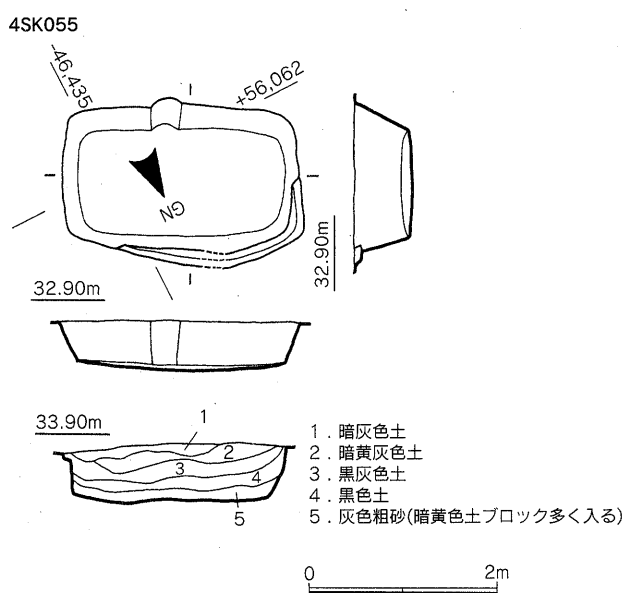
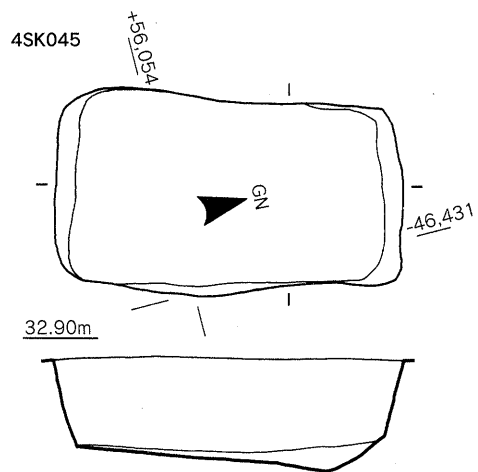
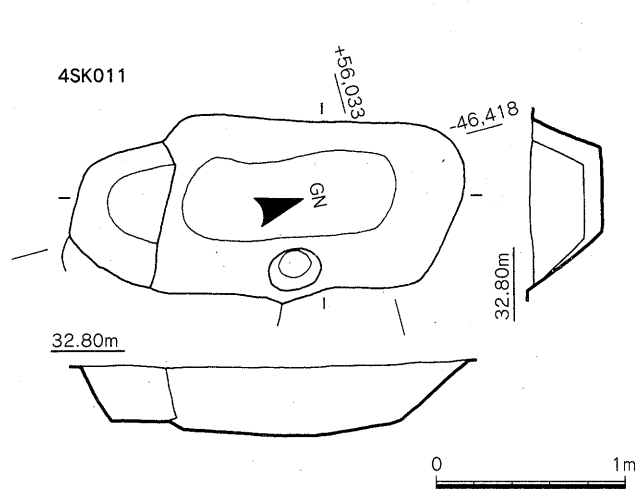
4SK095 (第8図、図版12-2,3) 4SK085と雁行形に平行して検出された長方形プランの遺構で、堆積層は緩慢に堆積した4つの層からなる。土層観察から最終埋没層(暗灰土)形成以前の埋没途中で杭のようなものが打たれた痕跡が見られる。最新の遺物は8世紀の須恵器坏片である。

4SK104 (第8図、図版3-1~4-2) 調査区中央の東壁際で検出された楕円形を呈す遺構で、段状に掘られている。8世紀の須恵器片が出土し、埋没はそれ以降のものである。

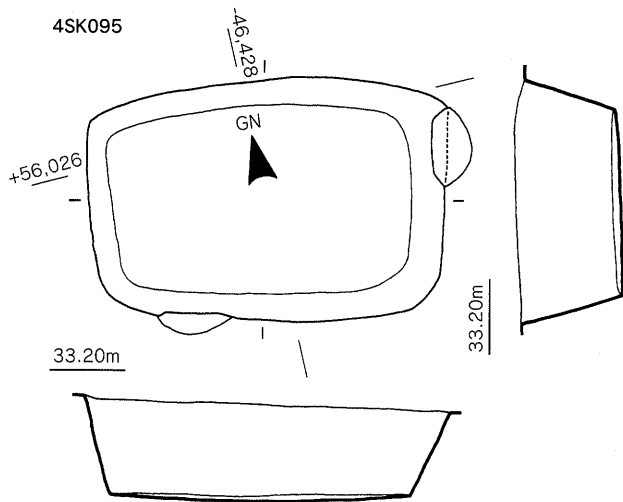
4SK105 (第8図、図版13-1~14-2) 調査区南側中央で検出された平面型がT字を呈す遺構で、掘り下げると



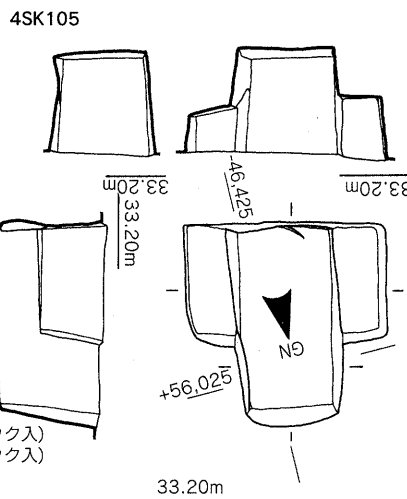
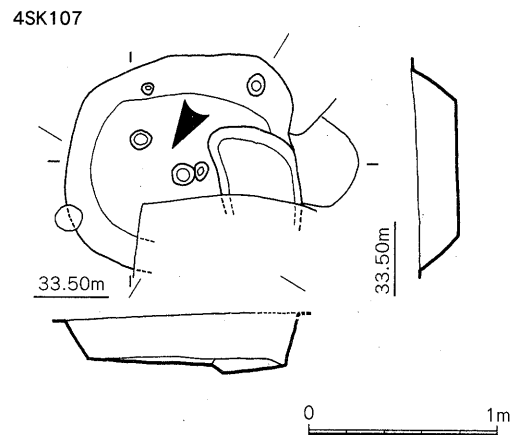
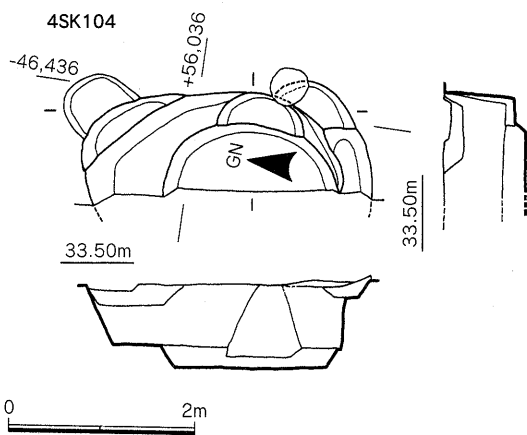
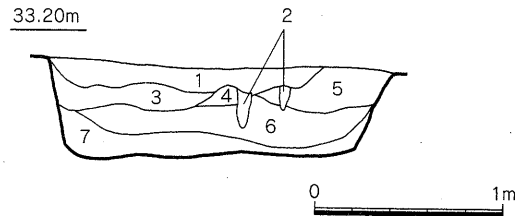
第6図 前田4次SI135,SI140,SI145,SI150,SI180遺構実測図 (1/80)



第7図 前田4次SK011,SK045,SK055,SK074,SK075,SK085遺構実測図 (055・074は1/80、他は1/40)

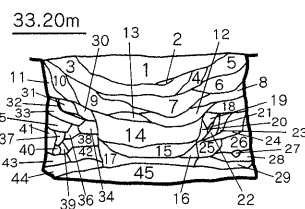
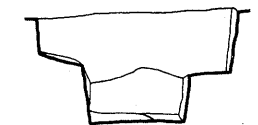


1. 黒灰色土
2. 灰色土
3. 暗灰褐色土
4. 暗灰褐色土
5. 灰褐色土(黒灰色土ブロック入)
6. 灰褐色土
7. 淡灰褐色土(乳灰色土ブロック入)



1. 黒色土
2. 黒灰色土
3. 黒灰色土(乳灰色土ブロック入)
4. 淡灰色土(乳灰色土ブロック入)
5. 暗灰色土
6. 黒色土
7. 淡黒灰色土
8. 灰褐色土(乳灰色土ブロック入)
9. 淡灰褐色土
10. 暗灰褐色土
11. 灰色土
12. 灰褐色土
13. 乳灰色土ブロック
14. 黒灰色土
15. 灰褐色砂
16. 黒灰褐色砂
17. 灰色砂
18. 灰色土(暗灰色ブロック入)
19. 暗灰色土
20. 乳灰色土(暗灰色土ブロック入)
21. 暗灰色土
22. 乳灰色土(わずかに灰色土含む)
23. 黒灰色土

11. 黒灰色土
12. 淡黒灰色土
13. 灰褐色砂状土
14. 灰色砂
15. 乳灰色砂(褐色粘ブロック入)



24. 暗灰色土(乳灰色土ブロック大)
25. 淡乳灰色土
26. 淡灰色土
27. 乳灰色土
28. 暗灰色土
29. 乳灰色砂状土
30. 淡色ブロック大
31. 淡色ブロック小
32. 黒色土
33. 暗灰色土
34. 暗灰土(粗砂入)
35. 暗灰色土(乳灰色土ブロック入)
36. 暗灰色土ブロック
37. 暗灰色土(粗砂入)
38. 暗灰色土(粗砂入)
39. 灰色土
40. 黒色土
41. 乳灰色粗砂
42. 淡色土(粗砂入)
43. 淡色土(橙色土入)
44. 暗褐色土
45. 乳灰色砂(褐色粘ブロック入)



第8図 前田4次SK095,SK104,SK105,SK107遺構実測図 (095・107は1/40、他は1/80)

長方形の土坑をT字に組んだ様なプランに、段状に一枚土を敷いてT字の突出部分に高さ約70cmの段を土を細かく積んで突き固めている。遺構は全体に緩慢に埋没するが、T字長軸方向の土層断面では中位から上で多少不整合に見える堆積部位が見られ、ここに地山の白色系のブロック土が入るなど、埋没過程で一部掘り返された可能性がある。出土遺物は少なく、弥生前期板付式期の土器片が出土している。当該期の貯蔵穴の一形態と考えているが、ステップの作り付けは特異な例である。

4SK107（第8図、図版15-1） 調査区南東部で確認された隅丸方形を呈す遺構で、壁面が緩やかな立ち上がりを持っている。4SK108を切り、大半が黒灰土で埋没する。この埋土から須恵器の小蓋1が出土することから古墳時代後期の所産と考えられる。

4SK108（第9図、図版15-2,3） 4SK107に切られる長方形プランの遺構で、壁は直線的に立ち上がる。床面もフラットである。遺構は大きく4つの層から成り、そのラインが緩やかなことから緩慢な土壌供給によって埋没したと考えられる。弥生前期板付I式期の甕片が出土しており、当該期の施設と考えられる。

4SK109（第9図、図版16-1,2） 4SI140の北側で検出された長方形を呈す遺構で、土層は大きく3群に分けられ、堆積初期と中間のものは地山の黄色土が崩壊して形成されたものである。埋没時期は須恵器小坏aと小蓋1の出土などから、4SI140の埋没時期と同じ古墳時代後期を想定できる。

4SK111（第9図、図版17-1,2） 調査区南東部で検出された楕円形を呈す遺構で、段状に掘られている。堆積は大きく3層からなる。須恵器小坏aと小蓋1などが出土しており、4SK109などと埋没時期が近い古墳時代後期と考えられる。最終埋没土から鉄鏃が出土している。

4SK125（第9図、図版16-3） 調査区中央で検出され4SK074に切られる。楕円形を呈し、弥生後期の土器片が出土する。

4SK148（第9図） 調査区北東部で検出された隅丸長方形を成す遺構で、須恵器片などが出土するが、帰属時期や遺構の性格などはっきりしない。

4SK154（第9図） 調査区北部で検出された長楕円形を呈す遺構で、須恵器片などが出土するが、帰属時期や遺構の性格などはっきりしない。

4SK155（第9図、図版4-1） 調査区中央で4SD100に切られて発見された遺構で、長方形を成す。弥生前期板付II式期のものと筑後亀の甲式の土器（甕）片が出土する。遺構の形状や出土遺物から弥生前期中頃に帰属するものと考えられる。

4SK160（第9図、図版4-1） 調査区中央で4SD100と4SD010に切られて発見された遺構で、遺構は浅く広い形状を持ち、黒褐色土で覆われる。須恵器片や弥生後期の土器片も少量出土するが、弥生前期の遺物が大半を占める。埋土や遺構形状が4SI025などに近似することなどから、弥生前期の竪穴式住居の可能性も考えられる。

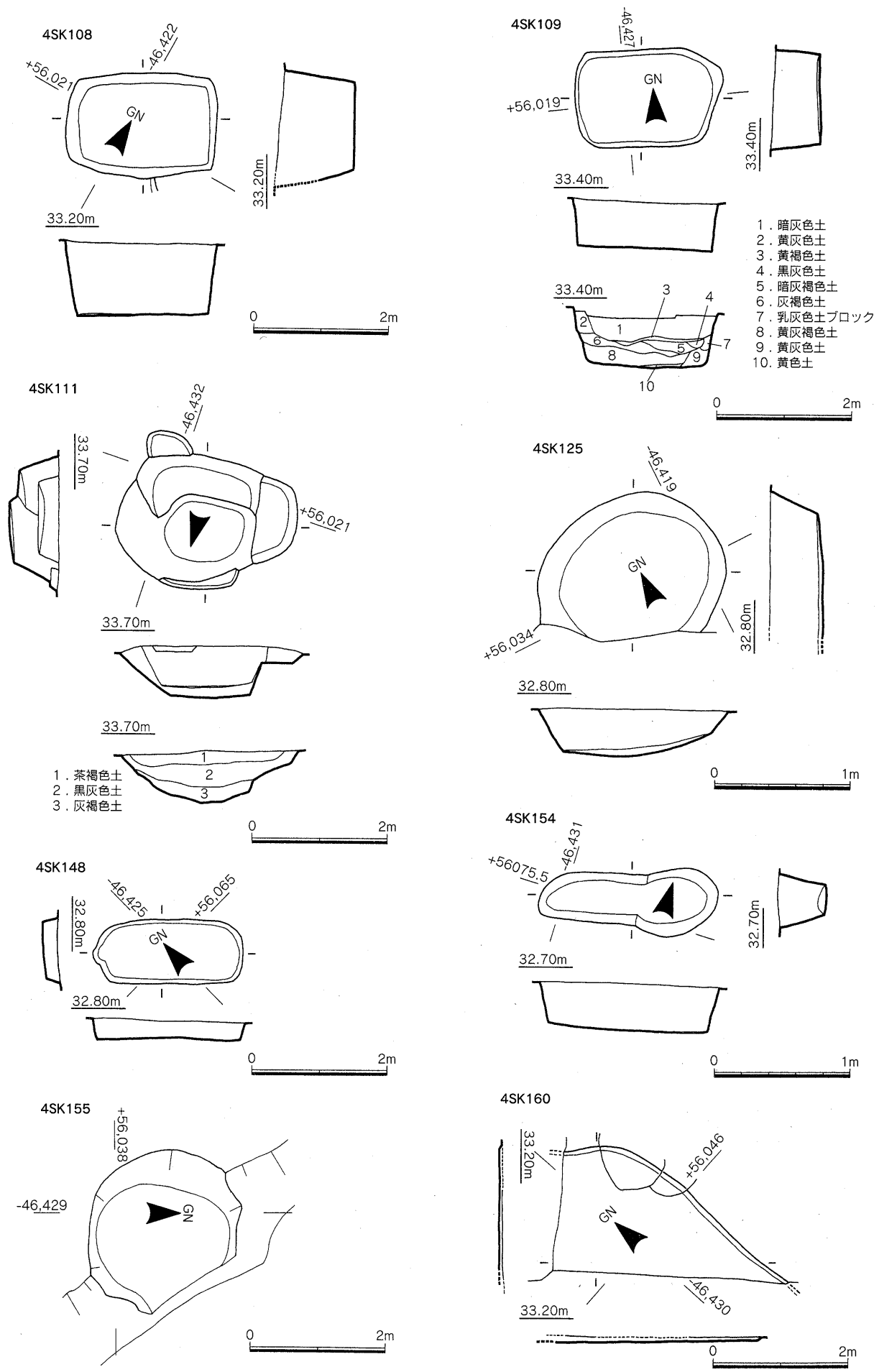
4SK170（第10図、図版18-1～3） 調査区南東隅で確認された遺構で、長方形を成す。4SK175の下層で確認され、4SD100に切られる。土壌が灰色砂、黒灰色土の順で水平堆積する。弥生前期板付II式期の土器片が出土する。

4SK175（第10図、図版18-1） 4SK175の上位に形成された方形プランの遺構で、弥生前期の土器片が出土する。4SD100に切れ全様がかめないが、堀方が浅いことから弥生前期の竪穴式住居の可能性も考えられる。

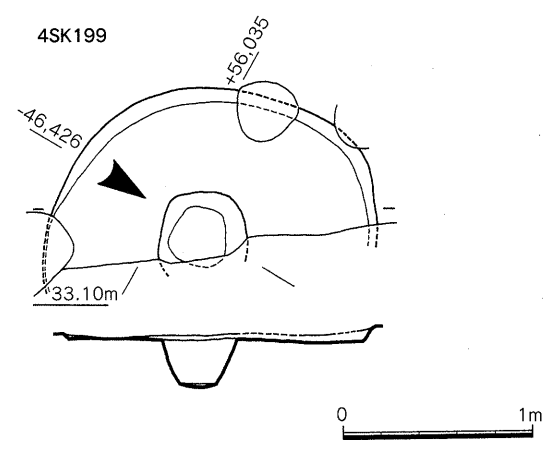
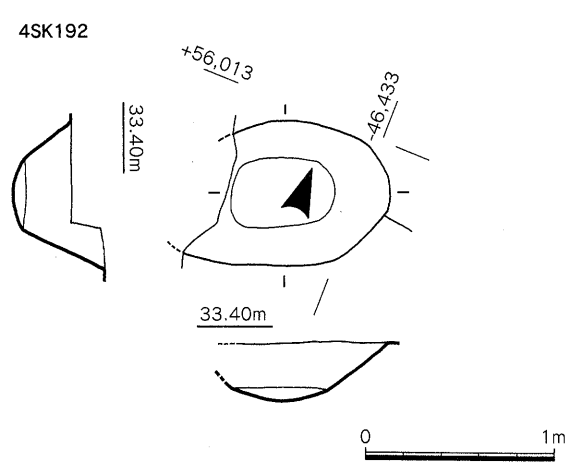
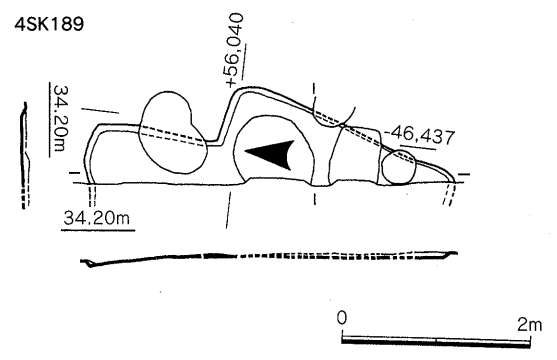
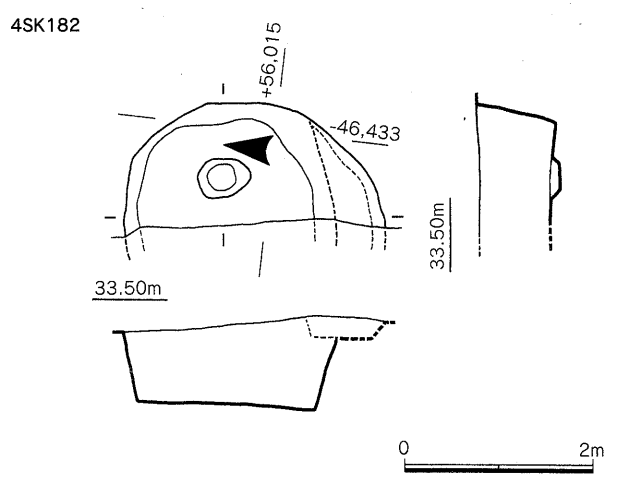
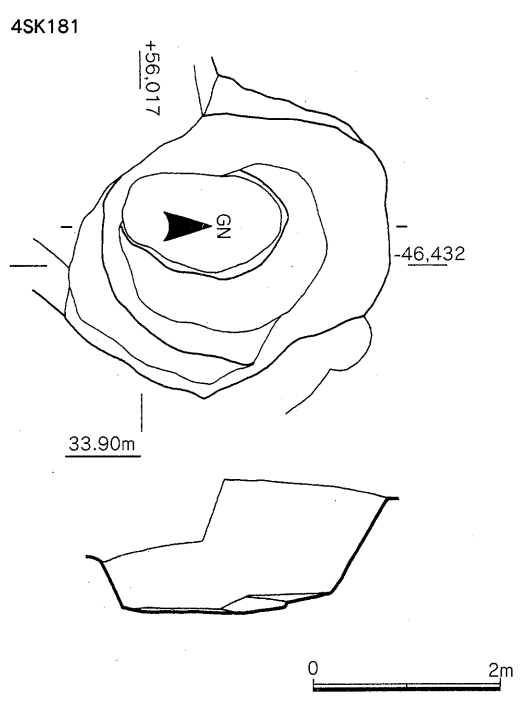
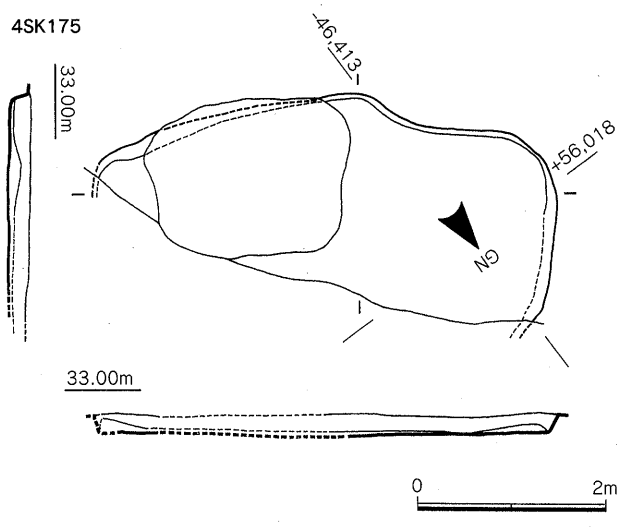
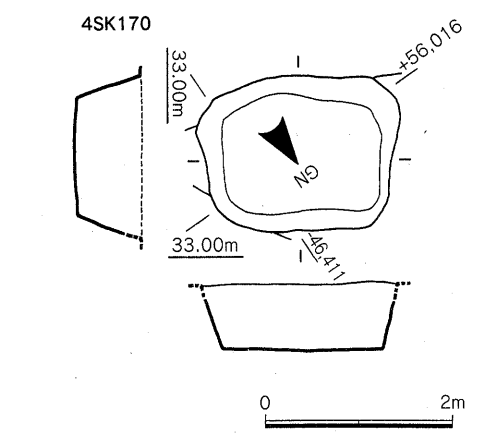
4SK181（第10図、図版19-1～2） 調査区南西側で検出された楕円形を呈す遺構で、段状の掘り鉢型に掘られている。中位以下の層から須恵器の破片が出土していることから、古墳時代以降の埋没と考えられる。

4SK182（第10図、図版19-3） 調査区南西側の4SK181の南壁際で検出された円形を呈す遺構で、堆積土は3つの層群から成る。初期と2回目の堆積後に有機質を含む黒色土層が形成され、堆積が進行と停滞をくり返しゆっくり埋没したことが想定される。

4SK189（第10図、図版4-1） 調査区中央の西壁際で検出された矩形の浅いプランの遺構で、須恵器の小坏



第9図 前田4次SK108,SK109,SK111,SK125,SK148,SK154,SK155,SK160遺構実測図 (125・154は1/40、他は1/80)



第10図 前田4次SK170,SK175,SK181,SK182,SK189,SK192,SK199遺構実測図 (192・199は1/40、他は1/80)

片などが出土している。

4SK190 (図版20-1,2) 調査区南中央の4SI180下層で検出された楕円形を呈す遺構で、積土は4つの層群から成る。土層の状態から堆積、地山崩壊をくり返して埋没する過程が読み取られる。黒曜石のフレイクが出土している。遺構の切り合い関係や形状から弥生時代前期に属す可能性がある。

4SK192 (第10図、図版3-2) 調査区南東側で検出された楕円形の遺構で、4SI090を切り、断面の形状は播り鉢型を呈す。弥生時代後期の土器片が出土する。

4SK199 (第10図、図版3-1) 調査区中央で検出された円形を呈す遺構で、東半分は4SD100に切られ全様がつかめない。小蓋1などが出土しており、埋没時期は古墳時代後期と考えられる。

墳墓

4ST065 (第11図、図版20-3) 調査区中央4SD100の東側で検出された。南西から北東方向に軸を置く長方形の遺構で、床面はフラット東側に枕状の花崗岩が初期の堆積層上面に乗る高さで出土し、その西側に白磁の破片と土師器椀が正位置で検出された。遺構形状と土層観察から土坑墓と考えられる。木棺の痕跡を示す痕跡は見られない。土器は遺体に副葬されたものと思われる。初期輸入陶磁器の破片副葬は7次調査の7ST015例をはじめとして当地域に共通するものである。

4ST115 (第11図、図版21-1~3) 4SB025埋土を掘り下げ中に認識された遺構で、黒色土器B椀、土師器皿c、鉄鎌の刃(柄の装着痕跡はない)などが確認された。遺構床面は平坦で遺物は床から10~20cm浮いた形となった。土器の傾きから棺蓋の崩落によって供献品が棺内に流入、落下したものと考えられ、土層では確認できなかったが本遺構は木棺墓であったと推定している。

溝

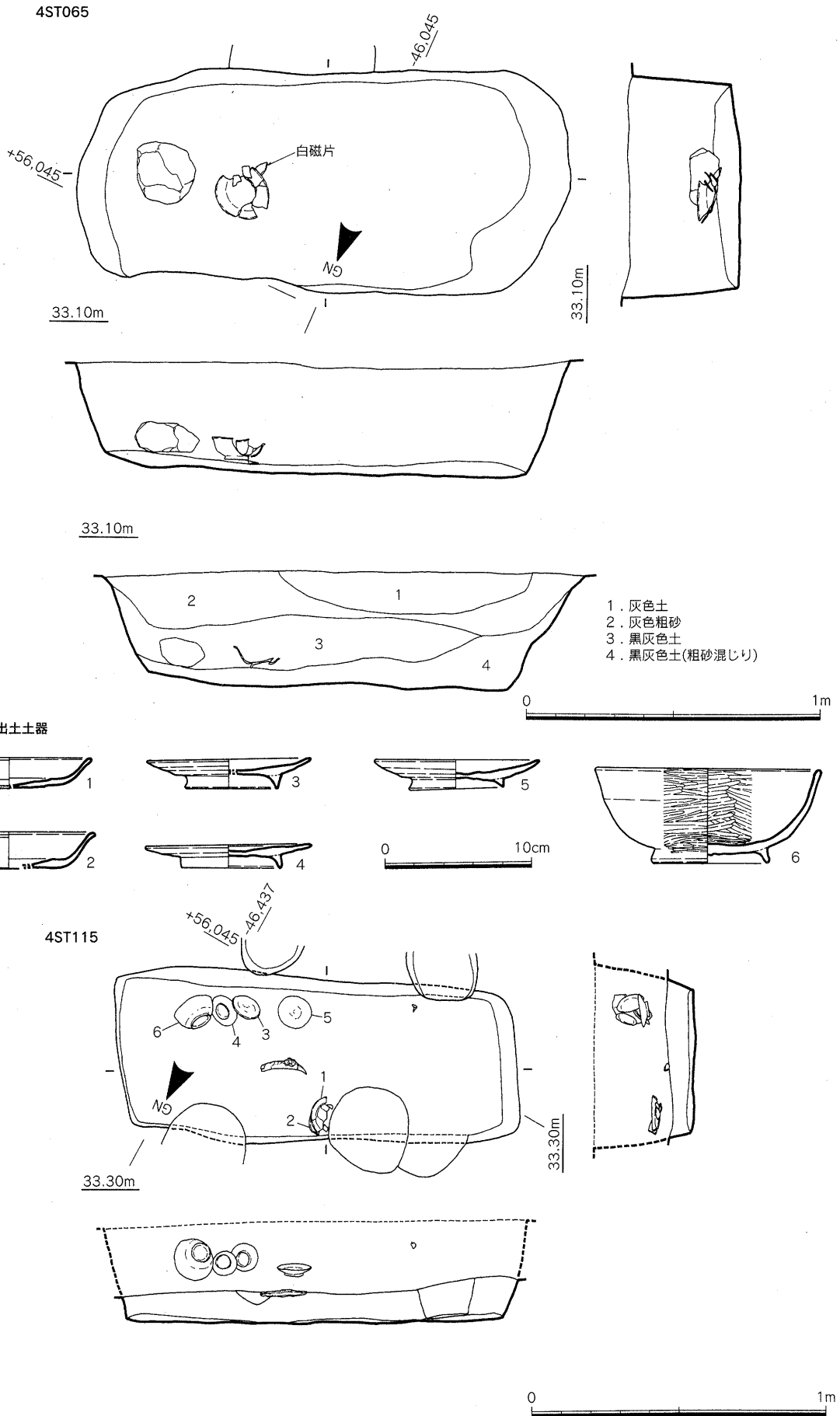
4SD001 (第12、13図、図版22-1,2) 4SD100に平行して調査区の南東から北西方向に走る溝で、黒色系の堆積土が全体を覆っている。DI41区付近で矩形に溜まり状の広がりを持っており、東隣の3次調査区に矩形が二股にわかれて延伸している。勾配は北に向かって緩やかに傾斜している。箇所々で土層断面の様相が少しづつ異なるが、溜まり状以北では上層から黒灰砂(溜まり状部分では茶色土)、灰茶色砂、黒茶色土、黒灰土の大きく4つの層群に分けられる(現場作業時での土色名の付与にあたって多少の混乱が見られ、残念ながら諸関係を追認できない層位も存在する。溜まり状になった付近はS-3として遺物を取り上げている。)。黒茶色土層については北で東側に寄ったラインを描くため4SD030として、別遺構の取り扱いとしている。河床の中心ラインは各層群ごとにずれがある。溜まり状部分(S-3)を下げると直角方向に分岐する小溝群が検出された(4SD006,4SD032)。上位の黒灰砂、灰茶色砂については砂層が発達した箇所が見られ、流路として一定の機能がかったものと判断される。時期的にも上位2層は平安後期までの遺物が入り、4SD030は8世紀後半までの、最下層の黒灰土層は8世紀中頃までの遺物が見られ、埋没した時期の差を示している。

4SD100と平行して穿たれ、初期(8世紀前半)には古代官道の東側溝として機能していたものと考えられる。平安期には灌漑用水路の幹線路として機能していたものと考えられる。現代の水田区画の大畦がほぼこの溝のライン上を走っていた。古代遺構が土地区画の中で残存する好例として挙げられる資料といえる。

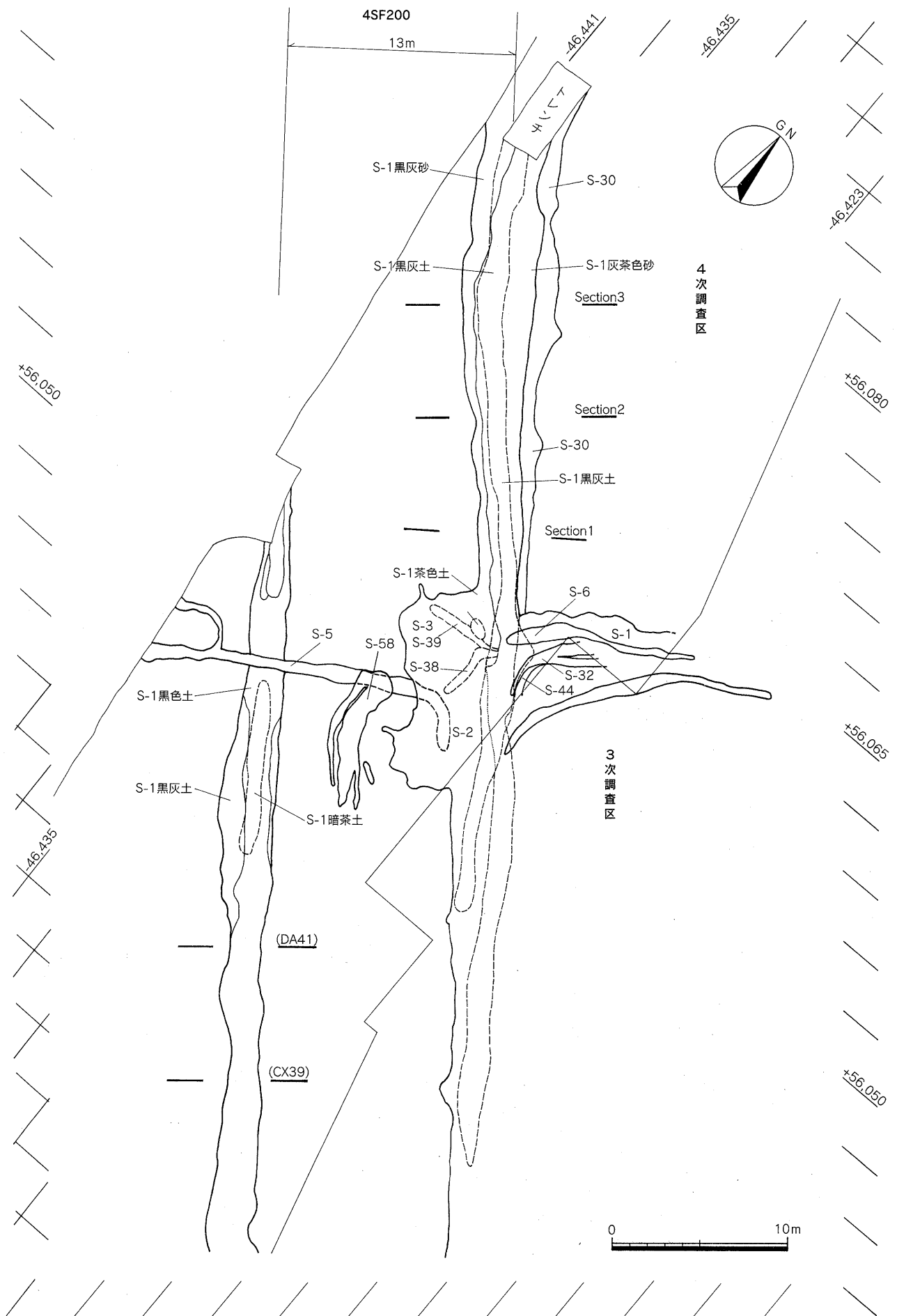
4SD005 (第12図、図版2-1) 7SD001、10SD010の延長にあたり、4SD001を切る。低い方に向かっては4SD001の溜まり状部(S-3)の下で南側に直角に折れて終息している。黒色系の土壌で埋没する。DE45区では弧を描いて分岐している。

4SD006 (第12図) 4SD001上層の茶色土の上で検出された。平安後期以降の土器片が出土しており埋没はそれ以降の時期である。

4SD058 (第12図) 4SD001の溜まり状部の西外側にあり、4SD032などと同様のカーブを描いている。遺構検出面全体が50cm以上削られている可能性があることから、4SD059と共に本来は上面で4SD001の溜まり状

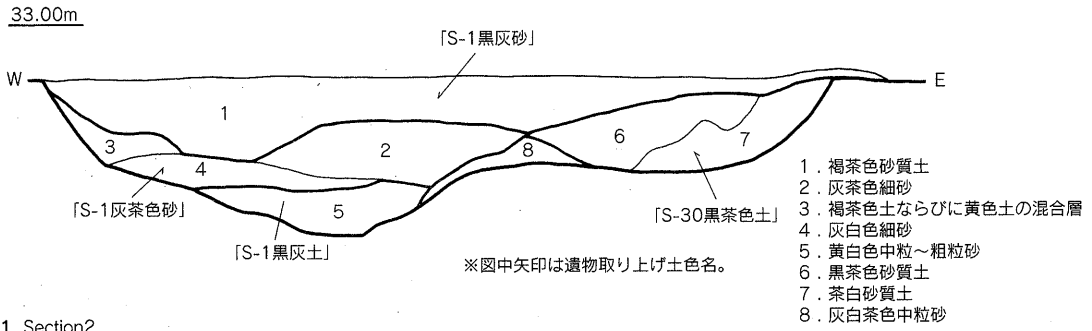


第11図 前田4次ST065,ST115遺構実測図 (1/20)

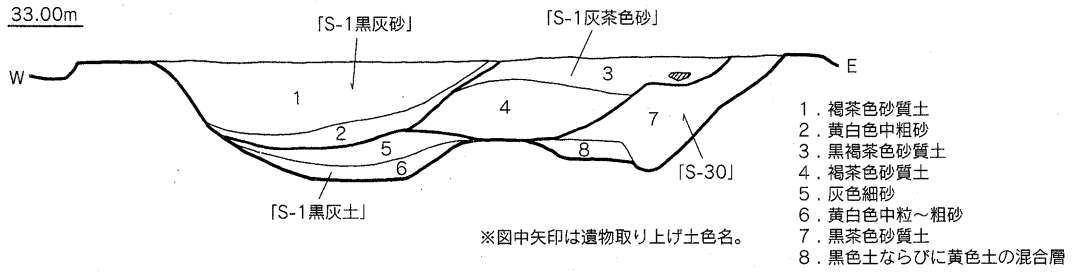


第12図 前田4次溝関係図 (1/300)

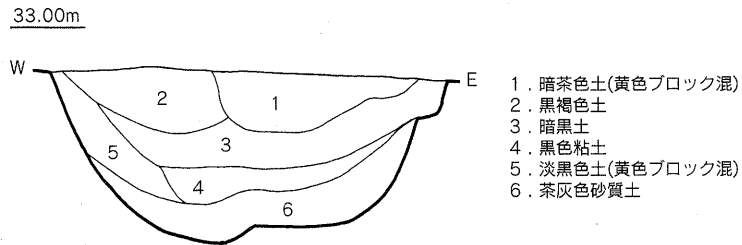
4SD001 Section3



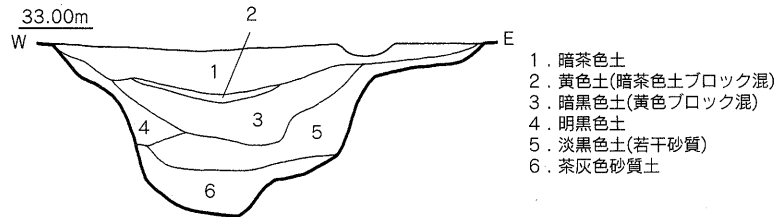
4SD001 Section2



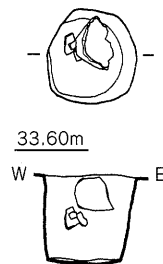
4SD100 (DA41)



4SD100 (CX39)



4SX106



第13図 前田4次SD001 Section3・Section 2, SX106遺構実測図 (1/40)

部に接続していたものと考えられる。白磁V類椀片が出土しており平安後期以降の埋没と考えられる。

4SD089（第12図） 調査区中央東端で検出されたお玉杓子形の遺構である。弥生後期の土器片が出土しており、それ以降の埋没と考えられる。

4SD100（第12、13図、図版23-1～3） 4SD001に平行して穿たれた溝状遺構で、溝の肩の形状が一定でなく、底も凹凸が著しく、堆積は黒色系の土色で覆われ、水が流れた痕跡はない。覆土は大きく3層群に分かれ、上から暗茶土、暗黒土、茶灰土の順で検出された。溝底の一部（調査区南側DD43付近）で断面形状がY字を呈す箇所が見られる。溝の両肩には最終埋没土と同一に見える土色で覆われた複数のピットがある。ただ、残念ながら後世に穿たれたピットにも近似したものがあるため、弁別が難しい。5次調査区で検出された本遺構の延長部分（5SD100）では、後代の遺構が希薄なためより明確に見ることができる。柱痕は確認されず、埋土の締まり具合がゆるく、一定の間隔を保つような状況もない。土留めの杭、植樹痕跡などの可能性はあるが確定する要素はない。

4SD151,154,157（第24図） 4SD151は調査区北東部の4SD030の東肩付近で沿うように検出された。南側は東に折れて終息している。4SD154,157などとともに水田の給排水に係わる可能性もあると考えている。8世紀以降の土器片が出土するが、157では輸入陶磁器片が含まれ、4SD001の最上層が灌漑溝として機能していた時期に平行する可能性がある。

道路状遺構

4SF200（第12図、図版4-1） 太宰府市大字吉松の水城西門跡（26次）、島本遺跡（2次）、筑紫野市大字杉塚での大宰府条坊跡99次の道路跡の調査所見から、その延長上に位置する4SD001と4SD100に挟まれた空間を古代官道の道路面と想定した。現場の観察では路面の築造に関する痕跡や通行痕跡は残存していなかった。路面幅は面自体の掘削や両側溝の掘り返しなど後事的改変によって当初の状況は掴めないが、現状での最大幅は11m、側溝心々の距離は13mを測る。側溝は1次調査では8世紀初頭までには埋没していたと考えられる1SK681を切って設定され（『佐野地区遺跡群XI』2001太宰府市p15）、埋没は側溝内出土遺物から8世紀中頃には始まり、4SD001は土器型式が変化する前に埋まってしまい、4SD010が8世紀中頃から後半には側溝と路面を横切っている。3次調査では路面に8世紀後半の円形土坑3SK215が形成される（『太宰府市史考古資料編』1992太宰府市p380～）。大宰府条坊跡99次では路面が9世紀には群集墓（木棺墓か）の墓域となっている（『大宰府条坊跡99次発掘調査』1997筑紫野市）。このことから、路面としての公的管理は8世紀後半には弛緩し、連続した通行帯としての機能は9世紀にはなくなっていたと考えざるをえない。前田遺跡においては9～10世紀の空間利用は顕著ではない。路面の喪失は、遺構を被覆している茶褐色の遺物包含層が形成された12世紀後半以降の耕作に伴う土地の改変に拠るところが大きいと考えられる。

その他の遺構

4SX106（第13図） 住居跡4SI080の南西側で検出されたピットで弥生後期末の時期の甕底が入れられている。

3. 遺物

掘立柱建物の出土遺物

4SB040f

（1）土器（第14図）

弥生土器

壺型土器（1） 複合口縁で屈曲部に稜を持つA2dタイプに属す。後期中頃以降の所産である。

4SB050b

(1) 土器 (第14図、図版24-1)

弥生土器

壺型土器 (1) 板付式の壺の頸部にあたり、縦方向にヘラ描き沈線で文様が描かれる。

甕型土器 (2) 底部の縁が高い形状を呈す。底に穀物の種子のような圧痕が見られる。

鉢型土器 (3) 焼成終了時に黒色に焼き上げられたもので、口縁端部が欠損する。縄文系の浅鉢。

4SB050f

(1) 土器 (第14図、図版24-1)

弥生土器

甕型土器 (1) 端部下半に片寄った小振りの刻みを有す3タイプの口縁を持つ。板付Ⅱ式に属す。

4SB070a

(1) 土器 (第14図、図版24-2)

須恵器

甕 (1) 内面に同心円の当て具痕跡、外面に平行の刻みのタタキを施した後にクシガキを施す。

4SB070b

(1) 土器 (第14図、図版24-2)

須恵器

甕 (1) 内面に同心円の当て具痕跡、外面に平行の刻みのタタキを有す。

4SB070c

(1) 土器 (第14図、図版24-2)

須恵器

蓋 (1) 内側にかえりを持つもので、小片であるがカーブが小さいため小蓋に属すものと考えられる。

4SB070h

(1) 土器 (第14図、図版24-2)

須恵器

蓋 (1) カーブが小さいため小蓋に属すものと考えられ、天井部に平行するヘラ記号を有す。

4SB070g上面

遺構の上面で検出された遺物である。

(1) 土器 (第14図、図版24-2)

須恵器

小蓋 (1) 内側にかえりを持つもので、天井部はヘラ切りのままである。九州須恵器編年のⅤ期に属すタイプの蓋である。

竪穴式住居の出土遺物

4SI035灰褐土

(1) 土器 (第14図、図版27-2)

弥生土器

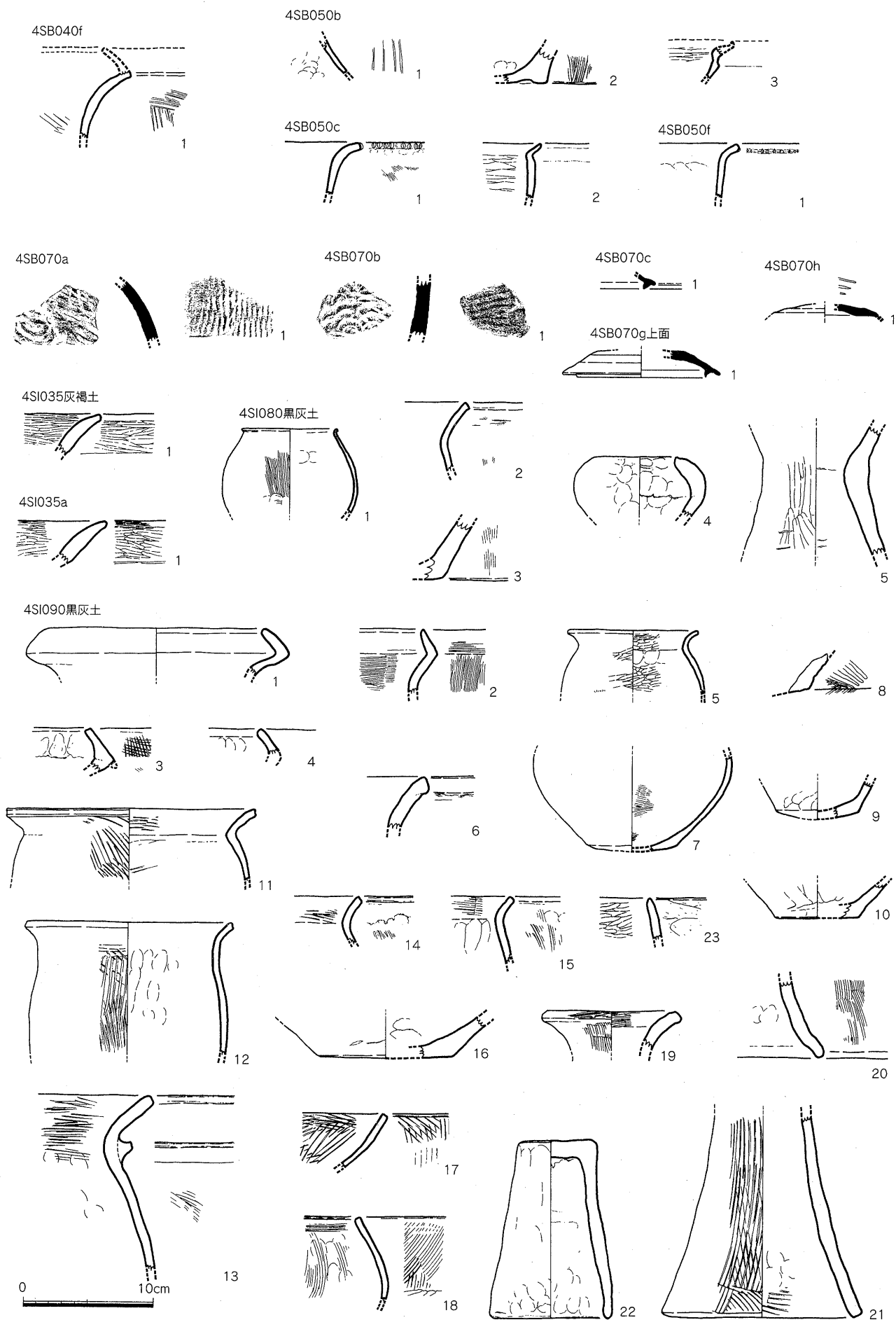
壺型土器 (1) 1.5cmほどの厚味を持つ破片で、先端に向かって若干細くなっている。内外面共に横方向のミガキが施される。大型の前期板付式の壺の口縁と考えられる。

4SI035a

(1) 土器 (第14図)

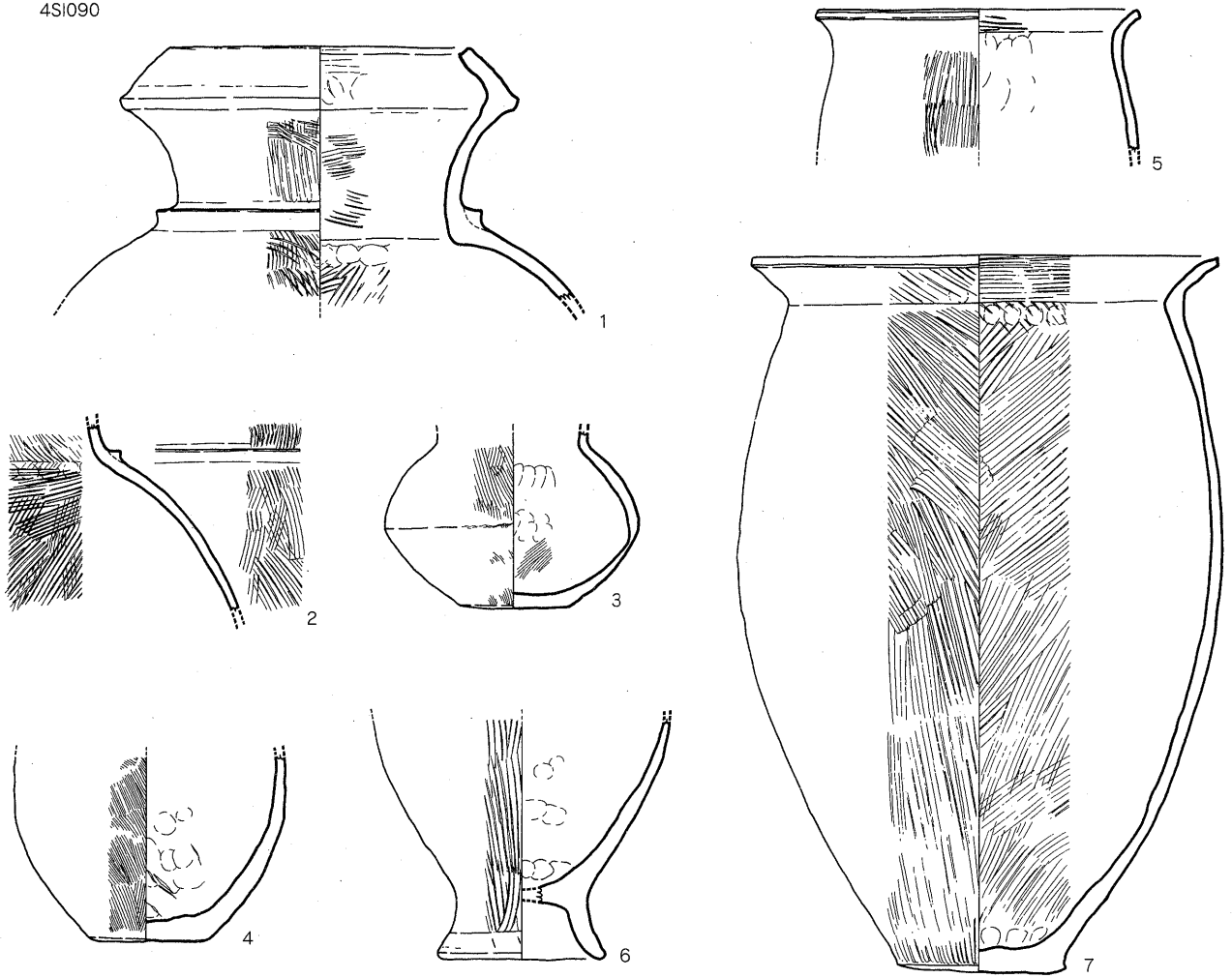
弥生土器

壺型土器 (1) 1.5cmほどの厚味を持つ破片で、先端に向かって若干細くなっている。外面下に段を有す。

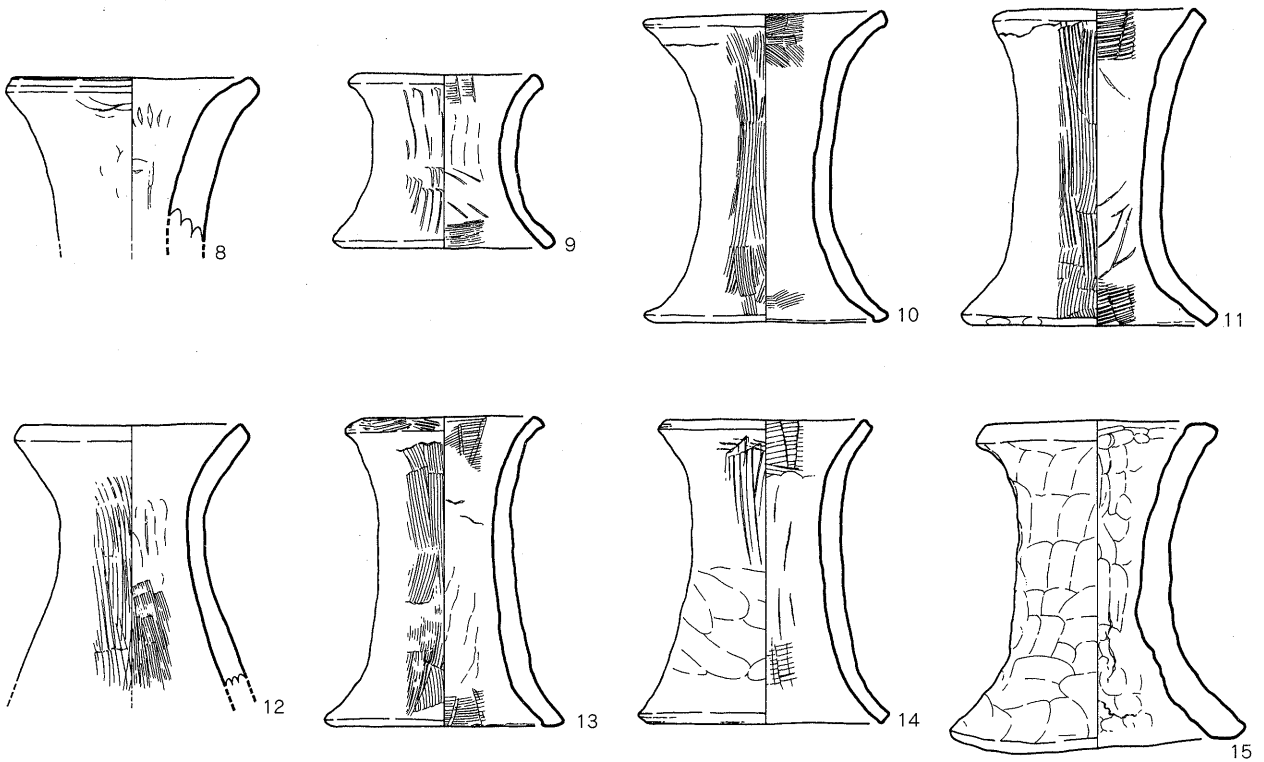


第14图 前田4次掘立柱建物、住居跡1出土土器実測図 (1/4)

4SI090



0 10cm



第15图 前田4次住居跡2出土土器実測图 (1/4)

内外面共に横方向のミガキが施される。大型の前期板付式の壺の口縁と考えられる。

4SI080黒灰土

(1) 土器 (第14図)

弥生土器

壺型土器 (1) 内傾する頸部の先端が短く外に屈曲する口縁を持つ。

甕型土器 (2、3) 2は「く」字形に緩く屈曲する口縁片。3は底部中央が若干膨らむ形状の底部片で、後期中頃以降の所産と考えられる。

器台 (4、5) 口縁が袋状に膨らむ口縁を持つもので、調整はユビオサエ止まりである。5はミガキ調整が施される。

4SI080c

(1) 金属器 (第20図、図版35-2)

鉄鏃 (1) 凹基式のもので、断面形状は全体に平板で先端に薄くなっている。基部の片方がやや開く。

4SI090黒灰土

(1) 土器 (第14図)

弥生土器

壺型土器 (1~10) 1~4は複合口縁になるタイプのもので、3は屈曲部が若干突出する。5はミガキで仕上げられるく字形口縁を持つもの。8以降は底部片であるが、8は厚底気味で底面までタタキを施す外来手法によるものである。

甕型土器 (11~16) 15までは口縁部片で、屈曲がはっきりしたものと緩慢に開くものがある。13は屈曲部に上向きの台形状の突帯がある。

鉢型土器 (17、18) 17は外開きの浅いタイプ、18は内傾する口縁のタイプのもの。

器台型土器 (19~21) 鼓型で屈曲部が上に片寄る。

支脚型土器 (22) カップをひっくり返した形状を成す。若干裾の広がりにより偏りがある。

4SI090

(1) 土器 (第15図、図版25-1)

弥生土器

壺型土器 (1~4) 1は複合口縁になるタイプのもので、屈曲部外面が突帯状になり平坦面を持つ。3は胴部が算盤玉形に屈曲する形状を持ち、底部が若干レンズ状に膨らむ。

甕型土器 (5~7) 5と7はく字形口縁を持つもので、7は屈曲部が稜を持ち底部が若干レンズ状に膨らむ。6はスカート状の脚部をもつ。肥後などの他地域の影響が考えられる。

器台 (8~15) 鼓型を呈し、12のみが屈曲部が上に片寄る。8と15はハケによる調整がなされていない。

これらは後期前半から中頃に移行する時期に位置付けられる資料である。

4SI120

(1) 土器 (第16図、図版25-2)

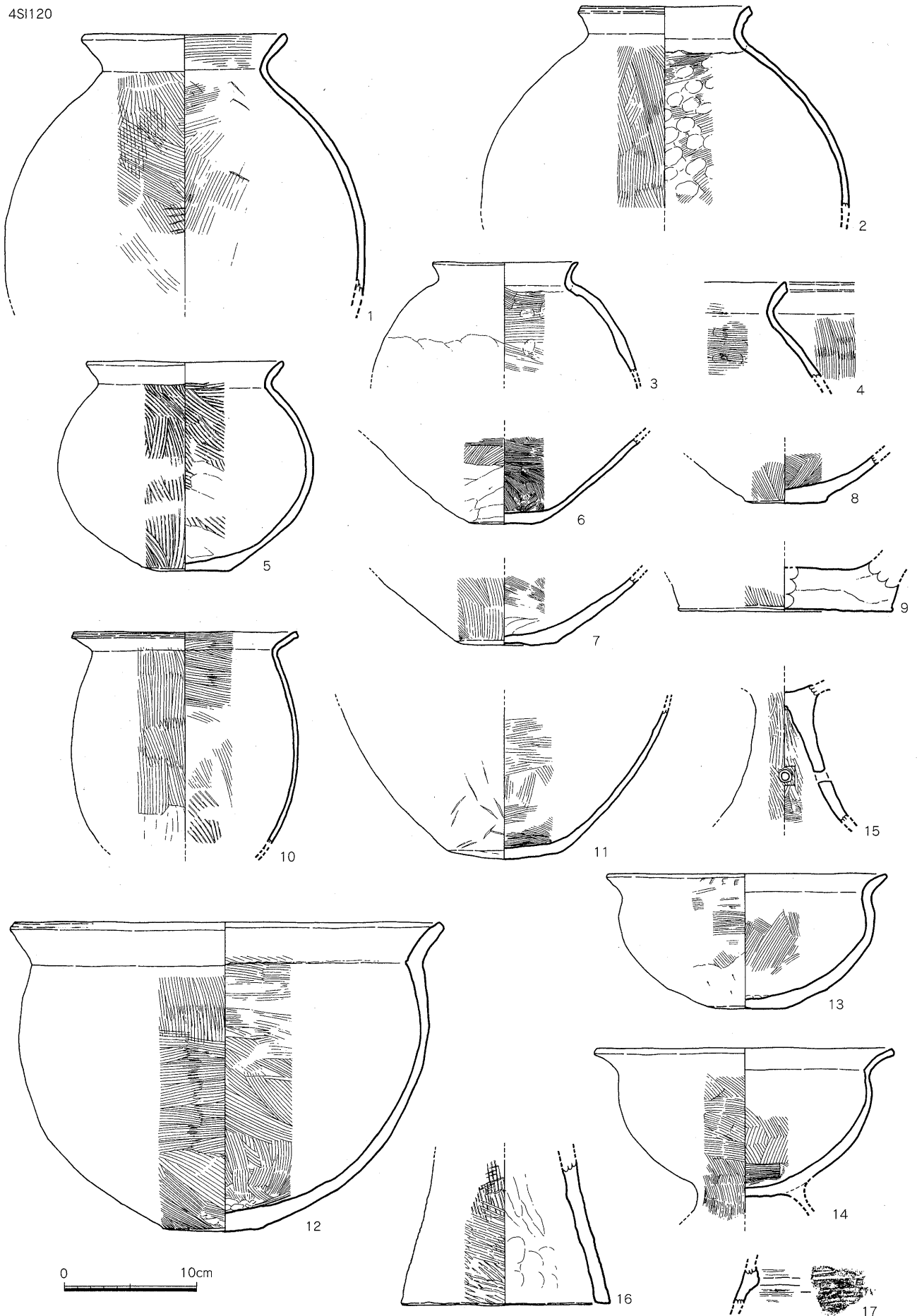
弥生土器

壺型土器 (1~9) 1~4は長胴から短くラップ状に開く口縁を持つタイプの壺で、内外面ともにはっきりしたハケを残す。5は中期から続く短頸の系譜に位置付けられ、底部が若干レンズ状に膨らむ。6~9は底部片であるが、6の下半はケズリ気味のナデが施される。8は若干レンズ状に膨らむ底部であるが、厚底を呈し、外来的要素として認識される。9は3cm以上の厚味を持つ巨大な底部で、前期板付式の所産と考えられる。

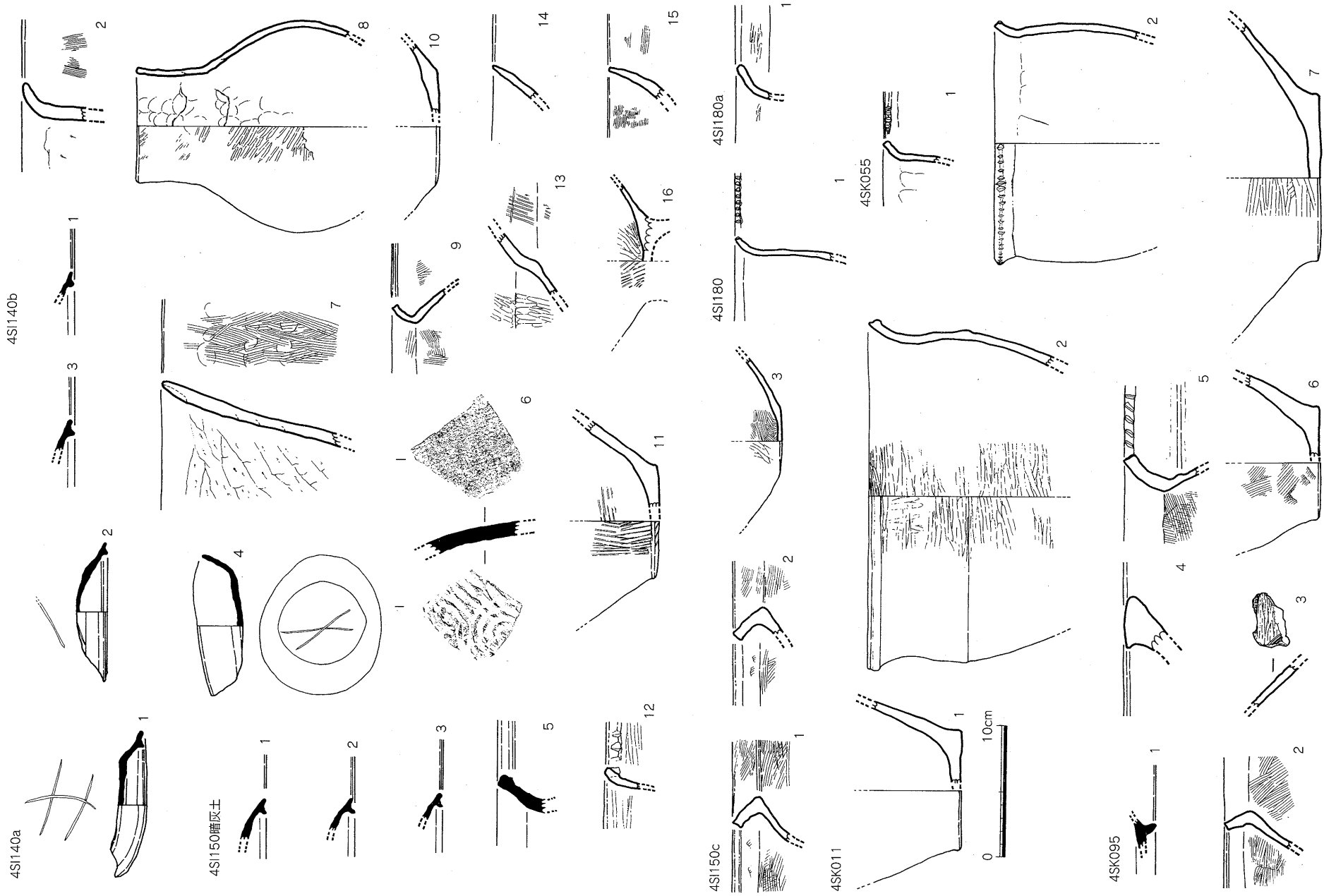
甕型土器 (10、11) 10はく字形口縁をもち、口縁端部は中央が若干凹む。11は底部片であり、外面は工具によるナデが施され、底部はレンズ状に膨らむ。

高坏型土器 (15) ストレートな部分がなく上に向かって逡減するフォルムを持つ。裾部に4箇所の円孔が

4SI120



第16図 前田4次住居跡3出土土器実測図 (1/4)



第17图 前田4次住居跡4、土坑1出土土器実測図 (1/4)

穿たれる。外面はミガキで仕上げられる。

鉢型土器（12～14） く字形口縁とレンズ状の底部を持つもので、14には脚が付けられる。

器台型土器（16） 裾にタタキを施したもの。

これらは後期中頃から後半にかけての時期に属す資料である。

縄文土器

鉢型土器（17） 小片で外面に突帯が貼り付けられる。表面には擦過した調整の痕跡が残る。

4SI140a

（1）土器（第17図、図版26-1,2）

須恵器

小蓋（1～3） 口縁内側に返りを持ち、直径が11cm程度の小振りの蓋である。1と2には天井部にヘラ記号が残される。1は焼け歪みが著しい。

4SI140b

（1）土器（第17図、図版26-1,2）

須恵器

小蓋（1） 口縁内側に返りを持つ。

土師器

甕（2） 口縁が端部にむかってゆるいカーブを描いて屈曲する。内面はケズリが施される。

4SI150暗灰土

（1）土器（第17図、図版27-1、31-2）

須恵器

小蓋（1～3） 口縁内側に返りを持つ。

小坏（4） 小蓋とセットになる坏で、底部はヘラ切り後に軽くなでられ、×のヘラ記号が施される。

甕（5、6） 5は口縁端部が断面方形に肥厚する口縁片。6はタタキを有す体部片。

土師器

甗（7） 口縁が屈曲しないので甗と判断した。内面は連続した斜位のケズリが施される。

弥生土器

壺型土器（8～10） 8は胴部に斜位のタタキを有す長頸の壺。9はく字口縁の短頸壺。10はレンズ状の底部片。

甕形土器（11、12） 11は口縁端部に三角突帯を貼付し大きめの刻みを施す。夜白系の甕片である。

鉢型土器（13～15） 14と15はボール状の形状で、13は体部の途中が屈曲するフォルムを持つ。

高坏型土器（16） 脚が残存するが、その径から長脚で大型のタイプになるものと考えられる。

4SI150c

（1）土器（第17図、図版27-1）

弥生土器

甕形土器（1～3） 1と2はく字を呈す複合口縁。3は底部が若干レンズ状を呈す。

4SI180

（1）土器（第17図、図版27-2）

弥生土器

甕形土器（1） 口縁端部全面に刻みの幅がおよぶタイプの甕で、前期板付I式に属す。

4SI180a

（1）土器（第17図、図版27-2）

弥生土器

壺形土器 (1) 端部に向かって若干膨らみ気味の形状を成す。外面下位に微かな段が見られる。

土坑の出土遺物

4SK011

(1) 土器 (第17図、図版28-1)

弥生土器

甕形土器 (1) 外面がナデによって丁寧に仕上げられた平底の甕で、前期に属す。

鉢型土器 (2) 甕に似た如意口状を呈し、体部中央に段を有す。基本的に横方向のミガキで仕上げられている。

4SK055

(1) 土器 (第17図、図版28-2)

弥生土器

甕形土器 (1、2) 口縁端部の下寄りの部位に刻みが施される。前期板付Ⅱ式の範疇で捉えられる。2は微かな条痕を残すaタイプのナデで仕上げられる。

4SK095

(1) 土器 (第17図、図版27-2)

須恵器

坏c (1) 高台は細みで外にふんばる形状を呈す。混入遺物と考えられる。

弥生土器

壺型土器 (2~5) 前期と後期のものが混在する。2は後期の複合口縁、3は金海式の大型の壺の口縁片。4はヘラガキ沈線を残す板付式の壺の頸部片。5は平底で外面に横方向のミガキを持つもの。

甕型土器 (6、7) 6はく字形の口縁端部に斜位の刻みを持つもの。7は外面にハケを残す平底のもの。

4SK105

(1) 土器 (第18図、図版27-2)

弥生土器

鉢型土器 (1) 口縁端部に平坦面を持ち、外面は端部から若干下がった位置に微細な段差を残す。全面ミガキで仕上げられる。板付式に納まるタイプの鉢である。

4SK107

(1) 土器 (第18図、図版29-1)

須恵器

小蓋 (1、2) 口縁内側に返りを持ち、直径が11cm程度の小振りの蓋である。2にはこの器種としてはめずらしく天井部に粗いミガキが施される。

小坏 (3) 胴部下位にゆるい沈線を残すもので、小蓋とセットになる坏である。ともに九州須恵器編年のV期に属す。焼成は軟質。

甕型土器 (4、5) 4は端部を沈線で装飾する口縁部。5はタタキ後にクシガキを施す胴部片である。

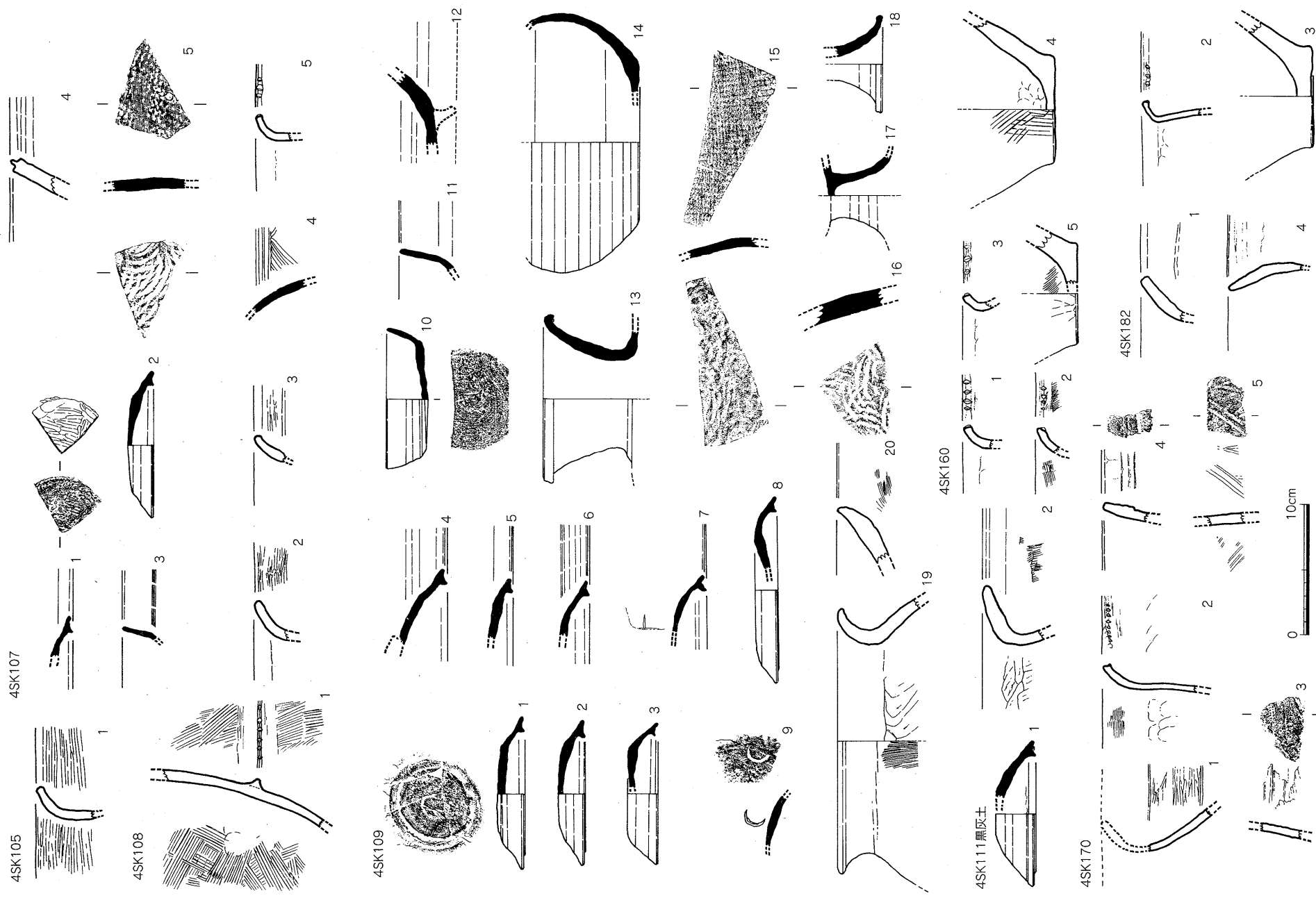
4SK108

(1) 土器 (第18図、図版29-2)

弥生土器

壺型土器 (1~4) 1は長胴の下半部につまみ出したような台形の刻み目突帯が付けられたもので、弥生後期中頃以降に属する。2~4は前期の板付式に属す資料で、2と3は口縁端部で3は肥厚する。4は胴部上半にヘラガキ沈線で平行線とその下に上に開く連弧文が描かれている。

甕型土器 (5) 刻みが端部全面に及ぶ1タイプの刻みを持つ板付式の口縁部片である。



第18图 前田4次土坑2出土器实测图 (1/4)

4SK109

(1) 土器 (第18図、図版31-1)

須恵器

小蓋 (1~7、9) 直径が12cm前後に復元できる蓋で、内面に短いかえりが付く。天井部は大半がヘラ切り
のままで7には十字のヘラ記号が施される。9も蓋と考えられる破片であり、天井部外面に円筒状の原体を捺
印した記号が残される。酸化気味のもの、軟質のものを含み、焼成状況は均質でない。

蓋1 (8) 直径が14.4cmに復元される蓋で内面に短いかえりが付く。

小坏a (10、11) 直径11cm程度の小型の坏で、底部と体部の境に回転ヘラケズリを施す。10は底部ヘラ切
りの後に工具でナデられる。

壺 (12) 球胴状を呈し、外面下半部には回転ヘラケズリを施す。高台は欠損する。

瓶 (13、14) 13は口縁端部が折り曲げられ垂下する。14は横瓶の下半部と考えられ、底部側面下の約
1.5cmの幅で回転ヘラケズリが施される。

甕 (15、16) 内面に同心円の当て具痕跡を残す。15は板目直交の刻みを持つタタキ具によるタタキが残さ
れる。

高坏 (17、18) 高さ4~5cmほどの低い脚部を持つ小高坏。

土師器

甕 (19) 口縁が一旦立ち上がって短く外に反る形状を持つ。内面には斜め上に向かって連続して施された
ケズリが残される。

盤 (20) 厚さ2cm程度の分厚い体部が短く斜めに立ち上がって納まる形状を持つ。外面下半にハケの痕跡
が見られる。大宰府地域では珍しい器種である。

(2) 金属器 (第20図、図版35-2)

鉄鏃 (1) 槍状の長いもので、断面形状は基本的に扁平な方形を呈す。先端のかえりは発達していない。

鉄釘 (2) 棒状で断面が方形を呈すことから釘としたが、鏃である可能性も否定できない。

4SK111黒灰土

(1) 土器 (第18図、図版30-1,2)

須恵器

小蓋 (1) 直径が11cm前後に復元できる小蓋で、内面に短いかえりが付く。天井部は磨耗しているがヘラ
切りのままと見られる。

土師器

甕 (2) 口縁が鋭角に屈曲して長く外に延びる形状を持つ。内面には斜め上に向かって連続して施された
ケズリが二段残される。

4SK111茶褐土

(1) 金属器 (第20図、図版35-2)

鉄鏃 (1) 槍状の長いもので、断面形状は基本的に扁平な方形を呈し基部は細くなる。4SK109例同様に
先端のかえりは発達していない。

4SK155

(1) 土器 (第19図)

弥生土器

壺型土器 (1) 2cm以上の厚味を持つ破片で、先端に向かって若干細くなっている。内外面共に横方向の
ミガキが施される。大型の板付式の壺の口縁と考えられる。

甕型土器 (2~7) 3~6は口縁端部やや下寄りに小振りの刻みを有す板付I式とII式の過渡的様相を呈す甕の

口縁。2は三角形の貼り付け突帯の先端に刻みを施し、胴部外面には横方向の深い条痕を残すナデで仕上げられる夜臼Ⅱ式に相当する甕。前田遺跡では希少な出土例である。7は外面にハケの痕跡を残す底部片。

縄文土器

深鉢 (8) 口縁端部に横方向の二条の沈線を有す口縁部片で、後期から晩期に属すものと考えられる。

4SK160

(1) 土器 (第18図、図版32-1)

弥生土器

甕型土器 (1~5) 刻みが端部全面に及ぶ1タイプの刻みを持つ1、3と端部下半に片寄った刻みを持つ3タイプの2とがある。板付式の口縁部片である。2は板付Ⅱ式に属し、ハケによって最終調整が施される。4と5は底部片であり、5には外面にハケが施される。

4SK170

(1) 土器 (第18図、図版32-2)

弥生土器

壺型土器 (1) 頸部付近の破片で上下の横方向にヘラによる沈線が施されている。

甕型土器 (2) 端部下半に片寄った刻みを持つ口縁片。刻みを施す前に端部中央に浅い横方向の沈線が施されている。

縄文土器

深鉢 (3~5) 破片が小さいため帰属する時期の詳細はわからないが縄文に属すと考えられる土器の小片が出土している。5には外面に浅い平行沈線のようなものが描かれ、内面にアナガラ類の二枚貝腹縁によるものに似た条痕を残すナデが観察される。このことから後期以降の所産と考えられる。

4SK182

(1) 土器 (第18図、図版33-1)

弥生土器

壺型土器 (1) 口縁の破片で外面下に段が残る。板付式に属す。

甕型土器 (2、3) 端部下半に片寄った小振りの刻みを有す3タイプの口縁を持つ。板付Ⅱ式に属す。3は底部片で外面はbタイプの薄い条痕を残すナデを有す。

鉢型土器 (4) 端部までの間に浅く「く」字に屈曲する内傾口縁を持つ。後期に属す可能性がある。

溝の出土遺物

4SD001灰茶色砂混土

(1) 土器 (第19図、図版34-1)

土師器

小皿a (1~3) 口径が8.5cm、器高1cm程度の法量を持つ小皿。1と3は糸切りで、2はヘラ切り。

瓦器

椀 (4、5) 4は外面下半に屈曲する部位があり、その下に押し出し前の糸切りの痕跡を残す。5は丸い胴下半部にハケ状工具によるナデの痕跡が残る。高台端部に浅い沈線が巡る。

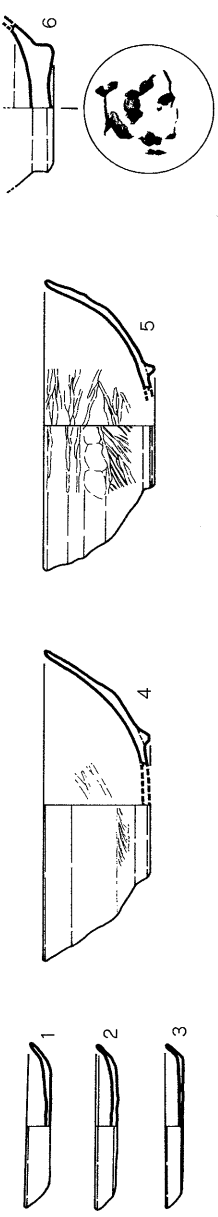
(2) 輸入陶磁器 (第19図)

白磁

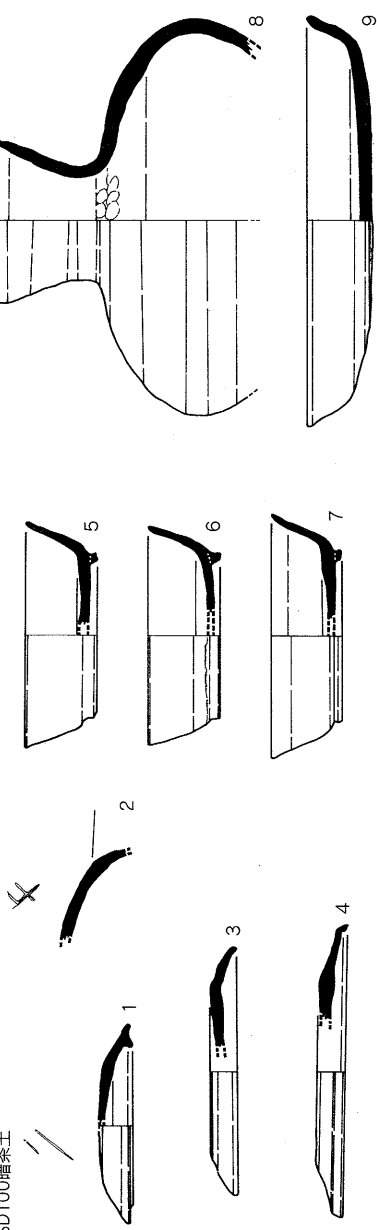
椀 (6) 厚味のあるケズリだしによる底部片である。Ⅳ類に属す。底に墨痕らしき付着が見られる。判読はできない。

(3) 金属器 (第20図、図版35-2)

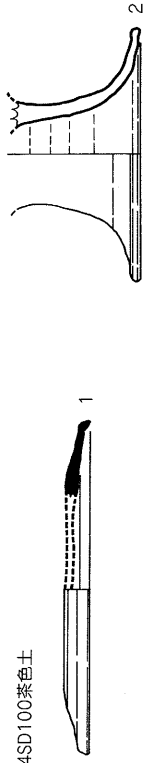
4SD001 灰茶色砂混土



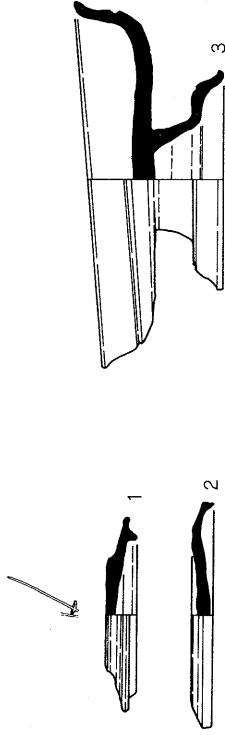
4SD100 暗茶土



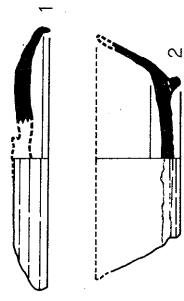
4SD100 茶色土



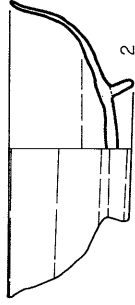
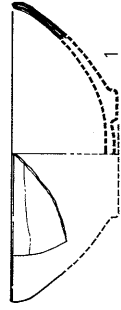
4SD100 黒灰土



4SD100 黒色土



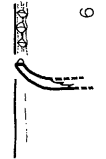
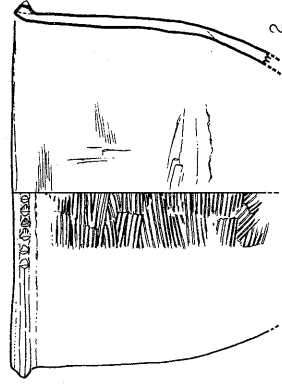
4ST065



4SX106



4SK155



第19図 前田4次溝、墳墓、その他の遺構出土土器実測図 (1/4)

鉄釘 (1、2) 身の断面形状が方形を呈すことから釘に比定した。1は頭部が腐食状態で円形を成す。

棒状鉄製品 (3、4) 部分的な断片で本来の形状が不明で棒状を呈す。4は多少扁平である。

(4) 石製品 (第21図、図版36-2)

石鍋 (1) 縦方向の耳が付くAタイプのもの。下端部は欠損後に二次的に加工され平坦になる。

4SD001灰茶色砂質土

(1) 金属器 (第20図、図版35-2)

鉄釘 (1、2) 身の断面形状が方形を呈すことから釘に比定した。2は両端が折れてかすがい状を呈す。

鉄塊 (3) 破片であり、全体形がわからない。上下に平坦面を持つ。

(2) 石製品 (第21図、図版36-2)

石鍋 (1、2) 縦方向の耳が付くAタイプ (2) と鏝付きのBタイプ (1) の二種類が出土している。(2)は下端部に二次加工が見られる。

4SD001灰茶砂

(1) 金属器 (第21図、図版36-1)

板状鉄製品 (1) 平面形は不等辺三角形を呈し、断面形状は腐食によって中央が膨らむ。

4SD030黒茶土

(1) 金属器 (第21図、図版36-1)

板状鉄製品 (1) 薄い板状で平面形が撥形を呈す。鏝の可能性もある。

4SD100暗茶土

(1) 土器 (第19図、図版34-2)

須恵器

小蓋 (1~3) 1と2は天井部がヘラ切りのみで内面に返りを持つタイプのもので、天井部にはヘラ記号を有す。3は口縁端部が若干垂下するもので、1より後出のタイプである。

蓋 (4) 口縁端部が短く折れるタイプのもの。

坏c (5~7) 高台が外よりに取り付けられる形状を成すもので、口縁端部が若干外に開く。高台の断面形状は外にふんばる。

壺 (8) 玉ねぎ状の扁平な球状を呈す胴部に、口縁端部外側に浅い沈線を有す。筑前では返りを持つ小蓋に伴う段階の壺である。

皿a (9) 22cm程度の口径を持つ。底部外面はヘラ切り後に植物繊維が付着する。内面は非常に平滑になっており、使用による磨耗と考えられる。

(2) 金属器 (第21図、図版36-1)

刀子 (1) 身の厚味が3ミリ程度で、平面形は一方に遞減する。刀子の基部と考えられる。

4SD100茶色土

(1) 土器 (第19図、図版34-2)

須恵器

蓋 (1) 口縁端部が短く折れるタイプのもの。天井部にはヘラケズリが施される。

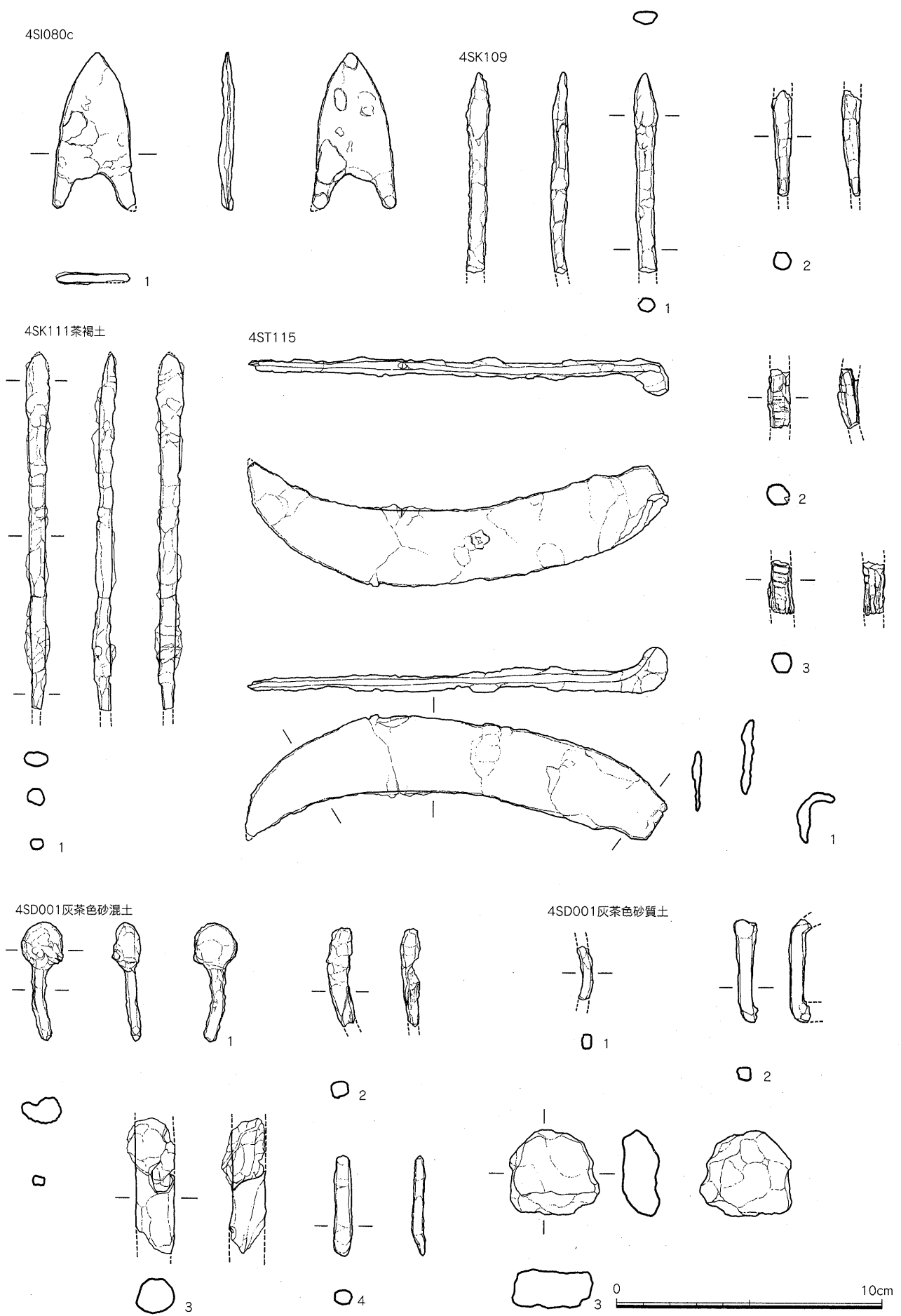
土師器

高坏 (2) 高さが6.6cm程度の短脚の部類に属す高坏の脚部。

4SD100黒色土

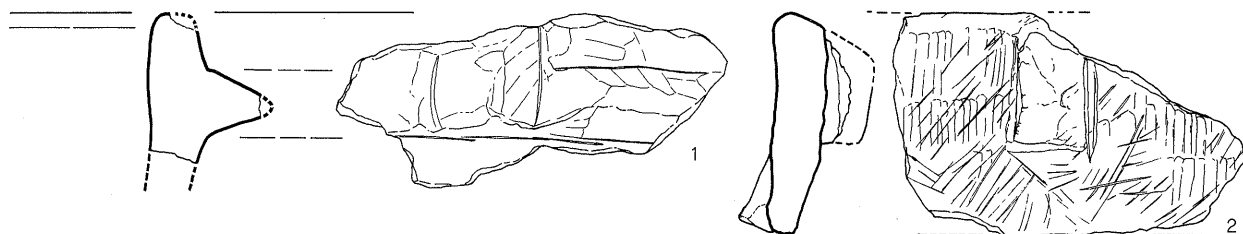
(1) 土器 (第19図、図版34-2)

須恵器

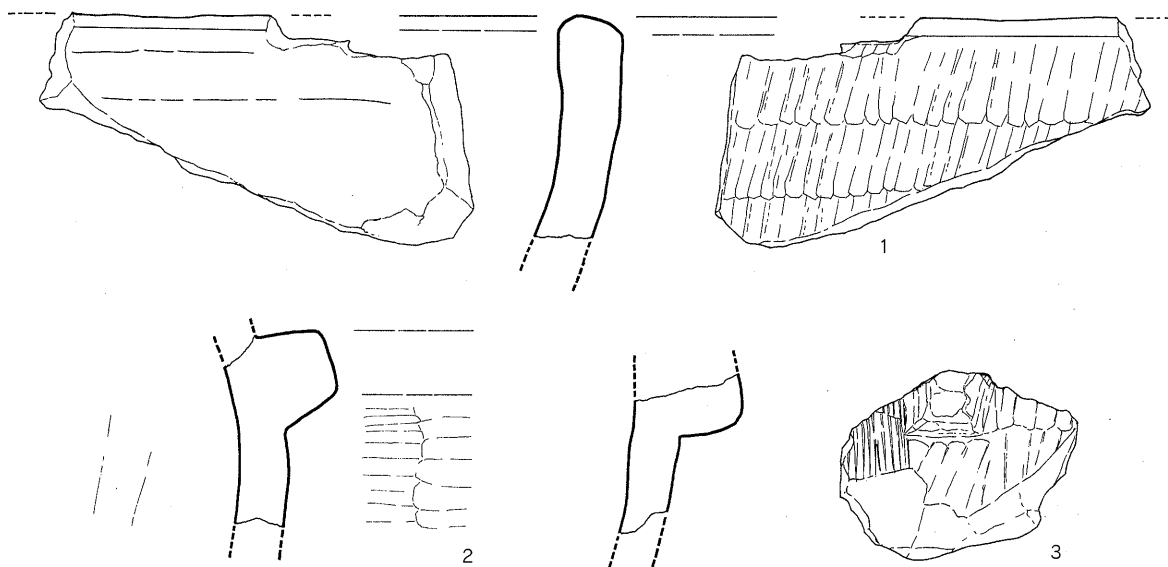


第20図 前田4次金属製品実測図1 (1/2)

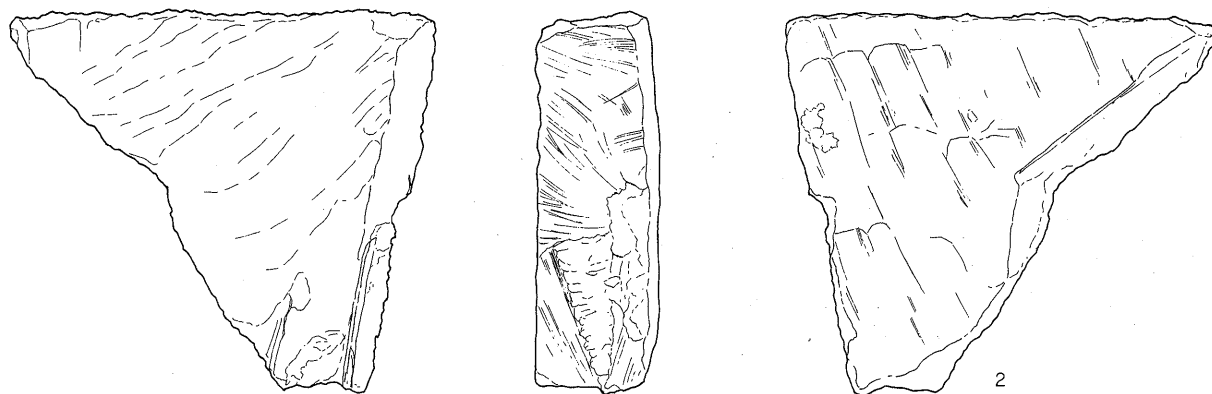
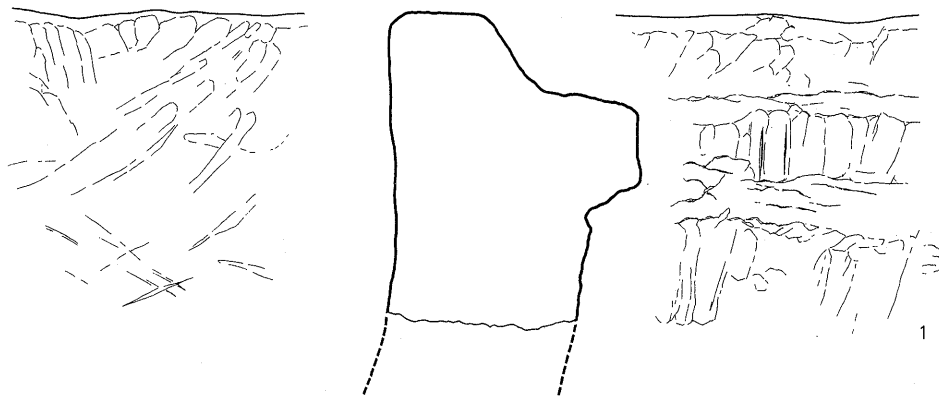
4SD001 灰茶砂質土



4SX002



茶褐土



0 10cm

第22図 前田4次石製品2実測図 (1/2)

前田4次遺構番号台帳 (1)

s-番号	遺構番号	種 別			地 区
1	4SD001	溝	官道東側側溝	灰茶色砂混じり	DJ41他
2		溜まり	3との境は不明	黒灰色土埋土 中世 12c以降	DG40他
3		溜まり		黒灰色土埋土 中世 12c以降	DG41他
4		ピット群	4→5		DG40
5	4SD005	溝	4→5	黒褐土 8c代	DG41他
6		溝		灰黒色砂質土 中世	DI40
7		ピット群			DK41
8		溝	S-100上を通る		CW38
9		ピット?			CV37
10	4SD010	溝	S-100上を通る	S-5に連続する	DI43
11	4SK011	土壌			DA39
12		ピット			CY39
13		ピット			CY40
14		土壌	=s-40a		DA41
16		ピット群			DB42
17		ピット			DB41
18		ピット		位置不明	DA41
19		ピット			DA41
21		ピット群			DB40
22		ピット			DC41
23		窪み	100→23		DC43
24		土壌			DB42
25	4SI025	竪穴式住居			DE45
26		ピット群			DC43
27		ピット			CX39
28		ピット			CX39
29		ピット群			DF44
30	4SI030	溝		8c後	DM45
31		ピット群		灰色砂質土 中世	DH40
32		溝	44→32→36	中世	DI40
33		ピット		茶黒色土 中世	DI41
34		ピット群		灰茶色土 8c	DG41
35	4SI035	竪穴式住居			DD44
36			44→32→36	黄色砂質土 8c後	DI40
37			灰黒色砂質土	中世	DI41
38		溝	39→38	黄灰色砂質土 8c中	DH41
39		溝	39→38	灰色中粒砂質土	DH42
40	4SB040	掘立柱建物	a~h		CY43
41		ピット群		茶黒色土 中世	DI41
42		ピット群		茶黒色土 中世	DM42
43		ピット		黒茶色土	DN44

前田4次遺構番号台帳 (2)

S-番号	遺構番号	種 別	地 区
44		溝 44・36→32 黄茶色土 8c前半	DH40
45	4SK045	土壙 50a→45 弥生前期前半	DH43
46		溝 位置不明	DR46
47		ピット群 弥生後期?	CX37
48		ピット 9c~	CX37
49		土壙 弥生後期	CY38
50	4SB050	掘立柱建物 a~d 50a→45 弥生前期	DG43
51		ピット群	DF45
52		ピット群 弥生後期	DA38
53		ピット 8c後~9c	DB38
54		ピット群 弥生後期	DB39
55	4SK055	土壙 弥生前期前半	DK45
56		ピット群 弥生後期?	DC40
57		ピット群 弥生後期?	DD41
58	4SD058	溝 12c	DE42
59	4SD059	溝? 弥生後期	DE41
60	4SI060	竪穴式住居? 弥生前期前半	DC43
61		ピット 100→61	DC42
62		ピット群	DC42
63		ピット群	DB42
64		ピット群 64→100	DD43
65	4ST065	土壙墓 11c	DE42
66		ピット 66→100	DB41
67		土壙 =50e	DF43
68		ピット	DL44
69		ピット群	DK43
70	4SB070	掘立柱建物 a~h	CY42
71		窪み	CU37
72		ピット	DJ42
73		ピット群 8c	DJ42
74	4SK074	土壙 弥生後期	DA40
75	4SK075	土壙 75→94	DB45
76		ピット群	DD44
77		ピット群	DD44
78		ピット群 ~8c中	DB44
79		ピット群	DC44
80	4SI080	竪穴式住居 弥生後中~後	CW43
81		ピット群	DB44
82		ピット群	DF45
83		ピット群	DE45
84		ピット群	DD45
85	4SK085	土壙	CX43
86		ピット群	DC45

前田4次遺構番号台帳 (3)

S-番号	遺構番号	種 別	地 区
87		ピット群	DC45
88		ピット 弥生前、中	DE44
89	4SD089	溝 弥生後期?	DC39
90	4SI090	竪穴式住居 90→110→120	CT38
91		ピット 8c中～後	DD45
92		ピット群 弥生中期	DD45
93		ピット	DB44
94		ピット 75→94	DB45
95	4SK095	土壌 8c?	CW42
96		ピット 97→96	DA44
97		ピット 97→96	DA44
98		ピット 70g→98	DA43
99		ピット	CX45
100	4SD100	溝 官道西側溝 8c前～中	CV37他
101		ピット 弥生後期	CY45
102		ピット 弥生後期後半	DA45
103		ピット 弥生後期中頃	CW44
104	4SK104	土壌	DB45
105	4SK105	土壌 弥生前期前半	CW41
106	4SX106	ピット 弥生後期後～末	CV44
107	4SK107	土壌 7c後	CV40
108	4SK108	土壌 108→107	CV40
109	4SK109	土壌 弥生前期?	CV40
110	4SI110	竪穴式住居 90→110→120	CU37
111	4SK111	土壌 7c後	CV44
112		ピット群	DB44
113		ピット群	DA43
114		ピット 弥生後期	DA43
115	4ST115	土壌墓 25→115 10c終	DE45
116		ピット群 弥生前期	DA44
117		ピット 11c	CY44
118		ピット 弥生後期前～中	CY43
119		ピット群 7c後～	CX44
120	4SI120	竪穴式住居 90→110→120	CT37
121		ピット	CY44
122		ピット	CX43
123		ピット 弥生後期後半	DA42
124		ピット群	CW39
125	4SK125	土壌 縄文晩期後半	DA40
126		ピット群	CX41
127		ピット群 8c～	CW44
128		ピット群 80→128 8c～	CW43
129		ピット	CY42

前田4次遺構番号台帳 (4)

S-番号	遺構番号	種 別	地 区
130	4SI130	竪穴式住居	CY43
131		ピット群	CY41
132		ピット	CV44
133		ピット	CV42
134		ピット群 7c後	CW41
135	4SI135	竪穴式住居	CV37
136		ピット	CY42
137		ピット 弥生後期後半	CX42
138		ピット 弥生後期	CY44
139		ピット	CV44
140	4SI140	竪穴式住居	CT41
141		ピット	CW44
142			DN46
143		ピット 弥生前期?	DK45
144		ピット 弥生前期?	DK45
145	4SI145	竪穴式住居	CT42
146		ピット群	DI43
147		ピット 11c~	DI42
148	4SK148	土壌 8c?	DL41
149		ピット群 8c~	DL42
150	4SI150	竪穴式住居	CT43
151	4SD151	溝 8c~	DM42
152		ピット群 8c~	DM42
153		ピット群 8c後~	DN43
154	4SK154	土壌 8c後	DO43
155	4SK155	土壌 60→155 弥生前期中	DC43
156		ピット群 8c後~	DO44
157	4SD157	溝 8c後~	DP44
158		土壌 弥生	DD42
159		ピット群 弥生後期?	DC39
160	4SK160	土壌 弥生前期中	DE43
161		ピット群 弥生後期?	CX38
162		ピット	CX39
163		ピット群 位置不明 弥生	CT37
164		ピット群 弥生	CV39
165		落ち? 黄灰色土 弥生	CY42
166		ピット群 位置不明 弥生後期	CW40
167		ピット 位置不明	CT39
168		ピット群 弥生後期	CU40
169		ピット群 8c~	CU40
170	4SK170	土壌 170→175 弥生前期前	CT36
171		ピット 弥生後期後	CU41
172		ピット群 弥生?	CU41

前田4次遺構番号台帳 (5)

S-番号	遺構番号	種 別	地 区
173		ピット 150→173	弥生後期中～後 CU42
174		ピット群	弥生? CT42
175	4SK175	土壙 170→175	弥生前期前 CT36
176		ピット	弥生後期中～後 CU42
177		ピット	8c?～ CU43
178		ピット群	弥生 CV42
179		ピット	CX43
180	4SI180	竪穴式住居	CT42
181	4SK181	土壙	CU44
182	4SK182	土壙	CT44
183		ピット群	CX42
184		ピット	CX45
186		ピット	CX44
187		ピット	弥生後期 CX44
188		ピット	8c～ DA45
189	4SK189	土壙	8c～ DD45
190	4SK190	土壙	CU42
191		ピット	DC45
192	4SK192	土壙	弥生後期? CU39
193		土壙 150→193	弥生後期中 CS44
194		ピット 90→194	位置不明 7c中～後 CT38
196		ピット	7c後 CV44
197		ピット 80→197→103	CW44
198		ピット	8c～ CX43
199	4SK199	土壙 199→100	7c後? DB42
200	4SF200	道路跡	8c～

蓋 (1) 口縁端部が短く折れるタイプのもので、天井部にはヘラケズリが施される。

坏c (2) 高台が外よりに取り付けられる形状を成すもので、高台は外にふんばる。

4SD100黒灰土

(1) 土器 (第19図、図版34-2)

須恵器

小蓋 (1、2) 1は天井部がヘラ切りのままで内面に返りを持つタイプのもので、天井部にはヘラ記号を有す。2は口縁端部が垂下するもので、天井部はヘラ切りのまま。

高坏 (3) 坏部の外面には屈曲部に明確な沈線が巡り、脚部は段状に開きこの屈曲部にも沈線が巡る。若干焼成による歪みが現れている。

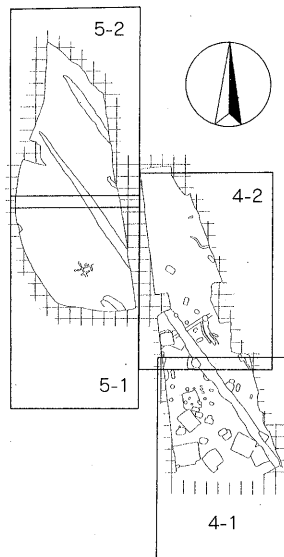
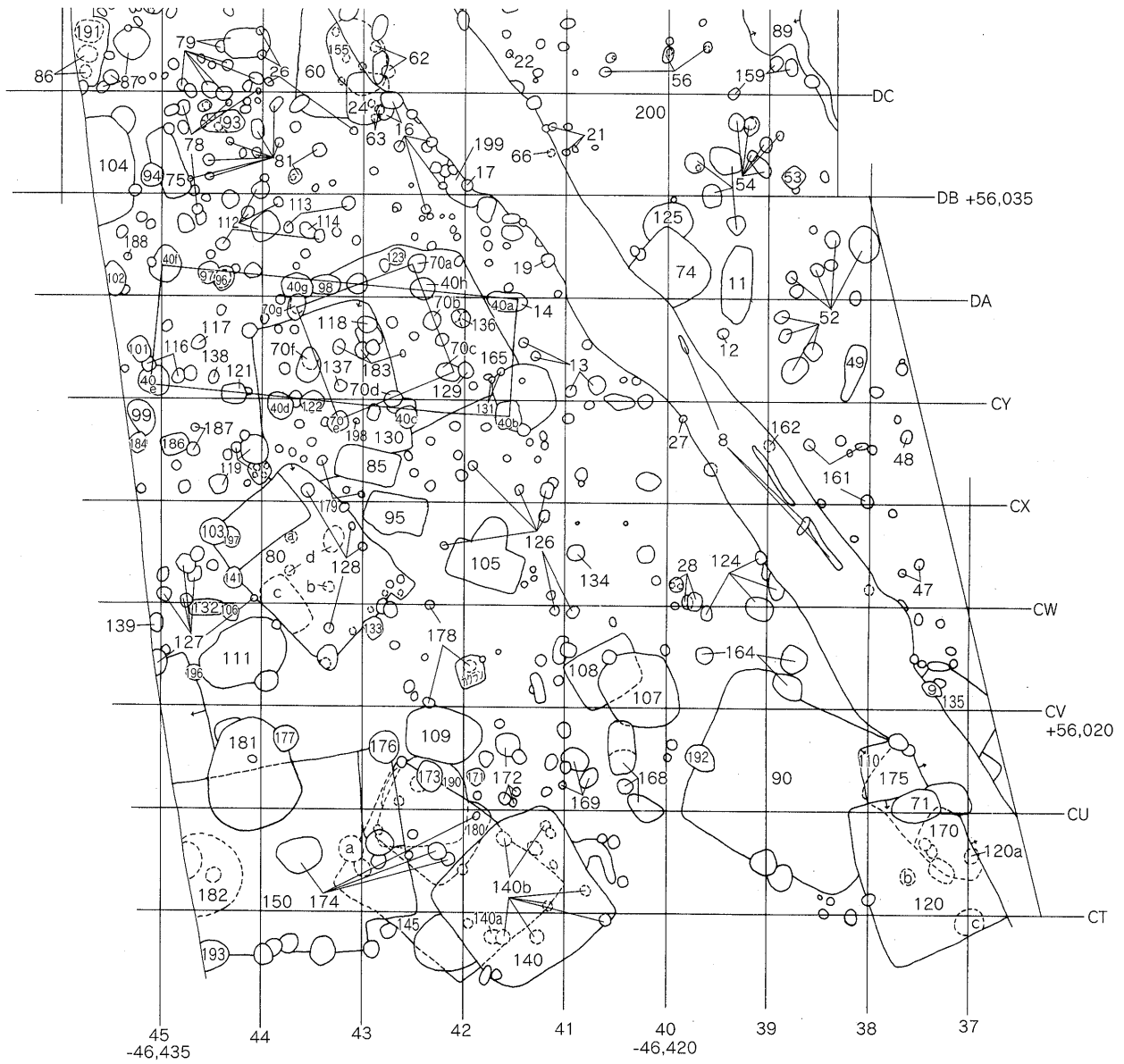
土師器

蓋c (4) 上面が平坦で本体との接点がすぼむ形状のつまみを持ち、内外面に回転を利用したミガキaを施す。

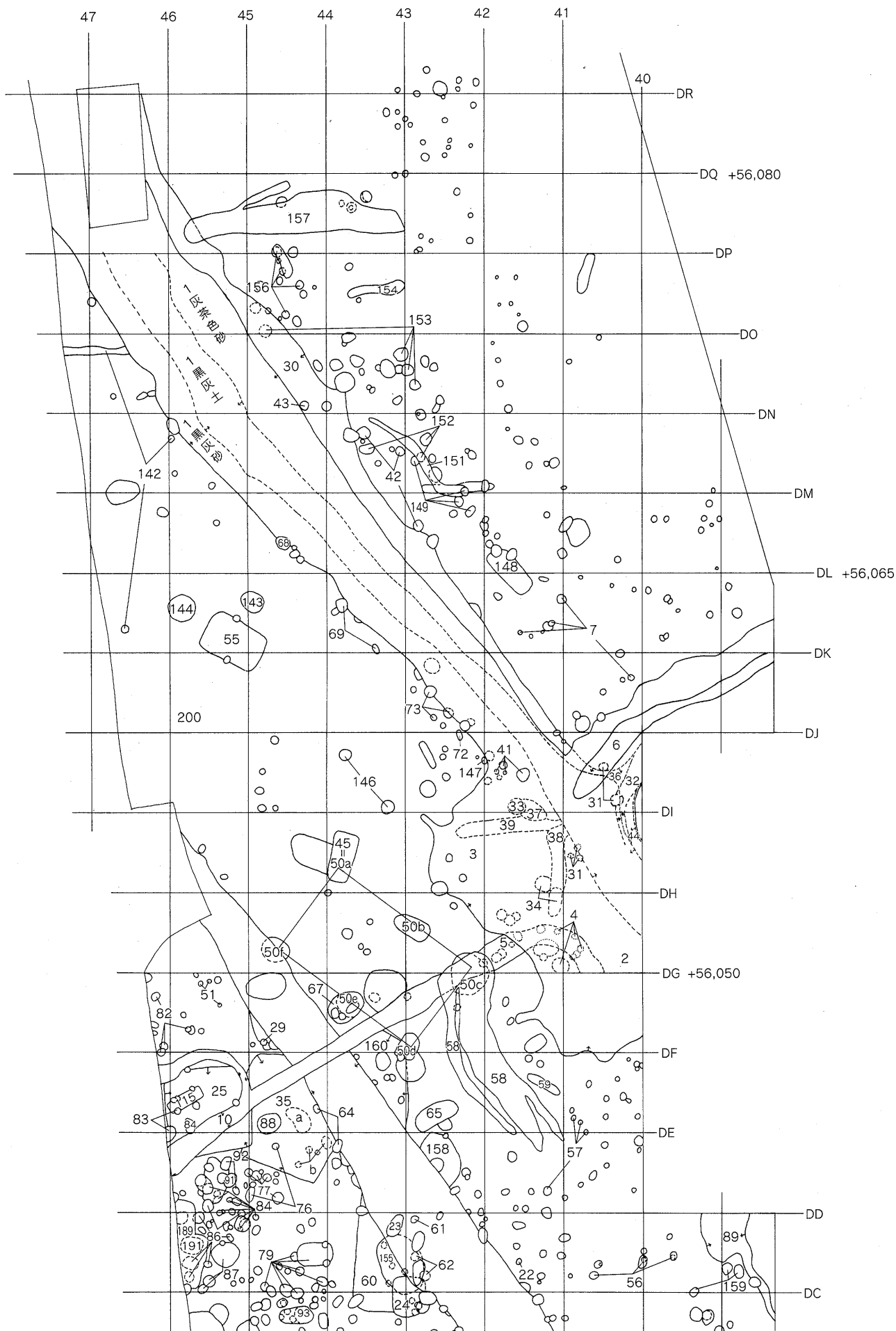
4SD100

(1) 金属器 (第21図、図版36-1)

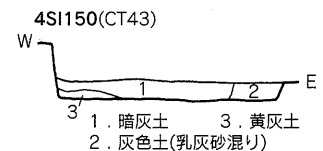
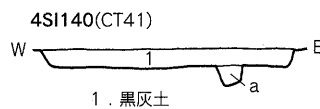
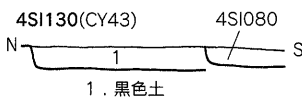
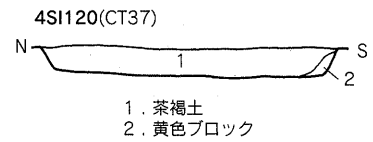
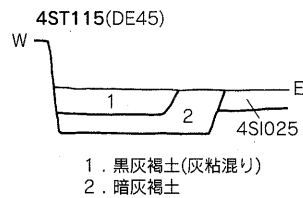
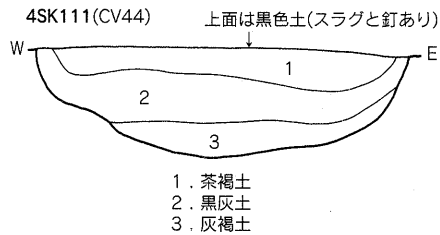
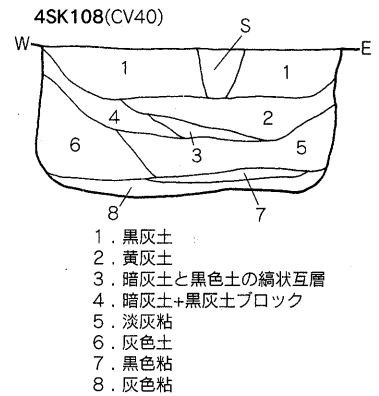
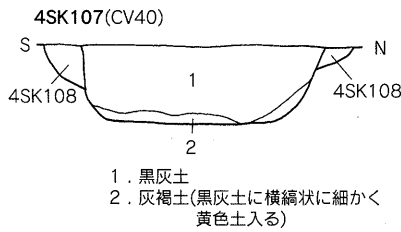
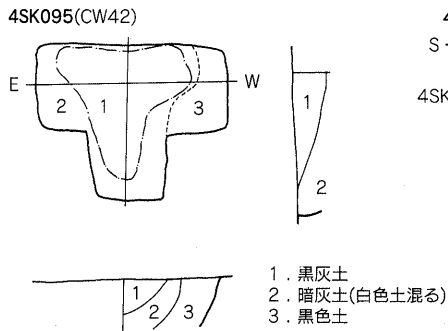
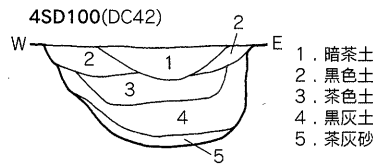
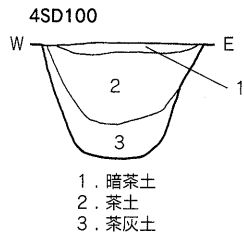
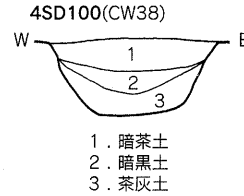
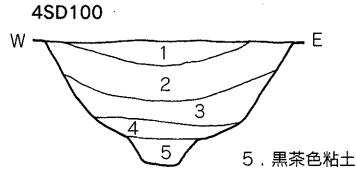
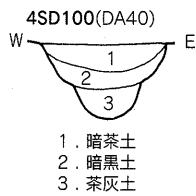
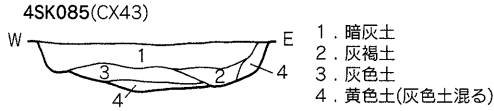
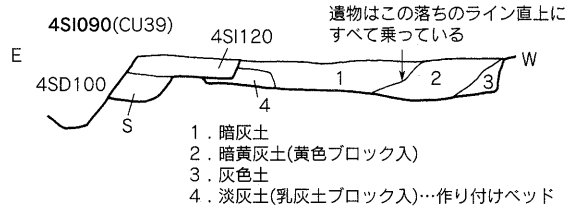
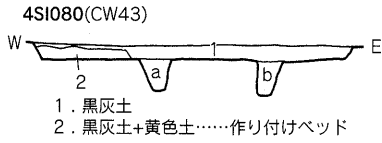
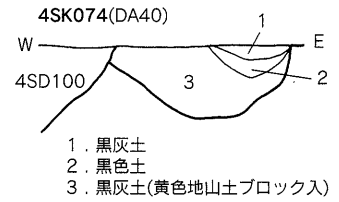
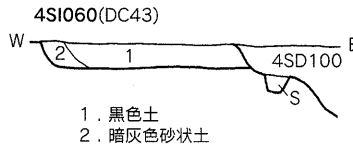
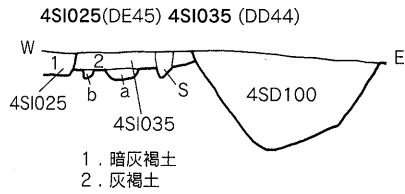
刀子 (1) 身の厚味が4ミリの刀子の刃部の中程の部分と考えられる。



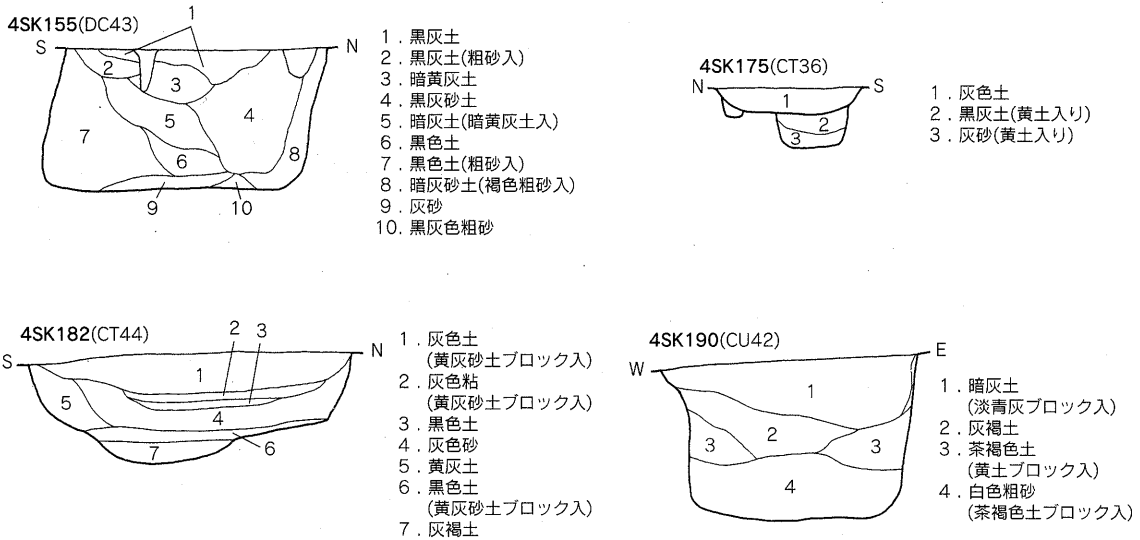
第23図 前田4次略図1 (1/200)



第24図 前田4次略図2 (1/200)



第25図 前田4次個別遺構略図1



第26図 前田4次個別遺構略図2

墳墓の出土遺物

4ST065

(1) 輸入陶磁器 (第19図、図版33-2)

白磁

椀 (1) 濁りのない白色を呈す口縁部片で端部は若干内に屈曲する。化粧土のかけムラがラインとなって口縁端部外面に浮き出ている。

(2) 土器

土師器

椀 (2) 丸い体部に口縁端部が短く外側に反る形状を持つ。高台は直線的で屈曲していない。X期前後の所産と考えられる。

4ST115

(1) 土器 (第11図、図版37-2)

土師器

坏a (1, 2) 底部処理はヘラ切りのままで淡い灰褐色を呈す。遺構の切り合いによって半分が残存する。

皿c (3~5) 底部はヘラ切り後に粘土紐で高台を付けたもので、乳白色系の一部に淡いピンク色の発色が見られる。

黒色土器B類

椀c (6) 口縁は外反りせず、体部は丸く納められている。底部は平坦で、高台はやや外側に膨らむ。ミガキは手持ちで、内外面共に4ないし5分割で施されている。磨耗しておらず漆黒色を呈し、状態は良い。

(2) 金属器 (第20図、図版35-2)

鉄鎌 (1) 身幅が先端に向かって逶減し、基部は背部角が折り曲げられる形状を成す。大宰府の古代墳墓において鎌の出土は珍しい。

鉄釘 (2) 遺構埋土中の中位で縦方向で出土しており、棺蓋をとめていたものと考えられる。

その他の遺構の出土遺物

4SX002

前田4次遺物観察表1

前田4・5・6次遺物観察表凡例

R番号とは遺物に付与された整理番号で、収蔵後の検索にはこの番号を用いる。

土器以外の分量は口径・高さ・底径を、長さ・幅・厚みに読み変える。

数値後の+は欠損状況での数値、*は復元状況での数値で表記している。

石器観察表について

観察表中の略号は次のとおり。

ob (黒曜石)、and (安山岩)、F (剥片)、RF (二次加工のある剥片)、UF (微細剥離など使用痕のある剥片)、AP (石鏃)

石器の設置方向は、剥片の場合は剥離面の打点部分を上とし、リングの広がりを中心部分を下としている。

石核の場合は最終剥離面ないし最も明瞭な剥離面を正面としている。

前田4次遺物観察表 (1)

遺 構	No.	器 種	図版番号	写真番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備 考 (+は欠損、*は復元値)
4SB040f (s-40f)	1	弥生 壺	014		001		6.8+		
4SB050b (s-50b)	1	弥生 壺	014	24-1	003		2.8+		
〃 (s-50b)	2	弥生 甕	014	24-1	001		2.7+	-	
〃 (s-50b)	3	縄文 鉢	014	24-1	002		2.4+		内面ミガキ
4SB050c (s-50c)	1	弥生 甕	014	24-1	001	-	3.9+		刻目1
〃 (s-50c)	2	弥生 鉢	014	24-1	002		4.2+		内面ミガキ
4SB050f (s-50f)	1	弥生 甕	014	24-1	001	-	4.1+		刻目3
4SB070a (s-70a)	1	須 甕	014	24-2	001		4.6+		
4SB070b (s-70b)	1	須 甕	014	24-2	001		4.1+		
4SB070c (s-70c)	1	須 小蓋1	014	24-2	001	-	1.1+		
4SB070g上面 (s-70 g 上面)	1	須 小蓋1	014	24-2	001	11.9*	2.1+	-	天井部ヘラ切りママ
4SB070h (s-70h)	1	須 小蓋	014	24-2	001		1.0+		回転ヘラケズリ後ヘラ記号
4SI035灰褐色土 (s-35灰褐色土)	1	弥生 壺	014	27-2	001	-	3.15+		
4SI035a (s-35a)	1	弥生 壺	014		001	-	3.2+		
4SI080黒灰土 (s-80黒灰土)	1	弥生 壺	014		001	7.2*	6.4+		
〃 (s-80黒灰土)	2	弥生 甕	014		002	-	5.1+		
〃 (s-80黒灰土)	3	弥生 甕	014		003		4.5+	-	
〃 (s-80黒灰土)	4	弥生 器台	014		005	5.4*	4.6+		
〃 (s-80黒灰土)	5	弥生 器台	014		004		9.6+		
4SI090黒灰土 (s-90黒灰土)	1	弥生 壺A	014	25-1	020	20.0*	3.6+		
〃 (s-90黒灰土)	2	弥生 壺A2	014		021	-	4.7+		
〃 (s-90黒灰土)	3	弥生 壺A	014		002	-	3.3+		
〃 (s-90黒灰土)	4	弥生 壺A	014	25-1	015	-	1.9+		
〃 (s-90黒灰土)	5	弥生 壺	014		005	9.9*	4.7+		
〃 (s-90黒灰土)	6	弥生 壺	014	25-1	003	-	3.8+		
〃 (s-90黒灰土)	7	弥生 壺	014	25-1	019		7.2+	6.8*	
〃 (s-90黒灰土)	8	弥生 壺	014	25-1	016		2.7+	-	
〃 (s-90黒灰土)	9	弥生 壺×甕底	014	25-1	008		2.8+	6.1*	
〃 (s-90黒灰土)	10	弥生 壺底	014	25-1	009		2.6+	6.4*	
〃 (s-90黒灰土)	11	弥生 甕	014	25-1	006	19.0*	5.4+		
〃 (s-90黒灰土)	12	弥生 甕	014	25-1	004	15.9*	10.0+		
〃 (s-90黒灰土)	13	弥生 甕	014		013	-	12.9+		
〃 (s-90黒灰土)	14	弥生 甕	014	25-1	001	-	3.4+		
〃 (s-90黒灰土)	15	弥生 甕	014		014	-	5.0+		
〃 (s-90黒灰土)	16	弥生 甕底	014	25-1	011		3.2+	10.0*	
〃 (s-90黒灰土)	17	弥生 鉢	014		007	-	4.0+		
〃 (s-90黒灰土)	18	弥生 鉢	014		017	-	6.2+		
〃 (s-90黒灰土)	19	弥生 器台	014		022	10.6*	3.0+		

前田4次遺物観察表2

遺 構	No.	器 種	図版番号	写真番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備 考 (+は欠損、*は復原値)
4SI090黒灰土 (s-90黒灰土)	20	弥生 器台	014		023		5.7+	-	
〃 (s-90黒灰土)	21	弥生 器台	014		010		15.1+	15.2*	
〃 (s-90黒灰土)	22	弥生 支脚	014		012	6.0	13.2	9.1	
〃 (s-90黒灰土)	23	縄文 深鉢	014		018		3.0+		
4SI090 (s-90-6)	1	弥生 壺	015	25-1	001	21.8*	13.5+		
〃 (s-90-2)	2	弥生 壺	015		002		10.1+		
〃 (s-90-8)	3	弥生 壺	015	25-1	001		9.6+	6.0	
〃 (s-90-16)	4	弥生 壺	015	25-1	001		10.0+	6.1	
〃 (s-90-5)	5	弥生 甕	015		001	17.7*	7.5+		
〃 (s-90-4)	6	弥生 甕底	015	25-1	001		12.9+	9.2	
〃 (s-90-1)	7	弥生 甕	015	25-1	001	25.6	38.7	9.2	肥後系
〃 (s-90-13)	8	弥生 器台	015		001	13.4*	8.6+		
〃 (s-90-12)	9	弥生 器台	015	25-1	001	10.2	9.2	11.8	
〃 (s-90-7)	10	弥生 器台	015	25-1	001	13.0	16.1	12.9	
〃 (s-90-14)	11	弥生 器台	015	25-1	001	11.3	16.5	13.6*	
〃 (s-90-2)	12	弥生 器台	015		001	12.4*	13.8+		
〃 (s-90-11)	13	弥生 器台	015	25-1	001	10.5	16.2	12.6	
〃 (s-90-10)	14	弥生 器台	015	25-1	001	11.3	15.9	13.3*	
〃 (s-90-9)	15	弥生 器台	015	25-1	001	12.7	15.4	15.5	
4SI120 (s-120-15)	1	弥生 壺	016		001	15.5*	19.45+		
〃 (s-120-13)	2	弥生 壺	016	25-2	001	13.0*	15.0+		
〃 (s-120-11)	3	弥生 壺	016		001	11.0*	8.2+		
〃 (s-120-10)	4	弥生 壺	016		002	-	7.1+		
〃 (s-120-10)	5	弥生 壺	016	25-2	004	14.8*	15.6	6.7	
〃 (s-120-10)	6	弥生 壺	016	25-2	003		6.4+	5.4	
〃 (s-120-6)	7	弥生 壺	016		001	-	5.05+	7.6	
〃 (s-120-14)	8	弥生 壺	016		001		2.7+	6.4	
〃 (s-120-12)	9	弥生 壺	016		001		3.9+	16.0*	
〃 (s-120-16)	10	弥生 甕	016	25-2	001	17.0*	15.7+		
〃 (s-120-18)	11	弥生 甕	016		001		11.2+	8.75	
〃 (s-120-10)	12	弥生 鉢	016	25-2	001	32.6	22.9	7.4	
〃 (s-120-7)	13	弥生 鉢	016	25-2	001	21.0*	10.5	6.0	
〃 (s-120-17)	14	弥生 鉢BC	016	25-2	001	22.5*	12.3+		
〃 (s-120-9)	15	弥生 高坏	016		001		10.2+		
〃 (s-120-8)	16	弥生 器台	016		001		10.8+	15.7*	
〃 (s-120)	17	縄文 鉢	016		001		2.65+		
4SI140a (s-140a)	1	須 小蓋1	017	26-1	002	11.2	2.2+	-	ヘラ切り後ナダ、ヘラ記号
〃 (s-140a)	2	須 小蓋1	017	26-1	003	10.4*	2.3	-	ヘラ切り後ナダ、ヘラ記号
〃 (s-140a)	3	須 小蓋1	017	26-1	001	-	1.5+		天井部磨耗
4SI140b (s-140b)	1	須 小蓋1	017	26-1	001	-	1.1+		
〃 (s-140b)	2	土師 甕	017	26-1	002	-	4.9+		
4SI150暗灰土 (s-150暗灰土)	1	須 蓋1	017	31-2	002	-	1.9+		ヘラ切りママ
〃 (s-150暗灰土)	2	須 小蓋1	017		003	-	1.9+		
〃 (s-150暗灰土)	3	須 小蓋1	017	31-2	007	-	1.5+		
〃 (s-150暗灰土)	4	須 小坏a	017	31-2	006	10.4	3.3	6.2	ヘラ切り後ナダ、ヘラ記号
〃 (s-150暗灰土)	5	須 甕	017	31-2	005	-	3.6+		
〃 (s-150暗灰土)	6	須 甕	017	31-2	004		7.2+		
〃 (s-150暗灰土)	7	土師 甕	017	31-2	009	-	13.3+		
〃 (s-150暗灰土)	8	弥生 壺	017	27-1	016	8.6*	15.9+		
〃 (s-150暗灰土)	9	弥生 壺	017		011	-	4.0+		
〃 (s-150暗灰土)	10	弥生 壺	017		008		2.2+	8.7*	
〃 (s-150暗灰土)	11	弥生 甕	017	27-1	014		5.6+	8.6*	
〃 (s-150暗灰土)	13	弥生 鉢	017	27-1	010		4.6+		
〃 (s-150暗灰土)	14	弥生 鉢	017		013	-	3.4+		
〃 (s-150暗灰土)	15	弥生 鉢	017		012	-	4.2+		
〃 (s-150暗灰土)	16	弥生 脚付鉢	017	27-1	015		2.2+		
〃 (s-150暗灰土)	12	縄文 深鉢	017	31-2	001	-	2.6+		
4SI150c (s-150c)	1	弥生 壺A	017	27-1	002	-	4.3+		

前田4次遺物観察表3

遺構	No.	器種	図版番号	写真番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
4SI150c (s-150c)	2	弥生 壺A	017		003	-	3.7+		
〃 (s-150c)	3	弥生 壺	017		001	-	2.4+	5.2*	
4SI180 (s-180)	1	弥生 甕	017	27-2	001	-	7.4+		
4SI180a (s-180a)	1	弥生 壺	017	27-2	001	-	2.0+		
4SK011 (s-11)	1	弥生 甕	017	28-1	001	-	6.8+	-	
〃 (s-11)	2	弥生 鉢	017	28-1	002	26.4*	13.8+		
4SK055 (s-55)	1	弥生 甕	017	28-2	001	-	4.5+		
〃 (s-55)	2	弥生 甕	017	28-2	002	18.3*	10.9+		
4SK095 (s-95)	1	須 坏c	017		003	-	1.6+		
〃 (s-95)	2	弥生 壺	017		001	-	5.1+		
〃 (s-95)	3	弥生 壺	017		005	-	4.0+	-	
〃 (s-95)	4	弥生 壺	017	27-2	007	-	2.3+		
〃 (s-95)	5	弥生 甕	017		002	-	5.6+	-	
〃 (s-95)	6	弥生 甕	017		004	-	5.6+	-	
〃 (s-95)	7	弥生 壺	017		006	-	6.0+		
4SK105 (s-105)	1	弥生 鉢	018	27-2	001	-	4.65+		
4SK107 (s-107)	1	須 小蓋1	018	29-1	002	-	1.6+		ヘラ切りママ、酸化焼成
〃 (s-107)	2	須 小蓋1	018	29-1	003	11.2*	2.0+	-	ヘラ切りママ
〃 (s-107)	3	須 小坏	018	29-1	004	-	2.6+		口縁酸化気味、軟質
〃 (s-107)	4	須 甕	018	29-1	001	-	3.6+		端部は沈線で装飾
〃 (s-107)	5	須 甕	018	29-2	005	-	5.4+		
4SK108 (s-108)	1	弥生 壺	018	29-2	005	-	12.3+		
〃 (s-108)	2	弥生 壺	018	29-2	001	-	2.5+		
〃 (s-108)	3	弥生 壺	018	29-2	002	-	2.5+		
〃 (s-108)	4	弥生 壺	018	29-2	003	-	4.1+		
〃 (s-108)	5	弥生 甕	018	29-2	004	-	2.8+		
4SK109 (s-109)	1	須 小蓋a1	018	31-1	008	11.6	2.1	-	ヘラ切り後、軽いハケナデ
〃 (s-109)	2	須 小蓋1	018	31-1	019	11.1	2.0	-	軽いハケナデ、酸化軟質
〃 (s-109)	3	須 小蓋1	018	31-1	006	10.8*	2.3	-	ヘラ切り後、ハケナデ
〃 (s-109)	4	須 小蓋c1	018		003	-	3.7+		ヘラ切り後、回転ヘラケズリ
〃 (s-109)	5	須 小蓋1	018		022	-	1.8+		ヘラ切り後、軽いナデ
〃 (s-109)	6	須 小蓋1	018		004	-	2.2+		ヘラ切り後、軽いナデか
〃 (s-109)	7	須 小蓋1	018		005	-	2.5+		ヘラ切り後、ヘラ記号
〃 (s-109)	8	須 小蓋1	018		007	14.2*	1.7+	-	天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-109)	9	須 小蓋	018	31-1	021		1.5+		ヘラ切り後、ヘラ記号、軟質
〃 (s-109)	10	須 小坏a	018	31-1	010	10.7*	3.1	7.6*	ヘラ切り後、ハケナデ
〃 (s-109)	11	須 小坏	018		009	-	4.0+		
〃 (s-109)	12	須 壺	018		016	-	3.0+		
〃 (s-109)	13	須 瓶	018		014	12.8*	7.2+		
〃 (s-109)	14	須 瓶	018		013	-	8.2+	12.3*	
〃 (s-109)	15	須 甕	018		017	-	5.3+		
〃 (s-109)	16	須 甕	018		011	-	5.0+		
〃 (s-109)	17	須 小高坏×	018	31-1	015	-	5.1+		
〃 (s-109)	18	須 高坏(脚部)	018	31-1	012	-	3.7+	7.4	
〃 (s-109)	19	土師 甕a	018	31-1	018	20.2*	6.0+		
〃 (s-109)	20	土師 盤	018	31-1	020	-	3.9+		
4SK111黒灰土 (s-111黒灰土)	1	須 小蓋1	018	30-1	002	11.1*	3.0	-	ヘラ切り後、軽いナデ、軟質
〃 (s-111黒灰土)	2	土師 甕	018	30-1	001	-	4.7+		
4SK160 (s-160)	1	弥生 甕	018	32-1	003	-	2.3+		
〃 (s-160)	2	弥生 甕	018	32-1	004	-	1.8+		
〃 (s-160)	3	弥生 甕	018	32-1	005	-	2.4+		
〃 (s-160)	4	弥生 甕	018	32-1	001	-	6.3+	8.1*	
〃 (s-160)	5	弥生 甕	018	32-1	002	-	3.2+	7.1	
4SK170 (s-170)	1	弥生 壺	018	32-2	002	-	4.8+		
〃 (s-170)	2	弥生 甕(刻目3)	018	32-2	001	-	7.0+		
〃 (s-170)	3	縄文 深鉢	018	32-2	003	-	3.1+		
〃 (s-170)	4	縄文 深鉢	018	32-2	004	-	3.5+		
〃 (s-170)	5	縄文 深鉢	018	32-2	005	-	3.0+		

前田4次遺物観察表4

遺 構	No.	器 種	図版番号	写真番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備 考 (+は欠損、*は復原値)
4SK182	(s-182)	弥生 壺	018	33-1	002	-	3.2+		
〃	(s-182)	弥生 甕	018	33-1	004	-	4.5+		
〃	(s-182)	弥生 甕	018	33-1	001	-	4.9+	7.6	
〃	(s-182)	弥生 鉢	018	33-1	003	-	5.6+		
4SD001灰茶色砂混土	(s-1灰色砂混土)	土師 小皿a	019	34-1	005	8.4	1.3	6.1	イト・内底ナデ○・板圧×
〃	(s-1灰色砂混土)	土師 小皿a	019	34-1	006	8.8*	1.2	7.0	ヘラ・内底ナデ○・板圧○
〃	(s-1灰色砂混土)	土師 小皿a	019	34-1	007	8.7	0.9	7.4	イト・内底ナデ○・板圧○
〃	(s-1灰色砂混土)	瓦器 椀	019	34-1	009	16.4*	5.6	7.6*	
〃	(s-1灰色砂混土)	瓦器 椀	019	34-1	008	15.3*	5.8	6.5	
〃	(s-1灰色砂混土)	白磁 椀IV	019	34-1	010		2.2+	6.8	
4SD100暗茶土	(s-100暗茶土)	須 小蓋a	019	34-2	010	10.6*	1.85+	-	ヘラ切り後、ヘラ記号、軟
〃	(s-100暗茶土)	須 蓋	019		011		1.9+	-	天井部回転ヘラケズリ
〃	(s-100暗茶土)	須 坏蓋	019	34-2	002	13.2*	1.4	-	天井部回転ヘラケズリ
〃	(s-100暗茶土)	須 坏蓋3	019		001	15.6*	1.5	-	ヘラ切り後、ナデ
〃	(s-100暗茶土)	須 坏c3	019		006	12.0	3.25	8.7	高台外寄り
〃	(s-100暗茶土)	須 坏c3	019	34-2	005	11.6	3.8	8.8	高台外寄り
〃	(s-100暗茶土)	須 坏c3	019	34-2	004	12.9	3.7	11.0	内底滑面化
〃	(s-100暗茶土)	須 瓶	019	34-2	009	8.55	13.8+		
〃	(s-100暗茶土)	9 須 皿a	019	34-2	007	21.75	3.5	18.5	ヘラ切りママ
4SD100茶色土	(s-100茶色土)	須 蓋3	019	34-2	001	-	1.35	17.9	天井部回転ヘラケズリ
〃	(s-100茶色土)	土師 高坏(脚部)	019	34-2	002		6.6+	13.5*	
4SD100黒色土	(s-100黒色土)	須 蓋3	019	34-2	001	14.0*	1.82	-	天井部回転ヘラケズリ
〃	(s-100黒色土)	須 坏c3	019	34-2	002		3.6+	8.5	高台外寄り
4SD100黒灰土	(s-100黒灰土)	須 小蓋a1	019	34-2	003	10.2*	1.6		ヘラ切りママ、ヘラ記号
〃	(s-100黒灰土)	須 小蓋a3	019	34-2	004	11.95	1.1		ヘラ切りママ
〃	(s-100黒灰土)	須 高坏	019	34-2	002	19.3	7.1	11.65	
〃	(s-100黒灰土)	土師 蓋c	019	34-2	001		1.4+		
4ST065	(s-65)	白磁 椀I	019	33-2	002	16.0*	2.9+		
〃	(s-65)	土師 椀c	019	33-2	001	15.8	6.4	7.4	
4ST115	(s-115-6)	土師 坏a	011	37-2	001	11.2*	2.1	7.1*	ヘラ・内底ナデ○・板圧×
〃	(s-115-7)	土師 坏a	011	37-2	001	11.8*	2.5	7.6*	ヘラ・内底ナデ○・板圧×
〃	(s-115-2)	土師 皿c	011	37-2	001	11.2	2.0	6.4	内底ナデ○・板圧×
〃	(s-115-4)	土師 皿c	011	37-2	001	11.4	1.6	6.9	ヘラ・内底ナデ○・板圧×
〃	(s-115-1)	土師 皿c	011	37-2	001	12.5	2.1	6.4	ヘラ・内底ナデ○・板圧×
〃	(s-115-5)	黒B 椀c	011	37-2	001	15.4	6.5	8.2	
4SX106	(s-106)	弥生 高坏	019		001		2.7+		
〃	(s-106)	弥生 甕底	019	35-1	002		13.8+	-	
4SK155	(s-155)	弥生 壺	011		002	-	3.7+		
〃	(s-155)	弥生 甕	011		008	20.2*	12.3+		
〃	(s-155)	弥生 甕	011		007		1.7+		
〃	(s-155)	弥生 甕	011		004	-	4.0+		
〃	(s-155)	弥生 甕	011		005	-	4.4+		
〃	(s-155)	弥生 甕	011		006	-	3.4+		
〃	(s-155)	弥生 甕	011		001		3.5	8.2*	
〃	(s-155)	縄文 深鉢	011		003	-	1.8+		

(1) 石製品 (第22図、図版36-2)

石鍋 (1~3) 縦方向の耳が付くAタイプ (3) と鋳付きのBタイプ (2) の二種類が出土している。

4SX003下層

(1) 金属器 (第21図、図版36-1)

板状銅製品 (1) 多少反りのある板状を呈し、方形の角の部分の小片である。

4SX003

(1) 金属器 (第21図、図版36-1)

鉄釘 (1) 腐食し膨れているが身の断面形状が方形を呈すことから釘に比定した。

4SX054

(1) 金属器 (第21図、図版36-1)

前田4次遺物観察表5

前田4次金属製品・石製品観察表(1)

遺構	No.	種別	器種	図版番号	写真番号	R番号	縦 cm	横 cm	厚さ cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
4SI080c (s-80c)	1	鉄製品	鉄族	20	35-2	001	5.8	3.0	0.5	
4SK109 (s-109)	1	鉄製品	鉄族	20	35-2	001	9.5	0.9	0.5	
〃 (s-109)	2	鉄製品	鉄釘	20	35-2	002	3.9	0.7	0.7	
4SK111茶褐色土 (s-111茶褐色土)	1	鉄製品	鉄族	20	35-2	001	13.2	1.05	0.95	
4ST115 (s-115-3)	1	鉄製品	鎌	20	35-2	003	15.8	2.8	0.4	
〃 (s-115)	2	鉄製品	鉄釘	20	35-2	002	2.2	0.9	0.7	
〃 (s-115)	3	鉄製品	鉄釘	20	35-2	001	2.0	0.7	0.8	
4SD001灰茶色砂混土 (s-1灰茶砂混じり土)	1	鉄製品	鉄釘	20	35-2	004	4.5	1.6	1.0	
〃 (s-1灰茶砂混じり土)	2	鉄製品	鉄釘か	20	35-2	002	3.7	0.7	0.6	
〃 (s-1灰茶砂混じり土)	3	金属製品	棒状鉄製品	20	35-2	003	5.0	1.8	1.4	
〃 (s-1灰茶砂混じり土)	4	金属製品	棒状鉄製品	20	35-2	001	3.7	0.7	0.6	
4SD001灰茶色砂質土 (s-1灰茶色砂質土)	1	鉄製品	鉄釘	20	35-2	002	2.0	0.6	0.4	
〃 (s-1灰茶色砂質土)	2	鉄製品	鉄釘(かすがい状)	20	35-2	001	3.8	0.85	0.5	
〃 (s-1灰茶色砂質土)	3	金属製品	鉄塊	20	35-2	003	3.15	3.4	1.4	
4SD001灰茶砂 (s-1灰茶砂)	1	金属製品	板状鉄製品	21	36-1	001	4.0	3.0	1.2	
4SD030黒茶土 (s-30黒茶土)	1	金属製品	板状鉄製品	21	36-1	001	6.0	3.5	0.6	
4SD100暗茶土 (s-100暗茶土)	1	鉄製品	刀子	21	36-1	008	3.0	1.2	0.9	
4SD100 (s-100)	1	鉄製品	刀子	21	36-1	001	4.2	1.4	0.6	
4SX003下層 (s-3下層)	1	金属製品	板状銅製品	21	36-1	001	2.8	2.0	0.7	
4SX003 (s-3)	1	鉄製品	鉄釘	21	36-1	001	4.05	1.3	0.7	
4SX054 (s-54)	1	鉄製品	鉄釘	21	36-1	001	2.0	0.3	0.3	
4SX091 (s-91)	1	鉄製品	鉄族	21	36-1	001	12.0	3.0	0.5	
茶褐色土 (茶褐色土)	1	鉄製品	くさび	21	36-1	003	4.3	1.8	1.1	
〃 (茶褐色土)	2	鉄製品	鉄釘	21	36-1	001	3.5	0.6	0.6	
〃 (茶褐色土)	3	鉄製品	鉄釘	21	36-1	002	2.1	0.6	0.5	
4SI090黒灰土 (s-90黒灰土)	1	土製品	焼土塊	21	36-2	024	3.5	2.9	1.5	
4SD001灰茶色砂混土 (s-1灰茶砂混じり土)	1	石製品	石鍋	21	36-2	011		5.7+		滑石
4SD001灰茶砂質土 (s-1灰茶砂質土)	1	石製品	石鍋	22	36-2	005		3.7*		滑石
〃 (s-1灰茶砂質土)	2	石製品	石鍋加工品	22	36-2	004	5.7	9.0	1.5	滑石
4SX002 (s-2)	1	石製品	石鍋	22	36-2	001		6.0*		滑石
〃 (s-2)	2	石製品	石鍋	22	36-2	002		5.3*		滑石
〃 (s-2)	3	石製品	石鍋	22	36-2	003		4.5*		滑石
茶褐色土 (茶褐色土)	1	石製品	石鍋	22	37-1	005		8.3*		滑石
〃 (茶褐色土)	2	石製品	石鍋加工品	22	37-1	004	10.0	11.5	3.0	滑石

鉄釘(1) 錆落としの結果身の断面径2ミリ程度とごく細いが、棒状を呈すことから釘に比定した。

4SX091

(1) 金属器(第21図、図版36-1)

鉄鎌(1) 台形の先端部を持つ鎌で、茎は方形を呈す。先端はさほど細くならない。

4SX106

(1) 土器(第19図、図版35-1)

弥生土器

高坏型土器(1) 脚と坏の接合部位の破片で、坏部内面にミガキが見られる。

甕型土器(2) 尖る丸底を呈し、体部外面にタタキを有し下半部はケズリ気味のナデが加えられる。

茶褐色土

(1) 石製品(第22図、図版37-1)

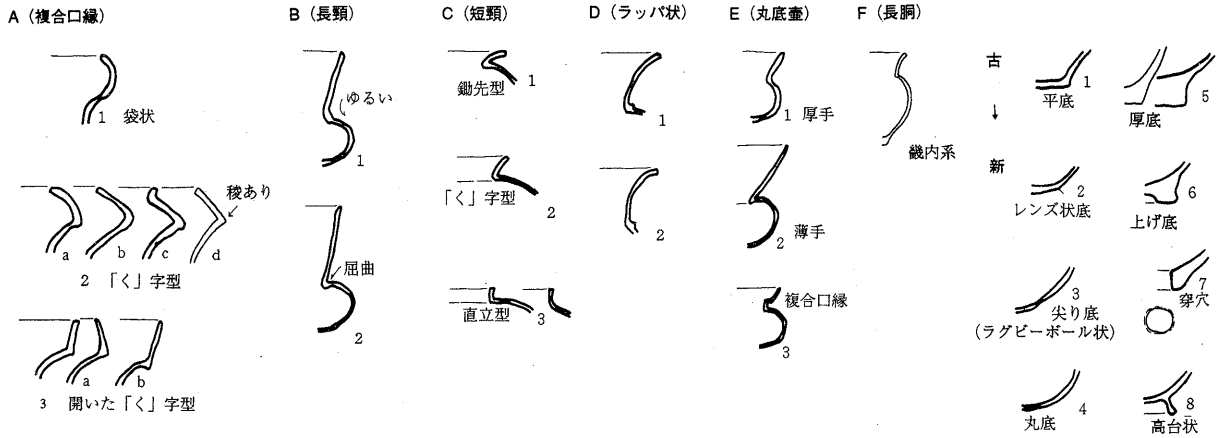
石鍋(1、2) 1は鑿付きのBタイプであるが、器壁が厚く大型品である。2は二次加工が施された破片。

前田4・5・6次遺物記号化一覧

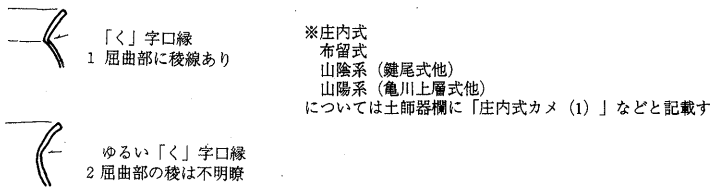
前田4・5・6次遺物記号化一覧

出土遺物の台帳化にあたっては従来の本市仕様の記号以外に、弥生時代後期の土器については型式ごとにアルファベットの大区分と数字の小区分に属性を分けてその組み合わせによって個別の表記を行っている。中間的様相については新しい傾向の属性に帰属させている。また記号化していない型式名については通有の名称で記載している。

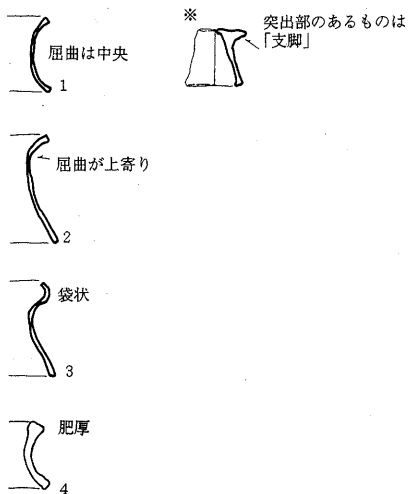
壺



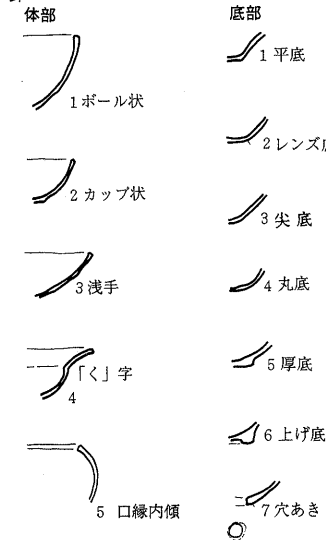
甕



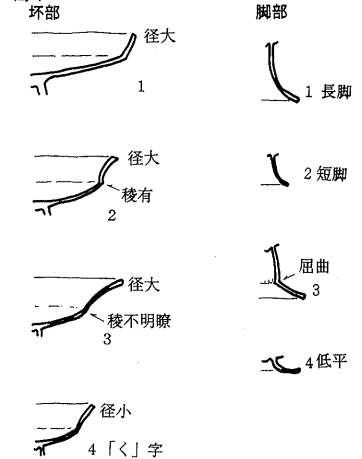
器台



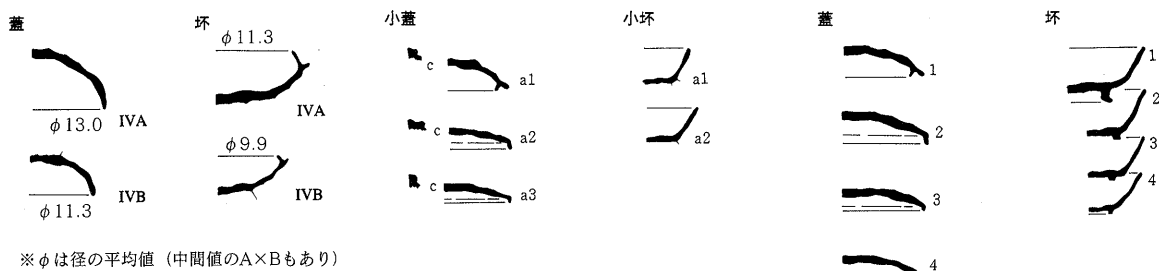
鉢



高坏



付；須恵器



(2) 前田遺跡5次調査

1. 調査の状況

4次調査に引き続きおこなった調査で、調査前は南北2筆の水田であった。調査区南西側に排土を一旦置いたため、この部分は後日調査をおこなった。北側の筆では南より段差をもって低くなっており、耕作土下には遺物包含層はなく、地盤に直接掘込んでいる形で遺構が検出された。南西側は地盤が西に向かって徐々に高くなり、包含層も西側ほど薄くなっている。高位部分には白色粘土（八女粘土層）と褐色粘土（鳥栖ローム層）の第四紀層の一部が見えている。

2. 遺構

土坑

5SK003（第28図、図版38-2） 調査区の東壁中央、5SD001と5SD100の中間で検出された弧状を呈す深さ0.1mほどの浅い遺構で、褐色土で覆われる。平安後期以降の遺物が含まれ、それ以降の所産である。遺構の性格を特定する要素はない。

5SK042（第28図、図版38-2） 調査区西壁中央やや南で検出された半円形を呈す遺構で、遺構の性格を特定する要素はない。瓦質土器片が出土しており、中世後期以降の所産である。

溝

5SD001（第28,29図、図版38-1,39-1） 位置関係から4SD001の延長遺構と考えられる。平行する5SD100に比して検出地盤が深かったため、遺構自体の残存する深さは浅い。最大幅2.3m。深い箇所0.45mの深さがある。しかし、溝底のレベル高は平行する同位置で比較した場合、ほぼ同じ高さを保っている。北端は先細の形状で終息する。溝底のレベルは北に向かって浅くなるような傾向は顕著にはない。出土遺物には須恵器小蓋1や坏c1など7世紀代に接触する資料が含まれている。

5SD004（第28図、図版38-2） 調査区南端で弧状に展開する短い溝状遺構で、深いところで0.8mの深さを測る。須恵器の坏片が出土しており、古墳時代以降に埋没したものと判断される。南側で調査した7次調査区の7SD095につながるもので、直径約15mほどの円墳の周溝と考えられる。

5SD100（第28,29図、図版38-3,39-2・3） 位置関係から4SD100の延長遺構と考えられる。5SD001に平行する直線的な溝で、最大幅3.2m。深い箇所0.8mの深さがある。黄色い粘土地盤を穿って構築される。埋没状況は縦横断面での観察から、初期には黒色～褐色の有機質を含む自然堆積土が形成され、深さの約半分の位置で地盤の黄色粘土の塊が前述の有機質土を覆うような形で全体に堆積している。この層はブロック状の粘土塊が構成主要素であることから、人為的に形成された可能性がある。溝中央部の両肩が二段掘り状になっている状況と関連があると思われ、溝が埋没する途中の段階で、溝肩を直線的に削り直す補修が加えられたものと考えられる。その際には削り落とした土は搬出せずに溝底で均されている。この溝は最終的にはさらにその上に褐色土層が自然堆積して埋没している。溝の肩にあたる部位に不規則な小ピットが何箇所も穿たれ、溝の最終埋没土と同じ層で埋没しているものが複数存在する。溝肩の外側にも小ピットが展開している。どれほどのものがこの溝が機能していた時期に併存したのか明確にできなかったが、本調査区中ではこの溝の東側に集中して検出されていることから、溝の存在と何等かの関係を持つ可能性も考えられる。出土遺物には8世紀前半以降の須恵器坏などが出土する。周辺の住居跡や掘立柱建物の存在から7世紀後半や弥生前期の遺物も見られる。溝の横方向の土層断面を薬剤で固化し、剥ぎ取って保存している。

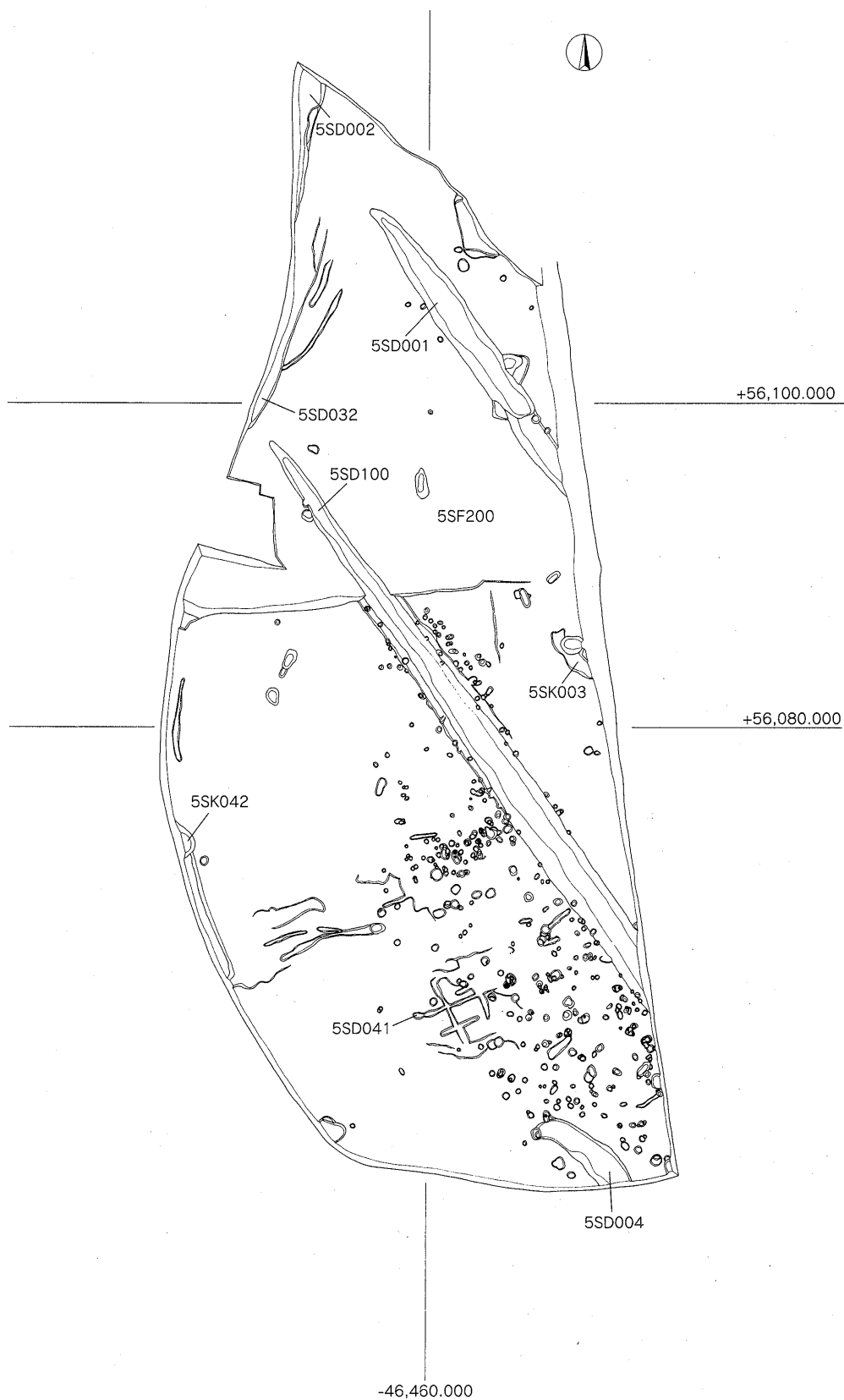
道路状遺構

5SF200（第29図、図版38-1） 4SF200の北延長上に位置する。古代官道の道路面と想定した。現場の観察では路面の築造に関する痕跡や通行痕跡は残存していなかった。路面幅は最大幅11.4m、側溝心々の距離は13.5mを測る。5SD100沿いには小ピットが不連続に展開し、溝の最終埋没と同時に埋まったものもある。

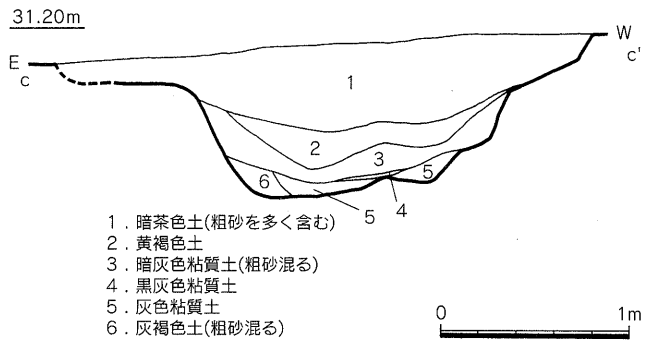
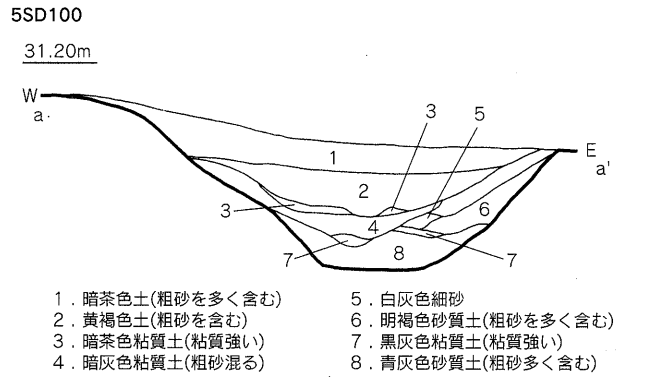
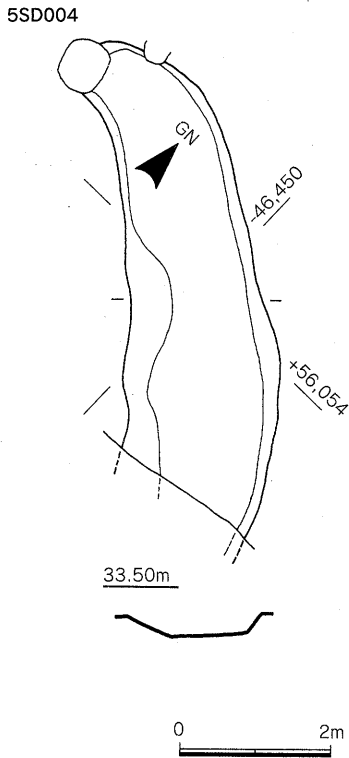
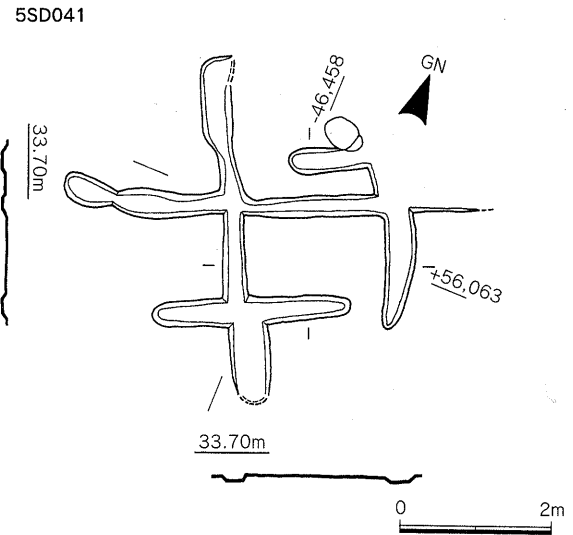
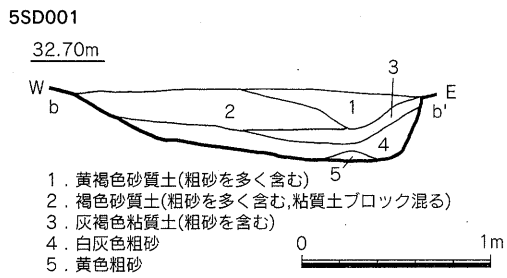
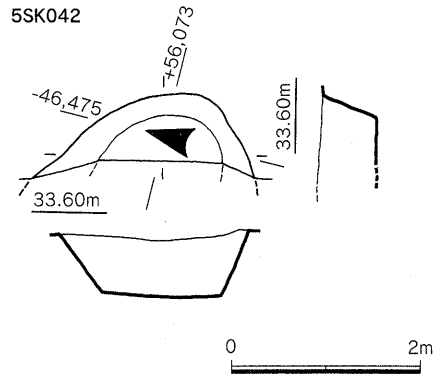
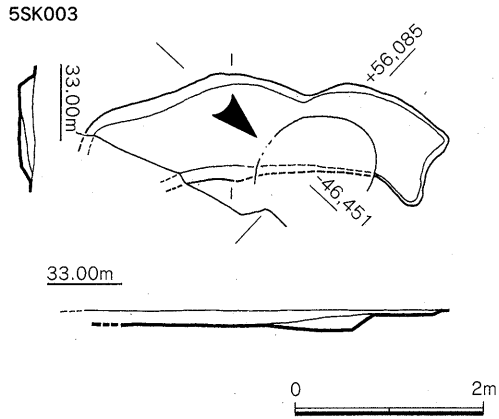
その他の遺構

畝状遺構

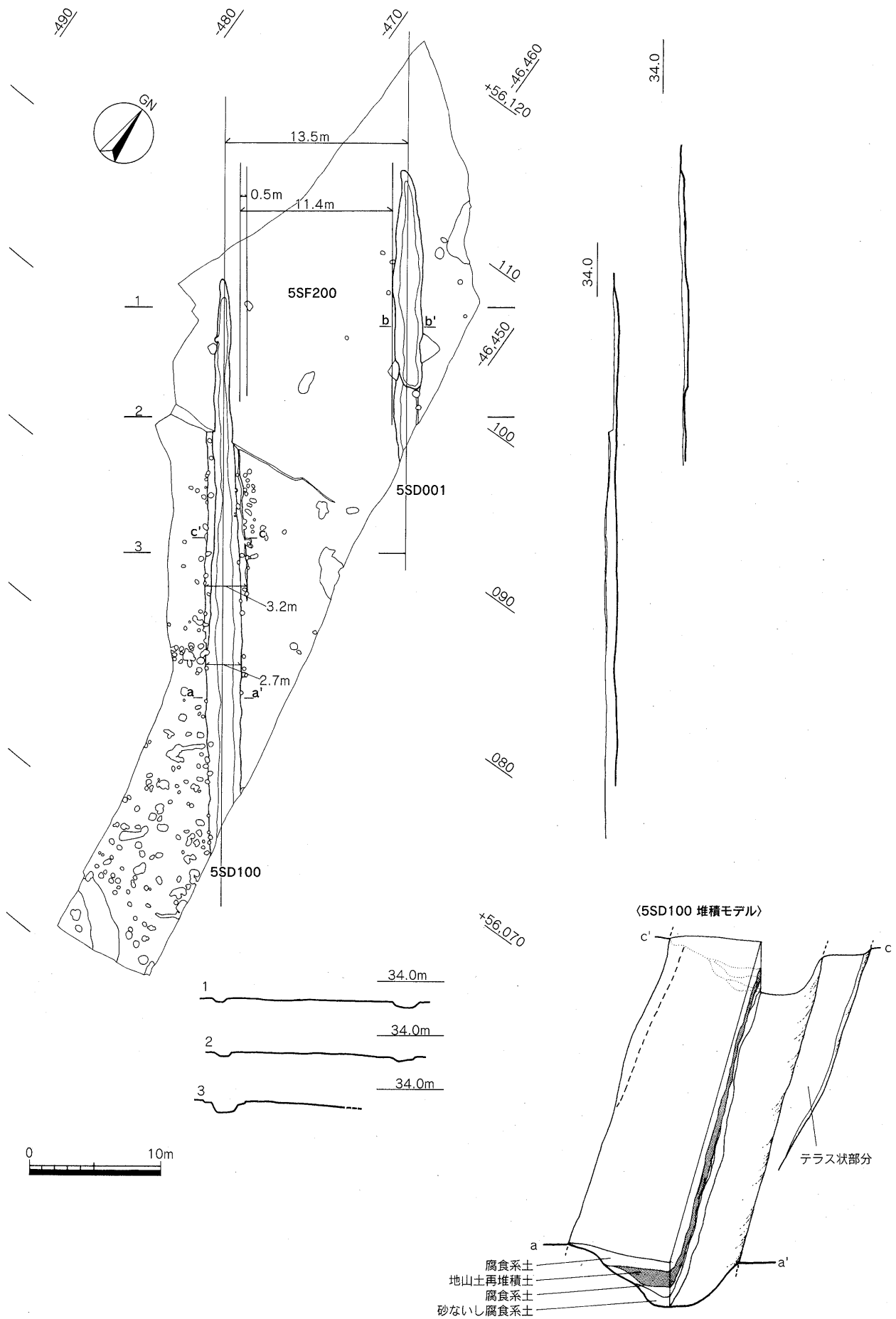
5SX041 (第28図、図版38-2) 調査区南側の緩い斜面中に展開する縦横方向の小溝が組み合う遺構で、埋没土中には中世後半以降の土器片を含んでいる。南側の7次調査区においても7SX143 (平安後期以降の遺構か) として同様の遺構が検出されており、類例から畑の畝さらえによる溝の可能性が考えられる。



第27図 前田5次全体図 (1/400)



第28図 前田5次SK003,SK042,SD001,SD004,SD041,SD100遺構実測図(001は1/40、004・041は1/100、他は1/80)



第29図 前田5次SD001,SD100, (SF200) 遺構実測図 (1/400)

3. 遺物

溝の出土遺物

5SD001最上層

(1) 土器 (第30図、図版41-1)

須恵器

坏c (1) 底部外側に回転ヘラケズリを有し、高台が外側にふんばる形状を成す。

(2) 金属製品 (第33図、図版42-2)

鉄釘 (1) 腐食膨張が見られるが、本来は方柱状を呈していたものと考えられる。頭部が折れ曲がっている。

5SD001

(1) 土器 (第30図)

須恵器

小蓋 (1) 内側に返りが付く。

5SD002

(1) 土器 (第30図、図版40-1,41-2,42-1)

須恵器

硯 (1) 春日市浦の原窯跡群、惣利西遺跡出土例から亀頭を形取った把手を有す硯の破片と判断される。肉厚であるが中空構造で、頸の上面に焼成前の穿孔がある。目と鼻は筒状工具の小口を押し付けて表現される。頸の根元に向かってやや細くなるが、全体に直線的な形状を呈す。

(2) 石器 (第32図、図版42-1)

縦長剥片 (1) 安山岩製で三稜尖頭器の可能性もあるが、エッジの加工は明瞭ではない。パティナは進行し白色化している。

5SD004

(1) 土器 (第30図)

土師器

甕 (1) 胴部全体が接合できず図上で復元しているが、高さ29cm程度、口径15.8cm程度に復元される。内面はケズリが施され、外面はハケによる調整。下部のハケは方向が変化する箇所があり、底部の意識があったものと見られる。布留式以降の古墳時代の所産と考えられる。

5SD100暗灰土

(1) 土器 (第30,31図、図版40-2)

土師器

蓋 (1) 端部がカーブしながら垂下する蓋で、天井部はケズリが見られる。赤橙色に発色する。

坏c (2) 角高台が取り付けられ、内外面には回転を利用したaタイプのミガキが施される。

鉢 (3) 体部から底部へ緩いカーブで連続する形状を持つ。底部は回転ヘラケズリが施される。

甕 (4~8) 内面にヘラケズリが施され、短く屈曲する口縁を持つ。4は小型に属す。6は傾きから鉢になる可能性がある。大宰府周辺地域に於ては鉢形土器の存在は一般的ではない。7と8は把手でありケズリとユビオサエによって整形される。

製塩土器

坏形 (9、10) カップ状ないしロート状を呈し、森田分類のII類に相当する。9は口縁内側にナデの条痕を残す。脆弱で磨耗する。

須恵器

蓋 (11~30) 口縁端部の形状は11のような返りがあるもの、12、23のような先端が折れ曲がり長く垂下す

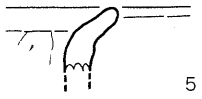
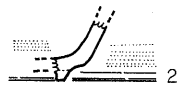
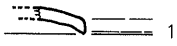
5SD001最上層



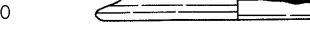
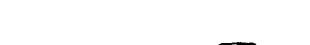
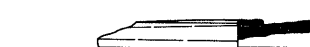
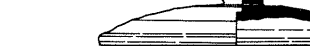
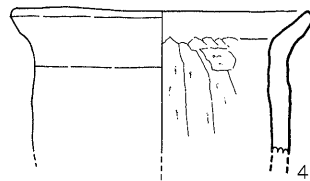
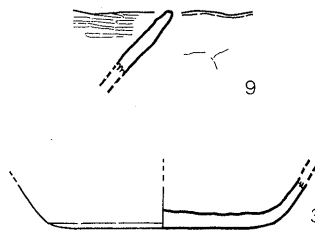
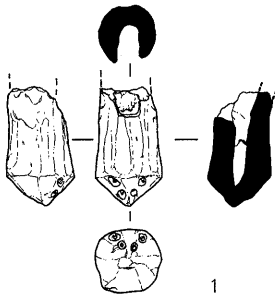
5SD001



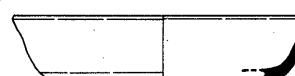
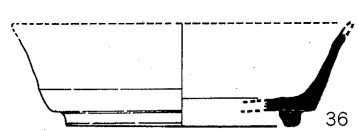
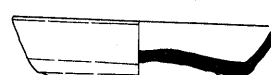
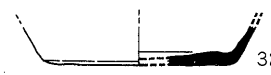
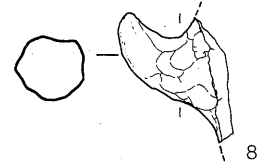
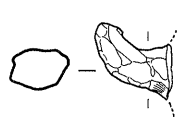
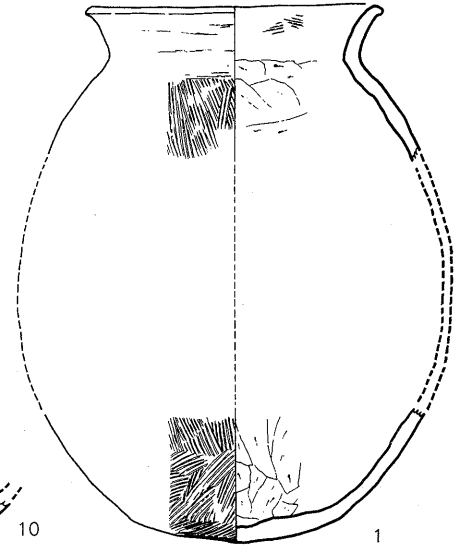
5SD100暗灰土



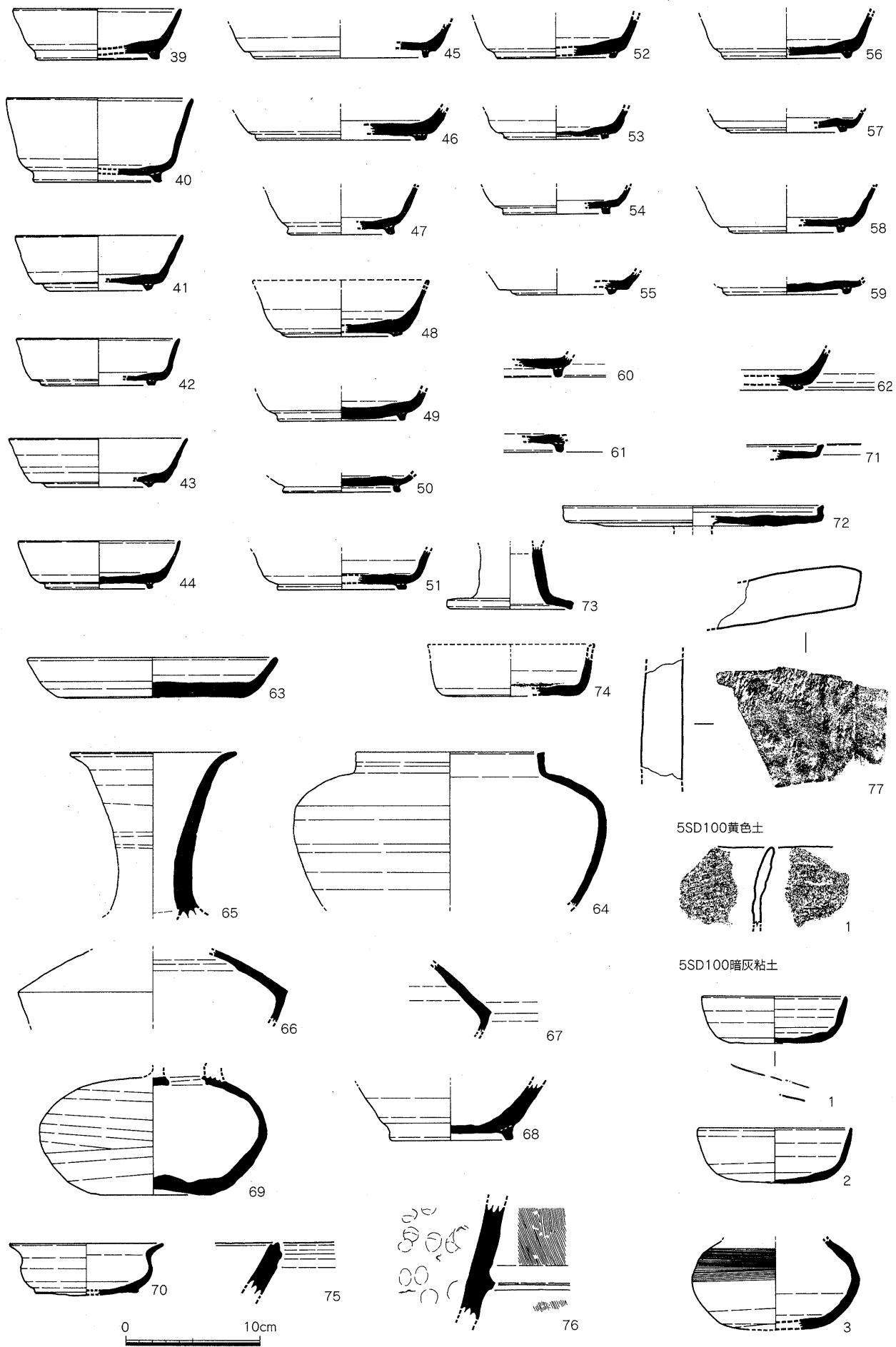
5SD002



5SD004



第30図 前田5次溝1出土土器実測図 (1/4)



第31图 前田5次溝2出土土器実測图 (1/4)

るもの、14以降のような短く折り返されるものがある。15、20、30のように天井部から口縁端部に向かって緩いS字を描くものがある。天井部の処理方法は残存する部位の状況によって観察できないものもあるが、15、16、18、19がヘラ切り後にナデられるに止まるが、他は基本的に回転ヘラケズリが施される。つまみには22のようなボタン状のものが含まれるが、大半は中央が若干隆起する扁平な形状のもので占められる。

坏a (31~34) 底部から体部がゆるいカーブを描いて立ち上がる形状のものが大半を占めるが、32のような直線的なものも含まれる。底部処理はヘラ切りのままである。

坏c(35~62) 坏aと同様に底部から体部がゆるいカーブを描いて立ち上がる形状のものが大半を占めるが、36、43、55は屈曲が直線的である。高台は外寄りに取り付けられるが、43、55などは内側に寄っている。

皿a (63) 底が回転ヘラケズリによって平たく整形されたやや肉厚の皿である。

壺a (64) 口縁が短く上に屈曲するいわゆる短頸壺である。肩の付近まで回転ヘラケズリが及ぶ。

壺b (65~68) 算盤玉形の胴部に二条の沈線を有す頸、ラッパ状に開く口縁を持つ長頸壺。

横瓶 (69) 口縁部が欠損するが、胴中央部の張りの部分が稜線を形成しないタイプの横瓶である。

小鉢 (70) 口縁がく字に屈曲する口縁を持つ。底部は平坦で調整はなく、ヘラ切りのまま。

高坏 (71~73) 坏部は端部が直角に折れ曲がり上面に平坦面を持つ。73は短脚のタイプ。端部の垂下は弱い。

転用硯 (74) 本来は体部の立ち上がりが直線的な壺蓋である。内底面に墨痕が確認される。

甕 (75) 端部を沈線によって装飾する甕の口縁部片。

埴輪

円筒埴輪 (76) 台形の突帯がありその上下にハケが施される。内面にはユビオサエが残る。還元焼成で灰色を呈し、硬質。5SD004、7SD095を周溝とする円埴に伴う遺物と考えられる。

(2) 瓦 (第31図、図版40-2)

平瓦 (77) 軟質で黒色を呈す。縄目のタタキが見られる。

(3) 石器 (第32図、図版42-1)

横長剥片 (1) 黒曜石製で連なる二つの辺の刃部を二次的に打ち欠いている。全体に風化している。

(4) 金属製品 (第33図、図版42-2)

鉄製刀子 (1~4) 1と2は切先部分で形状は良く似ている。背は本来直線的であったと思われる。刃渡りは10cm以上あったこととなる。身幅は約5mm。3と4は茎部と考えられ、断面は方形を成す。

板状鉄製品 (5) 厚さ4mmを測る。板状だが破損のため全体形状は不明。

鉄釘 (6) 厚さ約5mmの方柱状を呈す。

5SD100暗灰粘土

(1) 土器 (第31図、図版41-1)

須恵器

小坏 (1、2) 口径が11前後で底部と体部の境がカーブを成す形状を持つ。1には平行する二条のヘラ記号が施される。

小壺 (3) 口縁を欠くが、短頸のタイプで、肩部にクシガキを、底部に回転ヘラケズリを施す。

(2) 石器 (第32図、図版42-1)

砥石 (1) 砂岩製で扁平な板状を呈す。裏表両面が使用されている。凹突は小規模で研ぎの動作も小さい作業に制約される。

5SD100黄色土

(1) 土器 (第31図、図版41-2)

縄文土器

深鉢 (1) 口縁が若干屈曲する後晩期の粗製深鉢片と考えられる。

その他の遺構の出土遺物

5SX006

(1) 金属製品 (第33図、図版42-2)

鉄釘 (1) 頭部は縦長い円形を呈すが、この部分が環状になっている可能性もある。長さ7.6cmを測る。

5SX009

(1) 土器 (第32図)

土師器

坏 (1) 赤褐色を呈し、回転ナデによって整形される。

須恵器

蓋c (2) 口縁端部がごく短く折れ曲がる形状を呈す。天井部はヘラ切りのまま。

坏c (3) 体部は直線的で高台は外よりに取り付けられる。

甕 (4、5) いずれも胴部片で平行タタキが施される。内面は同心円の当て具痕跡がナデ消されている。

5SX012

(1) 土器 (第32図、図版41-2)

縄文土器

深鉢 (1) ケズリ気味の調整の痕跡を残す粗製深鉢の口縁部片。小片のため傾きは不明。

5SX015

(1) 土器 (第32図、図版41-2)

土師器

坏a (1) 口縁に向かって開き気味に立ち上がる胴部を持つ。底部は未調整で丸底気味。

5SX019

(1) 土器 (第32図)

須恵器

坏c (1~3) 1は底部角が丸みを持つ。高台は欠損する。3は細い高台が外寄りに取り付けられ、この系譜の坏としては新しい様相を呈す。

5SX028

(1) 土器 (第32図)

縄文土器

深鉢 (1) 内外面に平行する条痕が見れる。粗製に属すものと考えられる。

5SX029

(1) 金属製品 (第33図、図版42-2)

板状鉄製品 (1) 厚さ約5mmの板状を呈すが、全体形状は不明。

5SX041

(1) 土器 (第32図、図版41-2)

瓦質土器

風炉 (1) 器面がいぶしによって黒色化したもので、張りのある胴部から屈曲する口縁部にあたる。

鎌倉時代後半以降の所産と考えられる。

5SX046

(1) 土器 (第32図)

製塩土器

坏形 (1) 森田分類のII類にあたると考えられ、内面は磨耗が著しい。

5SX048

(1) 金属製品 (第33図、図版42-2)

鉄釘 (1) 厚さ0.6cmの方柱状を呈す。一方に細くなり釘の可能性はある。

各土層出土遺物

灰色土

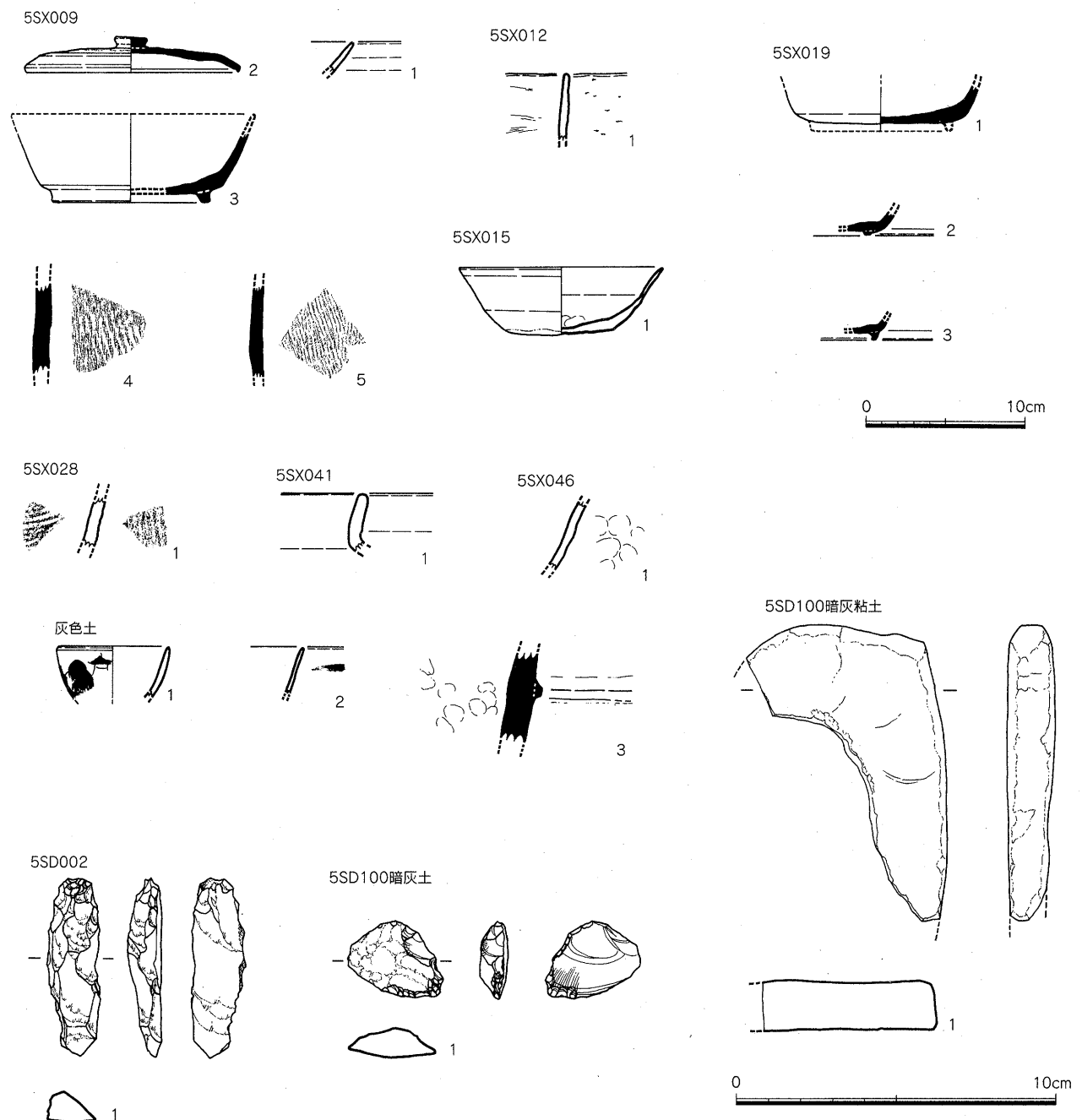
(1) 土器 (第32図、図版41-2)

肥前系染付磁器

小坏 (1, 2) 山水を描くもので、1は体部に丸みを持ち口径が7cm程度に復元される。

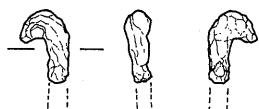
埴輪

円筒埴輪 (3) 焼成が酸化気味で橙色を呈すが、内面のユビオサエと外面の台形状の突帯などの特徴から5SD100暗灰土76と一連の須恵質製品であると考えられる。



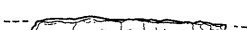
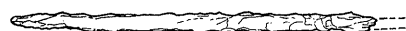
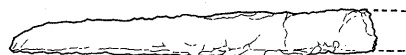
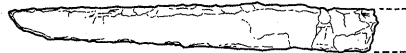
第32図 前田5次その他の遺構出土土器、石製品実測図 (土器は1/4、石製品は1/2)

5SD001最上層

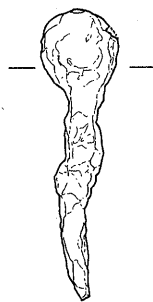


○ 1

5SD100暗灰土



5SX006



1



5SX029



1

5SX048



1



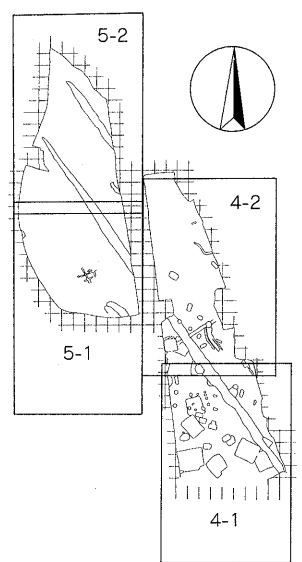
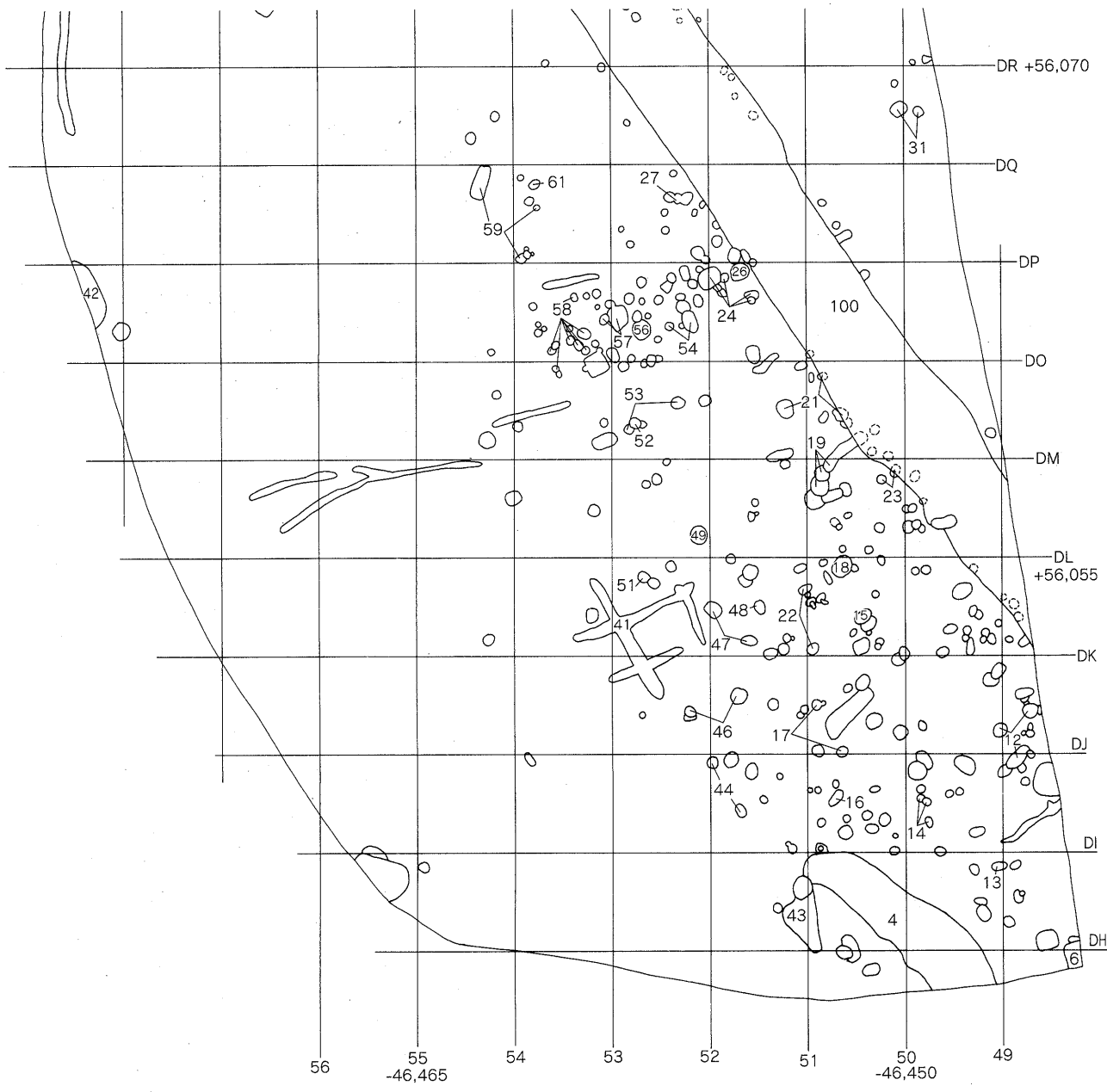
6



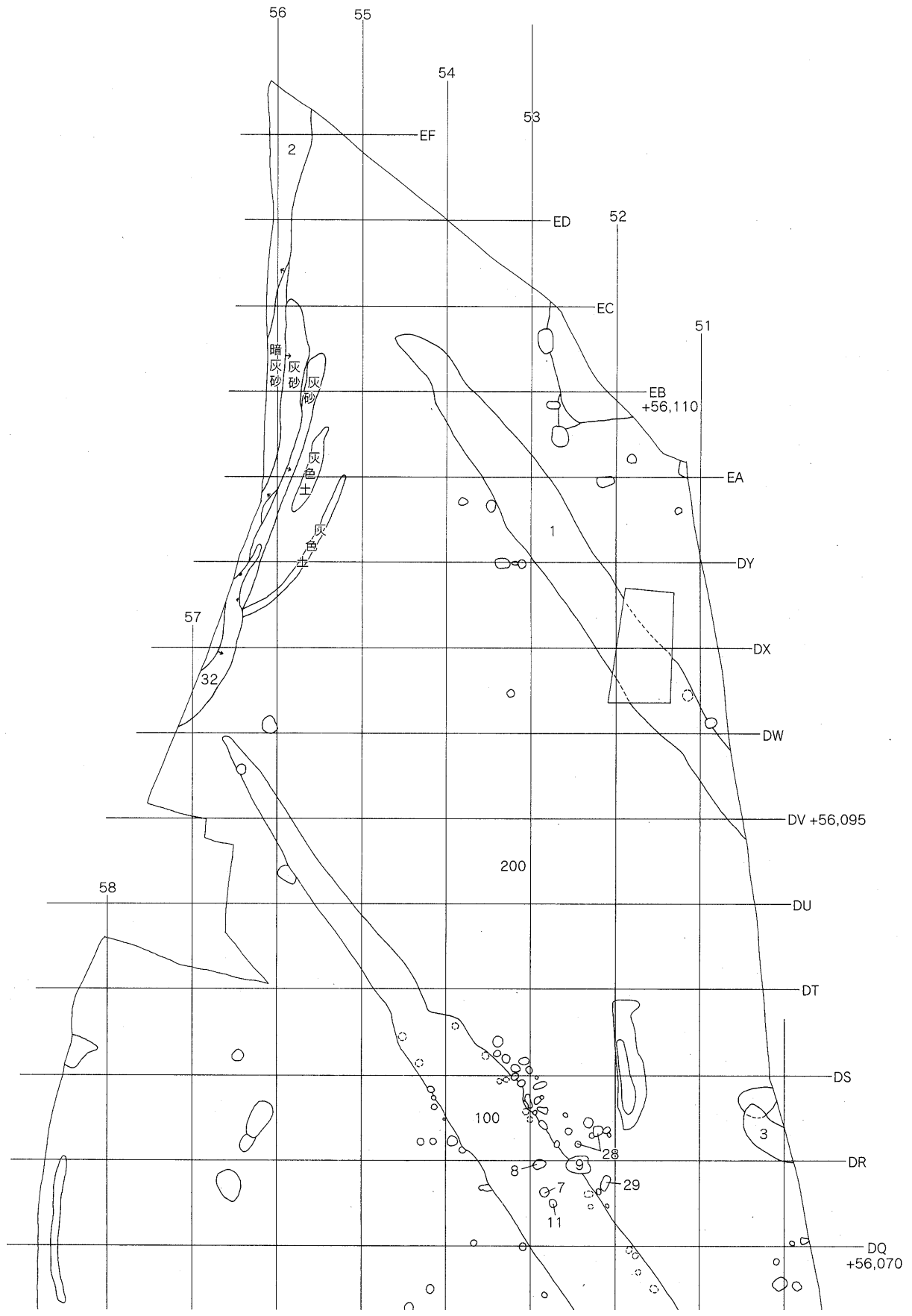
第33図 前田5次出土金属製品実測図 (1/2)

前田5次 遺構番号台帳 (1)

S-番号	遺構番号	種 別	地 区
1	5SD001	溝 官道東側溝	8c前～中 DY52他
2		溝 現況畔の下層	近世 55ライン
3	5SK003	土壌	12c～ DR50
4	5SD004	溝	DH49
6		ピット	中世 DH47
7		ピット 100→7	8c～ DQ52
8		ピット 100→8	8c～ DQ52
9		ピット 100→9	8c～ DQ52
11		ピット 100→11	中世 DQ52
12		ピット群	8c～ DJ48
13		ピット	DH48
14		ピット群	DI49
15		ピット	DK50
16		ピット	8c DI50
17		ピット群	DJ50
18		ピット	8c DK50
19		ピット群	奈良 DL50
21		ピット群	奈良 DM50
22		ピット群	DK50
23		ピット群	奈良 DL49
24		ピット群	奈良 DN51
26		ピット	奈良 DN51
27		ピット	奈良 DO52
28		ピット群	奈良 DR52
29		ピット	奈良 DQ51
31		ピット群	奈良 DP49
32		溝	中世以降～ DX56
41	5SX041	畝状遺構	近世～近代 DK52
42	5SK042	土壌	DN58
43		土壌	奈良～ DH50
44		ピット群	8c前～中 DI51
46		ピット群	8c DJ51
47		ピット群	DK51
48		ピット	8c前～中 DK51
49		ピット	DL51
51		ピット	DK52
52		ピット	DM52
53		ピット群	DM52
54		ピット群	DN52
56		ピット	DN52
57		ピット群	DN52
58		ピット群	～8c中 DN53
59		ピット群	DO54
61		ピット	DO53
100	5SD100	溝 官道西側溝	8c前～中 DM49他
200	5SF200	道路跡	

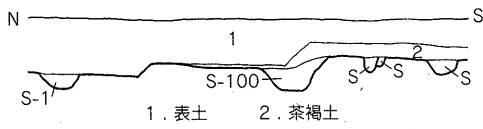


第34図 前田5次略図1 (1/200)

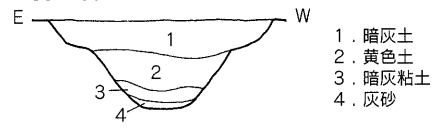


第35图 前田5次略图2 (1/200)

前5 土層略図



5SD100



第36図 前田5次個別遺構略図

前田遺跡第5次調査出土遺物一覽表 (1)

S-1遺土層	S-12	S-29	S-33
須恵器 灰c1、黄	須恵器 灰	須恵器 灰	須恵器 灰
弥生土 黄	土師器 破片	土師器 黄、黄×并	土師器 破片
	縄文土器 根製深鉢	石製品 ob-F	S-54
S-1灰粒			須恵器 灰c3、鉢×黒×黄
土師器 黄	S-13		S-31
弥生土 黄(大塚城)	弥生土 黄		須恵器 黄
石製品 褐色片石片			S-37
S-1	S-14		土師器 灰a、黄
須恵器 小蓋a、黄	弥生土 黄		白磁 鏡、破片
弥生土 黄	S-15		S-38
	土師器 灰a		須恵器 灰c3
S-2			白磁 鏡、破片
須恵器 黄×4、黄×黄、黄、黄(亀形)	S-16		S-39
土師器 黄	須恵器 黄2		瓦 平瓦
縄文土器 黄			S-41
縄文土器 黄	S-17		須恵器 灰a、灰c3、黄、黄b
縄文土器 黄	須恵器 灰、黄3		土師器 大塚c3
白磁 鏡、黄			縄文土器 黄
瓦 平瓦	S-18		土師器 灰(下)
石製品 ob-F、and-RF	須恵器 灰a、灰c3、小塚c		瓦 黄土器 黄
	土師器 破片		S-100陶器土
S-3	S-19		須恵器 灰、灰c3、黄、小塚c、黄3、黄2、黄3
須恵器 灰c2	須恵器 灰c3		土師器 黄
土師器 灰a	土師器 破片		瓦 黄土器 鉢×黄
白磁 鏡、V-4			弥生土 黄
弥生土 黄	S-21		石製品 ob-F、and-RF
	須恵器 灰、小塚c、黄3		S-42
S-4			土師器 灰
須恵器 灰	S-22		須恵器 灰、黄
土師器 黄	須恵器 灰、黄		土師器 破片
石製品 ob-F、板状破片、石屑丁	土師器 焼土塊		S-23
			須恵器 灰、黄3
S-5	S-23		S-24
須恵器 灰	須恵器 灰、黄3		須恵器 灰、黄3
土師器 灰(下)、黄			弥生土 黄 大塚
S-7	S-24		S-25
須恵器 灰c3、黄3	須恵器 灰、黄3		須恵器 灰
S-8	S-26		土師器 破片
須恵器 灰a、鉢	弥生土 黄		S-27
土師器 黄			須恵器 灰
S-9	S-27		土師器 破片
須恵器 灰c3、黄c、黄	須恵器 灰		S-28
土師器 灰	土師器 破片		須恵器 黄
S-11	S-28		土師器 灰a
須恵器 灰、灰a	須恵器 黄		鉢 黄、黄
土師器 破片	土師器 灰a		鉢 黄、黄
白磁 鏡、破片	鉢 黄、黄		白磁 鏡、破片
石製品 ob-F	白磁 鏡、1×灰		縄文土器 深鉢
	石製品 ob-F		

前田遺跡第5次調査出土遺物一覽表 (2)

S-29	S-33
須恵器 灰a	弥生土 黄
土師器 黄、黄×并	
石製品 ob-F	S-54
	須恵器 灰c3、鉢×黒×黄
S-31	
須恵器 黄	S-37
土師器 灰a、黄	土師器 破片
白磁 鏡、破片	
S-32	S-38
須恵器 灰c3	須恵器 灰、黄2、黄3、黄3(左側)、黄2×黄c
白磁 鏡、破片	土師器 灰
瓦 平瓦	S-39
	須恵器 灰、黄
S-41	土師器 破片
須恵器 灰a、灰c3、黄、黄b	S-41
土師器 大塚c3	土師器 灰(下)
縄文土器 黄	
瓦 黄土器 黄	S-100陶器土
須恵器 灰、灰c3、黄、小塚c、黄3、黄2、黄3	須恵器 灰、灰c3、黄c3、黄、小塚c、黄3、黄2、黄3
土師器 破片	土師器 破片
石製品 ob-F	瓦 黄土器 鉢×黄
	弥生土 黄
S-42	土師器 灰、黄3、鉢a、黄、黄b
須恵器 灰	須恵器 灰
瓦 黄土器 鉢×黄	土師器 灰
弥生土 黄	石製品 ob-F
S-43	石製品 ob-F
土師器 灰	瓦 平瓦
弥生土 黄	S-100陶器土
土師器 灰	須恵器 灰、小塚c、黄
S-44	土師器 黄、破片
須恵器 灰、黄3	石製品 ob-F
土師器 黄	縄文土器 根製深鉢
S-46	S-100陶器土
須恵器 灰、黄	須恵器 灰、黄、黄、小塚
石製品 ob-F	弥生土 黄
	石製品 ob-F、and-RF、破石
S-47	S-47
須恵器 灰a	土師器 灰
弥生土 黄	土師器 破片
S-48	土師器 黄
須恵器 灰	土師器 黄
弥生土 黄	土師器 黄
S-49	灰 色 土
須恵器 灰	須恵器 灰a、灰c3、黄3、黄c、小塚c、黄3、黄2、黄3
土師器 黄	土師器 黄
S-51	瓦 破片
土師器 灰	土師器 灰
	土師器 灰
S-52	土師器 灰
弥生土 黄、黄c3	土師器 灰
瓦 黄	土師器 灰
石製品 ob-F、黄化木	土師器 灰

前田遺跡第5次調査出土遺物一覽表 (3)

灰土	
須恵器 灰 灰a、灰c2、小塚c、黄	
土師器 灰 灰a	
白磁 鏡、V-VII	
石製品 ob-F	
須恵器 灰、黄	
土師器 灰	
石製品 ob-F、黄化木	

前田5次調査出土遺物一覽表

前田5次調査出土遺物観察表 (1)

遺構	No.	器種	図版番号	写真番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
5SD001最上層 (s-1最上層)	1	須 坏c1	030	41-1	002		2.4+	9.2*	
5SD001 (s-1)	1	須 小蓋1	030		001	-	1.5+		
5SD002 (s-2)	1	須 硯 (把手)	030	40-1	002	6.2	3.6	1.1	数値は縦×横×高さ
5SD004 (s-4)	1	土師 甕	030		001	15.8	15.3+	-	内面ヘラケズリ
5SD100暗灰土 (s-100暗灰土)	1	土師 蓋	030		083	-	1.45+	-	外面回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	2	土師 坏c3	030		084		3.1+	-	ミガキa
〃 (s-100暗灰土)	3	土師 鉢	030	40-2	021		2.2+	11.8*	外底回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	4	土師 甕	030		009	16.0*	7.55+		内面ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	5	土師 甕	030		086	-	3.4+		内面ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	6	土師 甕×鉢	030		085	-	3.6+		内面ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	7	土師 把手	030		079	4.0	3.9	3.1	数値は縦×横×高さ
〃 (s-100暗灰土)	8	土師 把手	030		049	6.8	6.1	3.7	数値は縦×横×高さ
〃 (s-100暗灰土)	9	製塩 II-b	030		026		3.5+		
〃 (s-100暗灰土)	10	製塩	030		027		1.85+		
〃 (s-100暗灰土)	11	須 小蓋1	030		062	-	1.2+		
〃 (s-100暗灰土)	12	須 蓋2	030		039	-	1.5+		天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	13	須 蓋3ウ	030		043	-	1.6+		天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	14	須 蓋3ウ	030		040	-	1.55+		天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	15	須 蓋3	030		060	-	0.9+	-	天井部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	16	須 蓋3	030		075	14.4*	1.15+	-	天井部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	17	須 蓋3	030		013	15.8*	1.6+		天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	18	須 蓋3	030		072	13.0*	0.85	-	天井部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	19	須 蓋3	030		066	12.6*	1.25+	-	天井部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	20	須 蓋3	030		069	16.6*	1.15+		天井部ナデ
〃 (s-100暗灰土)	21	須 蓋c	030		012		1.75+	1.95	天井部ヘラ切り後軽いナデ
〃 (s-100暗灰土)	22	須 蓋c	030		082		1.25+		つまみはボタン状
〃 (s-100暗灰土)	23	須 大蓋2	030		020	23.6*	1.75+	-	天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	24	須 蓋c3	030	40-2	056	19.6*	1.32	2.55	天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	25	須 蓋3	030		019	20.4*	2.2+	-	天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	26	須 蓋c3	030	40-2	007	14.2	2.9	2.15	天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	27	須 蓋c3	030	40-2	011	15.5	2.5	2.1	天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	28	須 蓋c3	030	40-2	073	14.4	1.65	-	天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	29	須 蓋c3	030		045	15.0*	1.75+	-	天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	30	須 蓋c3	030	40-2	029	14.95	2.05+	-	天井部回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	31	須 坏a	030	40-2	014	13.2*	3.25	8.1*	底部ヘラ切りママ
〃 (s-100暗灰土)	32	須 坏a	030		016		2.05+	10.1*	底部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	33	須 坏a	030		015		2.25+	9.0*	底部ヘラ切りママ
〃 (s-100暗灰土)	34	須 坏a	030		017		1.85+	10.0*	底部ヘラ切りママ
〃 (s-100暗灰土)	35	須 坏c3	030		030	14.15	3.15	9.6	底部下地ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	36	須 坏c3	030		078		4.95+	12.4*	底部下地ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	37	須 坏c3	030		061	16.0*	3.95+	11.4*	
〃 (s-100暗灰土)	38	須 坏c	030	40-2	008	12.8*	4.45	7.9*	底部ヘラ切りママ
〃 (s-100暗灰土)	39	須 坏c3	031		053	12.4*	3.75	9.2*	
〃 (s-100暗灰土)	40	須 坏c	031	40-2	010	13.5*	6.2	9.5*	
〃 (s-100暗灰土)	41	須 坏c3	031	40-2	033	12.45	4.05	8.0	
〃 (s-100暗灰土)	42	須 坏c	031	40-2	031	12.1*	3.5	8.4*	
〃 (s-100暗灰土)	43	須 坏c	031		032	13.2*	3.6	8.0*	高台内寄り
〃 (s-100暗灰土)	44	須 坏c3	031		076	12.0*	3.5	8.0*	底部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	45	須 坏c3	031		037		2.5+	-	底部角あり
〃 (s-100暗灰土)	46	須 坏c	031		034		2.4+	12.6*	底部ヘラ切り後ナデ、酸化
〃 (s-100暗灰土)	47	須 坏c3	031		077		3.35+	8.0*	底部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	48	須 坏c	031		052		3.5+	9.0*	底部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	49	須 坏c3	031		058		2.25+	9.5*	底部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	50	須 坏c3	031		065		1.2+	8.8*	底部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	51	須 坏c3	031		064		2.7+	9.6*	底部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	52	須 坏c3	031		022		3.1+	8.9*	底部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	53	須 坏c3	031		055		2.3+	7.8*	底部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	54	須 坏c3	031		046		1.9+	8.0*	底部ヘラ切り後ナデ

前田5次調査出土遺物観察表 (2)

遺構	No.	器種	図版番号	写真番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
5SD100暗灰土 (s-100暗灰土)	55	須 坏c3	031		047		1.6+	8.7*	高台内寄り
〃 (s-100暗灰土)	56	須 坏c3	031		023		3.3+	9.5*	底部ヘラ切り、軟質
〃 (s-100暗灰土)	57	須 坏c3	031		059		1.3+	9.0*	高台内寄り
〃 (s-100暗灰土)	58	須 坏c3	031		038		3.25+	8.6*	底ナデ
〃 (s-100暗灰土)	59	須 坏c	031		048		1.0+	9.6	底部ヘラ切り、軟質
〃 (s-100暗灰土)	60	須 坏c3	031		067		1.6+		底部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	61	須 坏c3	031		057		1.3+		底部ヘラ切り後ナデ
〃 (s-100暗灰土)	62	須 坏c3	031		035		3.0+		底部ヘラ切り、軟質
〃 (s-100暗灰土)	63	須 皿a	031		018	18.6*	2.95	14.0*	底回転ヘラケズリ
〃 (s-100暗灰土)	64	須 壺a	031	40-2	041	14.0*	11.3+		
〃 (s-100暗灰土)	65	須 壺b	031	40-2	044	12.4*	12.0+		
〃 (s-100暗灰土)	66	須 壺b	031		036		5.3+		
〃 (s-100暗灰土)	67	須 壺b	031		025		5.0+		
〃 (s-100暗灰土)	68	須 壺b	031	40-2	054		4.0+	9.2*	底部ヘラ切り後ナデ、酸化
〃 (s-100暗灰土)	69	須 横瓶	031	40-2	051	-	8.5+	8.9	
〃 (s-100暗灰土)	70	須 鉢	031		042	11.4*	3.8+	7.8*	底部ヘラ切りママ
〃 (s-100暗灰土)	71	須 高坏	031		068	-	1.1+	-	
〃 (s-100暗灰土)	72	須 高坏	031		074	19.4*	1.5+	-	
〃 (s-100暗灰土)	73	須 高坏(脚部)	031	40-2	028		4.6+	9.4	
〃 (s-100暗灰土)	74	須 転用甕(壺蓋)	031		081		2.8+	10.0*	
〃 (s-100暗灰土)	75	須 甕	031		063	-	3.9+		
〃 (s-100暗灰土)	76	須 惠質 円筒埴	031	40-2	024		8.5+		
〃 (s-100暗灰土)	77	瓦 平瓦	031	40-2	050	8.8	10.6	3.4	縦×横×厚さ
5SD100黄色土 (s-100黄色土)	1	縄文 深鉢	031	41-2	001	-	5.7+		
5SD100暗灰粘土 (s-100暗灰粘)	1	須 小坏a	031	41-1	003	10.6*	3.45	-	底部ヘラ切りママヘラ記号
〃 (s-100暗灰粘)	2	須 坏c1	031	41-1	002	11.25	4.1	-	天井部ヘラ切りママ
〃 (s-100暗灰粘)	3	須 小壺	031		004		6.5+	-	
5SX009 (s-9)	1	土師 坏	032		005	-	2.0+		
〃 (s-9)	2	須 蓋c	032		001	13.5*	2.2	-	天井部ヘラ切りママ
〃 (s-9)	3	須 坏c3	032		002		4.25+	10.0*	軟質
〃 (s-9)	4	須 甕	032		004		5.6+		
〃 (s-9)	5	須 甕	032		003		5.8+		
5SX012 (s-12)	1	縄文 粗製深鉢	032	41-2	001	-	4.1+		
5SX015 (s-15)	1	土師 坏a	032	41-2	001	12.8	4.15	6.9	内底ナデ、板状圧痕
5SX019 (s-19)	1	須 坏c	032		001		2.3+	-	
〃 (s-19)	2	須 坏c	032		002		1.4+		
〃 (s-19)	3	須 坏c4	032		003		1.3+		
5SX028 (s-28)	1	縄文 粗製深鉢	032		001		2.9+		
5SX041 (s-41)	1	瓦質 風炉	032	41-2	001	-	3.6+		
5SX046 (s-46)	1	製塩	032		001		4.25+		
灰色土 (灰色土)	1	国陶 小坏	032	41-2	002	7.2*	3.2+		肥前系
〃 (灰色土)	2	国陶 丸碗	032	41-2	001	-	2.8+		肥前系
〃 (灰色土)	3	須 惠質 円筒埴	032	41-2	003		5.6+		

遺構	No.	種別	器種	図版番号	写真番号	R番号	縦 cm	横 cm	厚さ cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
5SD002 (s-2)	1	石製品	尖頭器	32	42-1	001	5.5	1.5	1.0	安山岩
5SD100暗灰土 (s-100)	1	石製品	フレーク	32	42-1	071	2.2	3.0	0.9	黒曜石
5SD100暗灰粘土 (s-100暗灰粘)	1	石製品	砥石	32	42-1	001	9.1	6.3	1.55	砂岩
5SD001最上層 (s-1最上層)	1	鉄製品	鉄釘	33	42-2	001	1.9	1.3	0.7	
5SD100暗灰土 (s-100暗灰土)	1	鉄製品	刀子	33	42-2	002	9.8	1.1	0.5	
〃 〃	2	鉄製品	刀子	33	42-2	003	8.0	1.0	0.6	
〃 〃	3	鉄製品	刀子	33	42-2	005	5.0	1.2	0.5	
〃 〃	4	鉄製品	刀子	33	42-2	006	6.3	0.7	0.5	
〃 〃	5	金属製品	棒状鉄製品	33	42-2	004	5.0	1.5	0.5	
〃 〃	6	鉄製品	鉄釘	33	42-2	001	5.0	0.6	0.6	
5SX006 (s-6)	1	鉄製品	鉄釘	33	42-2	001	7.6	2.0	0.6	
5SX029 (s-29)	1	金属製品	棒状鉄製品	33	42-2	001	1.3	1.8	0.6	
5SX048 (s-48)	1	鉄製品	鉄釘か	33	42-2	001	1.8	0.8	0.6	

(3) 前田遺跡6次調査

1. 調査の状況

6次調査区はすぐ西側に宮ノ本丘陵を控え、東流する大佐野川が開析した小谷に面す丘陵裾部を人為的に平坦にしたと考えられる部位に位置する。調査着手前は調査区北側を東流する用水路を取水源とする水田として利用されていた。調査区の北側では水田耕作土、床土を除去した段階で黄褐色の地盤が見られ、南の傾斜面に向かっては茶色の遺物包含層が形成されていた。

2. 遺構

掘立柱建物

6SB015 (第38図、図版44-5) 調査区西端で検出されたほぼ東西方向を梁筋とする1×2間の柱間を持つ掘立柱建物である。土層観察では柱cを除いて明確な柱痕跡は確認できず、柱は抜き取られた可能性がある。柱堀方は楕円形を呈す。弥生後期の土器片が複数出土し、埋没はそれ以降のものと考えられる。6SI040などの竪穴式住居に附随する施設か。aからは土師器の可能性のある土器片が出土しており、まだ新しいことも考慮すべきである。

竪穴式住居

6SI007 (第38図、図版45-1,2) 調査区中央付近で検出された竪穴式住居で、2.5×2.8mの方形プランで、一旦中央を円形に掘り窪めて4本の柱を立て、約15cmの土を盛って床面を構築している。床面上では見えるはずの柱痕跡がうまく認識できなかった。床面北側の一部に炭化物が集積した箇所があり、その北西側に須恵器坏蓋3が1点裏返しの状態で水平な状態で検出された。8世紀以降の所産と考えられる。

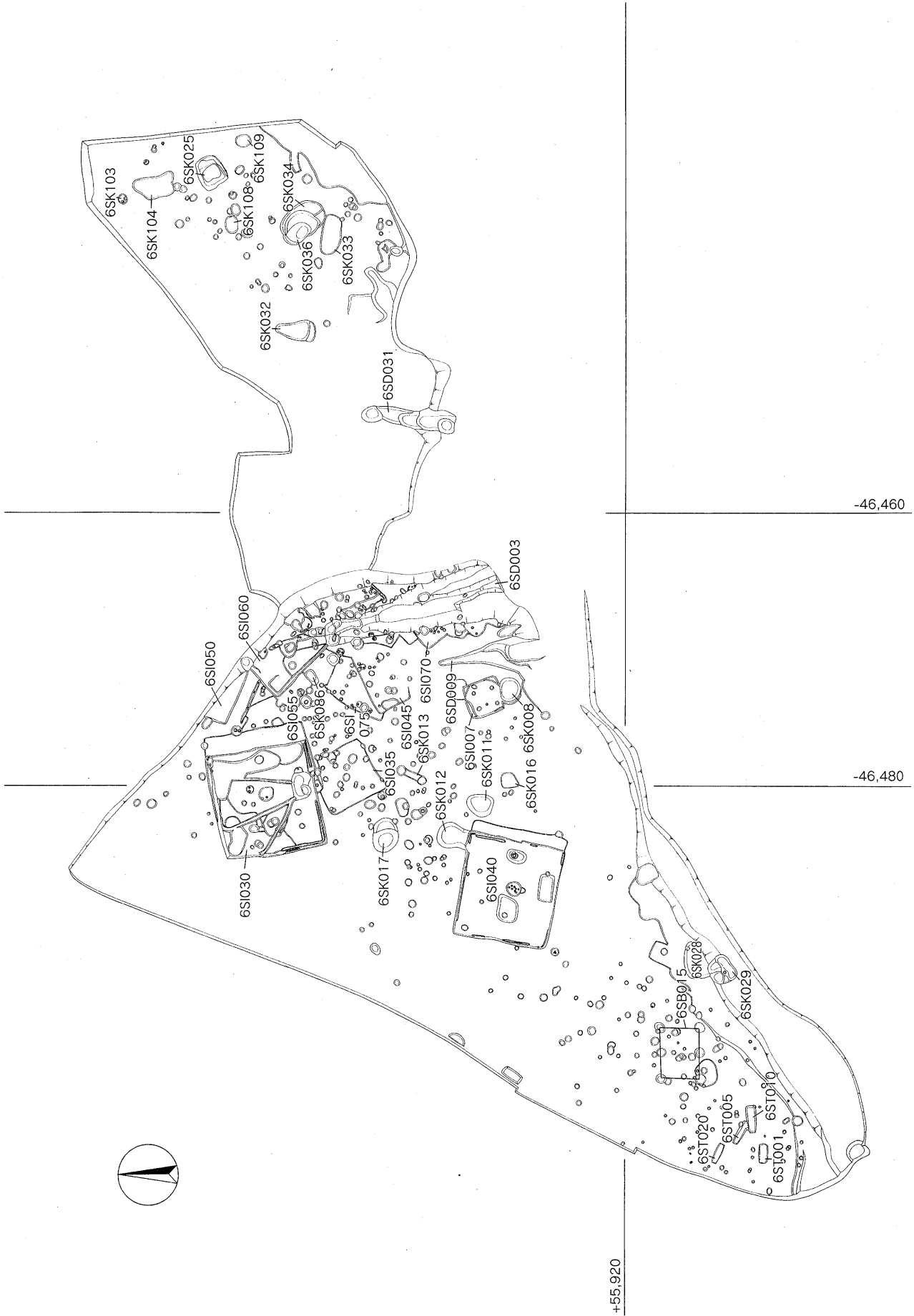
6SI030 (第39図、図版45-3~46-3) 長方形プランの竪穴式住居である。東片に南北の半削り出し、半作り付け(盛り土)のベット状遺構を持つ。上下2つのプランが重なっており、新しいプランに土坑とそれに連なる三又状の溝が附随する遺構6SX046が伴う。この遺構の機能は不明であるが県下の同時期の竪穴式住居に類例が見られる。2本の主柱は新旧で供用していた可能性もある。柱bは堀方にダブリがあり据え直した可能性がある。新旧の改変によって北東側では床面が約10cm盛り土によって上げられ、東壁が約20cm拡張されている。柱が朽ちた後の住居堀方埋没時にベット際の柱c上に土器がまとまって廃棄されている。埋没土中の土器は6SX046の堀方中にも散漫に分布し、遺構床面から浮いたものや傾斜を持つものがあることから、一定の時間幅のある中で廃棄、埋没したものと考えられる。しかし、柱c上の箇所だけは土器片が密着した状態で検出されており、同時性が認められる。遺物を報告している「黒色土」は検出面で確認された土層で、「灰色土」はその下位に位置する。

遺物は弥生後期中頃から後半にかけての時期のものであるが、ヘラ描き沈線により裾部に条線と三角文を組み合わせた模様を持つ外来系(瀬戸内系か)の土器が含まれている。平面規模としては前田遺跡群では最大規模の竪穴式住居である。

6SI035 (第39図、図版47-2) 6SI030に切られる方形プランを成す遺構で、灰色土で埋没する。主要な柱を認定できない。弥生後期の器台が出土しており、埋没は切り合い関係から後期後半以前の後期中ということになる。

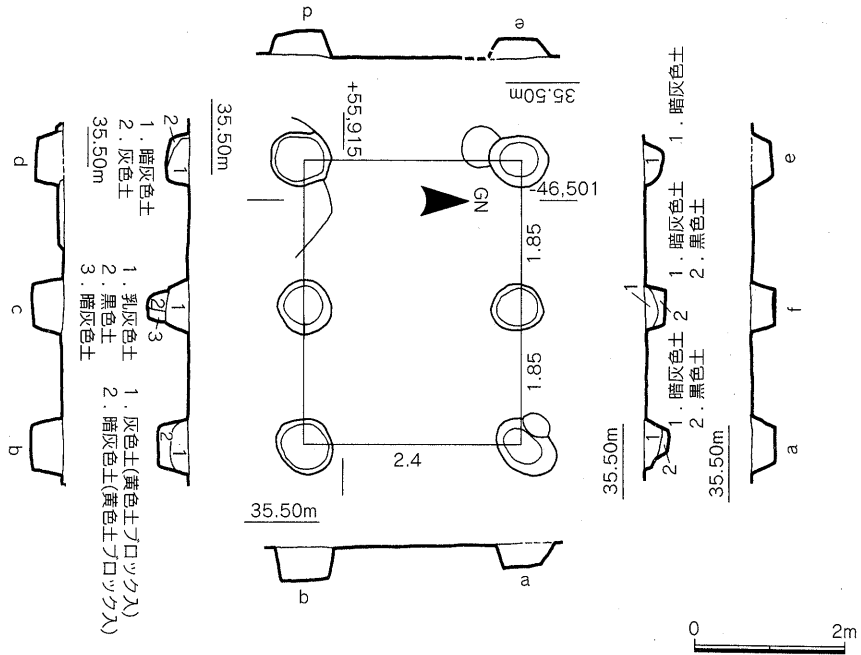
6SI040 (第40図、図版44-4,47-1) 6SI030の南側で検出された東西に長い長方形プランの竪穴式住居である。東壁沿いに幅約0.9mの半削り出し、半作り付け(盛り土)のベット状遺構を持つ。東西一对の柱があり、その間に床面に刺突したような痕跡を持つ浅い窪みがある。炉跡と考えられる。南側壁中央には長方形の土坑がある。四方壁沿いには深さ約0.15mほどの小溝が切れ切れに巡っている。弥生後期中頃から後半の土器が出土しており、6SI030に近い埋没時期を示している。規模も大型で6SI030に近い。6SB015と共にこの三者はこのエリアの核になる遺構である。

6SI045 (第39図、図版44-2,3) 6SI035の東側にある方形プランの北西角が残存している遺構で、南東側の低い方は自然に遺構の覆土は流出していた。8世紀代の須恵器片が出土している。

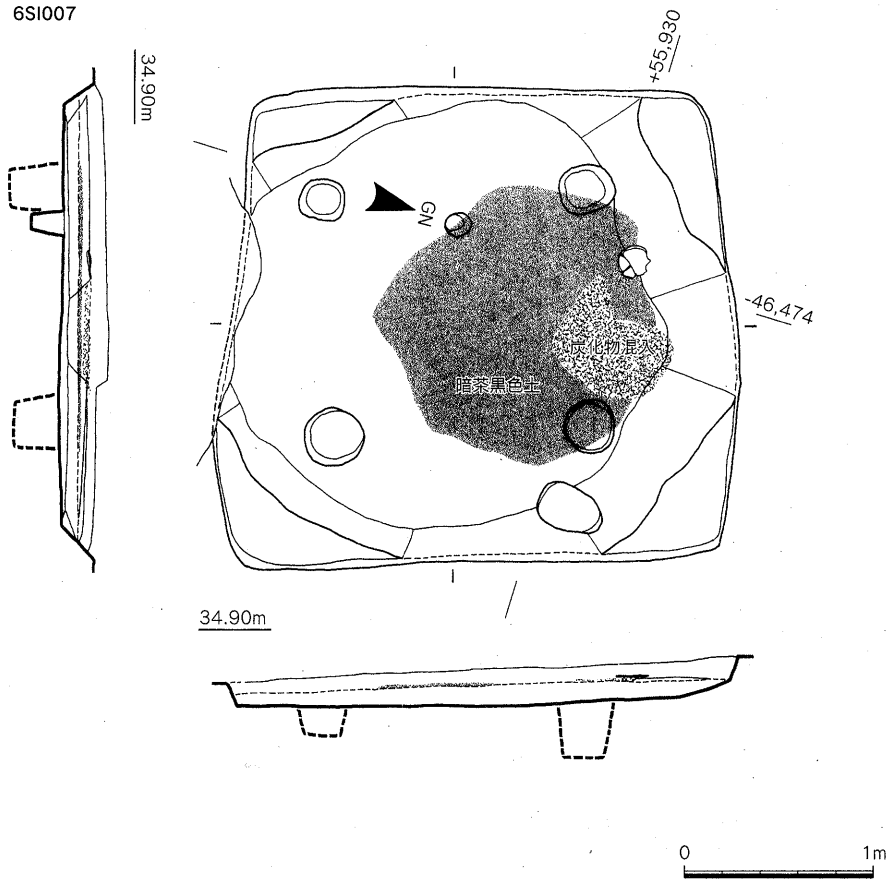


第37図 前田6次調査遺構全体図 (1/400)

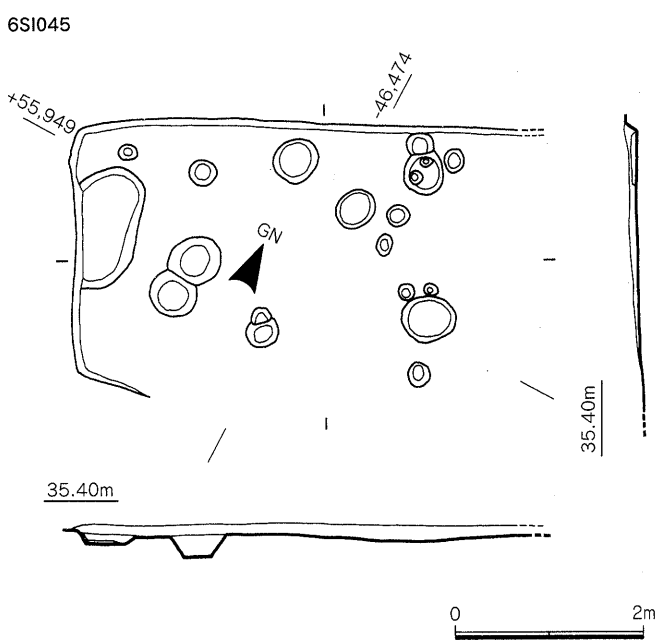
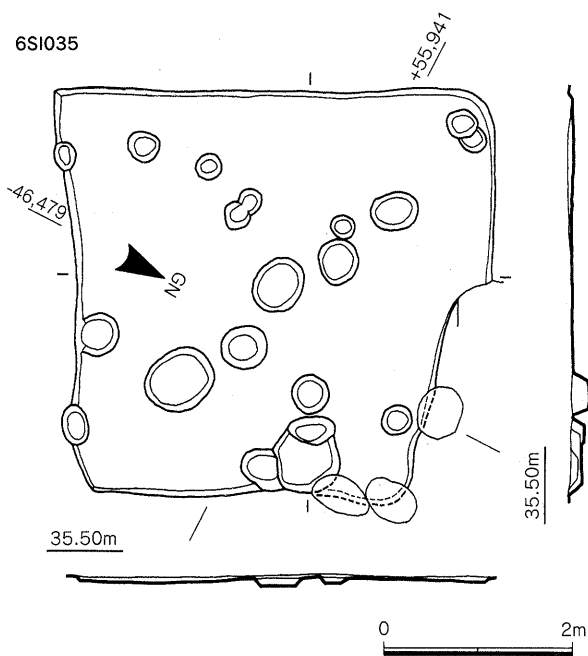
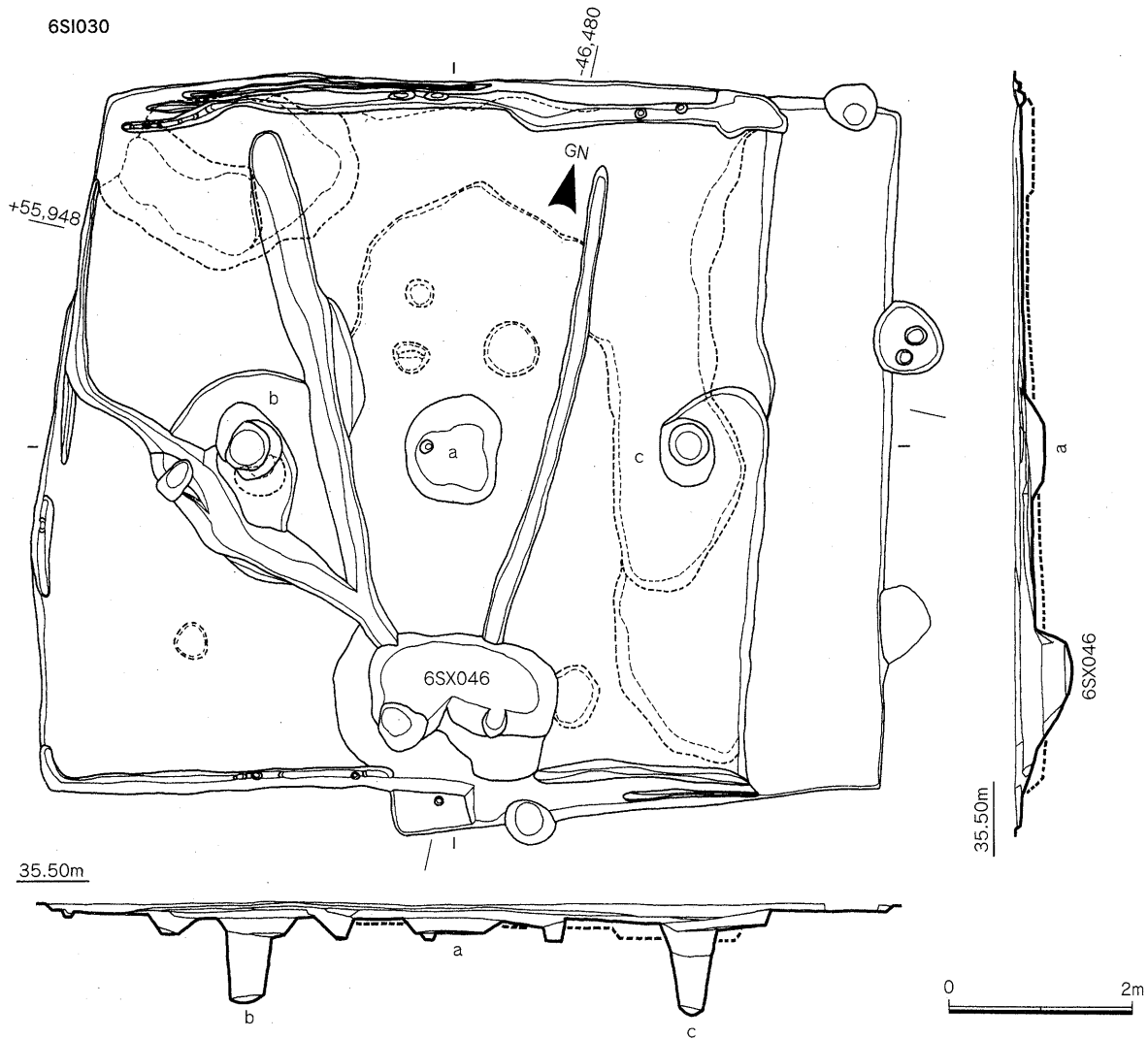
6SB015



6SI007

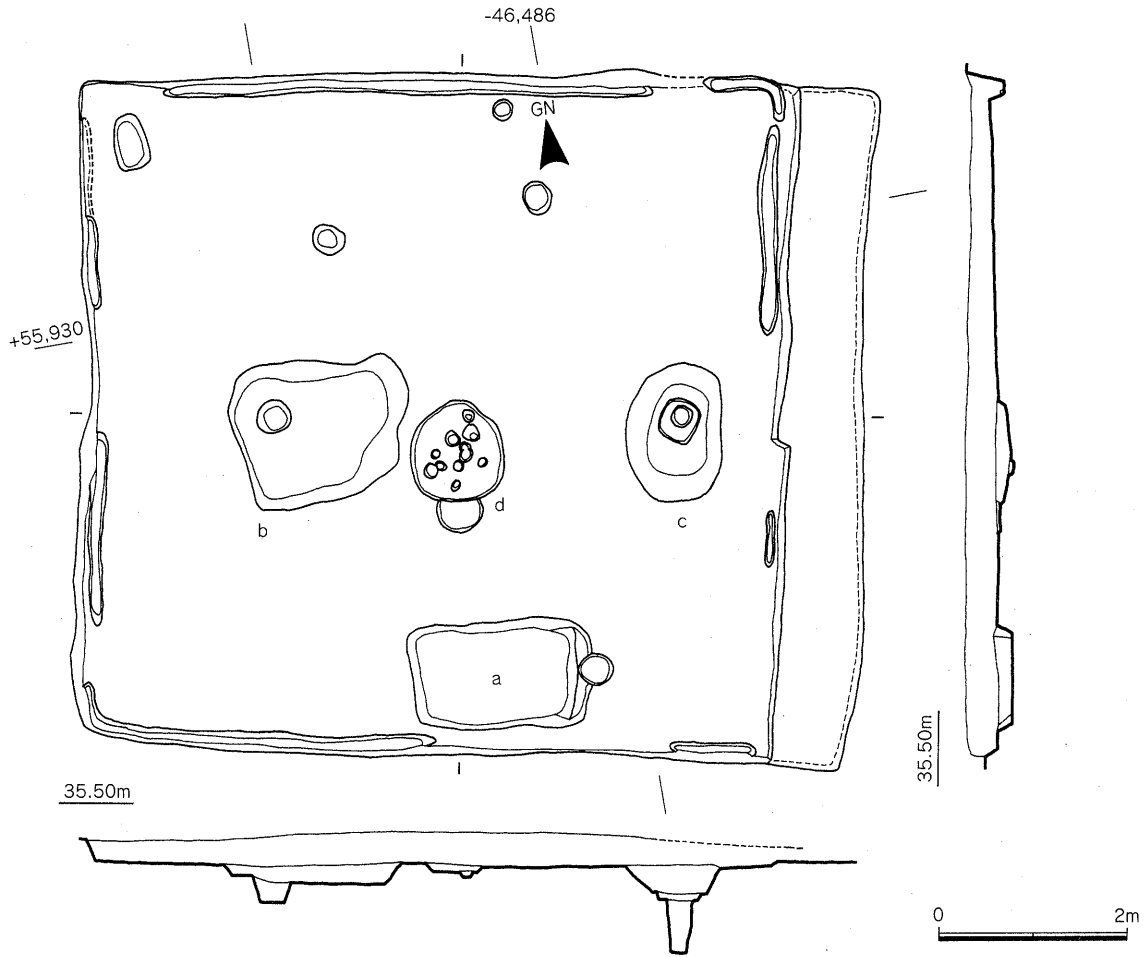


第38図 前田6次SB015 (1/100), SI007遺構実測図 (1/40)

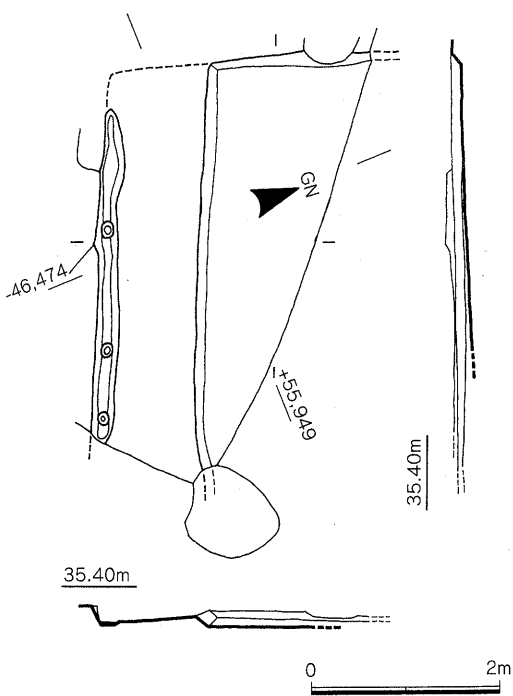


第39図 前田6次SI030,SI035,SI045遺構実測図 (1/80)

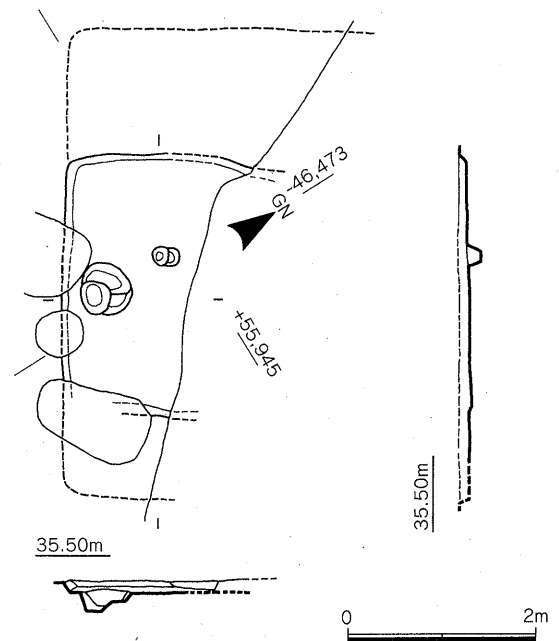
6SI040



6SI050



6SI055



第40図 前田6次SI040,SI050,SI055遺構実測図 (1/80)

6SI050 (第40図、図版44-3) 6SI030の東側の調査区端で検出された方形プランの遺構で、幅約1mほどのベット状遺構を持つ。上面は東方向の傾斜に伴う後代の堆積土壌が乗っている。弥生後期中ごろ以降の土器が出土しており、それ以降の埋没である。

6SI055 (第40図、図版44-3) 6SI030、6SI050、6SI060に切られる方形プランを成す遺構で、南北に半作り付け(盛り土)のベット状遺構を持つ。弥生後期中ごろ以降の土器が出土しており、それ以降の埋没である。

6SI060 (第41図、図版44-3) 調査区中央北端の傾斜面の堆積層を除去した段階で検出した遺構。二方向に壁際の溝が顕著に残っている。須恵器片などが出土しているが、壁溝が顕著な特徴から弥生後期に属す可能性がある遺構である。

6SI070 (第41図、図版44-3) 方形プランの中央部の大半を6SD003に切られる。北壁の一部に壁溝がある。この遺構からも須恵器片などが出土しているが、壁溝があることから弥生後期に属す可能性がある。

6SI075 (第41図、図版44-3) 6SI045に切られる方形プランの遺構。支柱穴を特定することはできない。

土坑

6SK008 (第41図、図版47-3) 調査区中央付近で検出された隅丸方形ないし楕円形を呈する遺構で、6SI007を切って構築される。暗褐色土、暗茶褐色土の順で堆積する。上層の暗茶褐色土に遺物が集中する。土器類を主体とする廃棄遺構と考えられる。釘や刀子などの金属製品も含まれる。8世紀中頃以降の遺物が出土している。

6SK011 (第41図、図版48-2) 調査区中央付近6SK008の西側で検出された楕円形を呈する遺構で、暗茶褐色土層から8世紀中頃以降の遺物が出土している。

6SK012 (第41図、図版44-2) 調査区中央付近6SK011の西側で検出された縦長い楕円形を呈する遺構で、6SI040を切る。暗茶褐色土層から8世紀中頃以降の遺物が出土している。

6SK013 (第42図、図版44-3) 調査区中央付近6SK011の北側で検出された縦長い溝状を呈する遺構で、両端をピットに切られる。弥生後期の土器片が出土している。

6SK016 (第42図、図版44-4,48-3) 調査区中央付近6SK011の東側で検出された不定型な浅い遺構である。8世紀に帰属すると考えられる土師器の供膳形態の土器が出土している。

6SK017 (第42図、図版44-3,49-1) 6SK012の北側で検出された楕円形を呈する遺構。茶粘、茶褐色土の順で堆積があり、上層の茶褐色土が形成される時期に平面プランが東側に拡張している。8世紀中頃以降の遺物が出土している。

6SK025 (第42図、図版49-2,3) 調査区の西端で検出された方形プランで1.4mの深さを有す遺構。北東に位置する11次調査区で検出された11SK040に接ぐ規模の遺構で、最終埋没層の暗茶褐色土に多く遺物が含まれる。地盤の下位が砂質のため下層は砂質土が堆積し、帯水があった状況は土層観察からは考えられず、井戸とはせず、土坑と判断した。8世紀後半以降の遺物が出土している。老司Ⅱ式の軒丸瓦片が暗茶褐色土に含まれる。

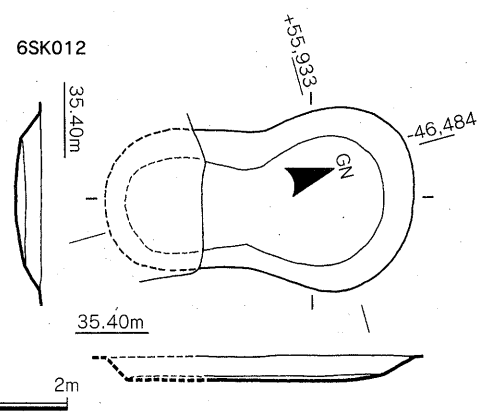
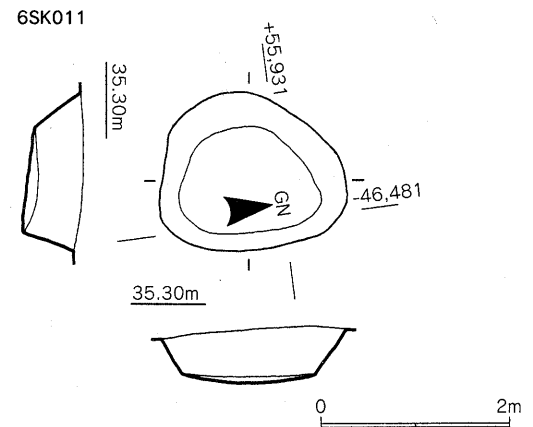
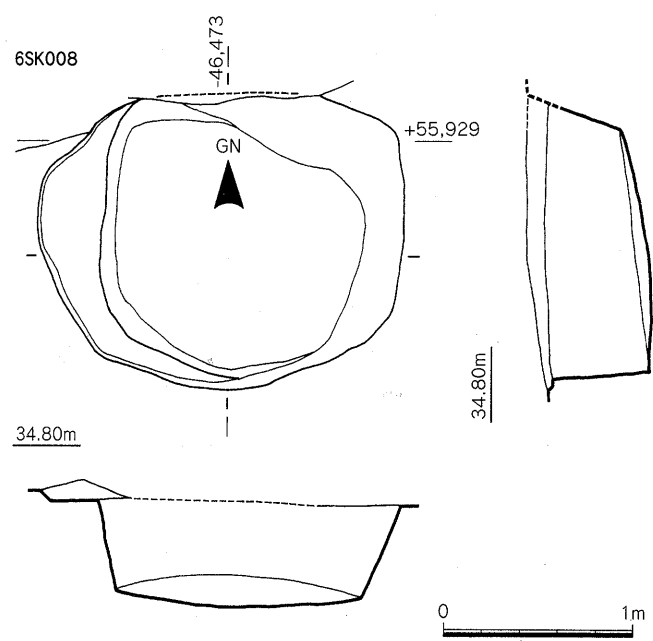
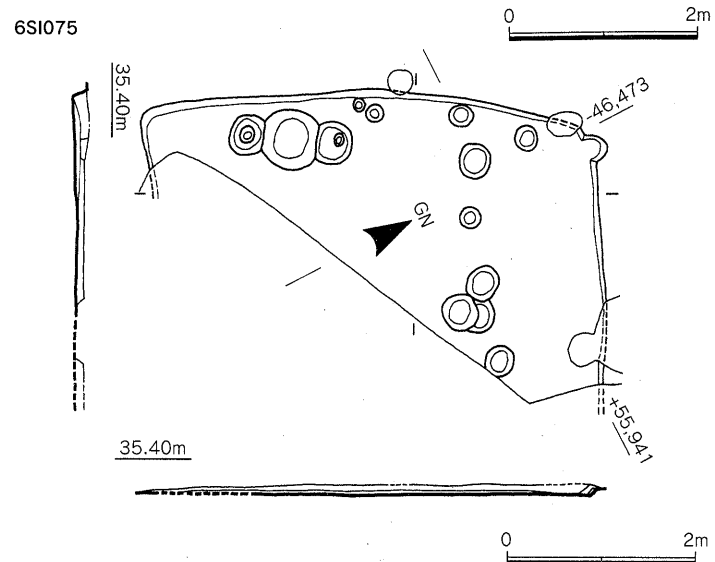
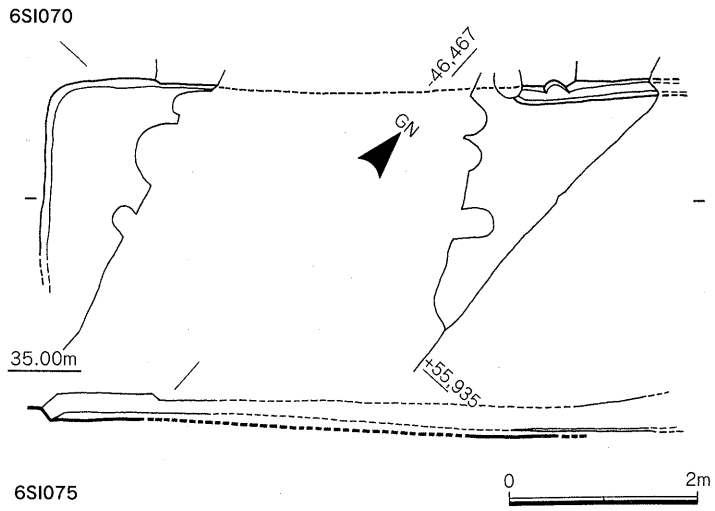
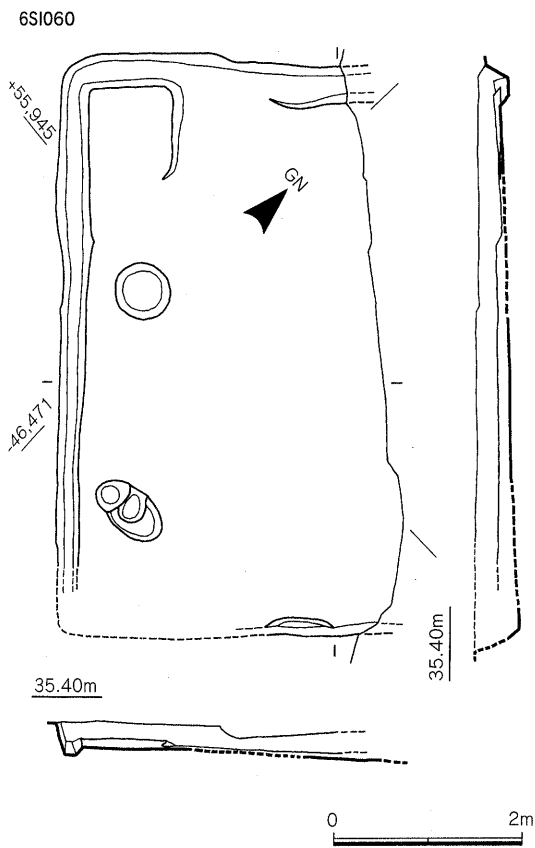
6SK028 (第42図、図版44-5) 調査区の南西部の法面で検出した隅丸方形の遺構で6SK029に切られる。須恵器、土師器と共に緑釉陶器片が出土している。

6SK029 (第42図、図版44-5) 6SK028の北側で検出した不定型な遺構。

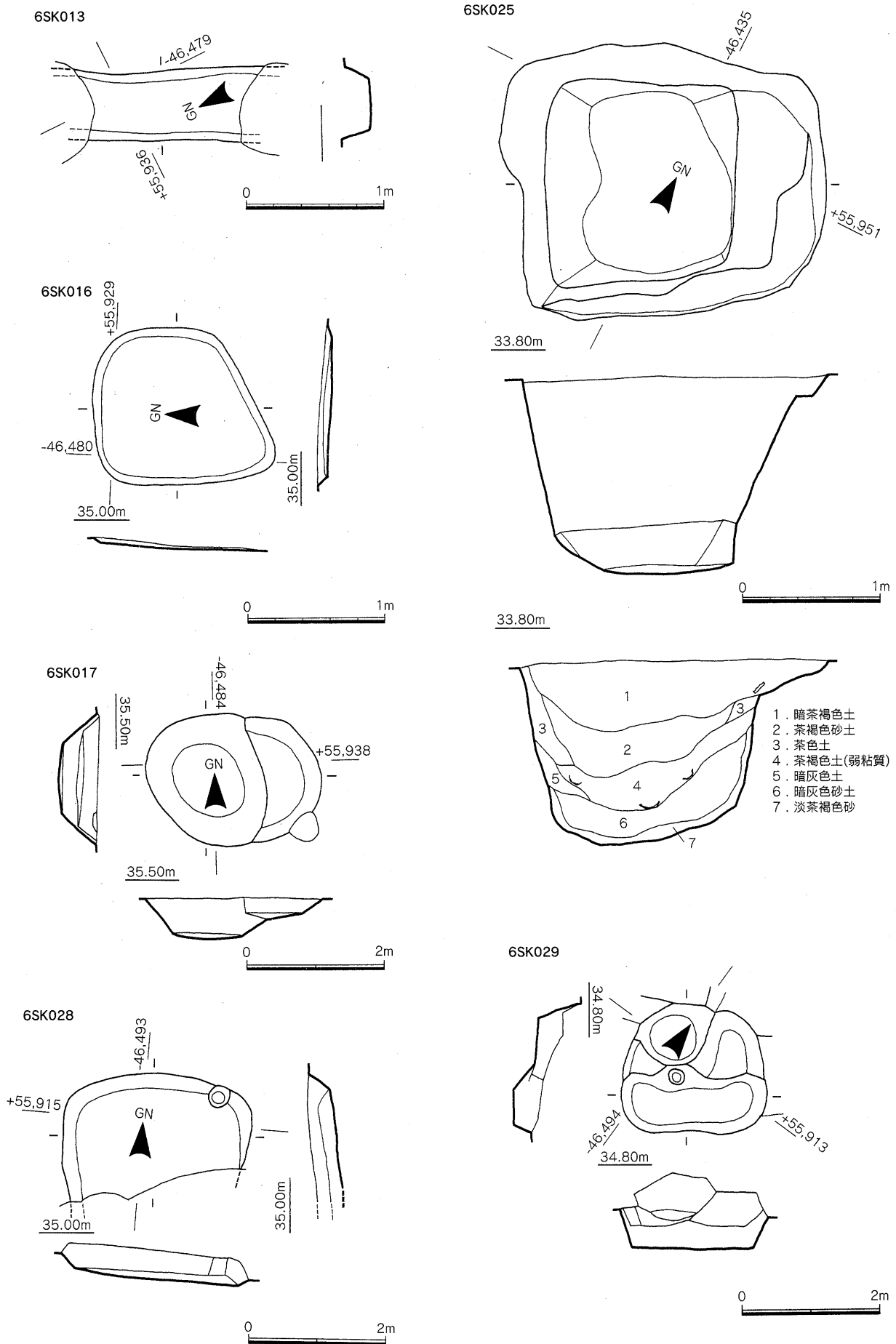
6SK032 (第43図、図版44-1) 調査区の東側で検出された南北に縦長い窪状の遺構。8世紀中頃以降の遺物が出土している。

6SK033 (第43図、図版44-1) 調査区の東端で検出された東西に長い楕円形状の浅い遺構。8世紀後半以降の遺物が出土している。

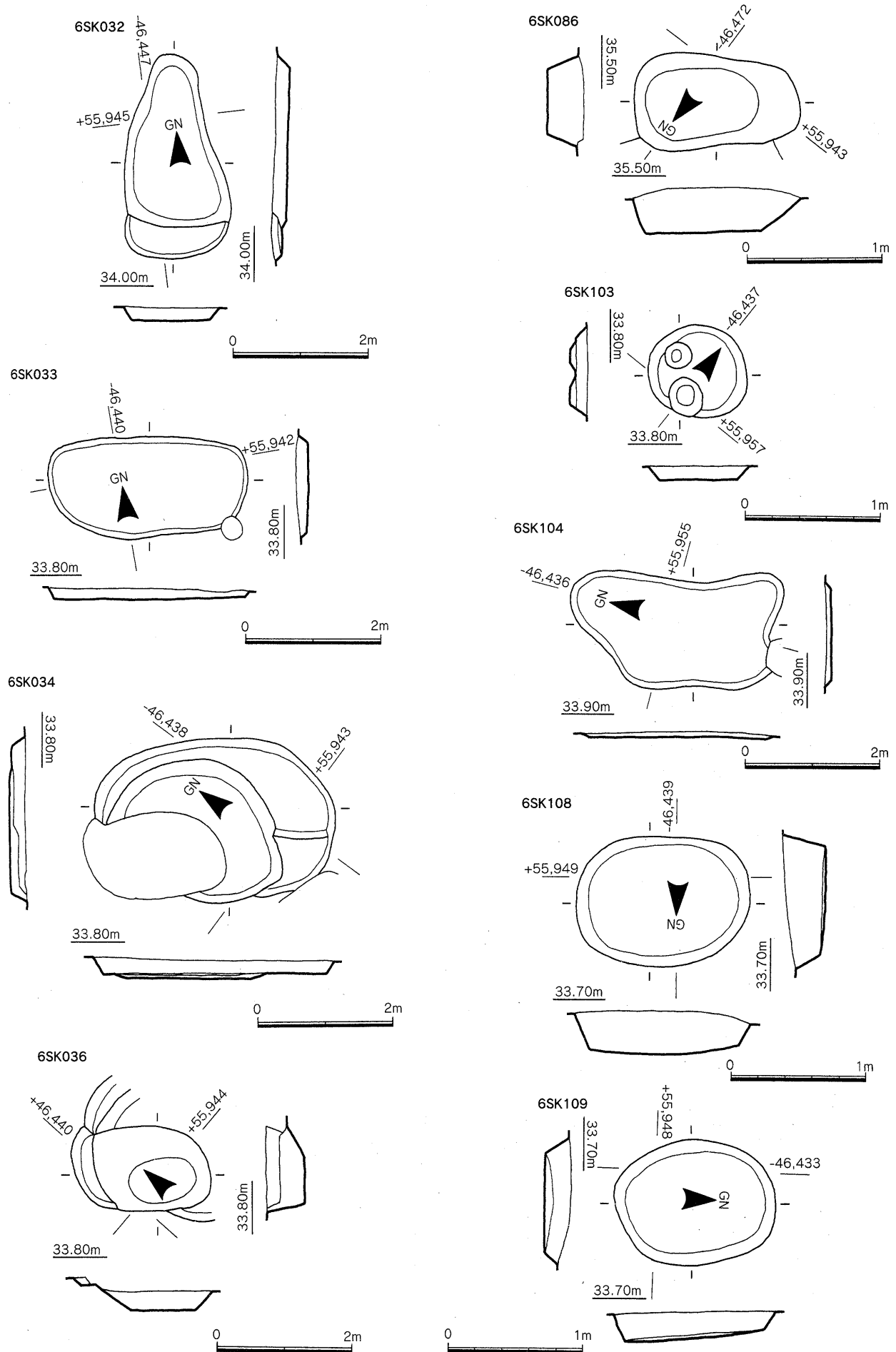
6SK034 (第43図、図版44-1) 6SK033の北側で検出された東西に長い楕円形状の浅い遺構。底面はフラットでなく複数の段が付く形状を呈す。篠窯系の鉢が出土しており、平安前期以降の埋没と考えられる。时期的に前田遺跡全体では希少な段階の遺構である。



第41図 前田6次SI060,SI070,SI075,SK008,SK011,SK012遺構実測図 (008は1/40、他は1/80)



第42図 前田6次SK013,SK016,SK017,SK025,SK028,SK029遺構実測図 (013・016・025は1/40、他は1/80)



第43図 前田6次SK032,SK033,SK034,SK036,SK086,SK103,SK104,SK108,SK109遺構実測図
(086・103・108・109は1/40、他は1/80)

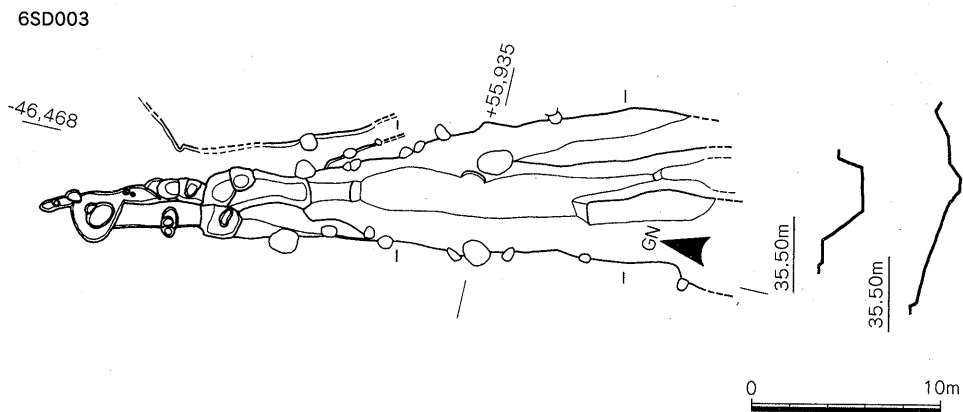
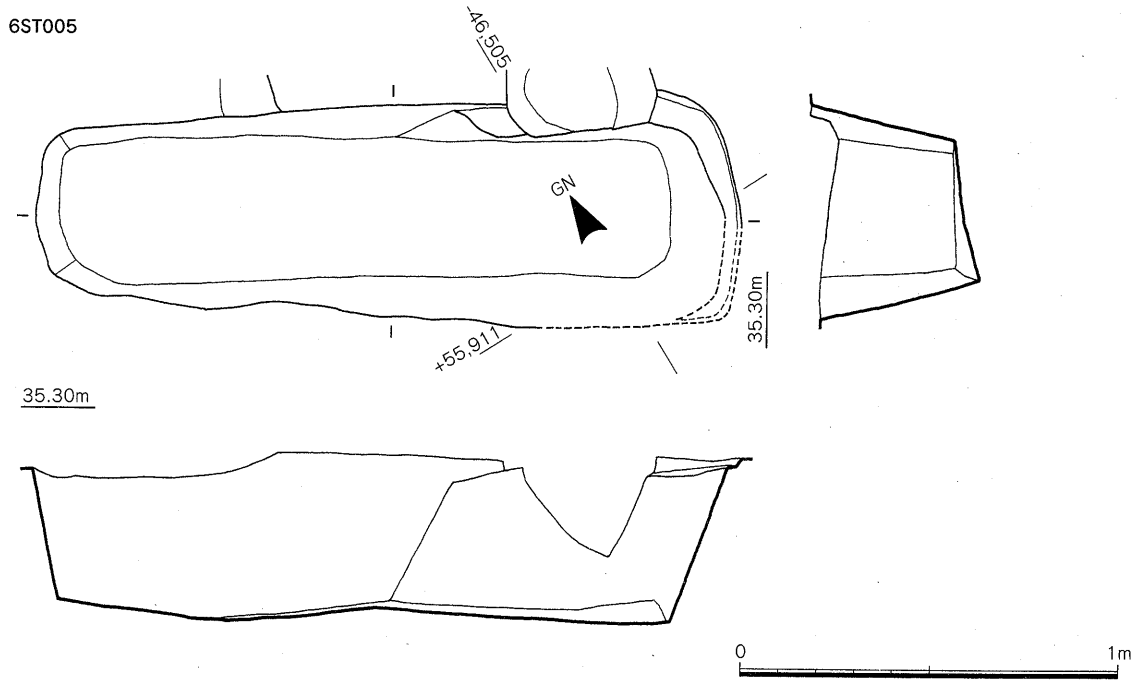
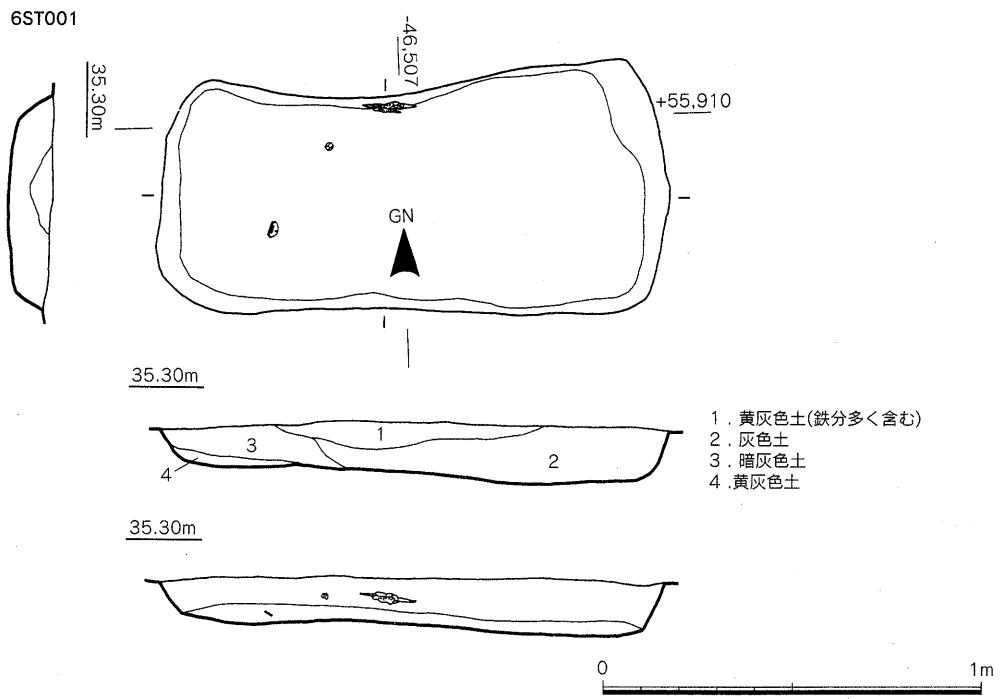
- 6SK036 (第43図、図版44-1) 6SK034の北側を切る楕円形の遺構。連続して形成された可能性も考えられる。
- 6SK086 (第43図、図版44-3) 調査区中央で検出された長楕円形の遺構。6SI065を切って構築される。
- 6SK103 (第43図、図版44-1) 調査区北東隅で検出された円形の遺構。弥生後期の土器片が出土している。
- 6SK104 (第43図、図版44-1) 調査区の北東隅、6SK103の南側で検出された縦長い不定型な遺構。8世紀中頃以降の遺物が出土している。
- 6SK108 (第43図、図版44-1) 調査区の北東で検出された東西に長い隋円形の遺構。8世紀中頃以降の遺物が出土している。
- 6SK109 (第43図、図版44-1) 調査区の北東で検出された南北に長い隋円形の遺構。8世紀中頃以降の遺物が出土している。

墳墓

- 調査区の南西隅で4基の墳墓が集中して検出された。墳墓は全て東西方向に軸を持つ共通性を有し、平安時代に属するものと見られる。6ST001での帯金具の出土などから、大宰府官人の葬送地（公葬地）と考えられる宮ノ本遺跡の墳墓群の一角を成すものと考えられる。方向性によりの6ST001と6ST010の群、6ST005と6ST020の群との二つに分けられる。二者は雁行型に配置され、この4基の墓は計画的な展開とも理解できる。
- 6ST001 (第44図、図版50-1～3) 墳墓群中で最も南側に位置する遺構で東西の正方向に軸を向ける。長さ1.3m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。後述の三つの遺構に対して長さが短く、ごく浅い遺構である。床面から若干浮いた高さで銅製の帯金具1個と、北壁沿いで身を長軸方向に合わせた刀子2口が出土している。刀子はほぼ床面にあった。長軸が短く土層観察からは棺の痕跡などは確認できない。土葬ないし火葬骨の埋納も可能性がある。帯金具は単体出土で着衣状態ではなく、副葬と考えられる。
- 6ST005 (第44図、図版51-1,2) 東西の方向に軸を向ける遺構で、軸は東の正方向に対し南に約32度振っている。6ST020に平行し雁行型に配置される。長さ1.9m、幅0.55m、深さ0.45mを測る。平面プランでは東側が多少幅広となる。下端ラインはほぼ平行する。遺物の出土はない。
- 6ST010 (第45図、図版51-1,2) 東西の正方向に軸を向ける遺構で、平面プランでは東側が多少幅広となる。6ST001に平行し雁行型に配置される。6ST005を切り、時間的に後出する。長さ2.05m、幅0.7m、深さ0.45mを測る。遺物出土鉄釘の他は土師器坏と皿が出土している。釘の配置から木棺が納められていたと考えられる。遺物は東側に集中し、遺体の頭位がこちらにあった可能性がある。土器は一番東側の坏には皿が重なり、ほぼ床面で検出されており、これは棺内に置かれた副葬品であった可能性がある。他の土器は多少床面から浮いた位置で確認され、棺上の供献品であったものが経年変化で沈下した可能性がある。
- 6ST020 (第45図、図版50-3) 墳墓群内では一番北側で検出した遺構で、6ST005に雁行型に平行する位置に構築されている。

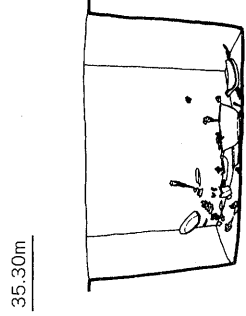
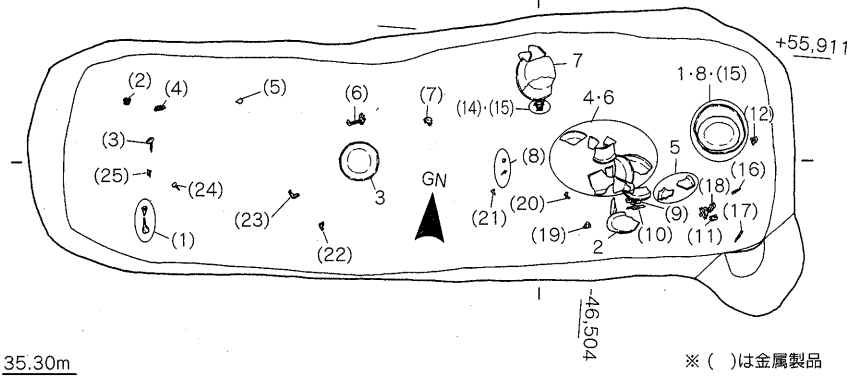
溝状遺構

- 6SD003 (第44図、図版44-3) 調査区中央に南側から北に楔形に切り込んだ形で形成された溝状の遺構。北側に向かって徐々に浅くなっている。遺物は奈良、平安時代のものが出土しており、古代の遺構と考えている。南側の谷からこの遺構が展開する平坦面へ上がるための遺構であった可能性も考えられる。
- 6SD009 (第45図、図版44-2) 6SD003の西側で検出された平行する楔型の溝状遺構。8世紀中頃以降の遺物が出土している。北に向かって徐々に浅くなり、6SD003同様の通行機能が想定される。
- 6SD031 (第45図、図版44-1) 6SD003の東側で検出された楔型の溝状遺構。8世紀中頃以降の遺物が出土している。北に向かって徐々に浅くなり、堆積土下位は砂が堆積し、水が流れたことが想定されるが6SD003



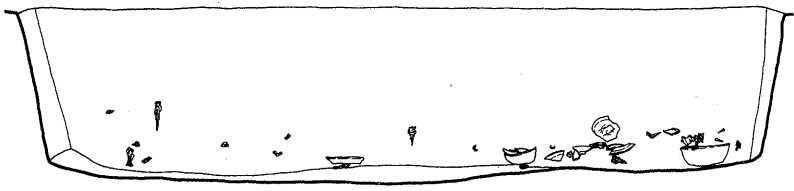
第44図 前田6次ST001,ST005,SD003遺構実測図 (001は1/200、他は1/20)

6ST010

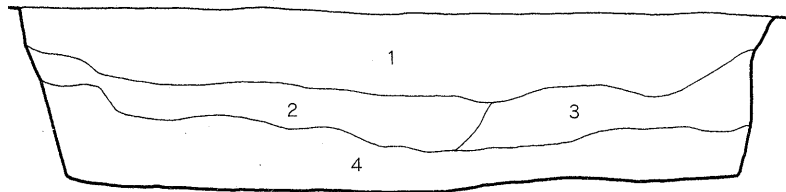


35.30m

※ ()は金属製品



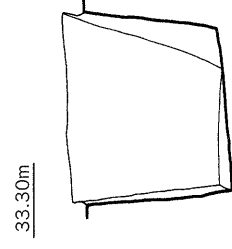
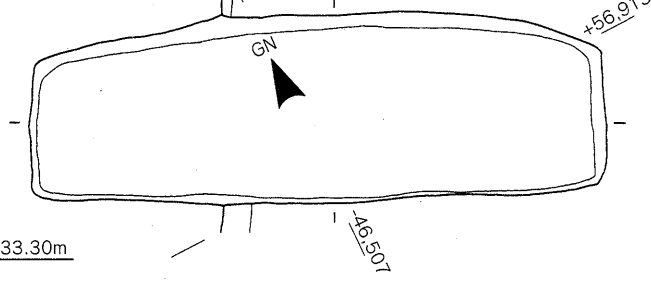
35.30m



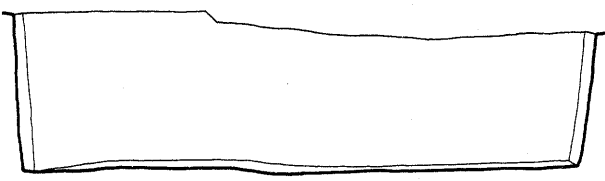
- 1. 明茶褐色土
- 2. 暗灰色土
- 3. 明灰色土
- 4. 黄灰色粗砂



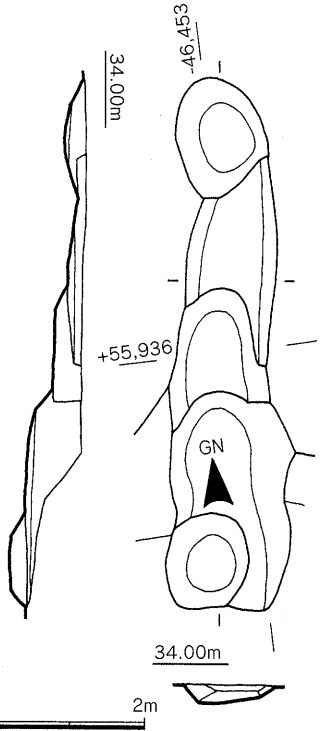
6ST020



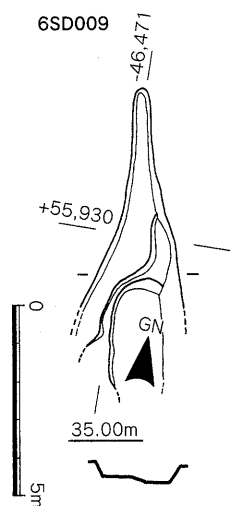
33.30m



6SD031



6SD009



第45図 前田6次ST010,ST020,SD009,SD031遺構実測図 (009は1/200、031は1/100、他は1/20)

同様に通路であった可能性も否定できない。

本調査区の南側には東西方向の谷が走るが、報告のようにその谷と遺構ステージ面をつなぐ機能が想定できる溝状遺構が複数確認される。前述の東西方向の谷の東延長部分は前田1次B区として調査されたが（『太宰府・佐野地区遺跡群X』2000年太宰府市教育委員会）、そこでは古代官道から直角に東に分岐した平行する二本の溝が検出され（1SD067,068）、この谷には奈良時代には幅約5mの分岐道があった可能性が想定された。その道は葬送地としての宮ノ本遺跡に向かったものと理解される。本溝群はその分岐道に接続する可能性が想定される。

その他の遺構

傾斜堆積（落ち）

6SX002（第37図、図版44-5） 調査区南西側の谷への落ち際に形成された東西方向の段状の落ち。12世紀後半段階までの遺物を含む。当該期の遺構は本調査区の北東側の3.4次調査区で卓越した出土傾向が認められるが、本調査区の平坦面では積極的な遺構の展開は見られない。同時期には人の介入が遺物の出土によって確認された形となっており、畑地等の耕作地としての利用形態を想定する必要もあろう。

6SX014（第37図、図版44-1） 調査区東端に形成された南北方向の段状の落ち。近世後半期の肥前系磁器までの遺物を含み、畑の開墾など、耕作地の開発と絡む遺構とも考えられる。

3. 遺物

個々の遺物の詳細情報については巻末の遺物観察表を御参照頂きたい。また、図化しなかった遺物については、各遺構、土層別に「出土遺物台帳」に記号化し表記している。器種分類記号については弥生土器は本書p55図を、須恵器は『宮ノ本遺跡II』窯跡篇1992年、陶磁器類は『大宰府条坊跡XV』陶磁器分類編2000年をご参照頂きたい。

竪穴式住居の出土遺物

6SI030土器溜まり

主柱が朽ちた後の住居堀方埋没時にベット際の柱c上に土器がまとまって廃棄されている。土器同士が密着した状態が見られ、同時性を有する。

(1) 土器（第46～50図、図版52-1～55-2）

弥生土器

壺型土器（1～12,30） 底部形態は1タイプの平底と2タイプのレンズ状底の中間形態で占められ、底部外面にまでハケが施される。口縁部形態は複合「く」字型のA2タイプ（1～3）が主体で短頸のC2タイプ（4）が出土している。A2タイプは頸部と胴部中央に三角突帯を有す。5の胴部突帯には浅く細かい連続する刻みを施す。調整はハケによる仕上げが主体で、1の底部から胴下半部にかけては下から上方向へのケズリ気味のナデがハケの上に施される。6はBタイプの長頸である。7は低平な形状で短頸のCタイプの可能性がある。30は短頸のC1タイプに属す。

甕型土器（13～29） 底部形態は壺型土器と同様に1タイプの平底と2タイプのレンズ状底の中間形態で占められ、底部外面にまでハケが施される。口縁部の屈曲は全体的に明瞭な1タイプで屈曲部外面に三角突帯が巡るものがある（13、14、15、16、23）。29は底部にコーン状の脚が付くもので、在地にはない属性であり筑前地域以外との関係が想定される。

鉢型土器（31～36） ボール状の1タイプ（31）とカップ状の2タイプ（32、36）、「く」字形口縁の4タイプ、口縁が内傾する5タイプ（34、35）の4種がある。5タイプは前田遺跡中ではこの6次調査区で多く出土する。底部は突レンズ気味の平底で調整は大半がハケを用い、底部から胴部外面にはケズリ気味のナデがハケの上

に施される。

高坏型土器 (37) 短脚の2タイプのもが見られるが、坏部は見つかっていない。

器台型土器 (38~45) 鼓形を成し、屈曲部が上方に片寄る2タイプのもので占められる。45は屈曲部位で素口縁となるもので支脚とするほうが良いのかも知れない。

(2) ガラス製品 (第64図、写真図版64-2)

小玉 (1) マリンブルー色を呈すガラス小玉が出土している。

6SI030黒色土

黒色土は検出面の一部で確認された土層で、灰色土はその下位に位置する。

(1) 土器 (第50図)

弥生土器

甕型土器 (1~4) 口縁部は屈曲が明瞭な1タイプで、底部は突レンズ気味の平底を成す。3は大型の胴部下半で突帯の先端は上向きになり刻み目が施されている。4は壺底である可能性もある。

鉢型土器 (5) 5は「く」字形口縁の4タイプであるが、屈曲はルーズである。

坏型土器 (6、7) 手づくねで形成されたもので、6は丸底に7は平底になる形状を持つ。指オサエの痕跡が明瞭に残される。

6SI030灰色土

(1) 土器 (第50図)

弥生土器

壺型土器 (1~3) いずれも底部片で、突レンズ気味の平底を成す。

甕型土器 (4~6) 口縁部は屈曲が明瞭な1タイプで、底部は突レンズ気味の平底を成す底部片である。

6SI030a

上層の新プランに伴う中央のピットで、炉の可能性のある遺構の埋没土中よりの出土遺物。

(1) 土器 (第50図)

弥生土器

壺型土器 (1~2) 底部片で、突レンズ気味の平底を成す。底部外面にも明瞭にハケが施される。

甕型土器 (3) 平底タイプであるが、底部外面にハケが施される。

高坏型土器 (4) 長脚の1タイプである。筒状部は肉厚で外面にはハケの後縦方向のミガキが施される。

坏型土器 (5) 手づくねで形成されたもので、丸底になる形状を持つ。指オサエの痕跡が明瞭に残される。

6SI030c

土器溜まり下位で検出された東側の支柱穴出土遺物。

(1) 土器 (第51図)

弥生土器

甕型土器 (1、2) 1は「く」字形口縁であるが、屈曲はルーズである。2は壺底の可能性もある。

高坏型土器 (3) 裾の開き具合から長脚と短脚の中間タイプといえる。表面は荒れてミガキの有無は確認しにくい、ハケは明瞭に残されている。

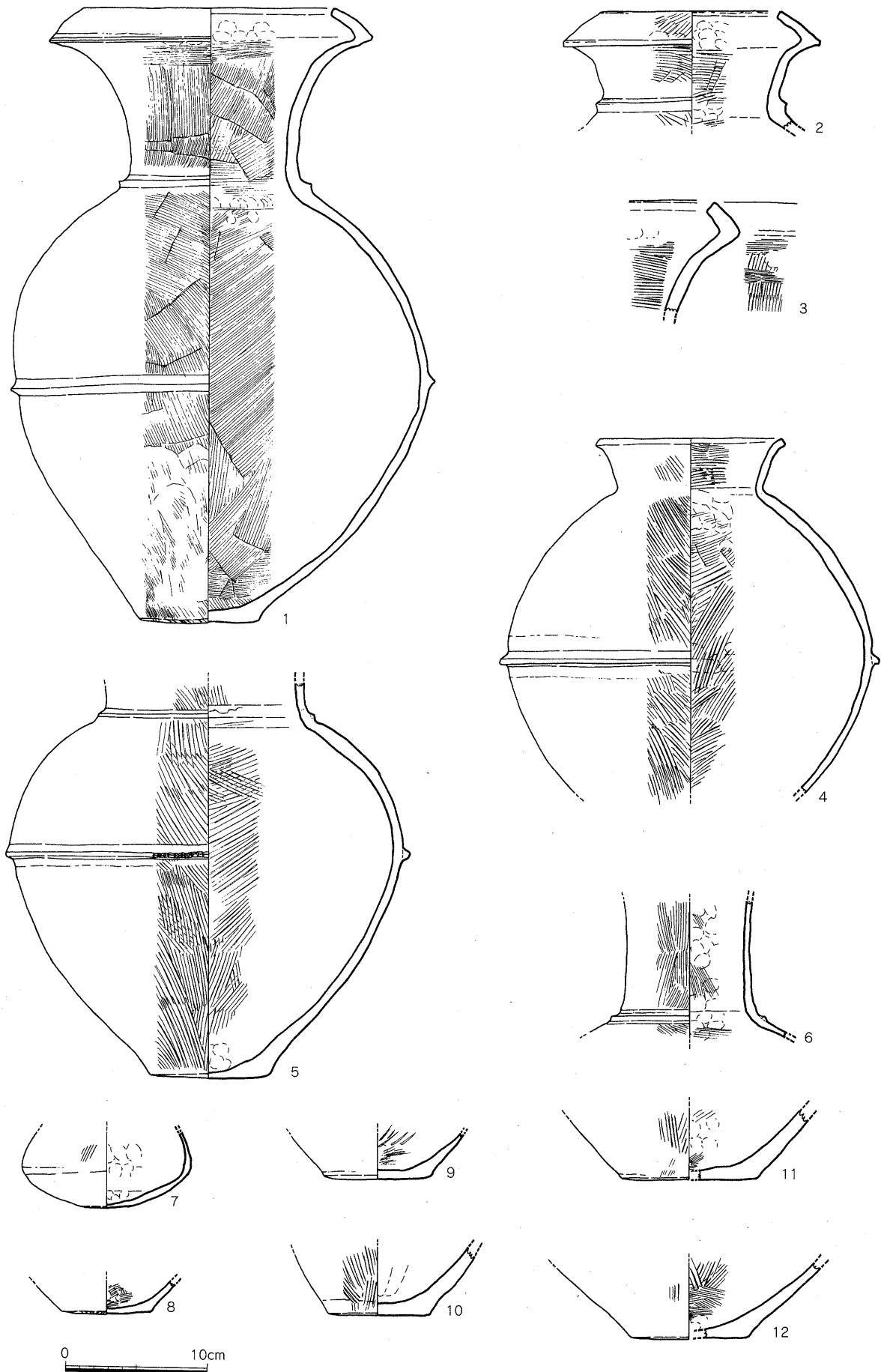
6SI030c茶褐色土

(1) 土器 (第51図)

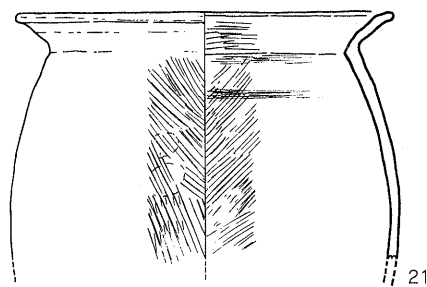
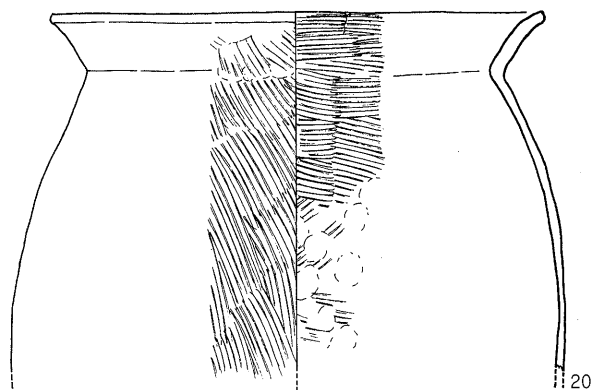
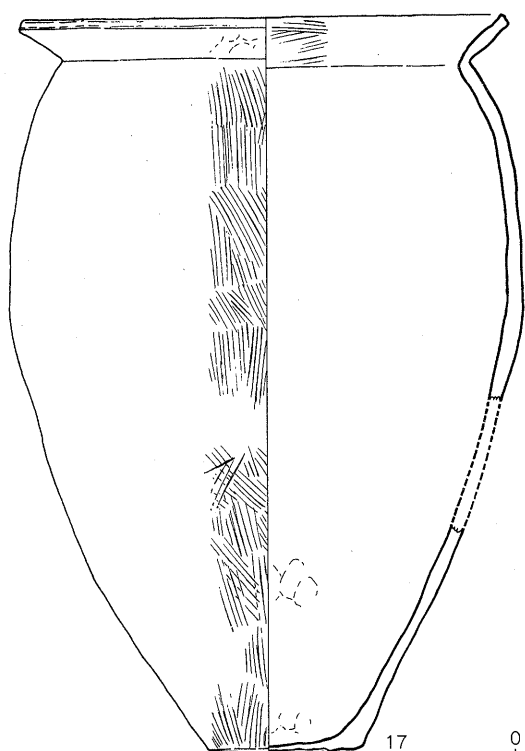
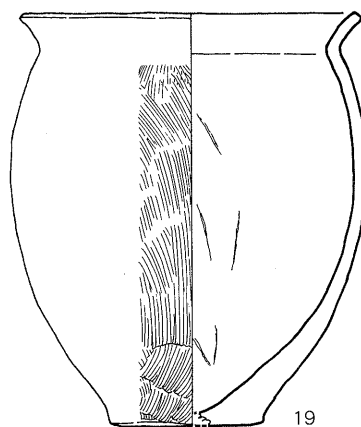
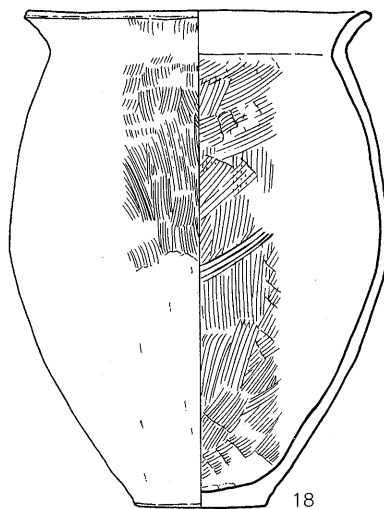
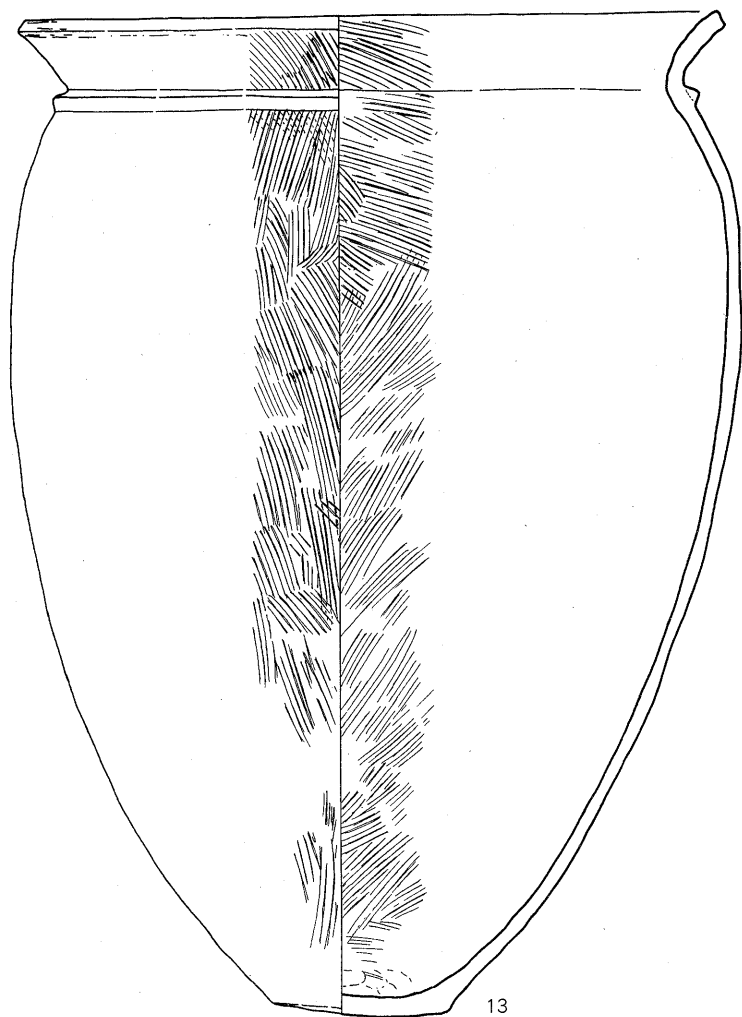
弥生土器

壺型土器 (1) 若干中央が肥厚する底部を持ち、胴部の最大径部位にM字形の突帯を有する。中期の須玖式の様式を残した器形で、口縁はラッパ状に開くDタイプになるものと考えられる。調整はハケで仕上げられる。

6SI030茶褐色土

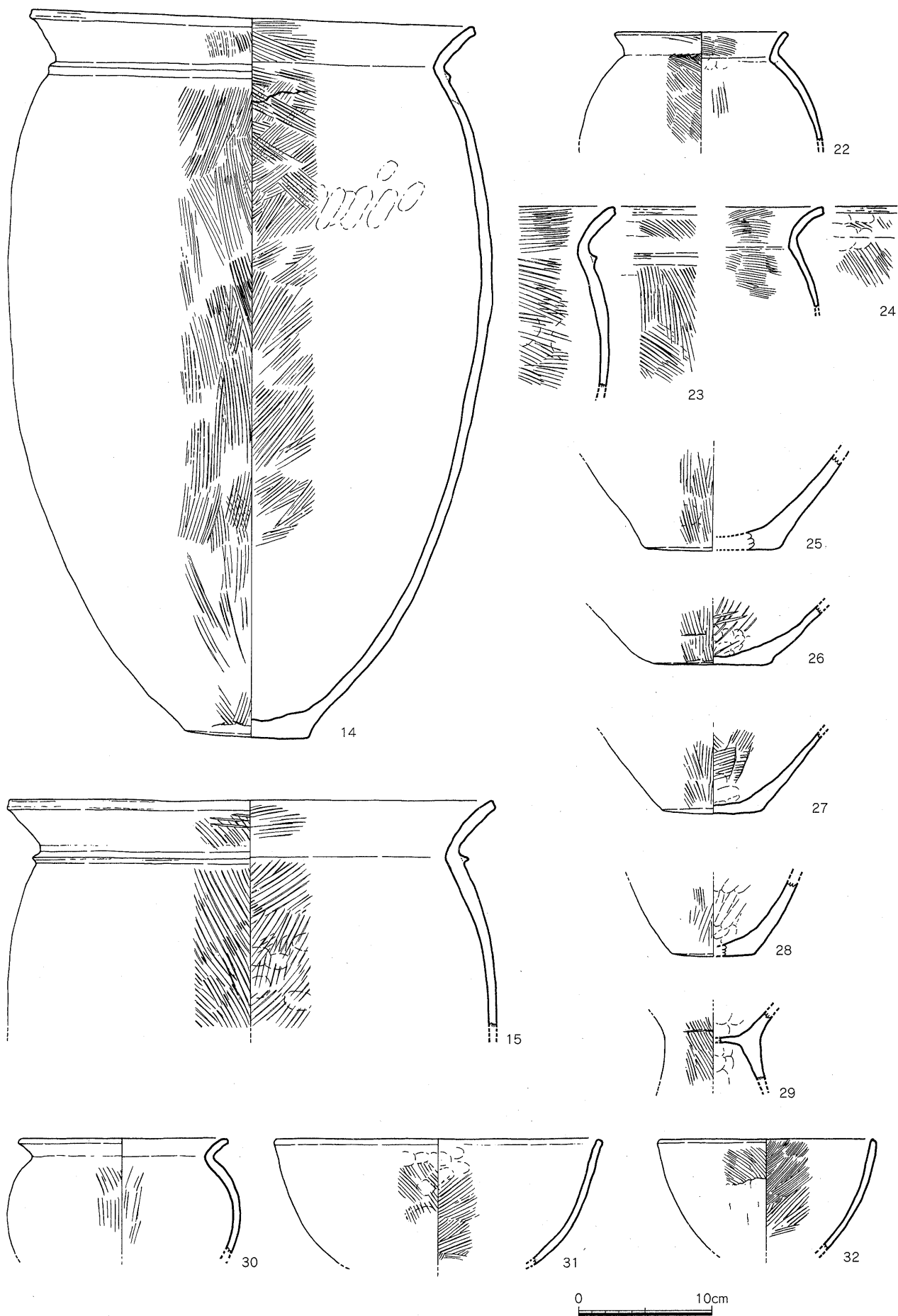


第46図 前田6次住居跡1出土土器実測図 (1/4)

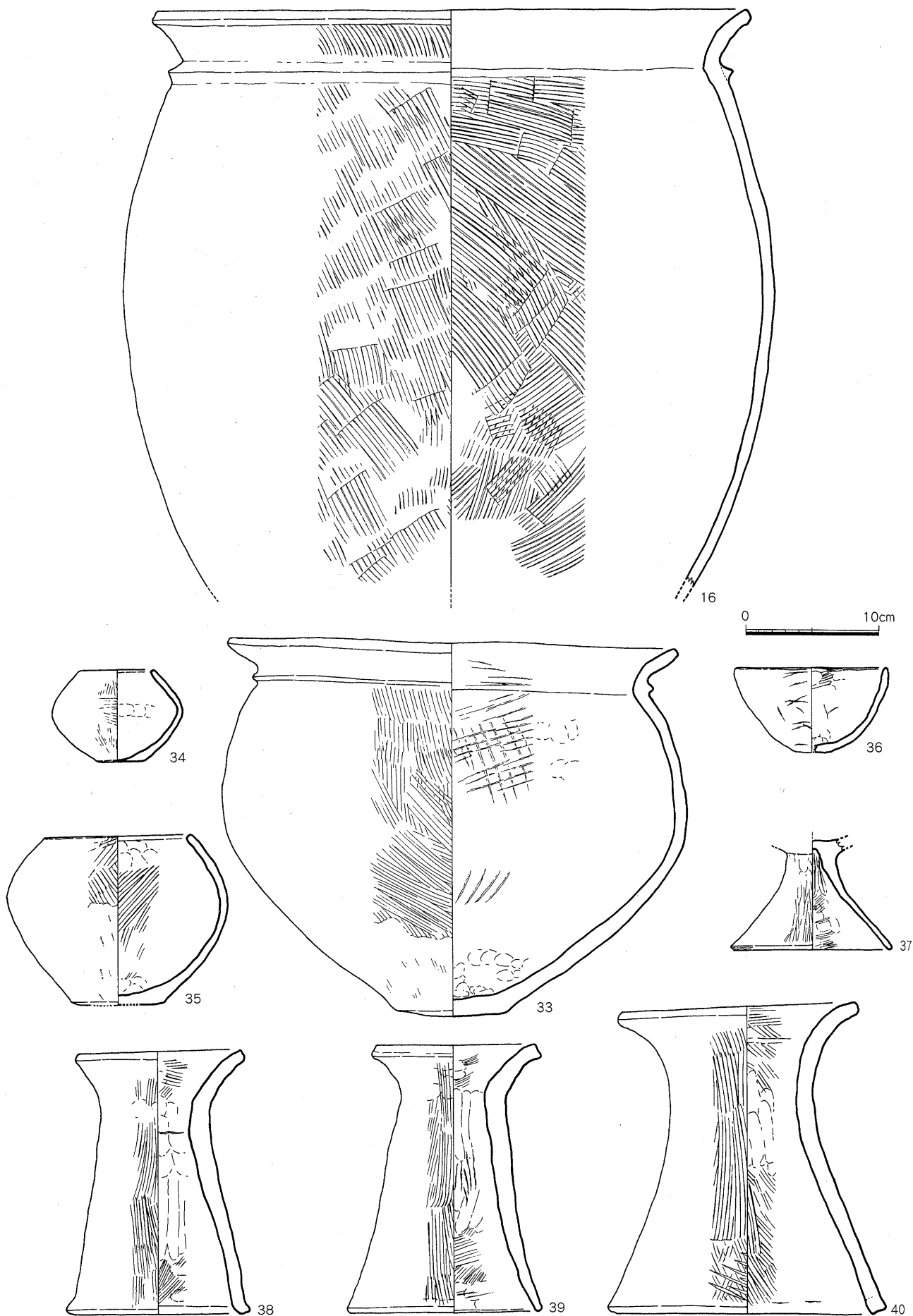


0 10cm

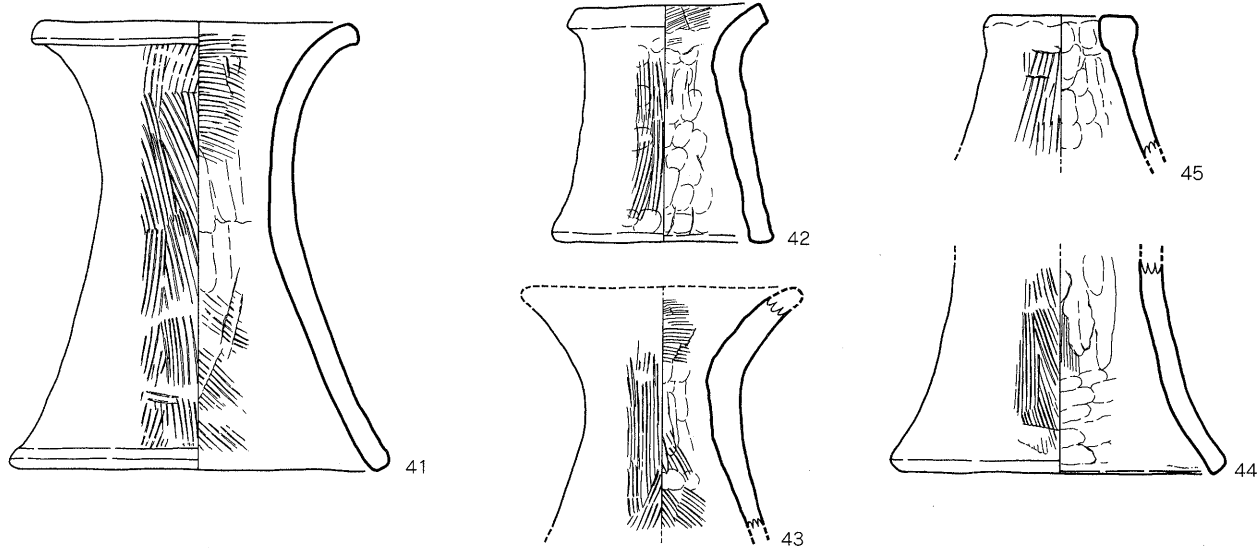
第47图 前田6次住居跡2出土土器実測图 (1/4)



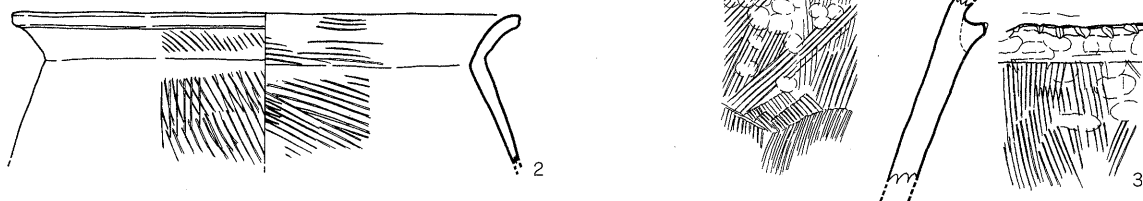
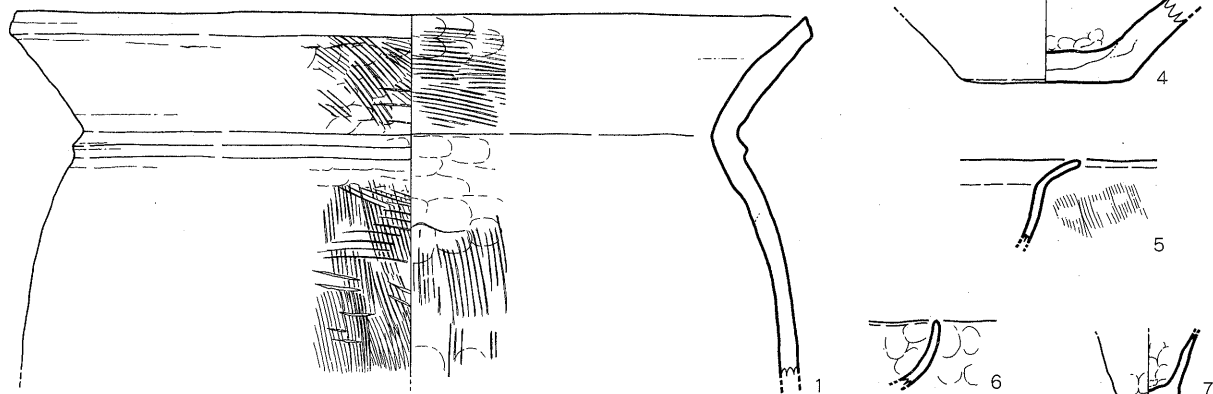
第48図 前田6次住居跡3出土土器実測図 (1/4)



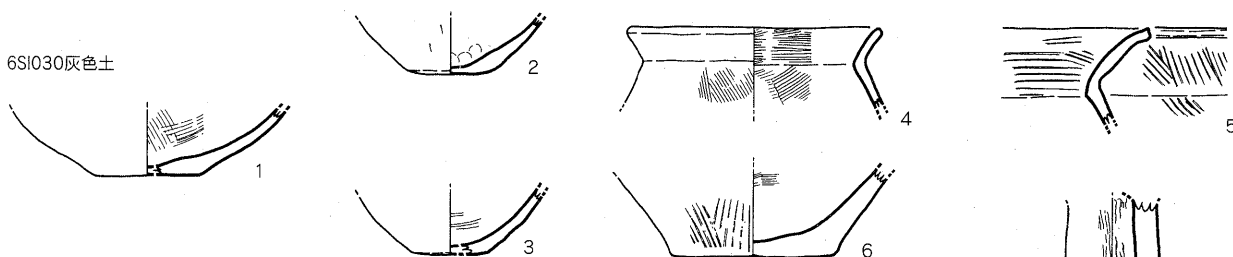
第49图 前田6次住居跡4出土土器実測图 (1/4)



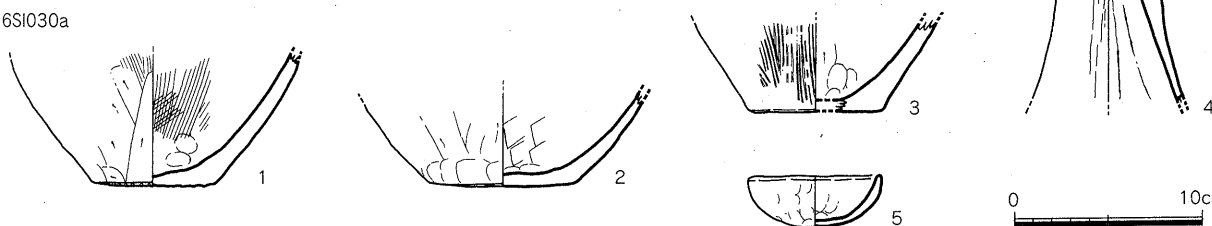
6SI030黑色土



6SI030灰色土

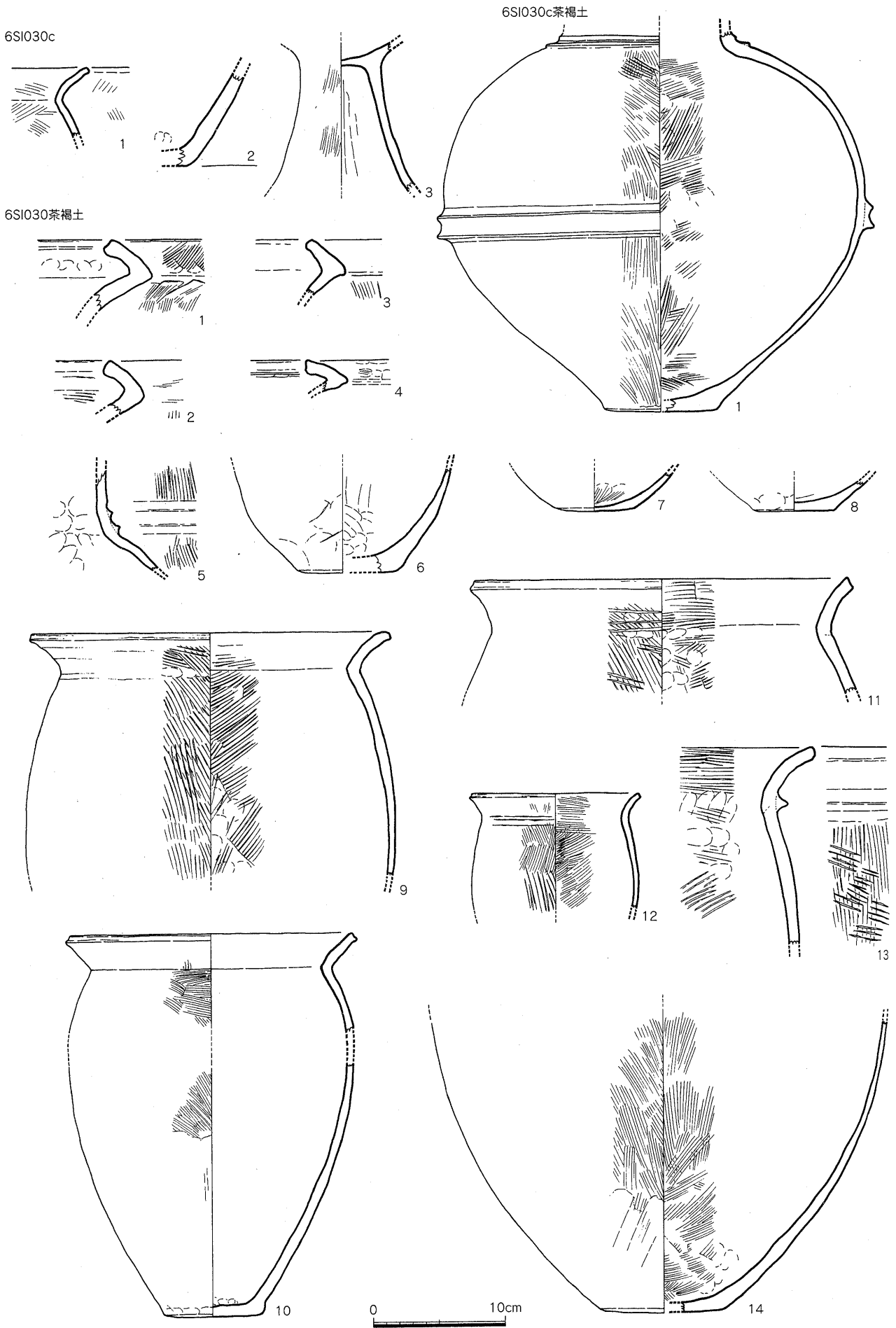


6SI030a

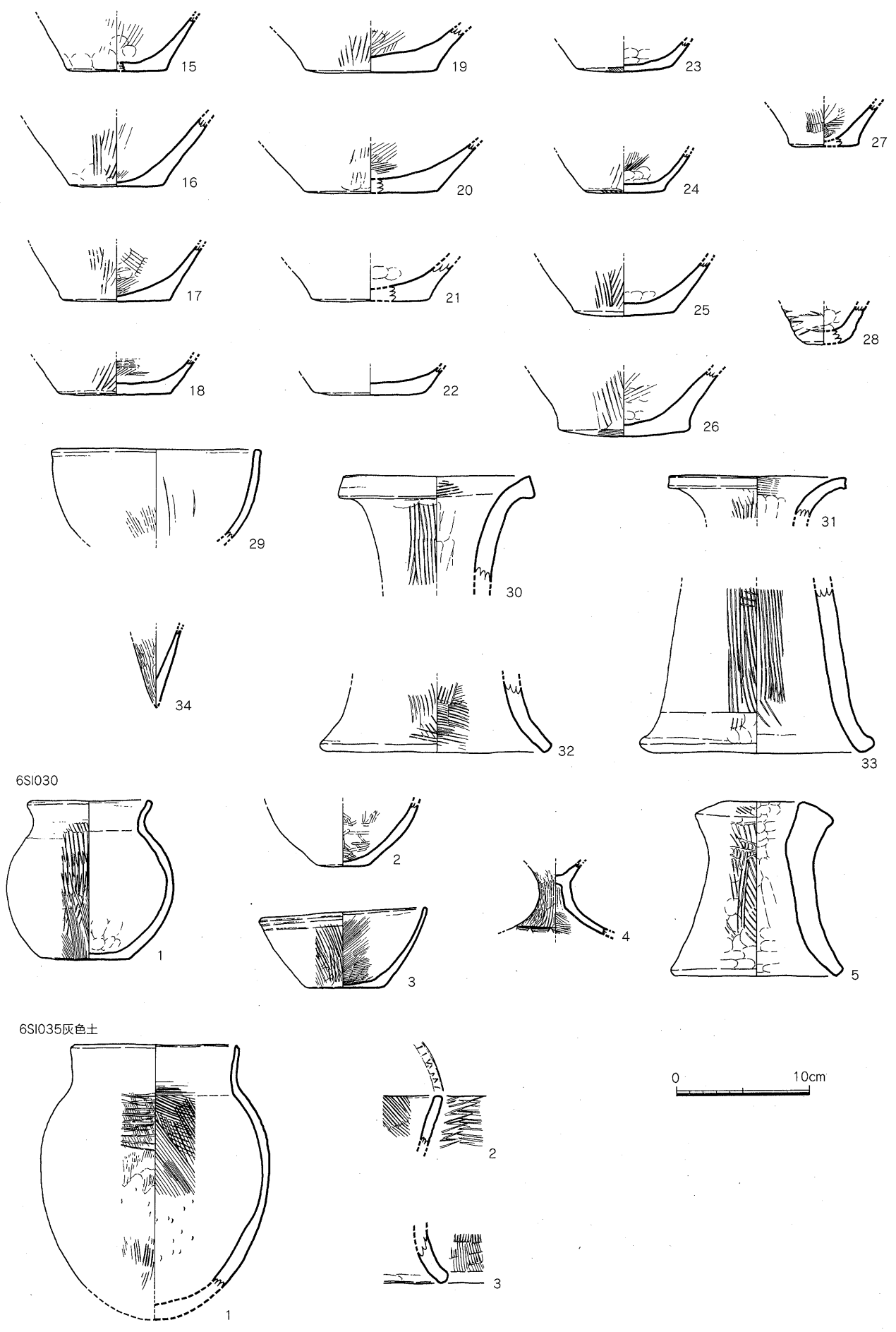


0 10cm

第50図 前田6次住居跡5出土土器実測図 (1/4)



第51图 前田6次住居跡6出土土器実測図 (1/4)



第52图 前田6次住居跡7出土土器実測图 (1/4)

遺構検出時に個別化しなかった遺物がこの土色ないし「S-30」で取り上げられている。

(1) 土器 (第51,52図、図版54-2,55-1)

弥生土器

壺型土器 (1~8) 底部形態は1タイプの平底と2タイプのレンズ状底の中間形態で占めらる。口縁部形態は複合「く」字型のA2タイプ (1~4) である。4は「く」字の形状が扁平で、新しい傾向を示している。

甕型土器 (9~28) 口縁は「く」字形口縁であるが、11~13のように屈曲がルーズなものを含んでいる。12は屈曲が不明瞭な2タイプである。11と13には胴部外面にタタキの痕跡が見られる。底部の中には壺が含まれている可能性がある。15以外の全ての底部外面にハケが施される。28は底が先細で径が小さく、外面にタタキを有す外来的な要素を持ったもので、畿内系譜の技術によるものと思われる。

鉢型土器 (29) 小型のボール状の形状を持つ。内面には縦方向の弧なりの工具の当たりの痕跡が連続して見られる。

器台型土器 (30~33) 鼓形を成し、屈曲部が上方に片寄る2タイプのものと考えられる。上部内面は底部に比較して丁寧は横方向のハケで仕上げられている。

器種不明土器 (34) 先の尖った器形を成す。外面は丁寧に縦方向にミガキが施される。上部を欠損するが、牛角状の坏である可能性も考えられる。

(2) 金属製品 (第59図、図版62-1)

鉄釘 (1~5) すべて断面形状が方形の釘であり、5には釘の軸方向に直交する木目が遺存している。この土層には須恵器片なども出土しており、平安時代以降の遺物が混入したものと考えられる。本遺構の至近に木棺墓があった可能性も考えられる。

6SI030

遺構検出時に個別化しなかった遺物が茶褐色ないしこの「S-30」で取り上げられている。

(1) 土器 (第52図、図版55-2)

弥生土器

壺型土器 (1, 2) 両者とも小型のもので、1は頸部の締まりがゆるい形状を呈す。底部外面にハケが施される。2は内面にミガキが施される。

鉢型土器 (3) 小型のカップ状の形状を成す。口縁付近は強い横方向のナデが残される。外底にはハケが施される。

高坏型土器 (4) 短脚で筒状部が短く、裾が急に開く形状を成す。外面は縦方向にミガキが施された後で、裾部に横方向のシャープな沈線と頂点を上に向けた連続した三角形が施される。胎土の発色はくすんだ灰褐色で、角閃石が多少含まれる点で同時期の在地土器の胎土と異なる。瀬戸内などの他地域との接触を示す土器である。

器台型土器 (5) 肉厚で重たい土器で支脚と中間的な位置を占める。ハケの原体の条線幅が幅広い。

6SI035灰色土

(1) 土器 (第52図)

弥生土器

甕型土器 (1) 長胴で直立する口縁を持つ。底部はおそらく尖り底になるタイプと思われる。胴部上半外面にはハケが施される。下半はケズリ気味のナデが下から上方向に施される。

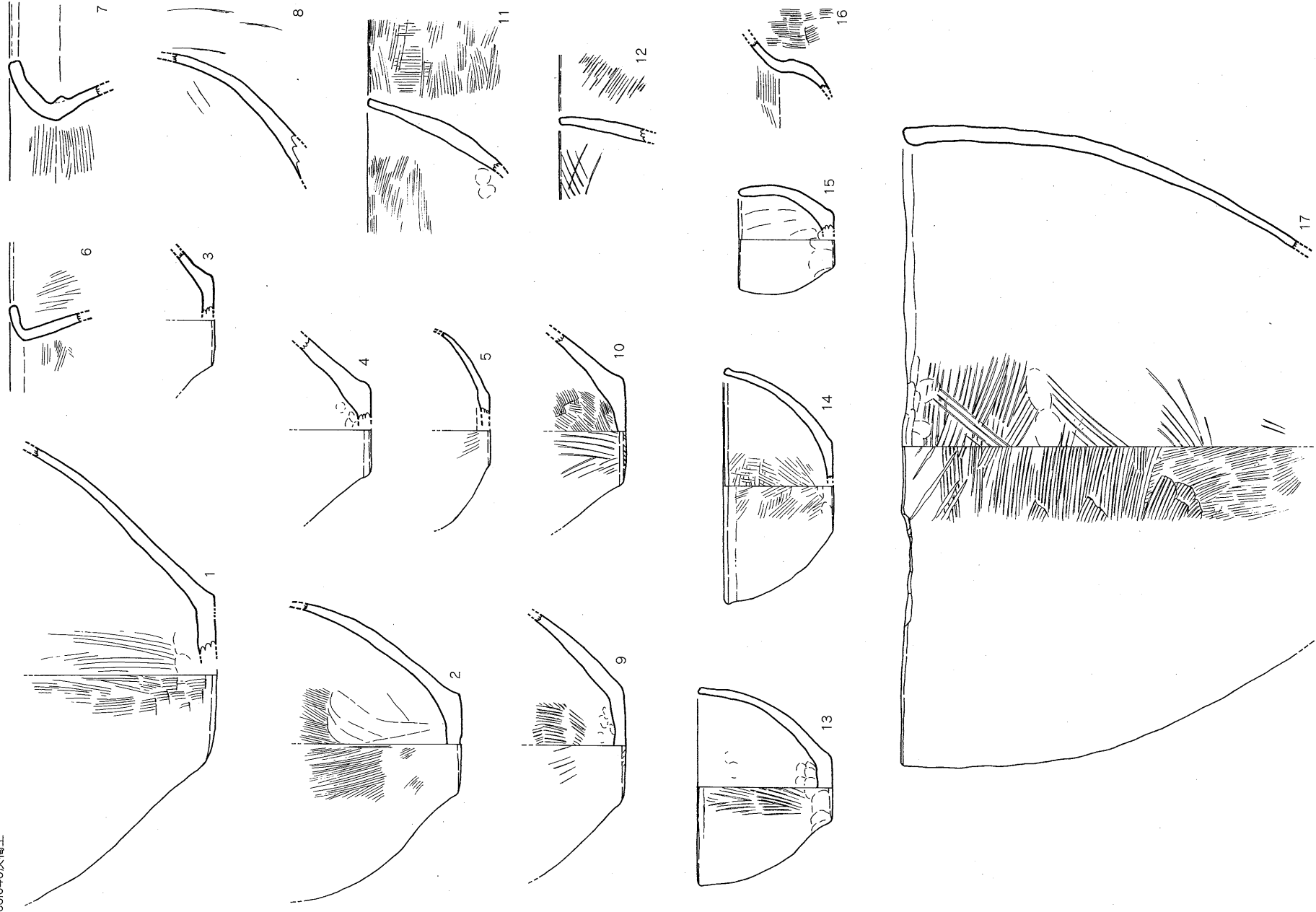
鉢型土器 (2) ボール状の形状のもので、口縁上端部は平坦面を有す。外面はタタキの痕跡が重複して残される。口縁上端部には「V」ないし「ハ」字の文様風の浅い刻みが残されている。

器台型土器 (3) 裾端部がゆるやかに屈曲する形状を持つ。

6SI040灰褐色土

(1) 土器 (第53図、図版56-1)

6S1040灰褐土



第53图 前田6次住居跡8出土器実測图 (1/4)

弥生土器

壺型土器 (1~5) 外面のナデが丁寧で上方にやや膨らみを持つ。底面は若干の膨らみを持つ。

甕型土器 (6、7) 6は「L」字に強く屈曲する口縁で、7は屈曲部に三角突帯を持つ「く」字口縁のもの。

鉢型土器 (11~17) ボール状の形状のもの (12~14、17) で、15はカップ状、16は「く」字口縁。17は鉢としては最大級の大きさを有し、口縁端部が丸く肥圧し、端部は指オサエや荒いナデによって端部はフラットでなく部位によって多少上下する。

(2) 石器 (第64図、図版64-2)

砥石 (1) 花崗岩製の扁平な四角い石で、未だ平坦面は滑面化していない。

6SI040b

(1) 土器 (第54図)

弥生土器

甕型土器 (1) 1は屈曲部に三角突帯を持つ「く」字口縁を持つ。

6SI040c

(1) 土器 (第54図)

弥生土器

壺型土器 (1) 直立に近い角度の複合口縁を持つ形態を呈す。下端の屈曲部は鋭角を成す。

6SI040d

(1) 土器 (第54図)

弥生土器

甕型土器 (1) 1は屈曲部は「く」字口縁を持つ。

6SI045

(1) 土器 (第54図)

弥生土器

甕型土器 (1) 1は屈曲部に三角突帯を持つ「く」字口縁を持つ。

(2) 石器 (第64図)

砥石 (1) 長細い形状で両端を欠く。研ぎは両小口からおこなわれ、研ぎ減りにより面が波をうつ。砂岩製で粗砥に向く。

6SI065

(1) 土器 (第54図、図版56-2)

弥生土器

壺型土器 (1) 直立に近い角度の複合口縁を持つ。下端の屈曲部はゆるいカーブを成す。胴と頸部の境は小規模な三角突帯を持つ。

甕型土器 (2) 2は「く」字口縁を持ち、底部は尖り気味の突レンズ底を持つ。全体は縦方向のハケが施されるが、胴部外面上半にはタタキが、下半にはハケをナデ消す調整が施される。

鉢型土器 (3、4) 浅いボール状の4タイプの形状を呈す。3には内外面にケズリが施される。

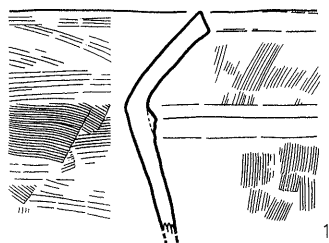
土坑の出土遺物

6SK008灰褐土

(1) 金属製品 (第59図、図版62-1)

刀子 (1、2) 1は完形を保つもので、身幅は最大で1.6cmを測る。刃部と茎 (なかご) の境は錆のためあまり明瞭でない。茎の断面形状は方形を呈す。厚味は刃部と変わらない。2は切先が欠損するもので、身幅は最大で1.3cmを測り1より小振りである。茎は身幅が刃部に比べて細い。

6SI040b



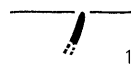
6SI040c



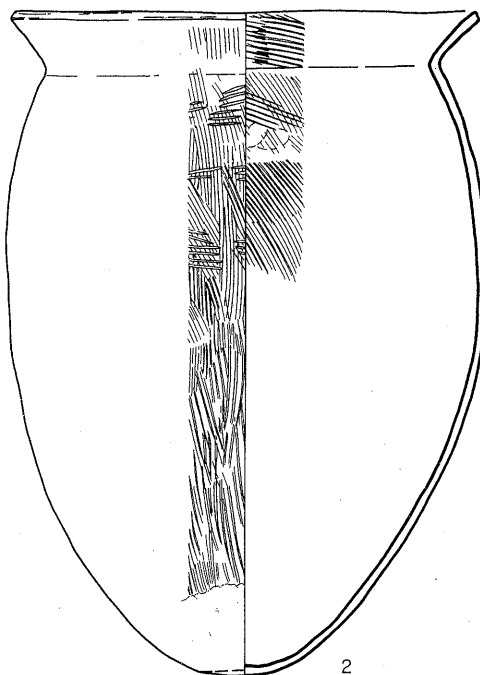
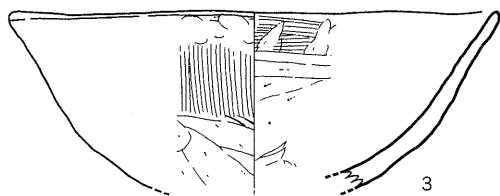
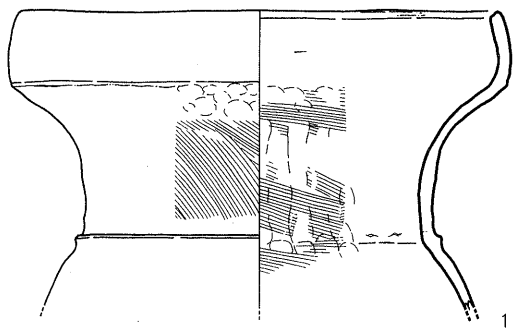
6SI040d



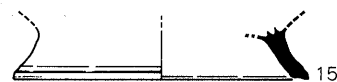
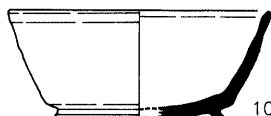
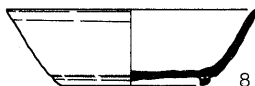
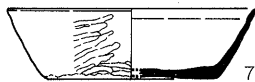
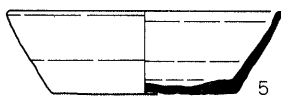
6SI045



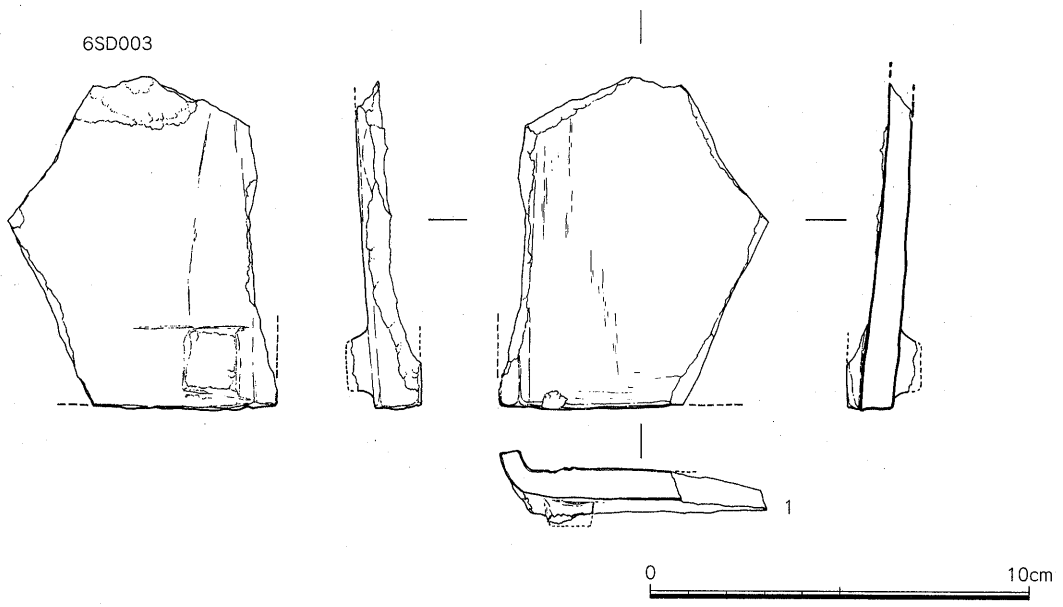
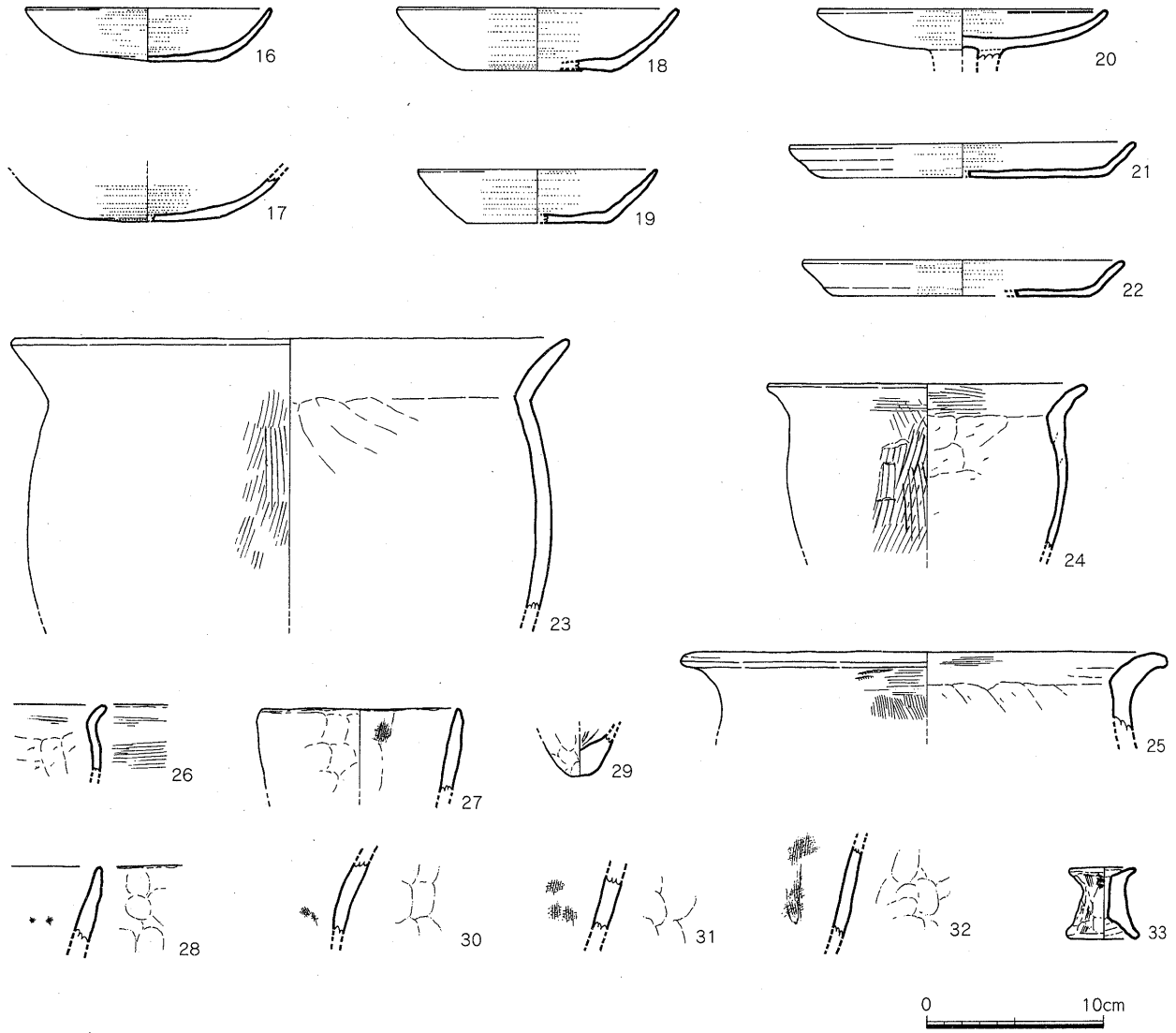
6SI065



6SK008暗茶褐色土



第54図 前田6次住居跡9、土坑1出土土器実測図 (1/4)



第55图 前田6次土坑2、溝1出土土器実測图 (1/4)

鉄釘 (3) 断面形状が方形で片方に身幅が狭くなるため釘と判断した。

6SK008暗茶褐色土

(1) 土器 (第54,55図、図版57-1,2)

須恵器

蓋 (1~4) 口縁端部は小規模に折れ曲がる形状で、1などは先端が膨らむような形状を持つ。天井部の処理は全てヘラによる切り離し後、軽く押さえたような雑なナデが施されるに過ぎず、ヘラ切りの軌跡が螺旋状に残存している。

坏 (5~10) 5~7は平底のaタイプ。底部の角は比較的鋭角で体部は直線的である。7には底部を中心に手持ちのミガキが施される。側面のミガキは全面には及ばない。8~10は高台の付くcタイプ。体部は直線的で高台は外側に寄った位置に取り付けられている。

皿 (11~14) 平坦な底部と短く開く口縁を持つ。12と14は底が突出している。

壺 (15) 脚部の破片で、端部には浅い沈線が巡る。

土師器

坏 (16~19) 底部から口縁にむかって広く開く形状のdタイプである。外面中位から底部にかけて下地には回転ヘラケズリを施し、底部以外には回転を利用したミガキaが施される。

高坏 (20) 体部から口縁にかけては屈曲せず緩やかなカーブを描く形状の坏部である。ミガキaが施される。

皿 (21, 22) 平坦な底部と短く開く口縁を持つ。ミガキaが施される。底部にはきれいな同心円を描く回転ヘラケズリを残す。

甕 (23~26) 外面にハケ、内面にケズリを持つ。23は口縁の屈曲部は厚くならない。24と26は小型に属し、26の外面には横方向のハケで仕上げられる。

製塩土器 (27~32)

大半が小片で全体形の復元には難がある。27~30は森田分類のII類に属すものと考えられる。29以外には局部に布目がかろうじて残されている。

ミニチュア土器 (33)

鼓の形状を呈し、中心には棒状の工具で穿孔される。

(2) 金属製品 (第59図、図版62-1)

鉄釘 (1, 2) 断面形状が方形を呈す。2は頭部がタタキによって扁平になっている。

板状鉄製品 (3~5) 用途は明確でないが断面形状が扁平な方形を呈すもの。4は平面形状が靴形に曲がっている。

(3) 石器 (第64図、図版64-2)

砥石 (1) 赤縞の入る砂岩製でいわゆる「天草砥石」とされるもの。中砥に向く石材である。片面は両小口から使用され、その境目で稜を成している。

6SK017茶褐色土

(1) 金属製品 (第60図、図版62-2)

鉄釘 (1) 断面形状が方形を呈す。木質などは付着していない。

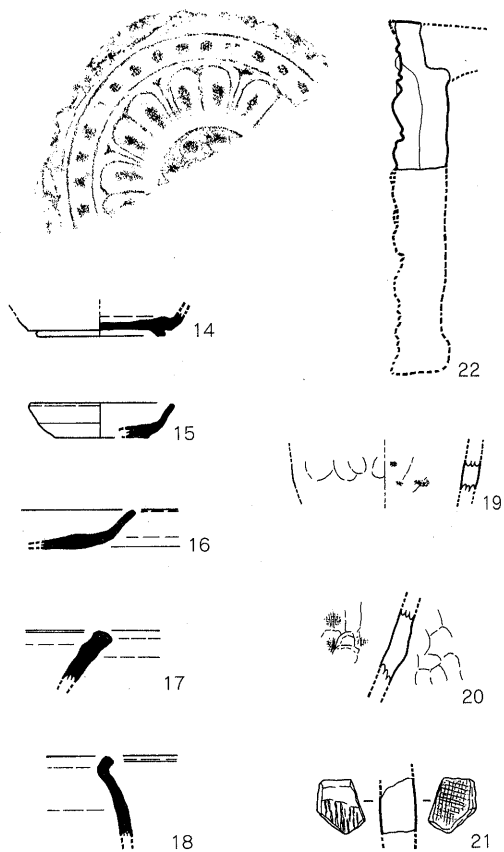
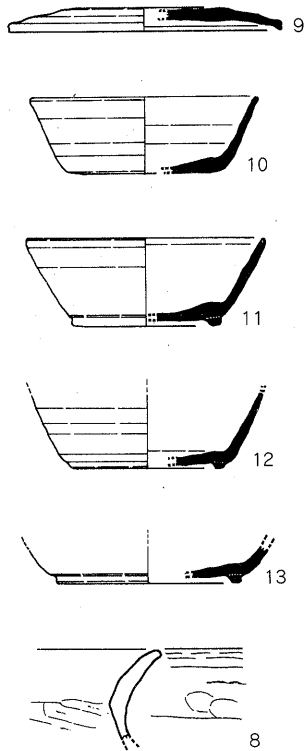
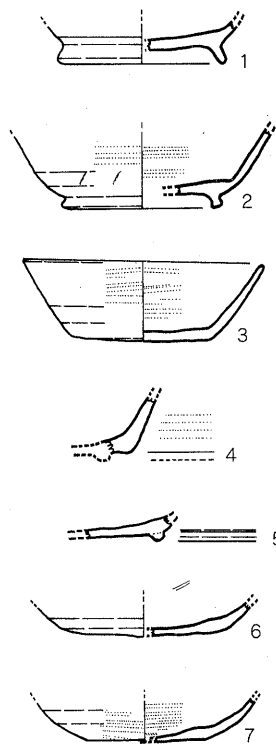
(2) 石器 (第65図、図版65-1)

原石 (1) シルト岩の大型の剥片。打割されたままで未使用。6SK025暗茶褐色土、6SD003にも同じものが含まれる。表面が多少風化し、黒色の地肌が部分的に灰白色化している。至近に原石を産する箇所はなく、持ち込まれた石材である。

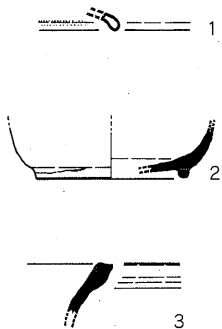
6SK025暗茶褐色土

(1) 土器 (第56図)

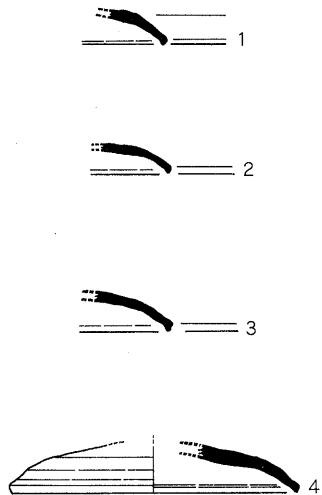
6SK025暗茶褐土



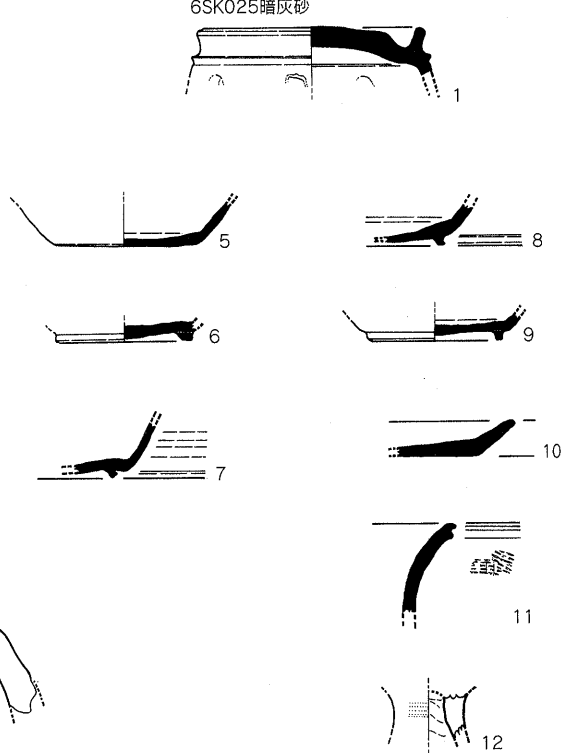
6SK032



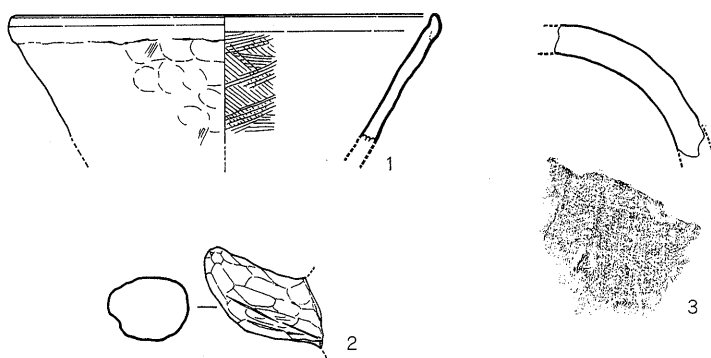
6SK033



6SK025暗灰砂



6SK034



0 10cm

第56图 前田6次土坑3出土土器実测图 (1/4)

土師器

椀(1) 外側に短く踏ん張る形態の高台を持つ。高台接合前の外面は回転によるケズリが施されている。坯よりやや薄い橙色を呈す。

坏(2~7) 2、4、5は高台の付くcタイプ。2の高台は底部の外側に付き、先端が幅広い形状を成す。3、6は平底のaタイプで3の外側面下には回転によるケズリが施されている。7はケズリによって丸みを持つ底部を作り出すdタイプの坏である。点線で表現したのは回転によるミガキaを施したものである。

甕(8) 先端がやや細くなる口縁を持つ甕で、胴部内面には斜め方向にケズリが施される。

須恵器

蓋(9) 端部の形態が三角を呈すもので、天井部外面はヘラ切りのままで調整は施されていない。

坏(10~15) 10は平底のaタイプ、11~14は高台の付くcタイプ。15は小皿のような形状を呈すもので、底部はヘラ切り後に軽いナデを施す。牛頸製品としては類例に恵まれない。蓋の可能性もある。

cタイプの高台はすべて低平で外側に付けられる。

皿(16) 底部から緩やかに立ち上がる口縁を持つaタイプのもの。底部はヘラ切りのまま。

鉢(17、18) 17は体部は傾斜を持ち、端部内面が突出するbタイプのものである。18は口縁端部が短く外側に屈曲するaタイプのものである。

(2) 金属製品(第60図、図版62-2)

板状鉄製品(1、5、6) 1は腐食して元の形状が認識しにくい、刀子の可能性もある。5、6はひし形を呈す板状のもので、形状から鍛冶製品の切断片の可能性も考えられる。

棒状鉄製品(2~4) 断面形状が円形を呈す。4は両端が先細くなっている。

(3) 石器(第65、66図、図版65-1,2)

原石(1) 1は灰色を呈す泥岩の剥片。一部が打割されたままで未使用。2はシルト岩の大型のコア。一部打割され一辺に小剥離の痕跡が複数見られる。6SK017茶褐土、6SD003にも同じものが含まれる。持ち込み素材である。

丸石(3) 扁平で楕円形を呈する。泥岩製である。無加工であるが持ち込み素材なので図化した。

(4) 土製品(第66図、図版65-2)

権(4) 幅の狭い端部側に穿孔を持つ札状を呈す。形状から秤の錘(権)と考えられる。土師器と同様の酸化焼成により淡い橙色を呈し、重量は61.7gを測る。

(4) 瓦(第56図、図版58-1)

軒丸瓦(22) 複弁を持ち外区には連続する鋸歯文と珠文が施される。鋸歯文帯は意図的に打ち欠かされている。中房の珠文の割付けは9+5+1に復元され老司式の範疇で捉えられる。九州歴史資料館分類では275Bタイプに属する。前田遺跡では土坑などから縄目のタタキを持つ平瓦が複数出土しているが、軒丸瓦はこの1点の出土に止まる。その状況からは瓦を本格的に所用した建物があったとは考えられない。

6SK025茶褐砂質土

(1) 金属製品(第60図、図版62-2)

鉄釘(1) 断面形状が方形を呈す。木質などは付着していない。

6SK025暗灰砂

(1) 須恵器(第56図、図版58-1)

円面硯(1) 中央がゆるく盛り上がる形状を呈す。この部分に若干墨痕が見られる。裾部は円形と方形の組み合わせによるくり込みの痕跡があり、連子にはならない。直径が12cmと小型に属す。連子のもは1次調査の1SK405黒灰土で出土している。転用硯も含め複数の硯が出土しており、8世紀後半の段階では行政的機能を持つ施設があったことを示唆している。

6SK032

(1) 土器 (第56図)

土師器

蓋 (1) 口縁の端部が肥厚するもので、内面にはaタイプのミガキが残される。

須恵器

坏c (2) 低平な高台が外側に付けられる。

壺 (3) 端部が肥厚しシャープな矩形を呈す。硬質に焼き上がっている。eタイプの壺である。色調は胎土の芯は黒灰色を呈すが、表面はうすい茶褐色を呈す。肥後系の製品と考えられる。

(2) 金属製品 (第60図、図版62-2)

鉄釘 (1) 断面形状が円形から方形の中間形態を呈す。木質などは付着していない。

6SK033

(1) 土器 (第56図)

土師器

高坏 (12) 筒状部の上の部分であるが、裾が開きかけており、低平な脚であったことが知られる。外面にはaタイプのミガキが残される。

須恵器

蓋 (1~4) 端部の形態が三角を呈すもので、天井部外面はヘラ切り後に軽くナデが施される。

坏 (5~9) 5は平底のaタイプで底部外面はヘラ切り後に軽くナデが施される。他は細身であるが断面方形の高台が取り付けられるcタイプの坏。7は多少中心に寄った位置に高台があり、その形状は多少外に踏ん張った形状を呈す。

甕 (11) 緩く外反する口縁の端部外面には沈線が施される。口縁下にはタタキの痕跡が見られる。

皿 (10) 短く外反する口縁を持つaタイプの皿である。

(2) 金属製品 (第60図、図版62-2)

塊状鉄製品 (1) 断面形状が楕円形を呈す。付着などはない。

6SK034

(1) 土器 (第56図)

須恵質土器

鉢 (1) 重ね焼きによって口縁外面端部のみが黒灰色を呈す典型的な東瀬戸内系のこね鉢である。内面は斜方向のハケ目が施される。外面には指頭痕跡が残されている。

土師器

甕 (2) 甕の把手部分であり、接合部で剥離したもの。

瓦

平瓦 (3) 外面がナデによって仕上げられる。

6SK041茶褐土

(1) 土器 (第57図、図版58-2)

須恵器

甕 (1) 格子タタキと同心円の当て具痕跡が残る。混入遺物と考えられる。

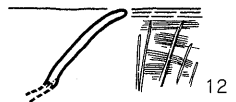
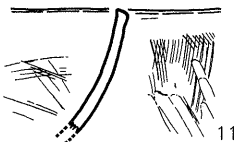
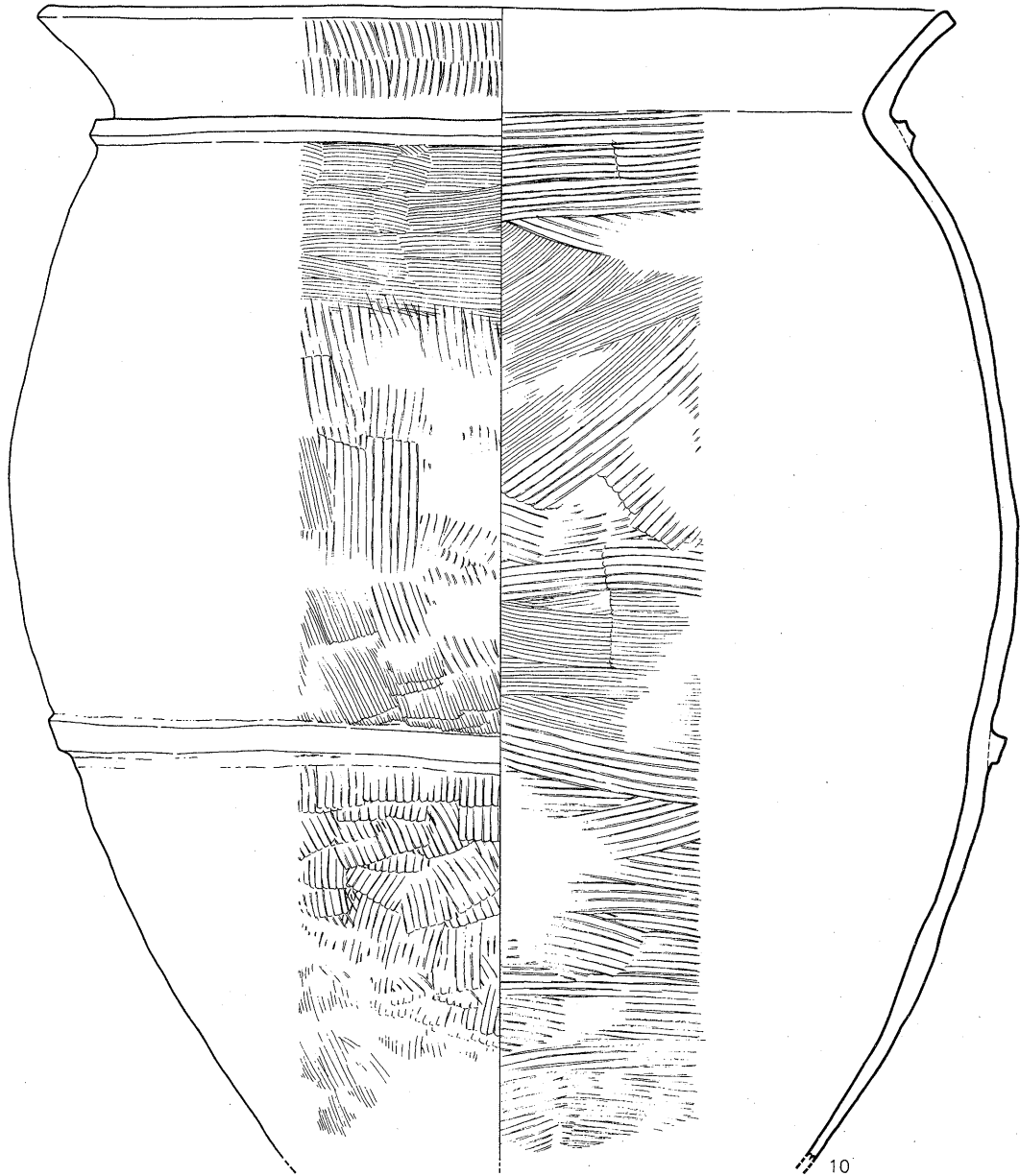
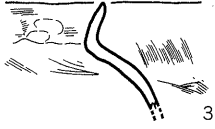
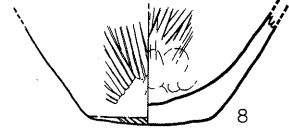
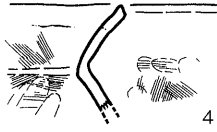
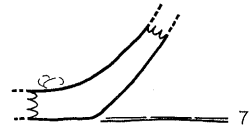
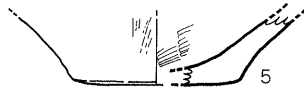
弥生土器

壺型土器 (2、3) 2は袋状口縁のA1タイプ。3は短く「く」字形に屈曲するC2タイプ。

甕型土器 (4~10) 4は「く」字形口縁で屈曲部はやや緩慢な状態を呈す。10は口縁屈曲部と胴部下半に台形の突帯を持つ。ハケによって調整がなされるが、胴部上半は横方向のハケであり、後期でも新しい傾向を示す。下半はハケの上にケズリ気味のナデが施される。

鉢型土器 (11) ボール状の1タイプを呈す。口縁端部には平坦面がある。

6SK041茶褐土



第57図 前田6次土坑4出土土器実測図 (1/4)

高坏型土器 (12) 坏部の口縁片で明瞭な屈曲部を持ち、短く外反する2タイプのものである。

縄文土器

浅鉢 (13) 口縁が「L」字形に立ち上がり、端部が丸く納められる形状を持つ。横方向のミガキで仕上げられる。晩期に属するものである。

墳墓の出土遺物

6ST001

(1) 金属製品 (第60図、図版62-2)

刀子 (1、2) 鉄製の刀子である。1は完形を保つもので、身幅は最大で1.4cmを測る。刃部と茎 (なかご) の境は背部のほうに段が見られる。刃部が研ぎ減りした結果と考えられる。茎の断面形状は方形を呈す。厚味は刃部と変わらない。2はさらに刃部が研ぎ減りし短くなっている。

帯金具 (3) 鋳造による銅製品で、かまぼこ型の平面形状を呈し、横長い窓があげられる。いわゆる「丸鞆」とよばれる帯金具である。裏面は型に穿孔があった部分が突起状に三箇所残されている。この突起の三角形をなす配置は石製品の糸かがりの穴位置と同じで、この突起が本来はもう少し長く、ベルト本体を貫いて装着する機能を帯びるものと考えられる。

6ST010

(1) 土器 (第58図、図版59-1,2)

土師器

皿 (1~6) 全てヘラ切りによる小皿である。口径が1のみ10センチ代前半で他は11センチ前後である。1を除いた口径と器高、底径の平均値は11.1、1.8、8.1cmである。すべての内底部には回転によらないナデがあり、外底部には板状圧痕が観察される。

椀 (7、8) 押し出しとコテ当てによって胴下半部に丸みを持たせた器形を呈す。口縁端部は短く外反する。7には外底部にヘラ切りの痕跡を残し、8の内底部にはコテの当たりの痕跡が観察される。

大宰府編年のIX期頃に位置付けられる資料である。

(2) 金属製品 (第61図、図版63-1,2)

鉄釘 (1~27) 断面形状が方形を呈し、頭が「L」字形を成すもので、すべて途中で欠損するため完全な法量は得られない。3と27は途中で板の目の方向が変化し、板の合わせ目であったことが知られるが、3~4センチの板の厚さがあったことが知られる。

6ST020

(1) 金属製品 (第62図)

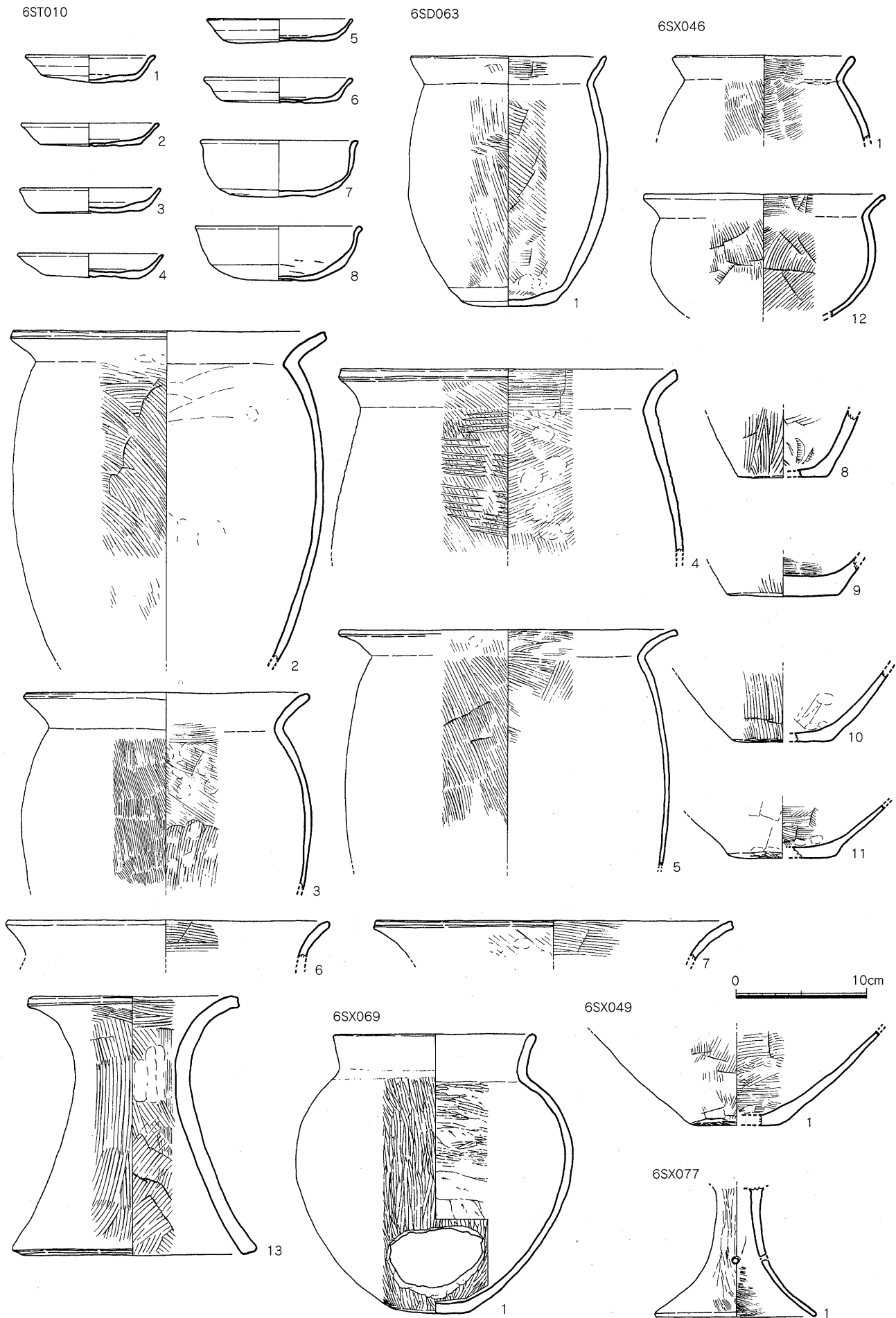
手鎌 (1) 鉄製の幅1.6cmの板状のものが端で折り曲げられ、それに横方向の木質が挟まっている。木質は折り返しに近い位置で平面形状で段を持つ。折り曲げを側面から見ると一方に薄くなっており、折り曲げの角も薄い方はカットされている。木質は薄い方までには及んでいない。この状況からこの製品は板と組み合わせて使用された刃器で、大きさから手鎌と判断される。遺構は平安時代のものであるが、周辺の弥生時代後期の遺物が混入した可能性も捨てきれない。手鎌の終焉時期は考古学上明確にされていないため、平安時代の存在も否定できない。民俗事例では近現代に及んでいるという。

溝の出土遺物

6SD003

(1) 土器 (第55図、図版60-1,2)

灰釉陶器 (1) 1は方形の脚が付いた風字硯である。小口側の破片で灰釉は摺面の縁に直線的な境目が観察され、このことから刷毛塗りによるものと思われる。釉は裏側のみに付着し、均一でなくかいらぎ状の釉の



第58図 前田6次墳墓、溝、その他の遺構出土土器実測図 (1/4)

塊が連接する状況を呈している。ナデで仕上げられ、摺面には微かに縦横方向のナデの軌跡が観察される。太宰府では大宰府条坊跡149次調査SX263について2例目で、本来は墳墓の副葬品とも考えられる。

(2) 金属製品 (第62図、図版64-1)

刀子 (1) 身幅が約2cmの鉄製の刃器。付着物などは観察できない。

鉄釘 (2~14) 断面形状が方形ないしそれに近い形を呈す。2~4は折れ曲がった頭部が残る。

板状鉄製品 (15~18) 薄板状を呈すが、15は切先状の形状を呈し小型の刀子の可能性もある。

円板状鉄製品 (19) 扁平で円形を呈す。表面の腐食で本来の形状が掴めないが、中央付近の突起が生きるものであれば、紡錘車の可能性も考えられる。

(3) 石器 (第67図、図版66-1)

石包丁 (1) 緑色片岩製のもので、直線的な背部を持つ。刃部の一部が欠損する。素材としての片岩の選択は太宰府周辺においては、立岩産の凝灰岩が使用される以前の弥生前期以来認められる。本例は紐穴と背部が近いことなどから中期よりも新しい傾向のものと捉えられる。

原石 (2) 1は灰色を呈す泥岩の剥片。一部が打割されたままで未使用。2はシルト岩の大型のコア。一部が打割され一辺に集中した小剥離の痕跡が複数見られる。6SK017茶褐色土、6SK025暗茶褐色土にも同じものが出土している。小剥離や風化の具合が類似する点から、本来は同一時期の所産であった可能性がある。弥生後期か奈良時代のものか判断は別れるところである。

砥石 (3) 破碎しているが、本来は立方体を呈していたものと考えられる。粗砥用と思われるが、石材は花崗岩由来のアプライトないし長石石英斑岩であり、弥生時代の鑄造鑄型素材として知られる石が使用されている。

6SD003上層

(1) 石器 (第67図、図版66-1)

打具 (1) 半分に割れているが、石材には花崗岩の円礫が使用され、平滑な表面の一部にあばた状の窪みが形成される。

6SD031

(1) 金属製品 (第63図)

鉄釘 (1、2) 両者とも棒状を呈すが、欠損して全容が分からない。1は先が細くなり釘先の可能性がある。

(1) 石器 (第67図、図版66-1)

石包丁 (1) 小豆色を呈す筑豊地方立岩産の輝緑凝灰岩製である。横長い形状を成し、紐穴の芯々間は約2cmと狭い。弥生後期通有の形状を呈す。紐穴は両面から穿孔される。

6SD063

(1) 土器 (第58図、図版61-1)

弥生土器

甕型土器 (1) 「く」字口縁に突レンズ状の底部を持つ。

その他の遺構の出土遺物

6SX004

(1) 金属製品 (第63図)

刀子 (1) 欠損した小片であるが、一辺が薄く刃器の刃部と考えられる。本来の幅はもっと広いもので小型品でない。

鉄釘 (2~4) 両者とも棒状を呈すが、欠損して全容が分からない。4は先端が尖る。

(2) ガラス製品 (第68図、図版66-2)

玉類 (1) 直径が約2cmに復元されるガラス玉で5mmの紐穴が復元できる。割れ口から本来は透明感のな

い緑色であったらしいが、表面は風化して白色化している。

6SX041茶褐土

(2) 石器 (第68図、図版66-2)

石包丁 (1) 小豆色を呈す立岩産の輝緑凝灰岩製である。多少反りを持つ背部を有す。紐穴の芯々間は2.2cmと狭い。弥生後期通有の形状を呈す。紐穴は両面から穿孔される。刃部は鈍い稜線を成す。

6SX046

(1) 土器 (第58図、図版61-2)

弥生土器

甕型土器 (1~11) 「く」字口縁を持つ。4の胴部には横方向のタタキが施される。8~9の底部は中央がやや肥厚する平底を呈し、8と11には底部外面にハケが及ぶ。11は壺の可能性もある。

鉢型土器 (12) 「く」字口縁と球形の胴部を持つタイプの鉢。胴部下半はハケの上からナデが施される。

6SX049

(1) 土器 (第58図)

弥生土器

壺型土器 (1) 底部は中央がやや肥厚する平底を呈す。ハケの後、外面下位はナデで仕上げられる。

6SX069

(1) 土器 (第58図、図版61-1)

弥生土器

壺型土器 (1) 直立する短頸を持つ壺で、底部は中央がやや肥厚する平底を呈す。口縁以下の胴部は外面は縦方向、内面は横方向のミガキが施される。内面は下地にケズリが存在する。焼成後に胴下半部が穿孔される。

6SX077

(1) 土器 (第58図、図版61-1)

弥生土器

高坏型土器 (1) しっかり直線的な筒状部を持ち、裾部との境に4つの円形の穿孔を持つ。1タイプ長脚の高坏脚部である。

6SX091

(1) 金属製品 (第63図)

鉋 (1) 鉄製であり、先端に丸い反りがある彫刻刀のような形状を成し、横断面は弧状を呈す。基部には繊維質が巻き付いたように残存している。身幅は1cmと狭いが装着した繊維の痕跡もあり、鉋と考えられる。

各土層出土遺物

茶色土

(1) 石器 (第68図、図版66-2)

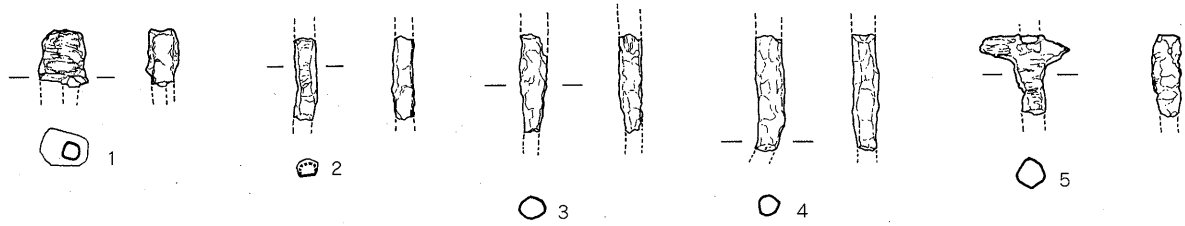
打具 (1) 棒状を呈し、先端があばた状の窪みを形成している。突いて使用されたものと考えられる。花崗岩を素材とする。

表土

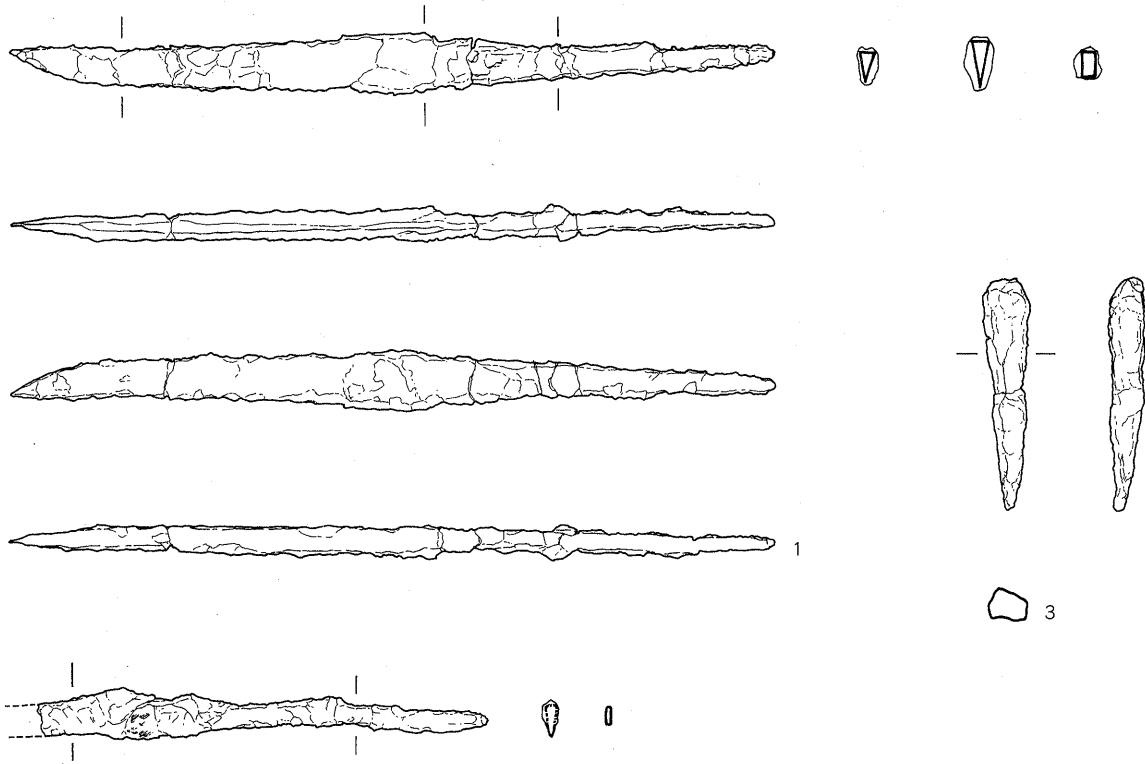
(1) 石器 (第68図、図版66-2)

原石 (1) シルト岩の原石で一部のエッジに集中して小剥離が施されている。

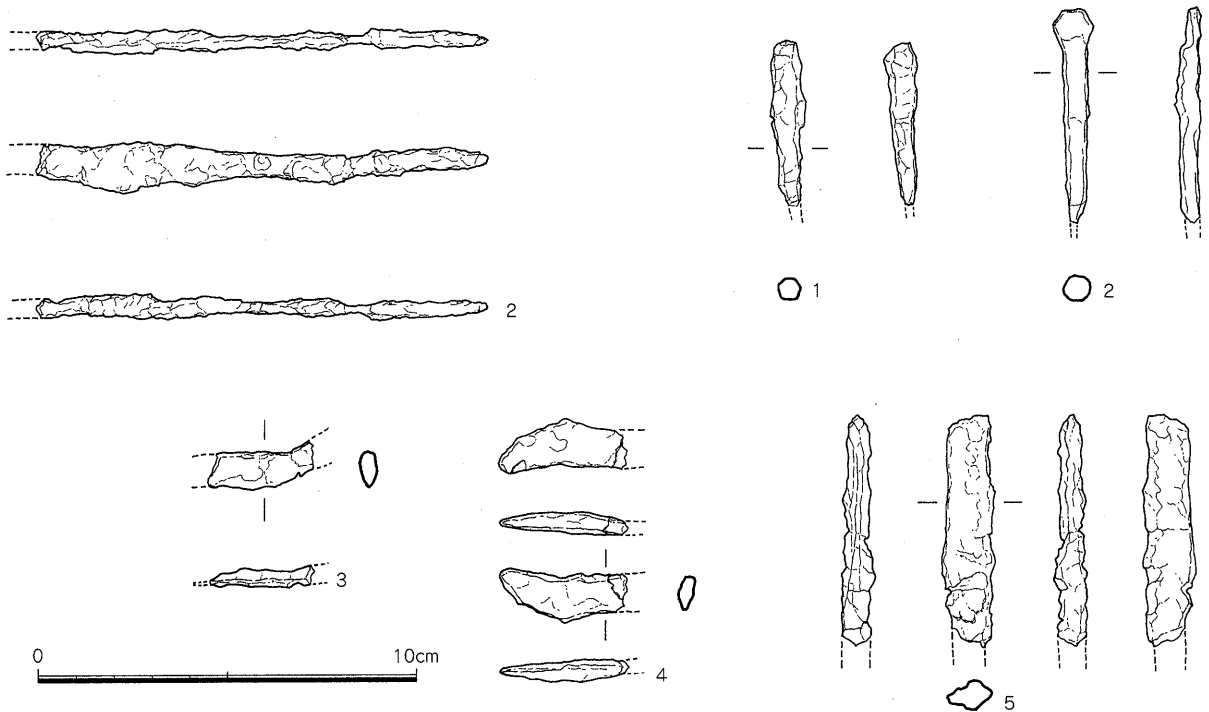
6SI030茶褐土



6SK008灰褐土



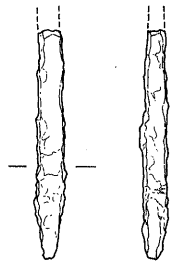
6SK008暗茶褐土



0 10cm

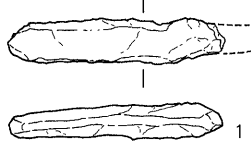
第59图 前田6次出土金属製品1実測図 (1/2)

6SK017茶褐土

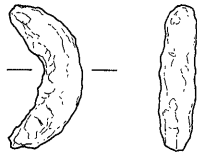


1

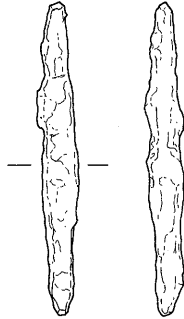
6SK025暗茶褐土



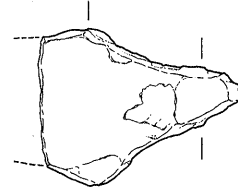
1



2



4

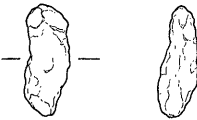


5

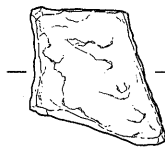
6SK025茶褐砂質土



1

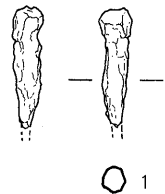


3



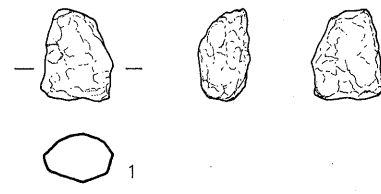
6

6SK032



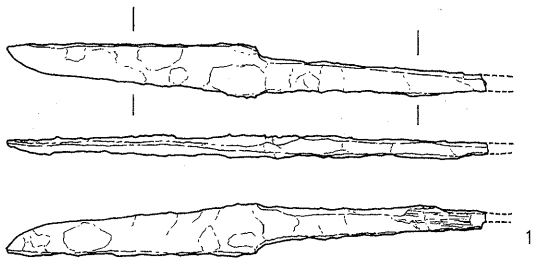
1

6SK033



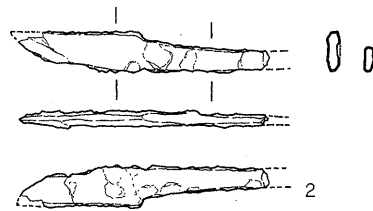
1

6ST001

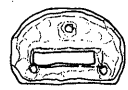
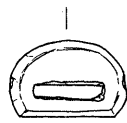


1

0



2

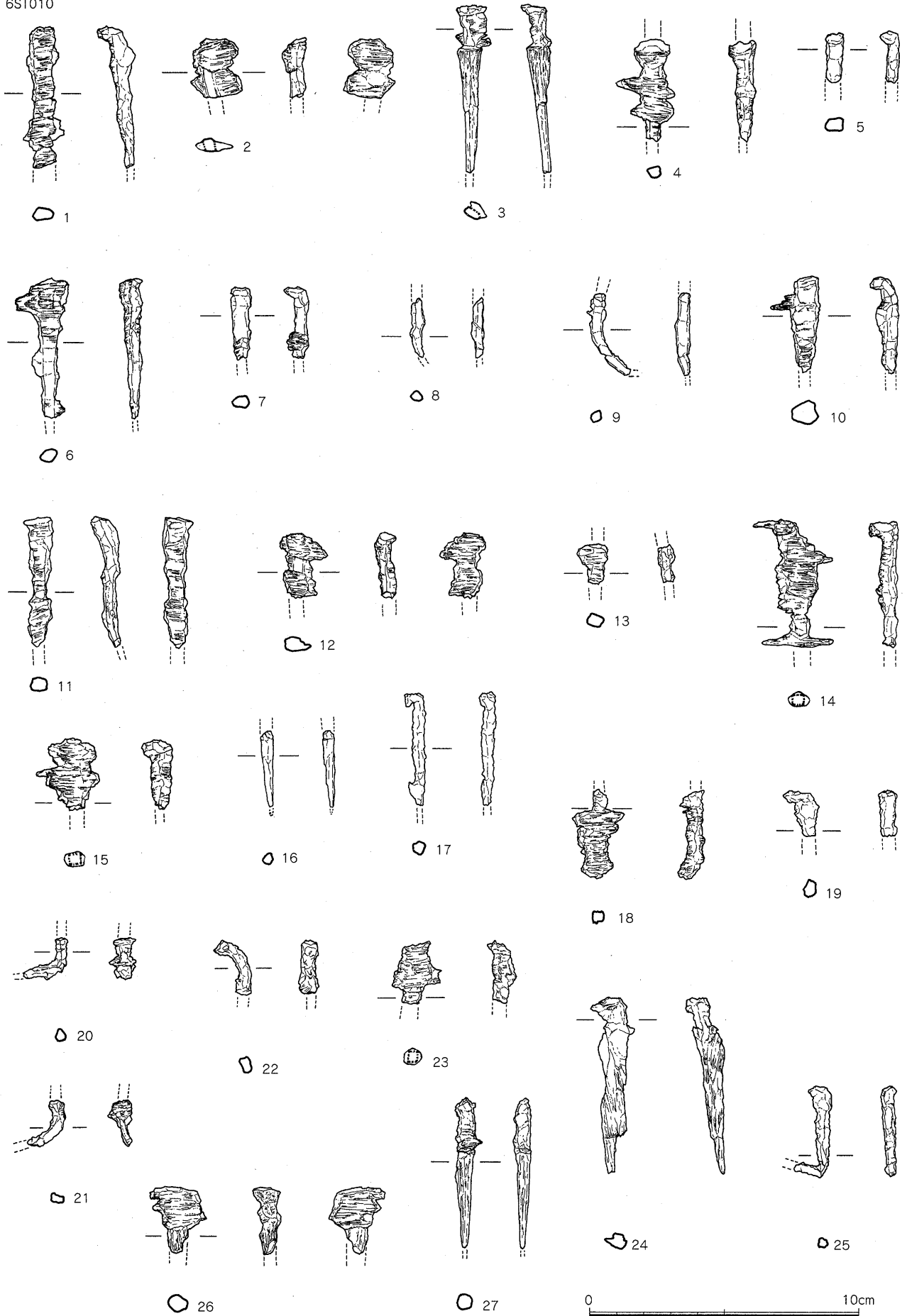


3



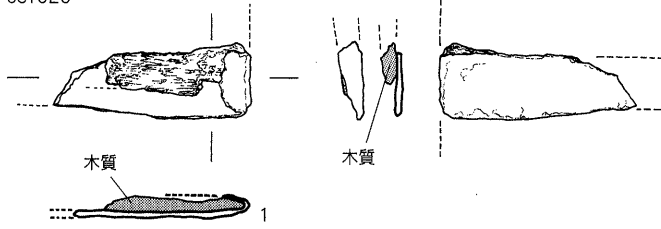
第60図 前田6次出土金属製品2実測図 (1/2)

6ST010

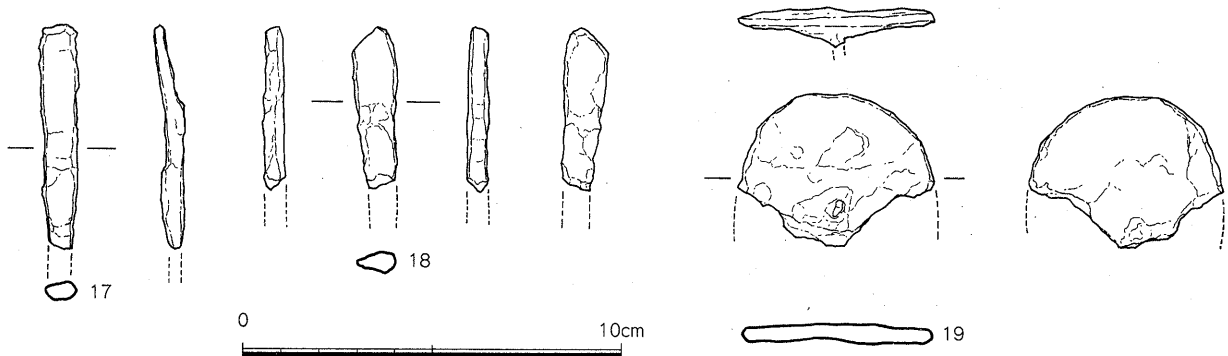
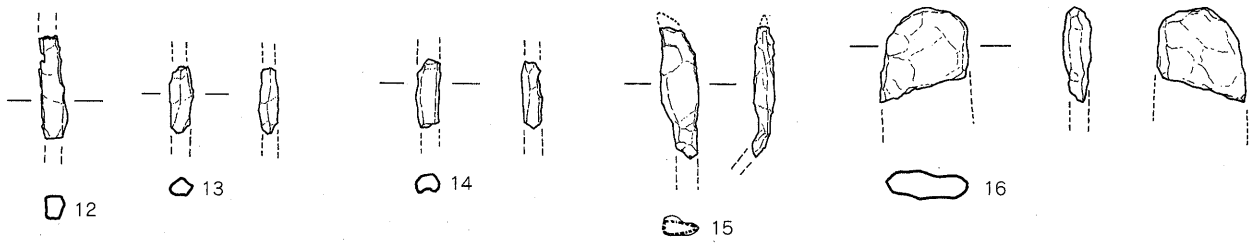
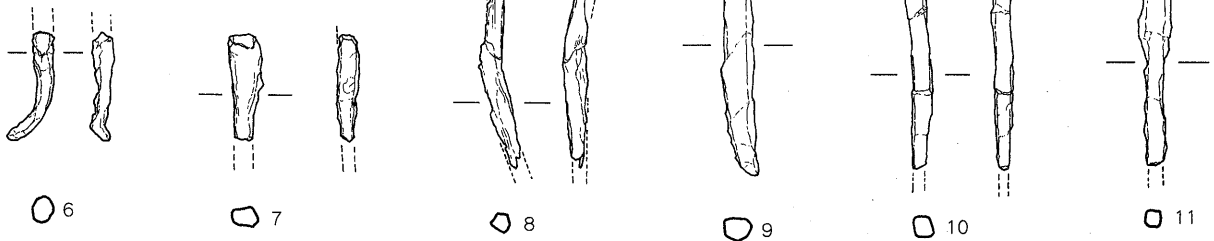
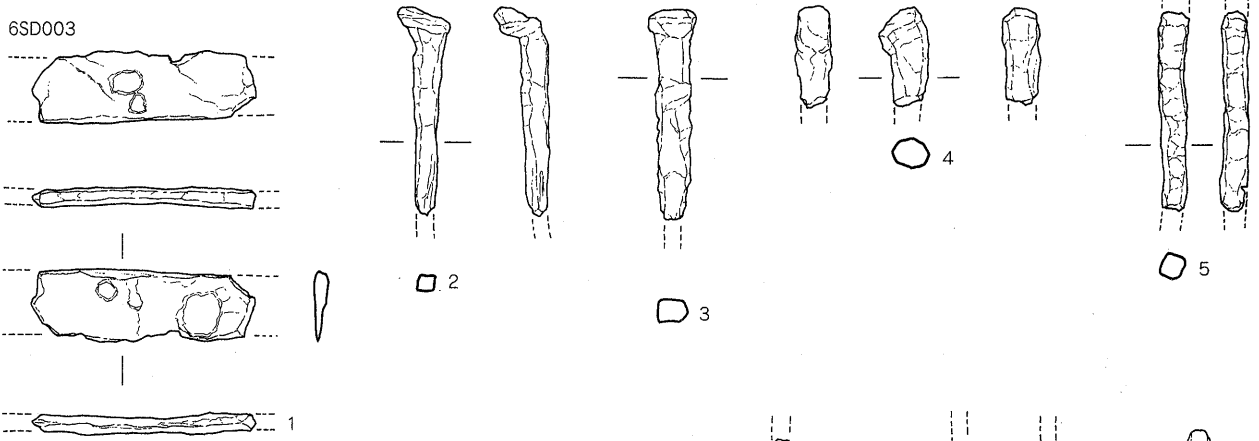


第61図 前田6次出土金属製品3実測図 (1/2)

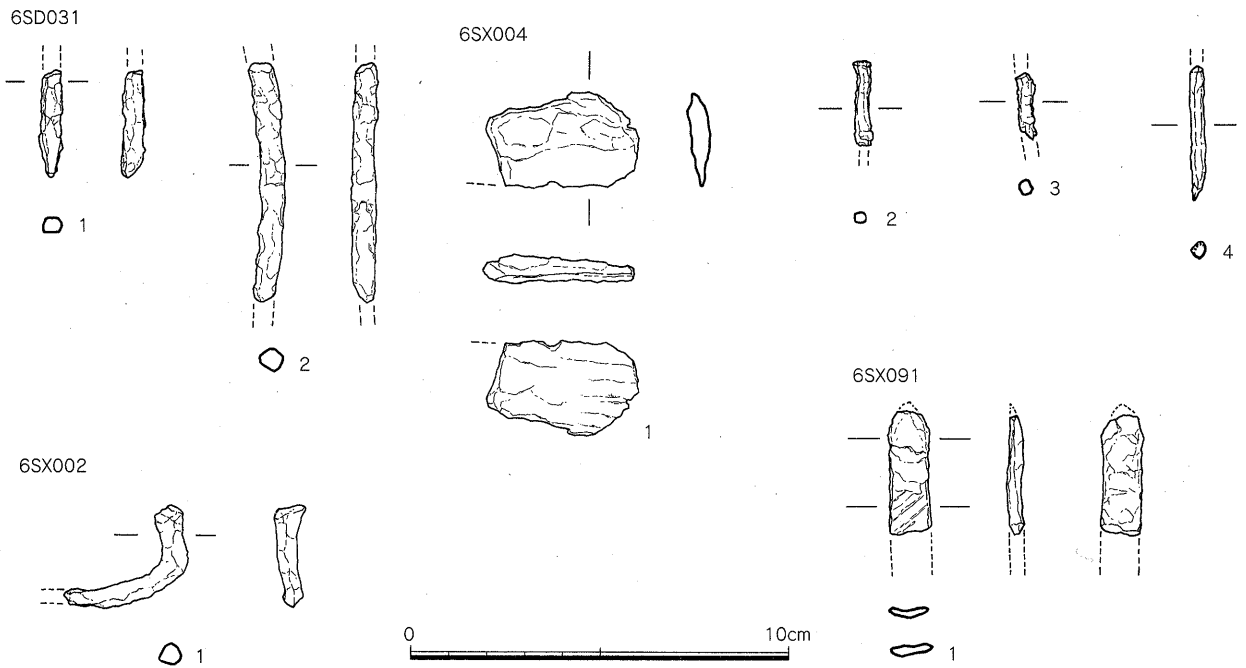
6ST020



6SD003



第62図 前田6次出土金属製品4実測図 (1/2)

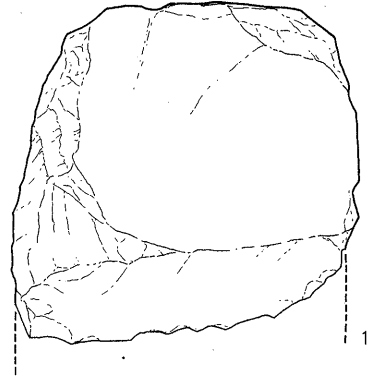
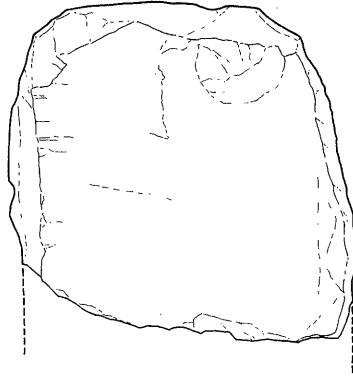
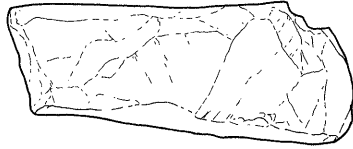


第63図 前田6次出土金属製品5実測図 (1/2)

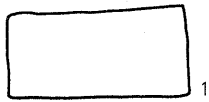
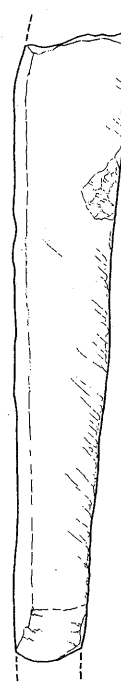
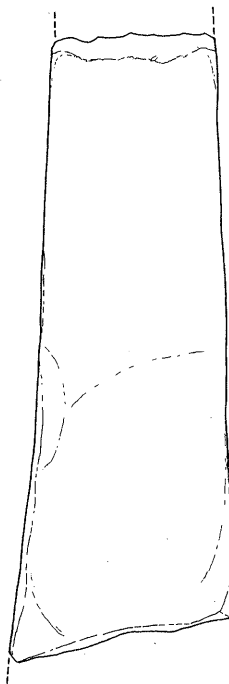
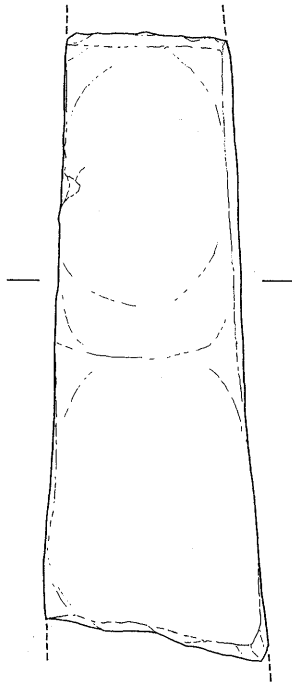
石鏃 (2, 3) 2は平基式の安山岩製で、先端は明確に尖らず、調整の剥離も連続せずおおざっぱな様相を呈す。制作技術が低下した弥生前期以降の所産と考えられる。3はデルタ型で基部に抉りが入る形状を呈す。黒曜石製で、大剥離面の様相から素材は定型の縦長剥片ではなく、背面に稜線のある不定型な剥片を選択的に利用して製作したものと考えられる。

6SI030土器溜まり

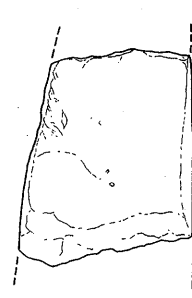
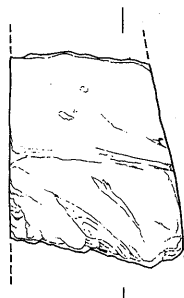
6SI040灰褐色土



6SI045

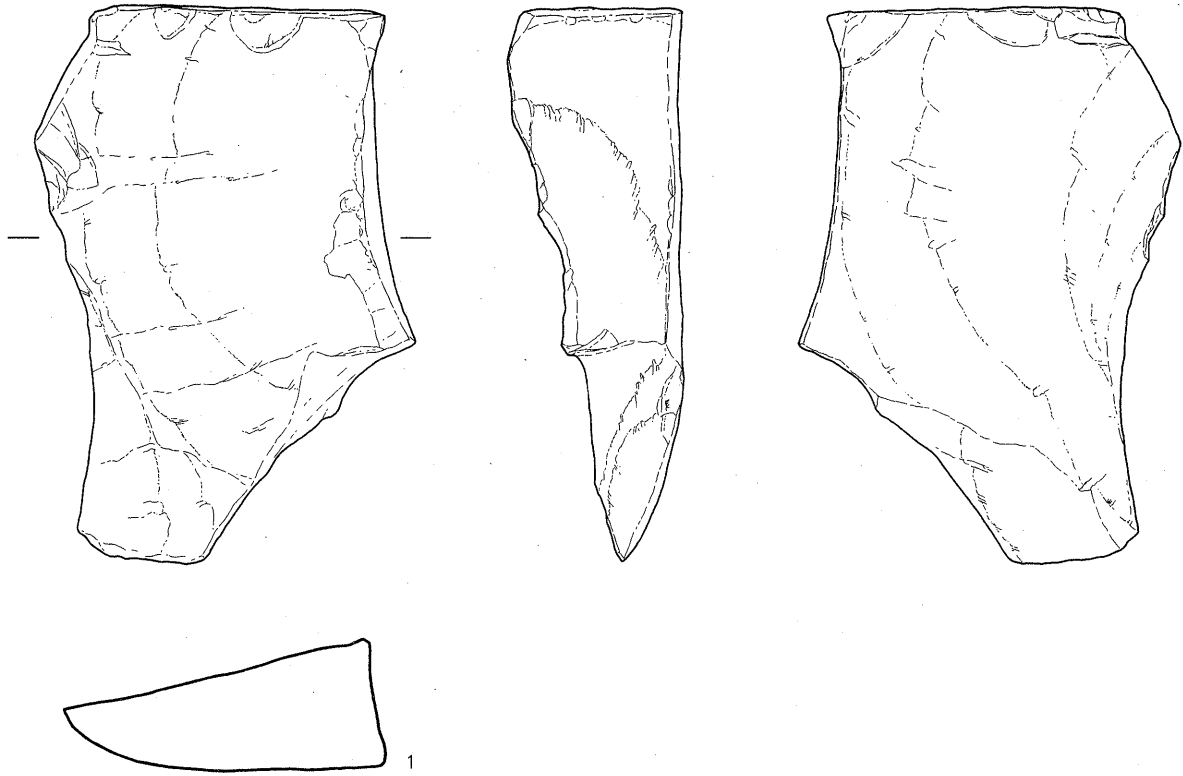


6SK008暗茶褐色土

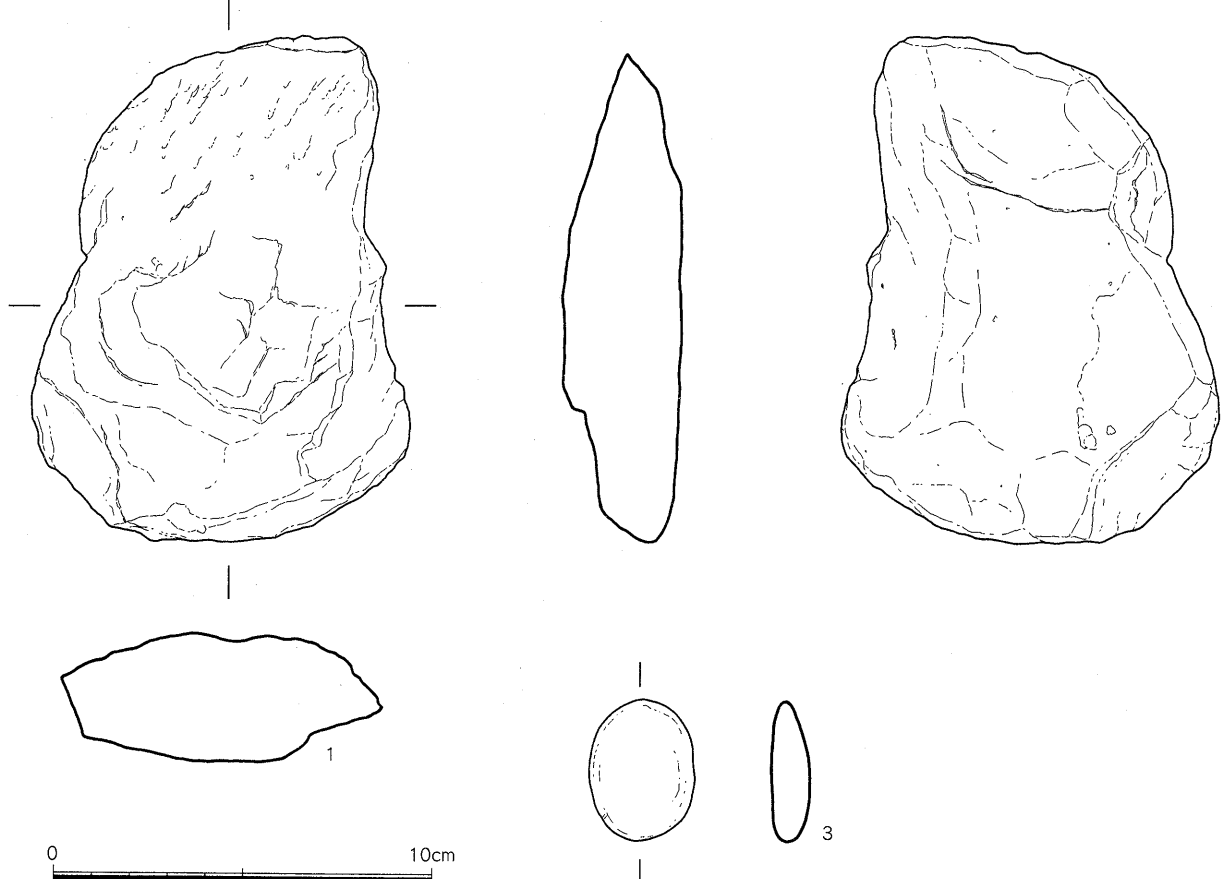


第64図 前田6次出土石製品1実測図 (1/2)

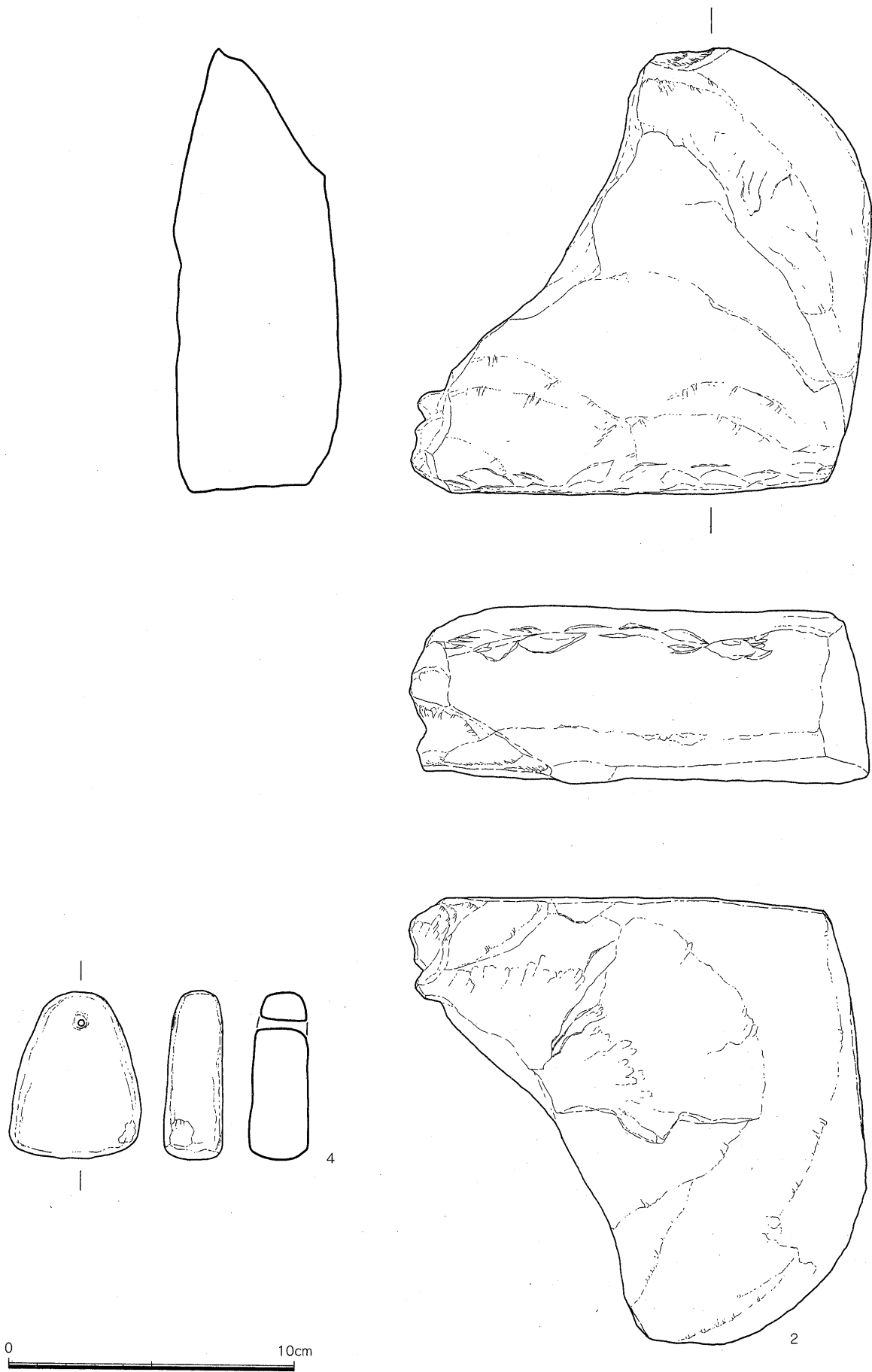
6SK017茶褐土



6SK025暗茶褐土

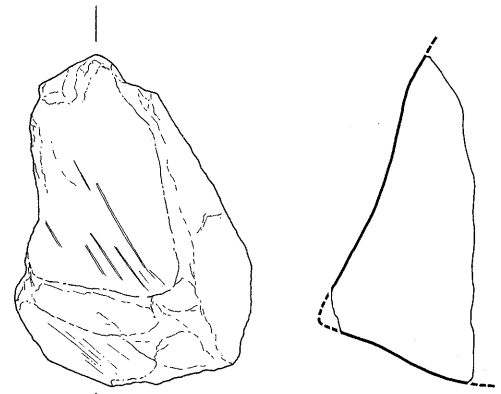
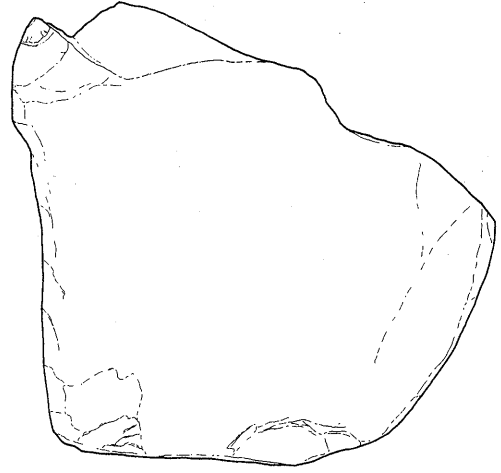
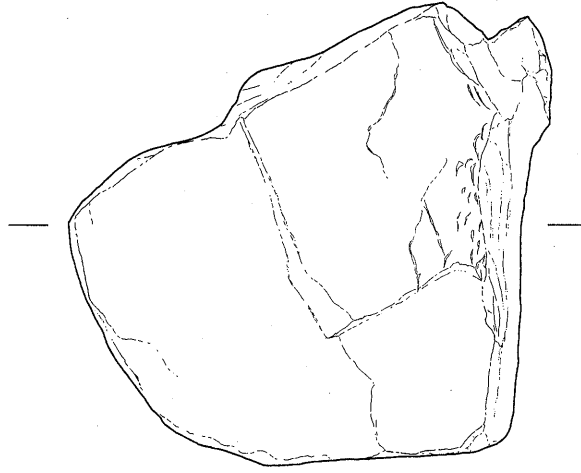
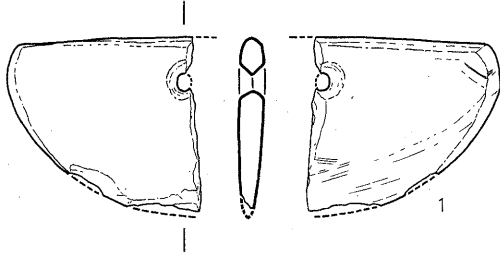


第65図 前田6次出土石製品2実測図 (1/2)

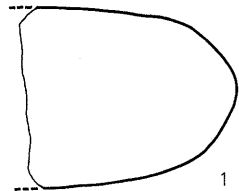
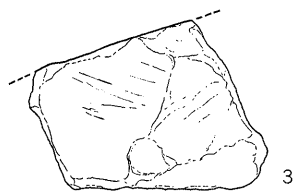
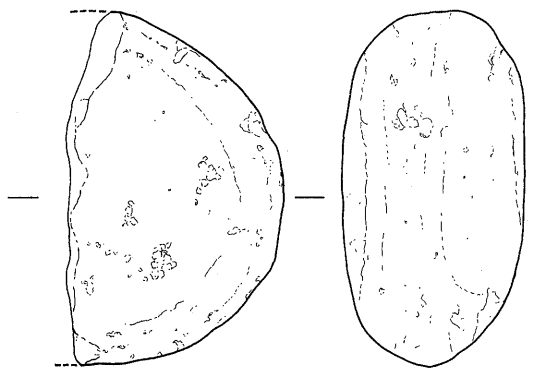


第66図 前田6次出土石製品3、土製品実測図 (1/2)

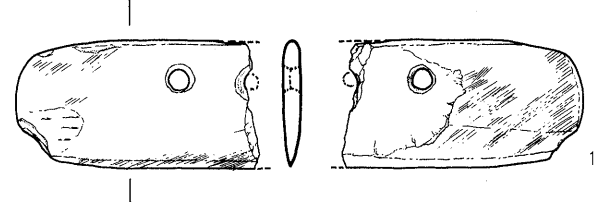
6SD003



6SD003上層

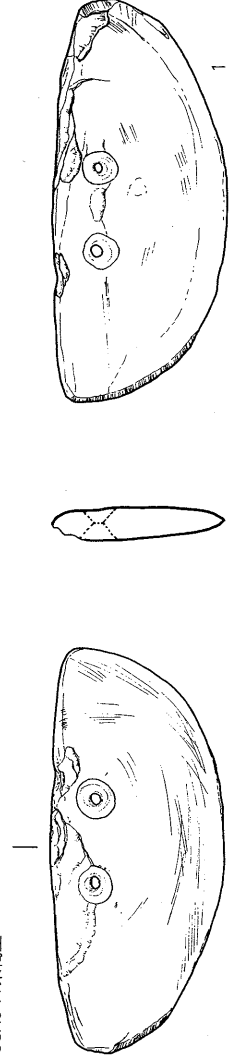


6SD031

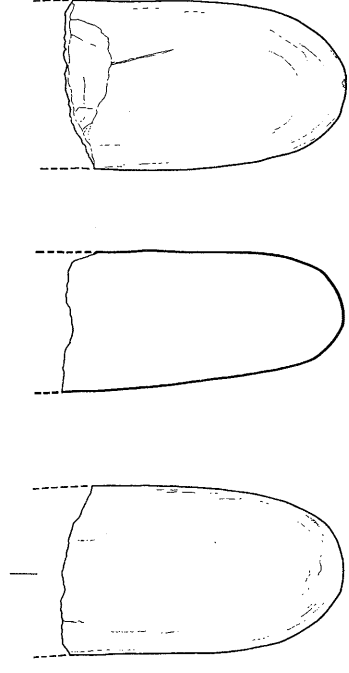


第67図 前田6次出土石製品4実測図 (1/2)

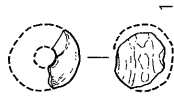
6SX041茶褐色土



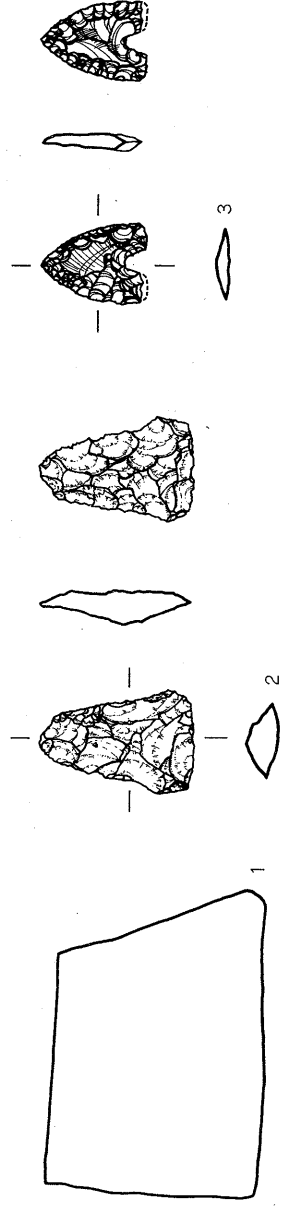
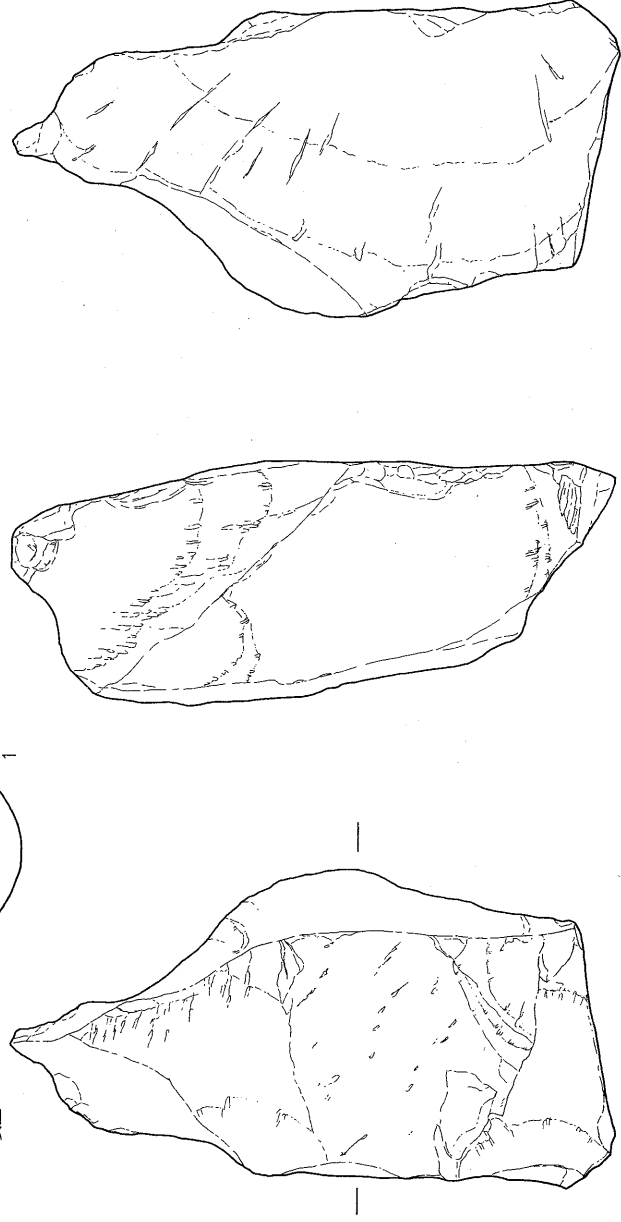
茶色土



6SX004

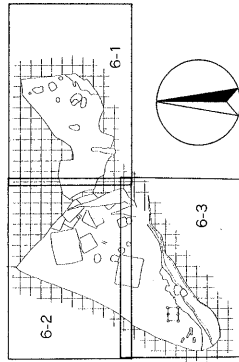
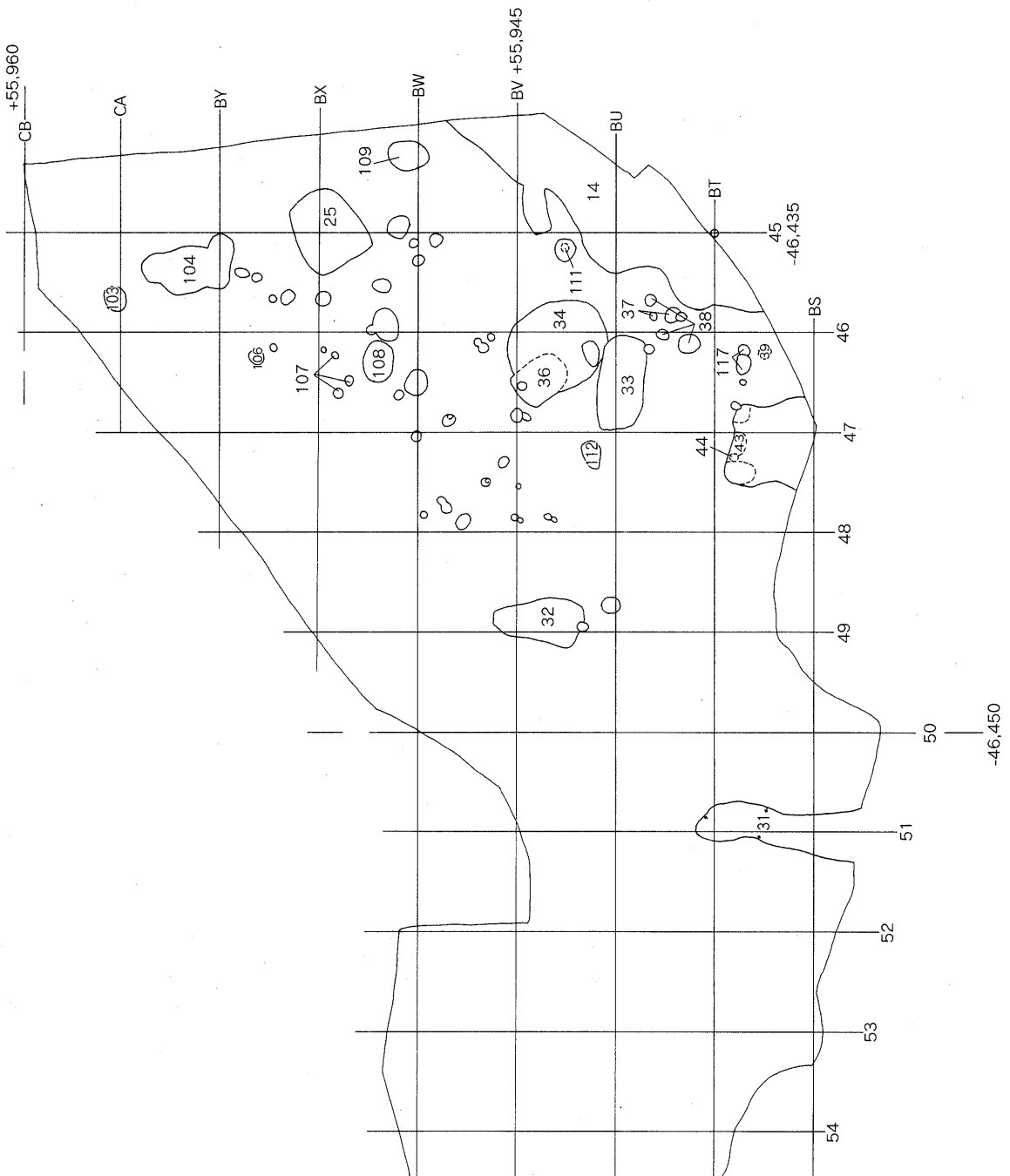


灰土



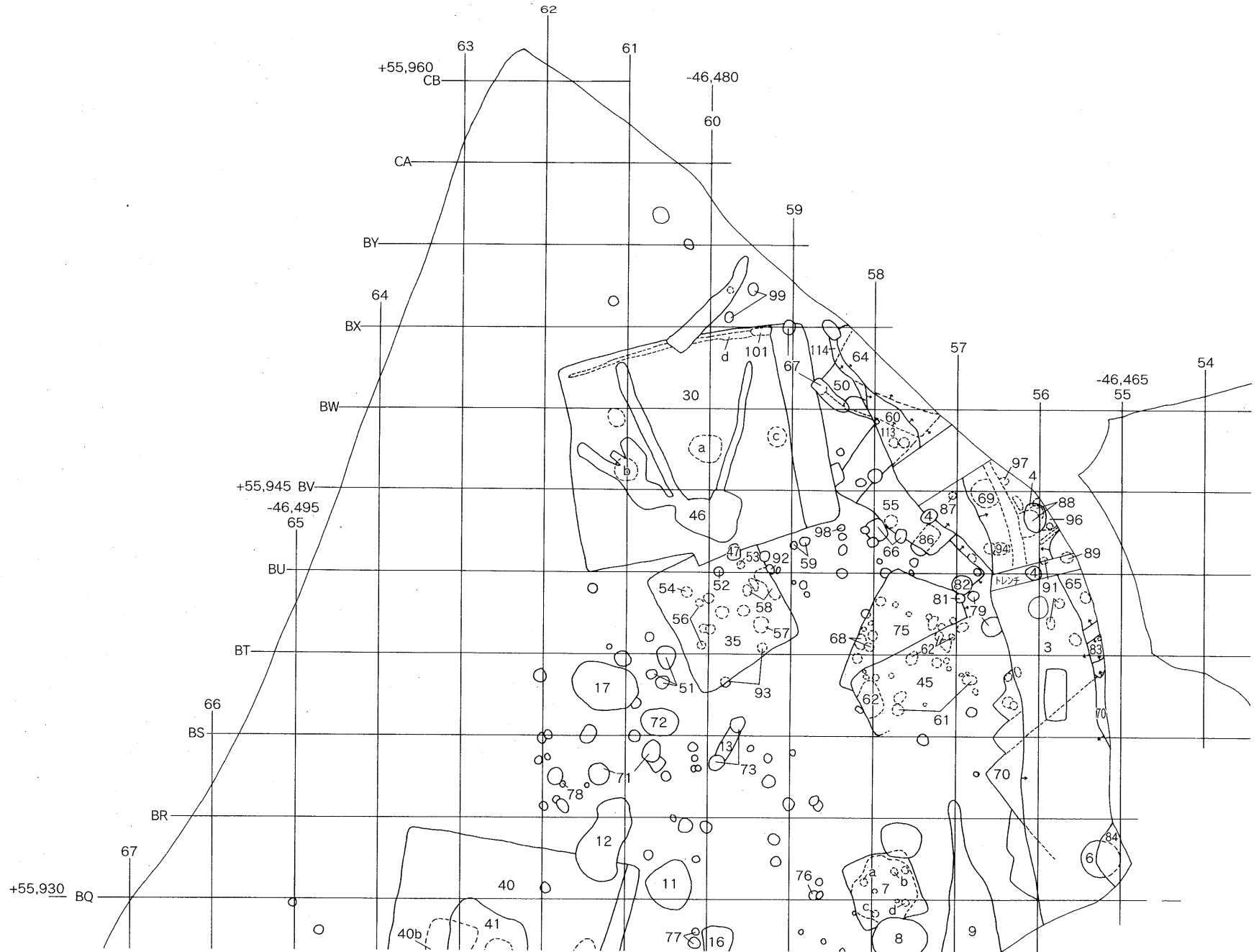
10cm

第68图 前田6次出土石製品5実測图 (1/2)



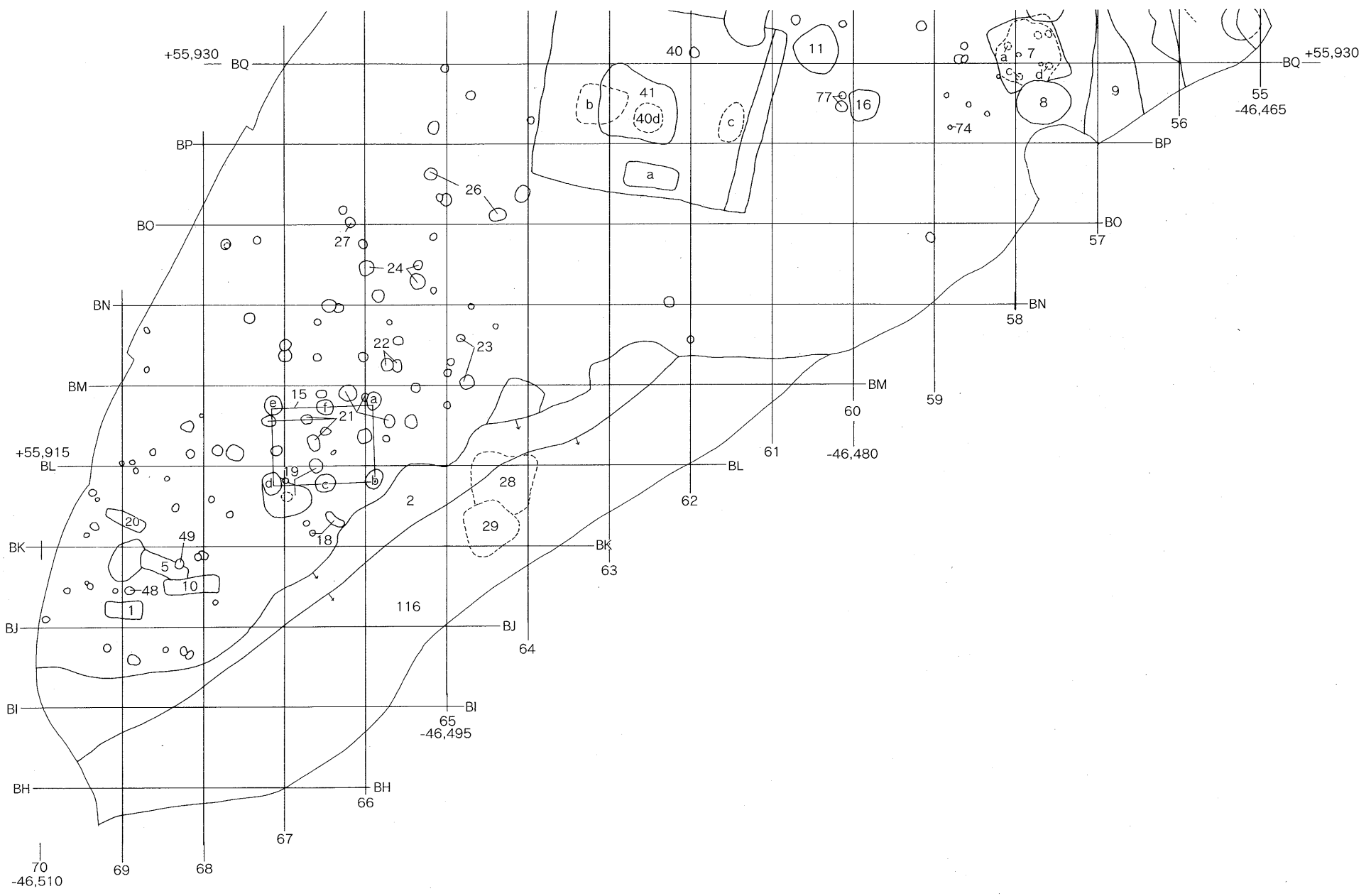
第69图 前田6次略图1 (1/200)

第70図 前田6次略図2 (1/200)



第71図 前田6次略図3 (1/200)

-120-



前田6次 遺構番号台帳 (1)

s-番号	遺構番号	種 別	地 区
1	6ST001	土壌墓 S-10と方向同一 10c頃?	BJ69
2	6SX002	落ち 旧河川肩部? 13c~	BJ65他
3	6SD003	溝 8c中~後	BC55
4		ピット群 3→4	BU56
5	6ST005	土壌墓 5→10	BJ68
6		カクラン	BQ55
7	6SI007	竪穴式住居	BP57
8	6SK008	土壌	BP57
9	6SD009	溝 8c後	BQ57
10	6ST010	木棺墓 5→10 10c後	BJ68
11	6SK011	土壌	BQ60
12	6SK012	土壌 8c中~	BQ61
13	6SK013	土壌	BR59
14	6SX014	落ち	BT45
15	6SB015	掘立柱建物 (a~f) 弥生後期	BL66
16	6SK016	土壌	BP60
17	6SK017	土壌 8c後	BS61
18		ピット群 弥生	BK66
19		ピット群	BK68
20	6ST020	土壌墓	BK69
21		ピット群 弥生	BL67
22		ピット 弥生	BM66
23		ピット群	BM65
24		ピット群	BN66
25	6SK025	土壌 8c中~後	BX45
26		ピット群	BO65
27		ピット	BO66
28	6SK028	土壌 28→2→116	BL64
29	6SK029	土壌 28→29→2→116	BK64
30	6SI030	住居	BV60他
31	6SD031	溝	BS50
32	6SK032	土壌	BU48
33	6SK033	土壌	BU47
34	6SK034	土壌	BU48
35	6SI035	住居 35→30	BT59
36	6SK036	土壌 36→34	BU47
37		ピット	BT45
38		ピット	BT45
39		ピット	BS46
40	6SI040	住居跡	BO62他
41		土壌 S-40掘り方利用か?	BP62
42		ピット 位置不明	BS46
43		ピット	BS47
44		ピット	BS47
45	6SI045	住居跡	BS57

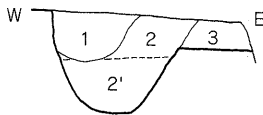
前田6次 遺構番号台帳 (2)

s-番号	遺構番号	種 別	地 区
46	6SX046	小溝及び窪み 30→46 黒色土	BV60
47		ピット 30→47	BU59
48		ピット	BJ68
49		ピット 5→49	BJ68
50	6SI050	住居跡 50→55→64	BN58
51		ピット群	BS60
52		ピット 35→52	BT59
53		ピット	BT59
54		ピット	BT60
55	6SI055	住居 50→55→64	BV58
56		ピット群	BT60
57		ピット	BT59
58		ピット群	BT59
59		ピット群	BU58
60	6SI060	住居 50→55→60→64	BU56
61		ピット	BS57
62		窪み及びピット	BS57
63		溝か? 63→3 位置不明	BV57
64		住居埋土の一部? 淡灰色土	BW57
65		住居埋土?	BT55
66		ピット群	BV57
67		ピット群	BX59
68		ピット群	BT58
69		ピット S-60主柱穴?	BV56
70	6SI070	住居残欠	BS55
71		ピット群	BR60
72		窪み	BS60
73		ピット	BR59
74		ピット	BP58
75	6SI075	住居	BT57
76		ピット	BR58
77		ピット群	BP60
78		ピット	BR61
79		ピット	BT56
81		ピット	BT56
82		ピット	BT56
83		土壌? 黒色土 弥生後期?	BT55
84		カクラン 近現代	BQ55
86	6SK086	土壌	BU57
87		ピット	BU57
88		ピット群	BU55
89		ピット	BV55
91		ピット群 91→3	BT55
92		ピット 8c	BU59
93		ピット群	BT59
94		ピット	BU56

前田6次 遺構番号台帳 (3)

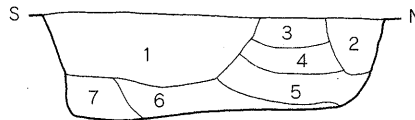
s-番号	遺構番号	種 別	地 区
96		ピット	BU56
97		ピット	BV56
98		ピット	BU58
99		ピット群	BX59
101		ピット 101? →30d	BW59
102		ピット 位置不明	BW58
103	6SK103	ピット 弥生後期	CA45
104	6SK104	土壌 8c	BY45
106		ピット	BX46
107		ピット群	BW46
108	6SK108	土壌	BW46
109	6SK109	土壌	BX45
111		ピット	BU45
112		ピット	BU47
113		窪み 50・55→113→64	BW57
114		窪み 50→114→113→64	BW58
116		窪み(表土) 2→116	BH68他
117		ピット群	BS46

6SD003(BC55)



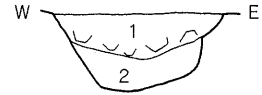
1. 上層 2'. 下層
2. 上層 3. S-65・70埋土

6ST005(BJ68)



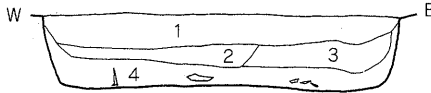
1. 暗褐土 4. 灰色土 7. 暗灰砂
2. 暗茶土 5. 黄灰粗砂
3. 明褐土 6. 灰色粗砂

6SK008(BQ57)



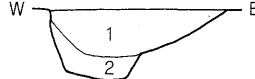
1. 暗茶褐土
2. 暗褐土

6ST010(BJ68)



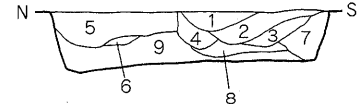
1. 茶褐土 3. 灰色粗砂
2. 暗灰土 4. 灰色砂

6SK017(BS61)



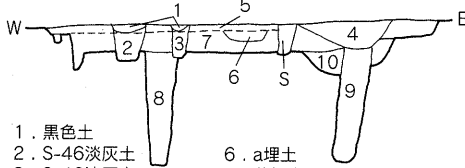
1. 茶褐土
2. 茶粘

6ST020(BK69)



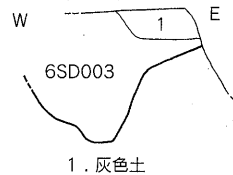
1. 茶褐土1 5. 茶褐土2
2. 暗茶土 6. 黄粗砂
3. 黄灰土 7. 茶粗砂
4. 黄灰土 8. 黄灰砂状上
9. 灰粗砂

6SI030-6SX046(BV59)



1. 黒色土 6. a埋土
2. S-46淡灰土 7. 茶褐土
3. S-46淡灰土 8. b埋土
4. S-30土器溜まり 9. c埋土
5. S-30新プラン

S-84(BQ55)



1. 灰色土

第72図 前田6次個別遺構略図

前田6次調査遺物一覧表2

前田遺跡第6次調査遺物一覧表5

S-74	石製品 ob-F	S-87	須恵器 埴
S-77	弥生土器 高坪埴、横口1	S-88	弥生土器 須×罎
S-78	弥生土器 罎×罎	S-89	弥生後期 罎口2、罎口C3
S-79	須恵器 埴	S-101	弥生土器 罎口2
S-81	須恵器 罎	S-102	石製品 ob-F
S-82	弥生土器 埴片	S-103	弥生後期 埴
S-83	弥生後期 罎C2	S-104	須恵器 埴c3
S-84	須恵器 埴、罎1、罎、罎	S-107	須恵器 埴
S-85	白磁 罎口(目形)	S-108	須恵器 埴c、罎3
S-86	瓦 須(種目不明)	S-109	弥生土器 埴片
S-87	弥生土器 埴片	S-111	須恵器 埴c、罎
S-88	弥生後期 大罎	S-112	弥生土器 罎
S-89	石製品 ob-F、and-F	S-145上	弥生後期 罎口A1a
S-91	須恵器 罎2、罎	S-181	石製品 ob-F
S-92	弥生後期 罎口1、支脚	S-190	弥生前期 罎
S-93	弥生土器 埴片	S-191	石製品 ob-F、and-CORE
S-94	弥生土器 埴片	S-191	須恵器 埴、小罎1
S-95	弥生土器 埴片		土師器 罎

前田遺跡第6次調査遺物一覧表6

弥生土器	埴c3、罎1、罎c、罎	赤色土	
土師器	罎	土師器	罎
白磁	罎口；目形	肥前須恵器	罎；須恵器、罎×罎
弥生後期	罎	弥生後期	罎口、罎c2、罎c、高坪
石製品	ob-AP、ob-F、and-AP、須石(罎口)	石製品	須石(花崗岩)
		土製品	土人形

前田6次遺物観察表1

遺 構	No.	器 種	図版番号	写真番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備 考 (+は欠損、*は復原値)
6S1030土器溜まり (s-30土器溜め)	1	弥生 壺	046	52-1	018	17.8*	43	8.5	
〃 (s-30土器溜め)	2	弥生 壺	046		026	18.2*	7.9+		
〃 (s-30土器溜め)	3	弥生 壺	046		025	-	7.6+		
〃 (s-30土器溜め)	4	弥生 壺	046	52-1	046	13.4*	24.8+		
〃 (s-30土器溜め)	5	弥生 壺底2	046	52-1	003		27.8+	8.4	
〃 (s-30土器溜め)	6	弥生 長頸壺	046		027		9.5+		
〃 (s-30土器溜め)	7	弥生 壺底	046		006		5.4+	4.1	
〃 (s-30土器溜め)	8	弥生 壺底	046		036		2.4+	6.4	
〃 (s-30土器溜め)	9	弥生 壺底	046		037		3.3+	7.7*	
〃 (s-30土器溜め)	10	弥生 壺底	046		039		4.8+	7.3	
〃 (s-30土器溜め)	11	弥生 壺底	046		038		5.1+	9.7*	
〃 (s-30土器溜め)	12	弥生 壺底	046		030		5.4+	-	
〃 (s-30土器溜め)	13	弥生 甕	047	52-2	016	37.4*	52.4	9.3	
〃 (s-30土器溜め)	14	弥生 甕	048	52-2	014	33.2*	51.8	9.3	
〃 (s-30土器溜め)	15	弥生 甕	048	54-1	033	36.8*	16.8+		
〃 (s-30土器溜め)	16	弥生 甕	049	53-1	002	44.9	43.0		
〃 (s-30土器溜め)	17	弥生 甕	047	53-2	007	25.9*	37.5	8.2	
〃 (s-30土器溜め)	18	弥生 甕	047	53-2	017	18.2*	26.1	7.0*	
〃 (s-30土器溜め)	19	弥生 甕	047	53-2	004	18.0*	21.7	8.0	
〃 (s-30土器溜め)	20	弥生 甕	047	54-1	047	26.15	18.75+		
〃 (s-30土器溜め)	21	弥生 甕	047	54-1	019	20.0*	13.9+		
〃 (s-30土器溜め)	22	弥生 甕	048		023	12.9*	8.0+		
〃 (s-30土器溜め)	23	弥生 甕	048		031	-	13.4+		
〃 (s-30土器溜め)	24	弥生 甕	048		024	-	7.4+		
〃 (s-30土器溜め)	25	弥生 甕底	048		041		7.1+	10.0*	
〃 (s-30土器溜め)	26	弥生 甕底	048		040		4.4+	9.0	
〃 (s-30土器溜め)	27	弥生 甕底	048		042		6.1+	7.8	
〃 (s-30土器溜め)	28	弥生 甕底	048		029		5.7+	6.2*	
〃 (s-30土器溜め)	29	弥生 脚付き甕	048		028		5.0+		
〃 (s-30土器溜め)	30	弥生 鉢	048		034	15.8*	8.6+		
〃 (s-30土器溜め)	31	弥生 鉢	048	52-1	022	24.6*	9.3+		
〃 (s-30土器溜め)	32	弥生 鉢	048		005	16.4	8.3+		
〃 (s-30土器溜め)	33	弥生 鉢	049	52-1	015	33.8	27.9	8.2	
〃 (s-30土器溜め)	34	弥生 鉢	049	55-2	035	5.4*	6.8	3.5	
〃 (s-30土器溜め)	35	弥生 鉢	049	52-1	012	10.8	12.6	7.0	
〃 (s-30土器溜め)	36	弥生 手づくね鉢	049	52-1	013	11.2	6.3	3.0*	
〃 (s-30土器溜め)	37	弥生 高坏脚	049	54-2	032		8.1+	12.2	
〃 (s-30土器溜め)	38	弥生 器台2	049	54-2	020	12.7	19.5	13.8	
〃 (s-30土器溜め)	39	弥生 器台2	049	54-2	009	12.7*	19.9	14.7*	
〃 (s-30土器溜め)	40	弥生 器台2	049	54-2	011	18.0*	22.8	20.8	
〃 (s-30土器溜め)	41	弥生 器台2	050	54-2	010	17.3*	23.5	20.2*	
〃 (s-30土器溜め)	42	弥生 器台2	050	54-2	021	10.7	12.4	11.7	
〃 (s-30土器溜め)	43	弥生 器台	050		045		12.0+		
〃 (s-30土器溜め)	44	弥生 器台	050		043		11.2+	17.8*	
〃 (s-30土器溜め)	45	弥生 器台	050		044	8.2*	7.5+		
6S1030黒色土 (s-30黒色土)	1	弥生 甕	050		006	41.5*	19.0+		
〃 (s-30黒色土)	2	弥生 甕	050		007	27.0*	7.8+		
〃 (s-30黒色土)	3	弥生 甕	050		005		9.9+		
〃 (s-30黒色土)	4	弥生 甕×壺底	050		001		4.7+	9.0*	
〃 (s-30黒色土)	5	弥生 鉢	050		003	-	4.4+		
〃 (s-30黒色土)	6	弥生 手づくね鉢	050		004	-	3.45+		
〃 (s-30黒色土)	7	弥生 手づくね鉢	050		002		3.4+	3.3	
6S1030灰色土 (s-30灰色土)	1	弥生 壺	050		006		3.5+	5.4*	
〃 (s-30灰色土)	2	弥生 壺	050		005		3.0+	4.5*	
〃 (s-30灰色土)	3	弥生 壺×鉢	050		003		3.45+	4.1*	
〃 (s-30灰色土)	4	弥生 甕	050		002	13.6*	4.25+		
〃 (s-30灰色土)	5	弥生 甕	050		004	-	5.2+		
〃 (s-30灰色土)	6	弥生 甕	050		001		4.7+	8.6	

前田6次遺物観察表2

遺構	No.	器種	図版番号	写真番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
6SI030a (s-30a)	1	弥生 壺	050		001		7.0+	6.6	
〃 (s-30a)	2	弥生 壺	050		002		5.0+	7.8*	
〃 (s-30a)	3	弥生 壺	050		005		4.7+	7.2*	
〃 (s-30a)	4	弥生 高坏脚	050		003		11.5+		
〃 (s-30a)	5	弥生 ミチアハ坏	050		004	7.15	2.7	-	
6SI030c (s-30c)	1	弥生 甕	051		002	-	5.1+		
〃 (s-30c)	2	弥生 甕×壺底2	051		003		7.0+	-	
〃 (s-30c)	3	弥生 高坏脚	051		001		10.7+		
6SI030c茶褐土 (s-30c茶褐土)	1	弥生 壺	051	55-1	001	28.5+	8.6		
6SI030茶褐土 (s-30茶褐土)	1	弥生 壺口	051		013	-	5.4+		
〃 (s-30茶褐土)	2	弥生 壺	051		027	-	4.1+		
〃 (s-30茶褐土)	3	弥生 壺口	051		014	-	4.2+		
〃 (s-30茶褐土)	4	弥生 壺口	051		015	-	2.4+		
〃 (s-30茶褐土)	5	弥生 壺	051		026		7.5+		
〃 (s-30茶褐土)	6	弥生 壺	051		040		7.9+	7.5	
〃 (s-30茶褐土)	7	弥生 壺底	051		016		2.9+	6.2*	
〃 (s-30茶褐土)	8	弥生 壺底	051		035		3.2+	5.2*	
〃 (s-30茶褐土)	9	弥生 甕	051		023	27.3*	18.2+		
〃 (s-30茶褐土)	10	弥生 甕	051	55-1	006	22.0*	7.0+		
〃 (s-30茶褐土)	11	弥生 甕	051		037	28.8*	8.7+		
〃 (s-30茶褐土)	12	弥生 甕	051		010	12.8*	8.6+		
〃 (s-30茶褐土)	13	弥生 甕	051		022	-	14.7+		
〃 (s-30茶褐土)	14	弥生 甕底	051		008		22.6+	9.5*	
〃 (s-30茶褐土)	15	弥生 壺底×甕底	052		033		4.1+	7.4*	
〃 (s-30茶褐土)	16	弥生 甕底	052		034		5.2+	7.2*	
〃 (s-30茶褐土)	17	弥生 甕底×壺底	052		030		4.2+	8.1*	
〃 (s-30茶褐土)	18	弥生 甕底1	052		021		2.7+	8.3*	
〃 (s-30茶褐土)	19	弥生 甕底1	052		020		3.3+	9.6*	
〃 (s-30茶褐土)	20	弥生 甕底	052		028		3.7+	10.0*	
〃 (s-30茶褐土)	21	弥生 壺底	052		032		2.7+	8.7*	
〃 (s-30茶褐土)	22	弥生 甕底×壺底	052		031		2.1+	8.3*	
〃 (s-30茶褐土)	23	弥生 甕底	052		018		2.3+	7.2	
〃 (s-30茶褐土)	24	弥生 甕底	052		017		3.0+	6.2	
〃 (s-30茶褐土)	25	弥生 甕底	052		019		4.0+	7.6	
〃 (s-30茶褐土)	26	弥生 甕底×壺底	052		029		4.9+	10.0	
〃 (s-30茶褐土)	27	弥生 甕底	052		036		2.2+	6.0*	
〃 (s-30茶褐土)	28	弥生 甕底	052		039		2.8+	2.6*	
〃 (s-30茶褐土)	29	弥生 鉢	052		009	15.8*	6.6+		
〃 (s-30茶褐土)	30	弥生 器台	052		011	14.8*	7.9+		
〃 (s-30茶褐土)	31	弥生 器台	052		025	13.4*	3.1+		
〃 (s-30茶褐土)	32	弥生 器台	052		024		5.3+	17.4*	
〃 (s-30茶褐土)	33	弥生 器台	052		012		12.1+	17.6*	
〃 (s-30茶褐土)	34	弥生 牛角坏型土器	052		038		5.4+		
6SI030 (s-30)	1	弥生 壺	052	55-2	004	9.4	11.8	6.7	
〃 (s-30)	2	弥生 壺×鉢	052		005		4.75+	4.0*	
〃 (s-30)	3	弥生 椀	052	55-2	002	12.7	5.6	5.7	
〃 (s-30)	4	弥生 高坏	052	55-2	003		5.3+		瀬戸内系
〃 (s-30)	5	弥生 器台	052	55-2	001	10.4	12.9	13.0	
6SI035灰色土 (s-35灰色土)	1	弥生 甕	052		003	12.7*	18.1+		
〃 (s-35灰色土)	2	弥生 鉢×器台	052		002	-	3.7+		
〃 (s-35灰色土)	3	弥生 器台	052		001		4.0+	-	
6SI040灰褐土 (s-40灰褐土)	1	弥生 壺底	053		003		13.2+	11.8*	
〃 (s-40灰褐土)	2	弥生 壺	053		016		11.55+	7.3	
〃 (s-40灰褐土)	3	弥生 壺	053		014		2.7+	-	
〃 (s-40灰褐土)	4	弥生 壺	053		009		5.2+	-	
〃 (s-40灰褐土)	5	弥生 壺	053		017		3.5+	5.4*	
〃 (s-40灰褐土)	6	弥生 甕	053		010	-	5.25+		
〃 (s-40灰褐土)	7	弥生 甕	053		015	-	6.7+		

前田6次遺物観察表3

遺構	No.	器種	図版番号	写真番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
6SI040灰褐色土 (s-40灰褐色土)	8	弥生 壺×甕	053		008		9.15+		
〃 (s-40灰褐色土)	9	弥生 壺×甕	053		006		6.55+	8.3	
〃 (s-40灰褐色土)	10	弥生 壺×甕	053		007		5.1+	7.6*	
〃 (s-40灰褐色土)	11	弥生 鉢	053		019	-	9.9+		
〃 (s-40灰褐色土)	12	弥生 鉢	053		012	-	6.4+		
〃 (s-40灰褐色土)	13	弥生 鉢	053	56-1	005	14.6*	9.8	4.8	
〃 (s-40灰褐色土)	14	弥生 鉢	053	56-1	004	17.3*	8.0	6.8*	
〃 (s-40灰褐色土)	15	弥生 鉢	053		018	7.4*	7.0	4.1*	
〃 (s-40灰褐色土)	16	弥生 鉢	053		011		5.8+		
〃 (s-40灰褐色土)	17	弥生 鉢	053	56-1	002	47.0*	38.7+		
6SI040b (s-40b)	1	弥生 甕	054		001	-	11.8		
6SI040c (s-40c)	1	弥生 壺	054		001	-	3.3+		
6SI040d (s-40d)	1	弥生 甕	054		001	-	3.4+		
6SI045 (s-45)	1	弥生 坏	054		002	-	1.8+		
6SI065 (s-65)	1	弥生 壺A	054	56-2	004	26.6*	15.5+		
〃 (s-65)	2	弥生 甕	054		001	24.9*	34.7	3.8	
〃 (s-65)	3	弥生 鉢	054		002	23.4*	9.25+		
〃 (s-65)	4	弥生 坏	054		003	16.6*	3.7+		
6SK008暗茶褐色土 (s-8暗茶褐色土)	1	須 蓋c3×4	054	57-1	017	19.0*	1.9		ヘラ切り後天井部に糸線、軟
〃 (s-8暗茶褐色土)	2	須 蓋	054	57-1	014	13.9*	1.8		ヘラ切り後天井部に軽いナデ
〃 (s-8暗茶褐色土)	3	須 蓋c3	054	57-1	015	13.0*	1.7		ヘラ切り後天井部に軽いナデ
〃 (s-8暗茶褐色土)	4	須 蓋c3	054	57-1	016	12.0	2.4		ヘラ切り後天井部に軽いナデ
〃 (s-8暗茶褐色土)	5	須 坏a	054	57-1	020	14.5*	4.3	9.6*	ヘラ切の後、外底カキ取、軟
〃 (s-8暗茶褐色土)	6	須 坏a	054	57-1	007	12.6*	3.4	8.8	ヘラ切り後底部にナデ
〃 (s-8暗茶褐色土)	7	須 坏a	054	57-1	008	13.2*	3.7	8.7	底部、体部の一部にミガキ
〃 (s-8暗茶褐色土)	8	須 坏c3	054	57-1	009	13.3*	4.0	8.3	細身の各高台。外寄り。
〃 (s-8暗茶褐色土)	9	須 坏c3	054	57-1	011	12.8	3.8	8.8	高台細身
〃 (s-8暗茶褐色土)	10	須 坏c3	054	57-1	010	13.9*	5.7	9.0*	底部ヘラ切り後、丁寧なナデ
〃 (s-8暗茶褐色土)	11	須 皿a	054	57-1	018	17.8*	2.6	14.0*	ヘラ切り後、押圧
〃 (s-8暗茶褐色土)	12	須 皿a	054	57-1	019	18.4	2.5	15.0	ヘラ切り後ナデ
〃 (s-8暗茶褐色土)	13	須 皿a	054	57-1	013	17.9*	2.1	13.2*	ヘラ切り後ナデ
〃 (s-8暗茶褐色土)	14	須 皿a	054	57-1	012	13.3*	2.2	9.8*	ヘラ切り後、軽いナデ
〃 (s-8暗茶褐色土)	15	土師 壺(脚部)	054		029		2.6+	15.7*	
〃 (s-8暗茶褐色土)	16	土師 坏d	055	57-2	023	14.0*	3.0	7.6	ヘラケズリ後ミガキa
〃 (s-8暗茶褐色土)	17	土師 坏d	055	57-2	026		2.5+	7.8*	ヘラケズリ後ミガキa
〃 (s-8暗茶褐色土)	18	土師 坏d	055	57-2	022	16.5*	3.5	8.0*	ヘラケズリ後ミガキa
〃 (s-8暗茶褐色土)	19	土師 坏d	055	57-2	021	13.5*	3.0	8.1*	ヘラケズリ後ミガキa
〃 (s-8暗茶褐色土)	20	土師 高坏	055	57-2	027	16.4	2.8+		ヘラケズリ後ミガキa
〃 (s-8暗茶褐色土)	21	土師 皿a	055	57-2	025	19.6*	1.9	15.9	ヘラケズリ後ミガキa
〃 (s-8暗茶褐色土)	22	土師 皿a	055	57-2	024	18.2*	2.0	19.6*	ヘラケズリ後ミガキa
〃 (s-8暗茶褐色土)	23	土師 甕a	055	57-2	033	31.6*	15.2+		
〃 (s-8暗茶褐色土)	24	土師 小甕a	055	57-2	030	18.1*	9.3+		
〃 (s-8暗茶褐色土)	25	土師 甕	055		028	27.6*	3.6+		
〃 (s-8暗茶褐色土)	26	土師 小甕a	055	57-2	031		3.7+		
〃 (s-8暗茶褐色土)	27	製塩 鉢I	055	57-2	034	11.7*	4.5+		内に布目痕跡
〃 (s-8暗茶褐色土)	28	製塩 鉢II	055		037		4.3+		内に布目痕跡
〃 (s-8暗茶褐色土)	29	製塩 鉢I	055	57-2	036		2.4+	0.9	内に布目痕跡
〃 (s-8暗茶褐色土)	30	製塩 鉢II	055	57-2	039		4.1+		内に布目痕跡
〃 (s-8暗茶褐色土)	31	製塩 鉢II	055	57-2	038		3.1+		内に布目痕跡
〃 (s-8暗茶褐色土)	32	製塩 鉢I	055	57-2	035		5.1+		内に布目痕跡
〃 (s-8暗茶褐色土)	33	製塩 ミニチュア器台	055	57-2	032	3.8	4.0	4.2	手ずくね
6SK025暗茶褐色土 (s-25暗茶褐色土)	1	土師 碗c	056		018		2.2+	9.0*	
〃 (s-25暗茶褐色土)	2	土師 碗c	056		025		4.0+	8.5*	ヘラケズリ後ミガキa
〃 (s-25暗茶褐色土)	3	土師 坏a	056		016	12.8	4.1	7.3	ヘラケズリ後ミガキa
〃 (s-25暗茶褐色土)	4	土師 坏c	056		017		3.0+	-	ヘラケズリ後ミガキa
〃 (s-25暗茶褐色土)	5	土師 坏c	056		019		1.4+	-	高台外寄り
〃 (s-25暗茶褐色土)	6	土師 坏a	056		020		1.7+	9.1*	ヘラ切り後ナデ
〃 (s-25暗茶褐色土)	7	土師 坏d	056		026		2.2+	6.2*	ヘラケズリ後ミガキa

前田6次遺物観察表4

遺構	No.	器種	図版番号	写真番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
6SK025暗茶褐色土 (s-25暗茶褐色土)	8	土師 甕	056		021	-	4.7+		内面ケズリ
〃 (s-25暗茶褐色土)	9	須 蓋	056		012	14.5*	1.2	-	
〃 (s-25暗茶褐色土)	10	須 坏a	056		022	12.1*	4.0	8.2*	外面ケズリ、光沢、肥後系
〃 (s-25暗茶褐色土)	11	須 坏c3	056		024	12.7*	4.6	7.8*	高台外寄り
〃 (s-25暗茶褐色土)	12	須 坏c3	056		009		3.9+	8.1*	
〃 (s-25暗茶褐色土)	13	須 坏c3	056		023		2.0+	9.8*	高台やや内寄り
〃 (s-25暗茶褐色土)	14	須 坏c3	056		010		1.3+	6.8*	高台やや内寄り
〃 (s-25暗茶褐色土)	15	須 坏×蓋	056		011	7.7*	1.8	4.9*	ヘラ切りママ
〃 (s-25暗茶褐色土)	16	須 皿a	056		015	-	2.0+	-	軟質
〃 (s-25暗茶褐色土)	17	須 鉢b	056		013	-	2.7+		
〃 (s-25暗茶褐色土)	18	須 壺×鉢	056		014	-	4.1+		
〃 (s-25暗茶褐色土)	19	製塩 鉢I	056		028			1.9+	
〃 (s-25暗茶褐色土)	20	製塩 鉢II-b	056		027			4.0+	
〃 (s-25暗茶褐色土)	21	瓦 平瓦	056		030	2.8	2.5	1.9	
〃 (s-25暗茶褐色土)	22	瓦 軒丸瓦	056	58-1	032	18.5	3.0		縦×横
6SK025暗灰砂 (s-25暗灰砂)	1	須 円面硯	056	58-1	001	12.0	12.9+	-	
6SK032 (s-32)	1	土師 蓋3	056		004	-	0.9+		
〃 (s-32)	2	須 坏c	056		002		2.7+	8.0*	高台外寄り
〃 (s-32)	3	須 壺b	056		003	-	2.5+		肥後系
6SK033 (s-33)	1	須 蓋3	056		003	-	1.8+		ヘラ切り後ナデ
〃 (s-33)	2	須 蓋3	056		002	-	1.6+		ヘラ切りママ
〃 (s-33)	3	須 蓋3	056		004	-	2.1+		ヘラ切り後ナデ
〃 (s-33)	4	須 蓋3	056		005	15.4*	2.5+	-	ヘラ切りママ
〃 (s-33)	5	須 坏a	056		010		2.3+	7.8	ヘラ切り後ナデ
〃 (s-33)	6	須 坏c	056		009		1.0+	7.3*	底部ヘラケズリ
〃 (s-33)	7	須 坏2	056		006		2.9+	-	高台細身、内より
〃 (s-33)	8	須 坏c	056		008		2.2+	-	外面ケズリ、高台外寄り
〃 (s-33)	9	須 坏c	056		007		1.4+	7.1*	高台細身
〃 (s-33)	10	須 皿a	056		011	-	1.9+	-	ヘラ切り後ナデ、軟質
〃 (s-33)	11	須 甕	056		012	-	4.7+		
〃 (s-33)	12	土師 高坏頭部?	056		013		2.3+		
6SK034 (s-34)	1	須恵質 鉢	056		001	23.0*	6.8+		
〃 (s-34)	2	土師 甕×壺把手	056		002	7.6	4.5	3.3	縦×横×幅
〃 (s-34)	3	瓦 丸瓦(須恵質)	056		003	10.5	9.0	1.7	縦×横×幅
6SK041茶褐色土 (s-41茶褐色土)	1	須 甕	057		009		4.3+		
〃 (s-41茶褐色土)	2	弥生 壺	057		008	-	2.5+		
〃 (s-41茶褐色土)	3	弥生 壺	057		011	-	5.6+		
〃 (s-41茶褐色土)	4	弥生 甕	057		007	-	5.6+		
〃 (s-41茶褐色土)	5	弥生 甕底×蓋底	057		013		3.5+	8.8*	
〃 (s-41茶褐色土)	6	弥生 甕底	057		006		2.5+	9.2*	
〃 (s-41茶褐色土)	7	弥生 甕底	057		004		5.1+	-	
〃 (s-41茶褐色土)	8	弥生 甕底	057		014		6.0+	6.4	
〃 (s-41茶褐色土)	9	弥生 甕底1	057		003		4.4+	12.8*	
〃 (s-41茶褐色土)	10	弥生 甕	057	58-2	002	50.5	63.1+		弥生後期
〃 (s-41茶褐色土)	11	弥生 鉢	057		005	-	6.5+		
〃 (s-41茶褐色土)	12	弥生 高坏	057		010	-	4.3+		
〃 (s-41茶褐色土)	13	縄文 浅鉢	057		012	-	3.1+		
6ST010 (s-10-15)	1	土師 坏a	058	59-1	008	10.1	2.1	7.5	ヘラ・内底ナデ○・板圧○
〃 (s-10-22)	2	土師 坏a	058	59-1	005	10.8	1.8	7.7	ヘラ・内底ナデ○・板圧○
〃 (s-10-6)	3	土師 坏a	058	59-1	007	11.1	1.9	8.1	ヘラ・内底ナデ○・板圧○
〃 (s-10-10)	4	土師 坏a	058	59-1	006	11.5	1.8	7.1	ヘラ・内底ナデ○・板圧○
〃 (s-10-21)	5	土師 坏a	058	59-1	004	11.2	1.8	8.7	ヘラ・内底ナデ○・板圧○
〃 (s-10-10)	6	土師 坏a	058	59-1	003	11.5	1.9	8.9	ヘラ・内底ナデ○・板圧○
〃 (s-10-16)	7	土師 坏a	058	59-1	001	12.0	4.3	-	ヘラ・内底ナデ○・板圧○
〃 (s-10-15)	8	土師 坏a	058	59-1	002	12.8	4.1	-	
6SD003 (s-3)	1	灰釉 風字硯	055	60-1	001	8.8+	7.1+	7.9+	縦×幅×高さ
6SD063 (s-63)	1	弥生 甕	058	61-1	001	15.0*	18.9	7.3*	
6SX046 (s-46)	1	弥生 甕	058	61-2	008	14.0*	5.1+		

前田6次遺物観察表5

遺構	No.	器種	図版番号	写真番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
6SX046 (s-46)	2	弥生 甕	058	61-2	004	24.4*	25.1+		
〃 (s-46)	3	弥生 甕	058		013	22.0*	14.8+		
〃 (s-46)	4	弥生 甕	058		006	25.6*	13.7+		
〃 (s-46)	5	弥生 甕	058		005	26.0*	17.7+		
〃 (s-46)	6	弥生 甕	058		011	25.1*	2.8+		
〃 (s-46)	7	弥生 甕	058		010	27.2*	2.95+		
〃 (s-46)	8	弥生 甕	058		009		5.1+	6.8*	
〃 (s-46)	9	弥生 甕	058		002		3.0+	8.6	
〃 (s-46)	10	弥生 甕	058		003		5.3+	7.6*	
〃 (s-46)	11	弥生 甕	058		012		4.0+	8.3*	
〃 (s-46)	12	弥生 鉢	058	61-2	007	18.5	9.2+		
〃 (s-46)	13	弥生 器台	058	61-2	001	16.4*	19.5	18.4*	
6SX049 (s-49)	1	弥生 壺	058		001		7.1+	6.8*	
6SX069 (s-69)	1	弥生 壺C2	058	61-1	001	15.5	17.15	5.9	
6SX077 (s-77)	1	弥生 高坏脚	058	61-1	001		9.8+	12.4*	

前田6次遺物観察表6

前田6次金属製品観察表(1)

遺構	No.	種別	器種	図版番号	写真番号	R番号	縦 cm	横 cm	厚さ cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
6SI030茶褐土 (s-30茶褐土)	1	鉄製品	釘	59	62-1	001	1.5	1.3	1.0	
〃 (s-30茶褐土)	2	鉄製品	釘	59	62-1	005	2.2	0.6	0.4	
〃 (s-30茶褐土)	3	鉄製品	釘	59	62-1	004	2.6	0.7	0.5	
〃 (s-30茶褐土)	4	鉄製品	釘	59	62-1	003	3.0	0.6	0.6	
〃 (s-30茶褐土)	5	鉄製品	釘	59	62-1	002	3.1	2.4	0.8	
6SK008灰褐土 (s-8灰褐土)	1	鉄製品	刀子	59	62-1	001	20.2	1.6	0.9	
〃 (s-8灰褐土)	2	鉄製品	刀子	59	62-1	002	12.0	1.3	0.6	
〃 (s-8灰褐土)	3	鉄製品	釘	59	62-1	003	6.1	1.0	0.9	
6SK008暗茶褐土 (s-8暗茶褐土)	1	鉄製品	釘	59	62-1	001	4.3	0.6	0.6	
〃 (s-8暗茶褐土)	2	鉄製品	釘	59	62-1	002	5.6	0.7	0.7	
〃 (s-8暗茶褐土)	3	金属製品	棒状鉄製品	59	62-1	005	2.7	0.9	0.5	
〃 (s-8暗茶褐土)	4	金属製品	棒状鉄製品	59	62-1	004	3.4	1.2	0.4	
〃 (s-8暗茶褐土)	5	金属製品	棒状鉄製品	59	62-1	003	6.0	1.2	0.9	
6SK017茶褐土 (s-17茶褐土)	1	鉄製品	釘	60	62-2	001	6.0	0.7	0.7	
6SK025暗茶褐土 (s-25暗茶褐土)	1	鉄製品	刀子	60	62-2	002	5.7	2.5	1.0	
〃 (s-25暗茶褐土)	2	鉄製品	釘?	60	62-2	004	3.8	1.0	1.0	
〃 (s-25暗茶褐土)	3	金属製品	棒状鉄製品	60	62-2	003	2.9	1.1	1.0	
〃 (s-25暗茶褐土)	4	金属製品	棒状鉄製品	60	62-2	006	8.2	1.0	0.9	
〃 (s-25暗茶褐土)	5	金属製品	板状鉄製品	60	62-2	001	5.3	4.1	0.8	素材片?
〃 (s-25暗茶褐土)	6	金属製品	板状鉄製品	60	62-2	005	4.6	2.8	0.7	素材片?
6SK025茶褐砂質土 (s-25茶褐砂質土)	1	鉄製品	釘	60	62-1	001	4.2	0.9	0.7	
6SK032 (s-32)	1	鉄製品	釘	60	62-2	001	3.1	0.6	0.8	
6SK033 (s-33)	1	金属製品	塊状鉄製品	60	62-2	001	2.4	1.8	1.4	
6ST001 (s-1)	1	鉄製品	刀子	60	62-2	001	12.6	1.5	0.4	
〃 (s-1)	2	鉄製品	刀子	60	62-2	003	6.6	1.1	0.4	
〃 (s-1)	3	青銅製品	帯金具丸柄	60	62-2	002	2.0	3.1	0.5	鑄造品
6ST010 (s-10-1)	1	鉄製品	釘	61	63-1	001	5.2	0.8	0.5	
〃 (s-10-2)	2	鉄製品	釘	61	63-1	001	2.2	1.4	0.6	
〃 (s-10-3)	3	鉄製品	釘	61	63-1	001	6.2	0.8	0.5	
〃 (s-10-4)	4	鉄製品	釘	61	63-1	001	3.8	0.5	0.4	
〃 (s-10-5)	5	鉄製品	釘	61	63-1	001	1.8	0.7	0.5	
〃 (s-10-7)	6	鉄製品	釘	61	63-1	001	5.2	0.6	0.5	
〃 (s-10-8)	7	鉄製品	釘	61	63-1	001	2.8	0.6	0.4	
〃 (s-10-9)	8	鉄製品	釘	61	63-1	001	2.2	0.5	0.4	
〃 (s-10-11)	9	鉄製品	釘	61	63-1	001	3.2	0.4	0.4	
〃 (s-10-12)	10	鉄製品	釘	61	63-1	001	3.6	0.9	0.9	
〃 (s-10-13)	11	鉄製品	釘	61	63-1	001	4.8	0.6	0.5	
〃 (s-10-14)	12	鉄製品	釘	61	63-1	001	2.4	1.0	0.5	
〃 (s-10-15)	13	鉄製品	釘	61	63-1	001	1.4	0.6	0.5	
〃 (s-10-17)	14	鉄製品	釘	61	63-1	001	4.7	0.8	0.5	
〃 (s-10-17)	15	鉄製品	釘	61	63-2	002	2.6	0.8	0.5	
〃 (s-10-18)	16	鉄製品	釘	61	63-2	001	2.8	0.4	0.4	
〃 (s-10-19)	17	鉄製品	釘	61	63-2	001	4.1	0.7	0.5	
〃 (s-10-20)	18	鉄製品	釘	61	63-2	001	3.3	1.9	0.5	
〃 (s-10-23)	19	鉄製品	釘	61	63-2	001	1.7	1.2	0.8	
〃 (s-10-24)	20	鉄製品	釘	61	63-2	001	2.5	1.7	1.0	
〃 (s-10-25)	21	鉄製品	釘	61	63-2	001	1.7	0.9	0.5	
〃 (s-10-26)	22	鉄製品	釘	61	63-2	001	2.0	0.8	0.6	
〃 (s-10-27)	23	鉄製品	釘	61	63-2	001	2.4	1.0	0.6	
〃 (s-10-28)	24	鉄製品	釘	61	63-2	001	6.5	1.1	0.6	
〃 (s-10-29)	25	鉄製品	釘	61	63-2	001	3.3	0.9	0.7	
〃 (s-10)	26	鉄製品	釘	61	63-2	010	2.5	0.7	0.7	
〃 (s-10)	27	鉄製品	釘	61	63-2	009	5.6	0.6	0.6	
6ST020 (s-20)	1	鉄製品	手鎌	62		001	1.8	4.7	0.6	
6SD003 (s-3)	1	鉄製品	刀子	62	63-2	009	1.9	5.9	0.4	
〃 (s-3)	2	鉄製品	釘	62	64-1	003	5.4	0.5	0.6	
〃 (s-3)	3	鉄製品	釘	62	64-1	016	5.5	1.3	0.6	
〃 (s-3)	4	鉄製品	釘	62	64-1	004	2.5	1.0	0.8	
〃 (s-3)	5	鉄製品	釘	62	64-1	008	5.2	0.7	0.7	

前田6次遺物観察表7

前田6次金属製品観察表(2)

遺構	No.	種別	器種	図版番号	写真番号	R番号	縦 cm	横 cm	厚さ cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
6SD003 (s-3)	6	鉄製品	釘	62	64-1	002	2.9	0.6	0.7	
〃 (s-3)	7	鉄製品	釘	62	64-1	007	2.7	0.6	0.5	
〃 (s-3)	8	鉄製品	釘	62	64-1	010	4.8	0.5	0.6	
〃 (s-3)	9	鉄製品	釘	62	64-1	015	6.4	0.8	0.6	
〃 (s-3)	10	鉄製品	釘	62	64-1	019	6.2	0.5	0.5	
〃 (s-3)	11	鉄製品	釘	62	64-1	014	6.35	0.95	0.45	
〃 (s-3)	12	鉄製品	釘	62	64-1	017	2.2	0.8	0.6	
〃 (s-3)	13	鉄製品	釘	62	64-1	012	1.8	0.7	0.5	
〃 (s-3)	14	鉄製品	釘	62	64-1	011	1.3	0.7	0.4	
〃 (s-3)	15	金属製品	棒状鉄製品	62	64-1	013	3.4	1.0	0.5	刀子×
〃 (s-3)	16	金属製品	棒状鉄製品	62	64-1	006	2.5	2.2	0.7	
〃 (s-3)	17	金属製品	棒状鉄製品	62	64-1	023	6.0	0.9	0.5	
〃 (s-3)	18	金属製品	棒状鉄製品	62	64-1	018	4.2	0.6	0.5	
〃 (s-3)	19	金属製品	円形鉄製品	62	64-1	001	4.0	5.0	0.5	紡錘車×
6SD031 (s-31)	1	鉄製品	釘	63		002	2.8	0.5	0.4	
〃 (s-31)	2	鉄製品	釘	63		001	6.2	0.5	0.6	
6SX002 (s-2)	1	鉄製品	釘	63		001	4.0	0.6	0.6	
6SX004 (s-4)	1	鉄製品	刀子	63		001	2.5	4.1	0.5	
〃 (s-4)	2	鉄製品	釘	63		004	2.2	0.3	0.3	
〃 (s-4)	3	鉄製品	釘	63		003	1.7	0.4	0.4	
〃 (s-4)	4	鉄製品	釘	63		002	3.5	0.4	0.4	
6SX091 (s-91)	1	鉄製品	鈍	63		001	3.2	1.1	0.3	

前田6次石器・土製品観察表(1)

前田6次石器・土製品観察表(1)

遺構	No.	石材	器種	図版番号	写真番号	R番号	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考 (+は欠損、*は復原値)
6SI030土器溜まり (S-30土器溜め)	1	ガラス製品	丸玉	64	64-2	001	0.4	0.4	0.4		ブルー
6SI040灰褐色土 (S-40灰褐色土)	1	花崗岩	未使用石材	64	64-2	001	8.7	9.0	3.4		
6SI045 (S-45)	1	砂岩	砥石	64	64-2	001	16.5	5.7	2.5		
6SK008暗茶褐色土 (S-8暗茶褐色土)	1	砂岩	砥石	64	64-2	006	5.3	4.5	2.2		天草産か?
6SK017茶褐色土 (S-17茶褐色土)	1	シルト岩	原石	65	65-1	002	14.6	9.0	3.4		
6SK025暗茶褐色土 (S-25暗茶褐色土)	1	泥岩	原石	65	65-1	008	13.2	10.0	5.2		
〃 (S-25暗茶褐色土)	3	泥岩	丸石	65	65-1	031	2.7	2.8	1.1		
〃 (S-25暗茶褐色土)	2	シルト岩	原石	66	65-1	007	15.0	15.5	5.7		
〃 (S-25暗茶褐色土)	4	土製品	権	66	65-2	029	5.9	4.6	2.0	61.7	
6SD003 (S-3)	1	緑色片岩	石庖丁	67	66-1	020	4.5	4.9	7.0		
〃 (S-3)	2	シルト岩	原石	67	66-1	021	12.0	12.0	3.9		
〃 (S-3)	3	アフライト	砥石	67	66-1	022	8.5	6.5	4.0		長石・石英斑岩か?
6SD003上層 (S-3上層)	1	花崗岩?	摺り石	67	66-1	001	9.2	5.5	4.8		
6SD031 (S-31)	1	輝緑凝灰岩	石庖丁	67	66-1	003	3.3	6.1	0.5		立岩産
6SX004 (S-4)	1	ガラス製品	丸玉	68	66-2	005	0.7	1.7	1.3		
6SX041茶褐色土 (S-41茶褐色土)	1	輝緑凝灰岩	石庖丁	68	66-2	001	4.6	10.5	1.0		立岩産
茶色土 (茶色土)	1	花崗岩	叩き石	68	66-2	001	7.5	4.5	3.5		
表土 (表土)	1	シルト岩	原石	68	66-2	004	15.8	8.0	6.4		
〃 (表土)	2	安山岩	石鏝	68	66-2	001	4.0	2.7	1.0		
〃 (表土)	3	黒曜石	石鏝	68	66-2	002	2.8	2.0	0.5		

第3章 考察

a 遺跡の時間的空間的推移

前田遺跡では過去の報告に触れたように後期旧石器時代から近現代にわたる遺構が検出されているが、本報告の4、5、6次調査でも同様の時期の遺構、遺物が検出された。

古くは縄文時代に属す土器、石器が散在し、弥生時代前期前半に至って方形プランの竪穴式住居、土坑、掘立柱建物からなる集落要素を備えた遺構の本格的な展開が見られるようになる。前期集落の中核は7次調査区にあるが、4次調査区において集落要素を構成する遺構が同心円的な分布を示すことが判明し、集落の北東方向に掘立柱建物が置かれている状況が認識できた。住居は7次調査区のものと比較した場合、規模やプランは同じであるが、支柱穴、炉跡などの構成施設を欠く。出土遺物は板付I式よりII式傾向の時期的にやや新しい傾向の土器片が埋土に含まれる傾向にある。

弥生後期には4次調査区は集落の北限を示す遺構展開であり、住居から出土した遺物は後期前半から中ごろにかけての土器が主体であり、後期集落としては早い段階に埋没したと認識できる。6次調査区は丘陵裾の奥まった部位であるが、後期中ごろから終末期にかけて活発に遺構が形成され、更に河川上流の宮ノ本遺跡の住居群に繋がっている。6SI030と6SI040は規模において最も大きいもののひとつであり、6SB015掘立柱建物を至近に備え、前田集落内では優位性を持つといえる。

7世紀後半代には4次調査区において竪穴式住居と円形土坑とからなる集落的様相が見られるが、官道の施行によって一時的に駆逐される。8世紀後半を主体とする廃棄土坑の進出は1次調査区の小規模な掘立柱建物を主体に持つ集落の再出現に伴うものである。円面硯や風字硯の出土や、廃棄土坑の展開も条坊内や近隣集落と様相を異にする点から、単純に集落と位置付けられない状況が指摘される。官道の施行、宮ノ本遺跡の墳墓形成など遺跡の周辺状況を勘案した見方が必要である。

b 古代官道について

本報告において4次調査4SD001,4SD100および5次調査5SD001,5SD100が道路遺構SF200の側溝と認識され、5次調査区での溝芯の方向性から得られたデータではその道路は北に対して東に35° 19' の傾きを持ち、北方向の延長約800mに水城西門があることから福岡平野から大宰府に至る道路と認識されている。

本調査で認識された道は約150mにわたり、5次調査区では溝芯々間の距離13.5m、路面幅11.4mを測る。4次調査区では東側溝4SD001が8世紀後半以降に数度に亘って掘り返され、二次的に水路として利用されたことなどから、本来の形状を止めておらず、振れが著しい。平均的な溝芯々間の距離13mを測る。残りの良い5次調査区では北側で地形が高くなり、溝先端が北に細くなり終息している。溝底はほとんど傾きを持たない。土層の堆積状況は初期に砂、または、場所によって腐植土が堆積し、それを覆うように土層中位に地山土を削り落として堆積した状況と考えられる土壌が存在する（第29図右下参照）。それに対応するように溝の肩の部分にテラス状の平坦面が部分的に残されている。これは溝の埋没途中の段階で溝肩を直線的に削って補修された痕跡と認識できる。削って出た土は溝底で均されて処理されたこととなる。

4次調査の溝同士の切り合いや正確な土層関係については、基礎資料に不備があり、十分に説明できるまでに整理がつかない部分が残されてしまった。いずれにしても4SD001は8世紀後半と12世紀に大きく改変され、最終的には大畔となって現代まで地形に影響を残す遺構となった。4SD001の東側は西側に対して低位であり一部新規の小規模な溝が数カ所で分岐するなどし、平安時代には水田耕作面を形成していた可能性が考えられる。別途に機会を作り詳述したい。

参考文献 「大宰府周辺の古代官道」山村信榮『九州考古学』第68号1993年

「古代道路の諸相 大宰管内の場合」山村『古代文化』第47巻第4号1995年

c 古代墳墓の展開

宮ノ本1次を見る限り、火葬墓から木棺墓への転換は9世紀の前半代におこり、遺跡全体では9世紀後半には火葬による埋葬は終息し、木棺ないし木蓋土坑墓に移行している。墳墓は同一斜面、同一コンタ内などという単位で群を成し、標高の高いほど時期的に古い占地経緯を持つ群であり、前田遺跡エリアの標高が低い群は大半が10世紀に形成される墳墓群である。

9世紀代においては、鏡などの副葬品も標高の高い宮ノ本1次調査の群に優位性が認められ、次に東に位置する宮ノ本7の2次の丘陵南斜面の群がそれに次ぐ。初期輸入陶磁器も宮ノ本7の1次ST003（南尾根群）では完形品が添えられているが、標高の低い前田地区では破片副葬に止まっている。

10世紀に至っては高位の宮ノ本遺跡では造墓活動は見られず、丘陵裾から平地と認識される前田遺跡内で2~3基が群となり一定の間隔をおいて展開している。

このように前田遺跡における古代の造墓活動は、8世紀に初源を持つ宮ノ本遺跡での墳墓造営を引き継ぐ形で9世紀後半から10世紀代に展開し、その初期には宮ノ本遺跡よりランクの低い連中が造墓主体者であった。ランクは落ちるが刀子や帯金具の出土は彼らが官人層であったことを示しており、10世紀代までこの地が大宰府の公葬地としての役割を担っていたと考えられる。

遺跡名	次数	遺構番号	遺構群	土器形式期	時期	遺物	形態	備考	文献	
宮ノ本	1	1号墓			不明	壳地券	火葬墓?	59	外護列石	1
宮ノ本	1	2号墓		VI期	9世紀前半	小刀、釘(5)、網状漆(烏帽子?)、土師器杯、皿	木棺墓	59	外護列石	1
宮ノ本	1	3号墓		VII期	9世紀中後半	唐式鏡片、黒色土器B、釘(50)	木棺墓	59		1
宮ノ本	1	4号墓			奈良時代?	土師器鉢	火葬墓	59		1
宮ノ本	2	7号墓			8世紀前~中頃	須恵器蓋付き壺a	火葬墓	64		2
宮ノ本	2	8号墓			8世紀前~中頃	須恵器長頸壺b、土師器碗c	火葬墓	64		2
宮ノ本	2	9号墓			平安時代?	刀子、釘(7+)	木棺墓	58		2
宮ノ本	2	10号墓			奈良時代?	小鏝(8)	火葬墓?	58		2
宮ノ本	7の1	ST025	北尾根		奈良時代?	須恵器壺(外来系)	火葬墓?	73		3
宮ノ本	7の1	ST002	東裾	VII期	9世紀中後半	釘(28)、土師器杯a(2)、皿a、須恵器壺(外来系)	木棺墓	49		3
宮ノ本	7の1	ST003	南尾根	VIII期	9世紀後半	釘(2)、土師器杯a(4)、黒色土器B碗c、白磁1碗	木棺墓?	52		3
宮ノ本	7の1	ST015	西裾		9世紀後半?	釘(6)、土師器鉢A、八稜鏡	木棺墓	52		3
宮ノ本	7の1	ST035	南尾根南裾	VIII期	9世紀後半	釘(26)、土師器杯a(5)	木棺墓	40		3
宮ノ本	7の1	ST040	南尾根南裾	VIII期	9世紀後半	釘(28)、土師器杯a(4)、碗c(1)	木棺墓	40		3
宮ノ本	7の1	ST050	南尾根南裾	VIII~IX期	10世紀前半	釘(24)、土師器杯a(7)	木棺墓	40		3
宮ノ本	7の1	ST075	北尾根	VIII期	9世紀後半	刀子(3)、土師器杯a(4)、皿c、碗c(2)	木蓋土坑墓	50		3
宮ノ本	7の1	ST085	北尾根	VII期	9世紀中後半	釘(2)、刀子、土師器杯a、碗c	木蓋土坑墓	49		3
宮ノ本	7の1	ST090	北尾根	VIII期	9世紀後半	土師器杯a、黒色土器A碗c	木蓋土坑墓	49		3
宮ノ本	7の2	ST120	13号墳裾		不明	釘(25)	木棺墓	56	周溝あり	4
宮ノ本	7の2	ST305	丘陵南斜面	VIII期	9世紀後半	釘、土師器杯a(3)、滑石石鍋片	木蓋土坑墓?	50		4
宮ノ本	7の2	ST340	丘陵南斜面		不明	釘(2)	木蓋土坑墓?	50		4
宮ノ本	7の2	ST265	丘陵南斜面		9世紀後半	釘(2)、越州窯系青磁鉢II	木蓋土坑墓?	50		4
宮ノ本	7の2	ST270	丘陵南斜面	VII期	9世紀中後半	釘(5)、土師器杯a(5)	木蓋土坑墓?	50		4
宮ノ本	7の2	ST295	丘陵南斜面		9世紀後半?	釘(22)、国産八稜鏡、土師器鉢、鉄製紡錘車	木棺墓	50		4
宮ノ本	7の2	ST300	丘陵南斜面		9世紀後半?	釘(25)、国産方形鏡、土製三ノ鏡、鉄製毛抜	木棺墓	51		4
宮ノ本	7の2	ST310	丘陵南斜面	IX期	9世紀後半	釘(8+)、刀子、土師器杯a(7)、碗c	木棺墓	50		4
宮ノ本	7の2	ST330	丘陵南斜面下	VIII期	9世紀後半	釘(39)、土師器杯a	木棺墓	47		4
宮ノ本	7の2	ST345	丘陵南斜面上	VIb期	9世紀前半	土師器杯a	木棺墓?	55		4
宮ノ本	9	ST014		VII期	9世紀中後半	釘(34)、土師器杯a(4)、中碗c(2)、黒色土器A碗c	木棺墓	52		5
宮ノ本	9	ST016		VIII期	9世紀後半	土師器杯a	木蓋土坑墓?	52		5
宮ノ本	9	ST020		V期	8世紀後半	土師器杯d、須恵器壺a、釘	火葬墓	60		5
宮ノ本	9	ST030		V期	8世紀後半	土師器壺、須恵器皿a	火葬墓	60		5
前田	1	ST140			9~10世紀	国産鏡、土師器杯、釘(15)	木棺墓	34		6
前田	1	ST155			不明	釘(3)	木棺墓?	34		6
前田	1	SX175			不明	釘(1)	木棺墓?	34		6
前田	7	ST015			9~10世紀	釘(28+)、越州窯系青磁鉢I片、鉄製紡錘車	木棺墓	36		5
前田	7	ST020			10世紀前半	土師器杯a(2)、碗c(2)	木棺墓	31	釘なし	5
前田	7	ST165			9世紀後半	釘(4)、土師器杯	木棺墓	35		5
前田	4	ST065			10世紀後半	土師器碗c、白磁碗1片	木蓋土坑墓	33		7
前田	4	ST115			10世紀後半	土師器杯a(2)、皿c(3)、黒色土器B碗c、鉄鏝	木蓋土坑墓	33		7
前田	6	ST001			不明	刀子(2)、銅製帯金具	木蓋土坑墓?	35		7
前田	6	ST005			不明	なし	木棺墓	35		7
前田	6	ST010			10世紀後半	釘(27)、土師器杯a(6)、杯a(2)	木蓋土坑墓?	35		7
前田	6	ST020			不明	鉄製手鏝	木蓋土坑墓?	35		7
前田	8	ST004			10世紀後半	土師器杯a、碗c(2)	木蓋土坑墓			8

文献

- 1 「宮ノ本遺跡」1980太宰府町教育委員会
- 2 「宮ノ本遺跡II」1987太宰府市教育委員会
- 3 「太宰府・佐野地区遺跡群IV 宮ノ本遺跡第7-1調査」1993太宰府市教育委員会
- 4 「太宰府・佐野地区遺跡群V 宮ノ本遺跡第7-2調査」1995太宰府市教育委員会
- 5 「太宰府・佐野地区遺跡群VIII」1998太宰府市教育委員会
- 6 「太宰府・佐野地区遺跡群XI」2000太宰府市教育委員会
- 6 「太宰府・佐野地区遺跡群XI」2001太宰府市教育委員会
- 7 本書
- 8 「太宰府・佐野地区遺跡群IX」1999太宰府市教育委員会

第4章 特論

前田遺跡の炭化米粒特性と稲作起源

和佐野喜久生※・牛嶋寛※・山村信榮※※

(※佐賀大学、※※太宰府市教育委員)

はじめに

本遺跡、その周辺の地理および地形は遺跡報告書(文献5)から関連する主な部分を抜粋あるいは図1及び福岡県地図(昭文社)を参考にしながら記述した。

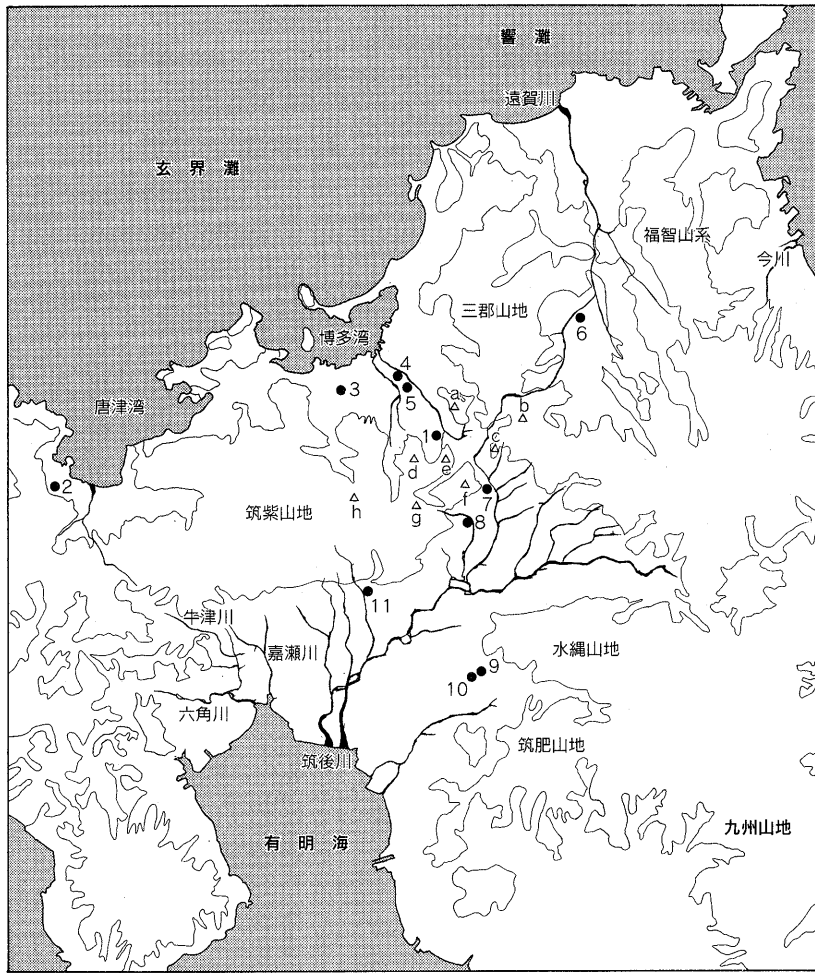
本遺跡は太宰府市大字向佐野字前田に所在する。太宰府市の佐野地区は福岡平野の最南部に位置するが、福岡平野の南には背振山地が聳えるように連なり玄界灘沿岸域と有明海沿岸域の沖積平野を南西方向に遮断する。背振山地の南西部には最高峰・背振山(1055m)があり、それから南東に下りて那珂川の源流域・七曲峠を経て背振山地西端・九千部山(848m)に連なる。九千部山のすぐ東隣に山口川の源流域となる権現山(262m)があり、ここから東に筑後平野(筑紫平野北端部)に突き出るように延びた支稜線末端に基山((405m)、基山の北方には山口川(筑後川支流になる)を挟んで天拝山(258m)、さらに天拝山の西方には福岡平野に北流する大佐野川と牛頸川を挟んで牛頸山(448m)がある。牛頸・大佐野両川、筑紫野市二日市方面から北流する鷹田川のいずれも御笠川に合流して、福岡平野中央を北に貫流して博多湾に注ぐ。御笠川は三郡山地の南端に位置する宝満山(869m)の西面を源流とするが、南東面は筑後川に南流する宝満川がその源流域とし、太宰府市は両河川が分水する峠域である。この峠域一帯は、東を御笠・宝満川を挟んで四王寺山脈、宝満山・愛嶽山(432m)、及び宮地岳(339m)が迫り出し、西からは天拝山と基山の山裾が迫って地峡を形成している。前田遺跡はこの地峡の北側入り口にあり、大佐野川が御笠川に合流する直前の左岸域に位置する。

本遺跡の遺構・状況については、下記のように報告されている(文献5)。弥生時代は、太宰府市佐野地区(図1)は、遺跡の密度から言えば、北の春日市の岡本丘陵を中心とした大集落群と、南の筑紫野市から小郡市にまたがる三国丘陵から夜須町にかけての筑紫野平野北側の集落群に挟まれた形となり、両地域に比べれば、点々とその痕跡が辿れるに過ぎないと考えられてきた。しかし、北にある原口遺跡では弥生前期中頃(板付II式期)に5棟の円形住居からなる集落跡が、前田遺跡とは大佐野川を挟んで対峙する籬川・フケ遺跡では弥生後期から終末、古墳時代の初頭にかけての低湿地を利用した木製品の貯蔵所や加工所及び掘立柱建物からなる集落の跡などが検出されている。

弥生時代前期の本遺跡の遺構の主体は方形の竪穴住居と貯蔵穴、掘立柱建物でそれらが直径約30mの円形に沿って展開し、竪穴住居と貯蔵穴が切り合う状態で検出され、当時には空間使用に一定の制約があったようである。後期の住居の展開は、大佐野川の面する南東側が徐々に希薄になる状況がみられ、地形は川に向かって傾斜するが、土地利用は段状にされていた可能性がある。掘立柱建物は竪穴住居が密集する高地には造られず、縁辺部に置かれている。

材料および方法

本遺跡の炭化米資料は太宰府市教育委員会によって発掘されたもので、発掘調査は、昭和63年10月(1988年)から平成元年(1989年)10月までに行われた。炭化米は遺構番号ISI665の住居跡(長辺4.8m、短辺4.6mの方形)の床面でまとまって検出され、その周辺の土壌には他の炭化物や焼けた面がみられたが、埋没環境としては他の住居跡と比して特に変わった様子はなかった、と報告されている。なお、遺物



- 炭化米出土遺跡**
1. 前田遺跡(太宰府市)
 2. 菜畑遺跡(唐津市)
 3. 有田遺跡(福岡市)
 4. 瑞穂遺跡(福岡市)
 5. 板付遺跡(福岡市)
 6. 立岩遺跡(飯塚市)
 7. 津古牟田・空前遺跡(小郡市)
 8. 安永田遺跡(鳥栖市)
 9. 吉田遺跡(八女市)
 10. 岩崎遺跡(八女市)
 11. 吉野ヶ里遺跡(神埼・三田川町)

- 山峰**
- a. 大城山(四王寺山)
 - b. 宝満山
 - c. 宮地岳
 - d. 牛頭山
 - e. 天拝山
 - f. 基山
 - g. 九千部山
 - h. 脊振山

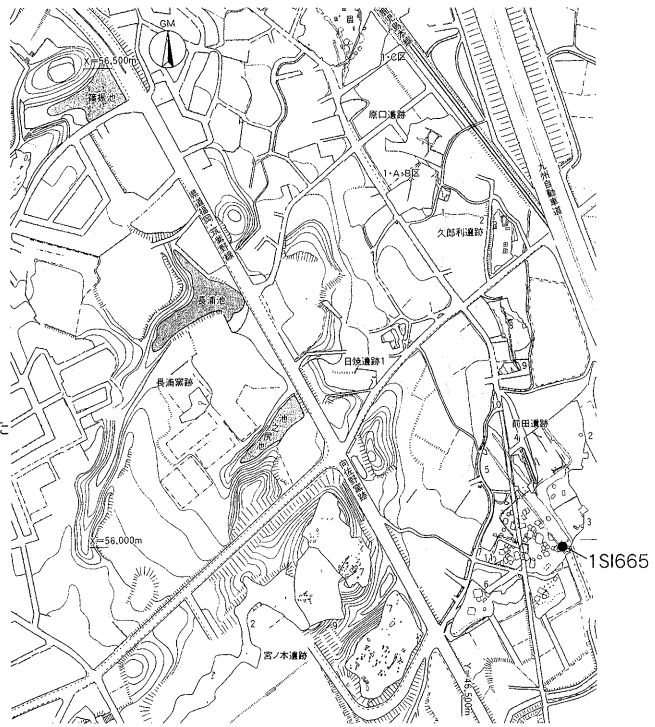
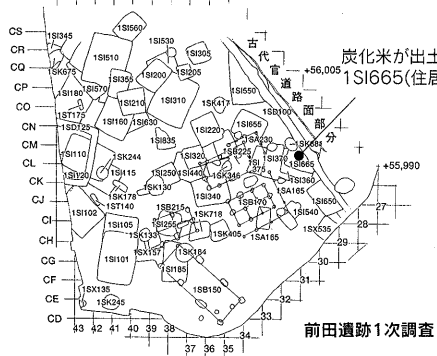
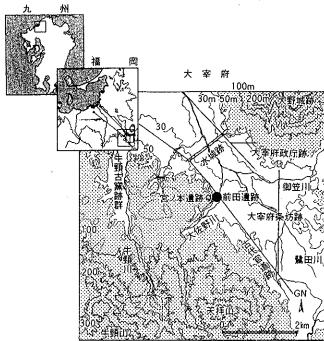


図1 前田遺跡の地理的位置とその周辺の地形図

には弥生後期のカメ・壺・高杯などがみられる。

炭化米粒の特性・計測調査は、発掘資料から100粒を任意抽出したものについて行った。計測は粒の平面及び側面を接写し、約4.5倍大にプリントしたものからデジタル表示式ノギスを用いて行った。炭化米の形態的特性は、粒長、粒幅及び粒厚の測定値および計算によって求めた長／幅比の4項目とし、北部九州の6遺跡(7資料)ものと比較した。

炭化米粒の形態的特性の粒形・大及び粒型の分類・表現法は、既報(文献1,2,3)の方法によったが、その概略は図4に示している。なお、日本の古代稲を対象とした長粒系および短粒系の分類は、およそ粒長4.4mm以上(4.6mm前後)を長粒系、4.2mm以下(4.0mm前後)を短粒系としているが、4.2～4.4mmの境界領域には長・短粒系の混種とみなされるものが多く分布する。

また、弥生時代の遺跡それぞれから出土する炭化米粒は、粒特性それぞれがかなりの変異幅を示すが、発掘資料が他と区別できる異なる粒特性値をもつものは、1つのイネ品種としての特性を示すものとみなして

いる。しかし、同じ粒特性値を示すものがすべて同じ品種になるとは限らない。

結果及び考察

表1には本遺跡の炭化米粒の4形質の平均値、標準偏差及び調査粒数を、北部九州6遺跡7資料(縄文晩期～弥生中期)のものと比較して示した。菜畑及び板付遺跡の資料は北部九州最古の短粒系イネ品種を代表するものであるが、本遺跡の炭化米は粒長4.63mmが示すように

表1 前田及び比較遺跡の炭化米粒特性の平均値、標準偏差及び調査粒数

遺跡名	菜畑	菜畑	板付	空前
時代	縄文晩期	弥生前期	弥生前期	弥生前期
所在地	唐津市	唐津市	福岡市	小郡市
長(mm)	4.11	3.93	4.19	4.59
S.D.	0.35	0.28	0.24	0.22
幅(mm)	2.45	2.38	2.64	2.77
S.D.	0.23	0.20	0.18	0.17
厚(mm)	1.93	1.95	1.80	1.95
S.D.	0.22	0.24	0.13	0.20
長/幅比	1.69	1.66	1.59	1.66
S.D.	0.17	0.12	0.11	0.11
調査粒数	155	38	120	100
遺跡名	安永田	津古牟田	八女吉田	前田
時代	弥生中期	弥生中期	弥生後期	弥生後期
所在地	鳥栖市	小郡市	八女市	太宰府市
長(mm)	4.50	4.70	4.70	4.63
S.D.	0.34	0.28	0.17	0.30
幅(mm)	2.51	2.67	2.59	2.53
S.D.	0.18	0.28	0.21	0.20
厚(mm)	1.86	1.92	1.91	1.92
S.D.	0.16	0.17	0.18	0.17
長/幅比	1.80	1.77	1.83	1.84
S.D.	0.15	0.16	0.14	0.16
調査粒数	110	100	76	100

S.D: 標準偏差

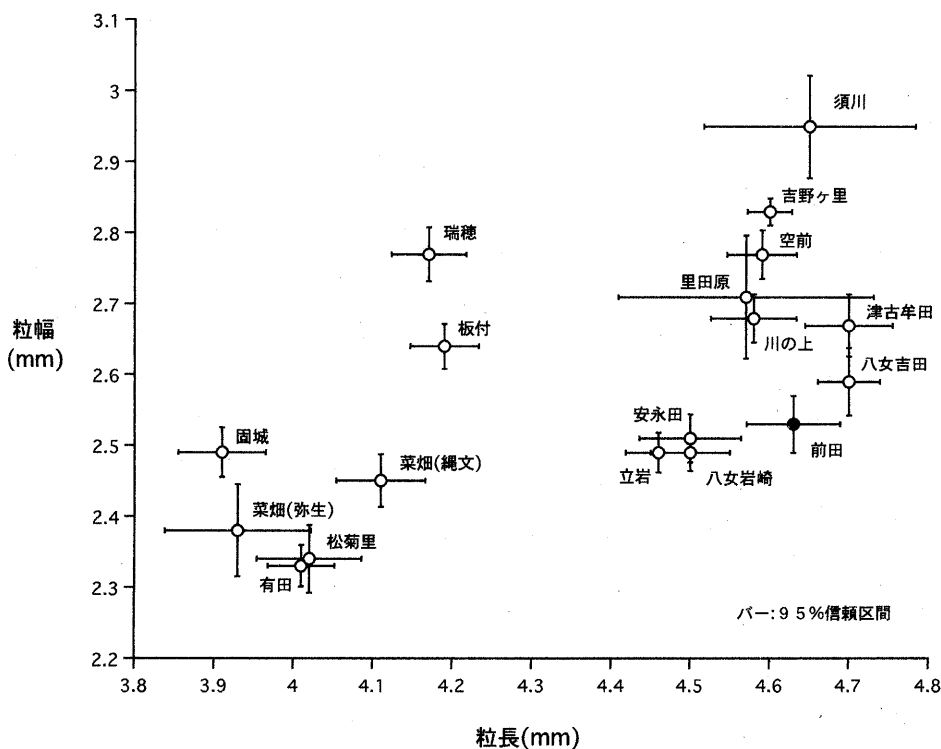


図2 比較及び前田遺跡の炭化米粒の粒長・幅平均値の分布図

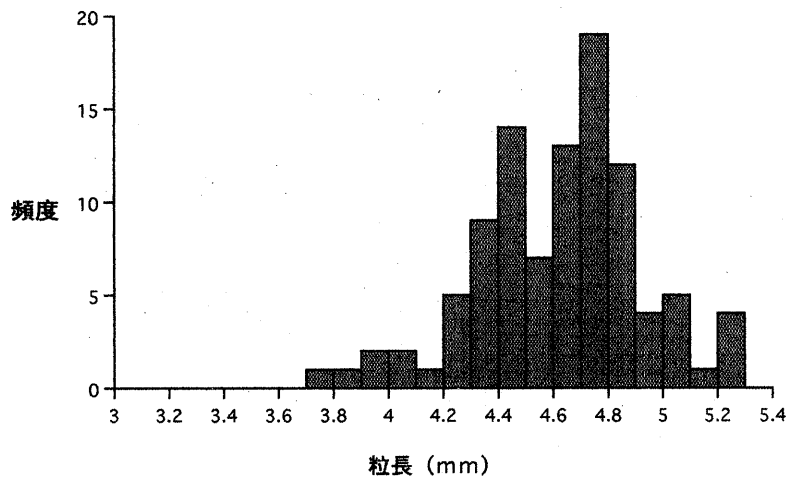


図3 前田遺跡の炭化米粒長の頻度分布図

本遺跡のイネ品種が筑後・宝満川流域に由来することを示している。

図3に示した粒長の度数分布図は、本遺跡の炭化米資料が1つのイネ品種として遺伝的純粋性を所有しているかを判断するために示したものである。図に示されるように、本遺跡の炭化米粒の粒長変異は3.7mmから5.3mmの間に広く分布し、4.4mmと4.7mmに2つのピークをもつ二頂的分布を示すことから、長粒系に属する2品種の混種(あるいは埋没時の混合)である可能性を示すものと考えられる。

表1に示した粒厚平均値については、本資料の1.92mmは全北部九州の平均値(1.88mm)と比べてやや高い値を示し、米粒の充実度も十分であったようである。このことから、弥生後期の前田はイネ品種、稲作技術及び水田・土壌環境も改善されたが、品種の混合があったとすれば稲作に関する知識はまだ十分ではなかったと考えられる。また長/幅比の1.84については、粒形指数では中形粒の平均値でジャポニカ品種ではやや大きい数値(やや狭長)になる。

図4は、表2に示した粒型分布の参考のために挿入したもので、粒幅指数と粒長指数の組合せることによって粒型分類したものである(文献2,3)。

表2は遺跡それぞれの炭化米粒個々の粒型分布を示しているが、比較遺跡は表1のものと同じである。本遺跡の粒型分布は、全体的には安永田、津古牟田及び八女吉田遺跡のものに類似することが分かるが、安永田遺跡に比べると5,5型、5,7型及び7,5型をやや多く含み、津古牟田遺跡に比べると7,5型が顕著に少なく、八女吉田遺跡は5,5型のものが集中している、など少しずつ傾向を異にすることが分かる。

図5の炭化米粒の接写写真は、上段右上

明らかに長粒系であり、比較に示した筑紫平野の長粒系4遺跡の粒特性値を全体的に平均したような値を示している。粒長の標準偏差0.30mmは比較的に大きな値であり、本資料が単一品種でないことを示唆するものである。

図2には粒長・幅平均値(付95%の信頼区間)の分布を、16の北部九州及び韓国の比較遺跡(遺跡名は図中に示した)のものと比較しながら示した。図から明らかなように、本遺跡の炭化米粒は安永田・津古牟田・八女遺跡のほぼ中間に位置し、

表2 前田及び比較遺跡の炭化米粒の粒型分布表

	菜畑(縄文) 155粒 粒長指数					計 (%)	菜畑(弥生) 38粒 粒長指数					計 (%)
	1	3	5	7	9		1	3	5	7	9	
粒幅指数	8	5	2			15	13	3			16	
5	14	47	19			80	18	53	11		82	
7		5	1			6		3			3	
9												
計%	22	57	22			101	31	59	11		101	
	板付 120粒						空前 100粒					
粒幅指数												
5	5	58	15			78		12	44	1	57	
7		13	8			21		4	38	1	43	
9												
計%	5	71	23			99		16	82	2	100	
	安永田 110粒						津古牟田 100粒					
粒幅指数												
3		2	3			5		1			1	
5	3	30	53	6		92		9	50	13	72	
7		1	3			4		2	23	2	27	
9												
計%	3	33	59	6		101		12	73	15	100	
	八女吉田 76粒						前田 100粒 粒長指数					
粒幅指数												
3			3			3		1			3	
5		4	71	5		80		16	62	10	88	
7			16	1		17		1	8		9	
9												
計%		4	90	6		100		18	72	10	100	

から整形粒を選んで粒長の長いものから順次に全体を反映するように配列している。

以上に述べたように、本遺跡の炭化米（イネ品種）は福岡平野にあって長粒系に属することから、本遺跡のイネ品種の由来及び伝播ルートは一見して分かるようには単純ではなく、以下のようなことが推察される。本遺跡の所在地が福岡平野の南端部で、しかも時代も弥生時代の後期であることから、本遺跡の稲作起源も、縄文晩期から弥生前期の板付や瑞穂遺跡からの南下を考えるのが常識的かも知れない。また、太宰府市よりさらに南に、筑紫平野との接点にもなる山口川の段丘上に弥生中期の貝本遺跡(筑紫野市大字古賀)があり、ここからは長粒系が混種した短粒系のイネ品種が発掘されていることから、本遺跡のイネ品種が短粒系で、御笠川河口に近い板付遺跡由来のものであっても何ら不思議ではない。一方、山口川は筑後川の支流・宝満川に合流して筑紫平野を南下する川であり、筑紫平野は弥生前・中期の長粒系のイネ品種が分布するところであるが、本遺跡は福岡平野の南端部で御笠川水系域に位置している。しかも貝本遺跡の北に位置しながら本遺跡から長粒系の炭化米(イネ品種)が出土したことは非常な驚きである。本遺跡が、北に位置する岡本丘陵の大集落群と、南の筑紫野市から小郡市にまたがる三国丘陵の大集落群に挟まれて散在する弥生の小集落であったことを考えると、この地域一帯が周辺地形と地域間交易ルートとの微妙な関係から、稲作事情も本遺跡の南北に存在した弥生の一大経済圏の影響を複雑に受けたのかも知れない。いずれにしろ、本遺跡の炭化米(イネ品種)は板付あるいは瑞穂遺跡から御笠川を南下して伝播したものではなく、有明海から筑後川・宝満川を経由して伝播した筑紫平野由来の長粒系のイネ品種である。今後に考古学的遺物からのさらなる検証が発展することを期待したい。

要約

- 1, 太宰府市佐野地区所在の前田遺跡（弥生時代後期）出土の炭化米の粒特性を既報の北部九州及び韓国の遺跡のものと比較し、本遺跡の古代稲の粒特性と稲作起源について考察した。
- 2, 本遺跡の炭化米は長粒系の2品種が混種したものと考えられ、遺跡は福岡平野の南端部に所在しているながらイネ品種は筑紫平野から北上して伝播したものである。
- 3, イネ品種の系譜は、粒形質の総合的判断から安永田及び津古牟田遺跡由来の長粒系品種になるようである。
- 4, 炭化米の粒厚は充実がよかったことから、本遺跡周辺でのイネの栽培条件は良好であったようであるが、イネ品種が混種であったことから、稲作の知識・技術はまだ十分には進んではいなかったと考えられる。
- 5, 本遺跡の所在地が福岡平野と筑紫平野の接点にあることから、本遺跡の稲作も両地域の弥生の経済圏、人と物の交流の中で微妙に影響されながら時代的にやや遅れて発展したように考えられる。

参考文献

- 1, 和佐野喜久生 『九州北部古代遺跡の炭化米の粒特性に関する考古・遺伝学的研究』 育種学雑誌 43: 586-602 1993年
- 2, 和佐野喜久生 『稲作の江南起源説』 講座・文明と環境 第3巻 農耕と文明. 朝倉書店. 東京. 143-167 1995年
- 3, 和佐野喜久生 『東アジアの古代稲と稲作起源』 東アジアの稲作起源と古代稲作文化 文部省科学研究費による国際学術研究、報告・論文集、和佐野喜久生・研究代表・編集: 1-52 1995年
- 4, 『貝元遺跡I』 福岡教育委員会 1998年
- 5, 『太宰府佐野地区遺跡群X』 (前田遺跡1次調査) 太宰府市の文化財第50集 太宰府市教育委員会2000年

粒幅指数
(階級値,mm)

7・1(大歌子) 7・3(須川) 7・5(吉野ヶ里) 7・7(津古牟田) 7・9(戦国糧倉) 9・7(須川)
 5・1(固城) 5・3(松菊里) 5・5(八女岩崎) 5・7(八女吉田) 5・9(河姆澁) 5・10(羅家角4)
 1・1(草鞋山) 3・1(草鞋山) 3・3(大嘴子) 3・5(草鞋山) 3・7(羅家角2)

9(3.7) (極広粒)				9・7		
7(3.1) (広粒)	7・1	7・3	7・5	7・7	7・9	
5(2.5) (中幅粒)	5・1	5・3	5・5	5・7	5・9	5・10
3(1.9) (狭粒)	3・1	3・3	3・5	3・7		
1(1.3) (極狭粒)	1・1					
	1(3.5) (極短粒)	3(4.1) (短粒)	5(4.7) (中長粒)	7(5.3) (長粒)	9(5.9) (極長粒)	10(6.5) (極大長粒)

粒長指数(階級値,mm)

図4 炭化米粒の粒型分類表



図5 前田遺跡の炭化米粒の接写写真

圖 版



1 前田遺跡4・5次調査全景1 (右が北)



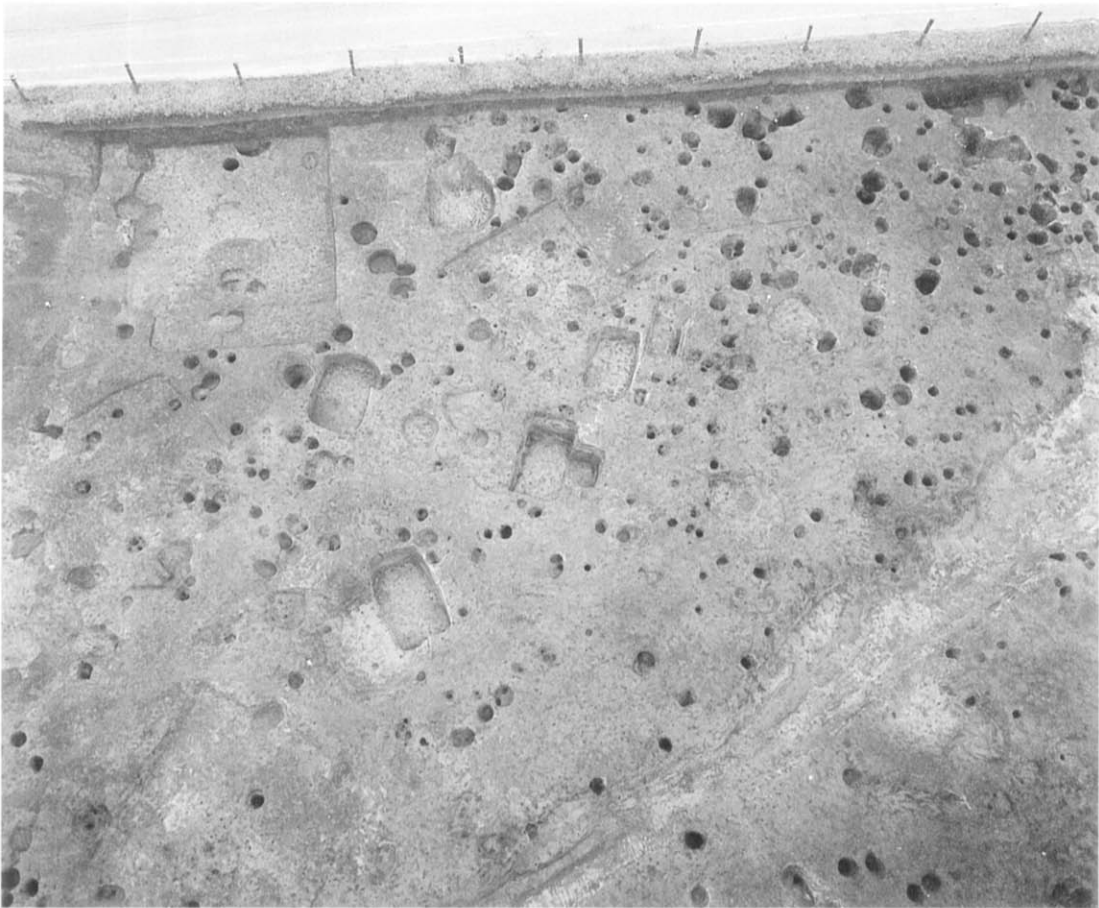
2 前田遺跡4・5次調査全景2 (右が北)



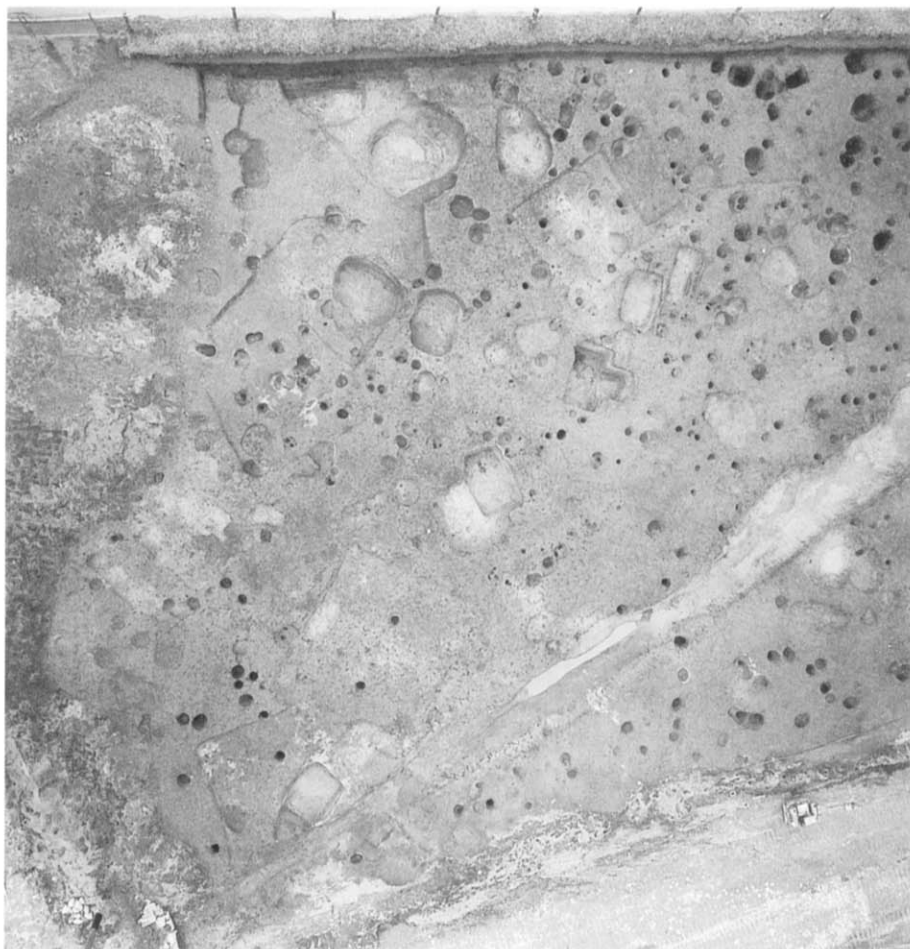
1 前田遺跡4次調査北部（右が北）



2 前田遺跡4次調査南部（右が北）



1 前田遺跡4次調査中部（右が北）



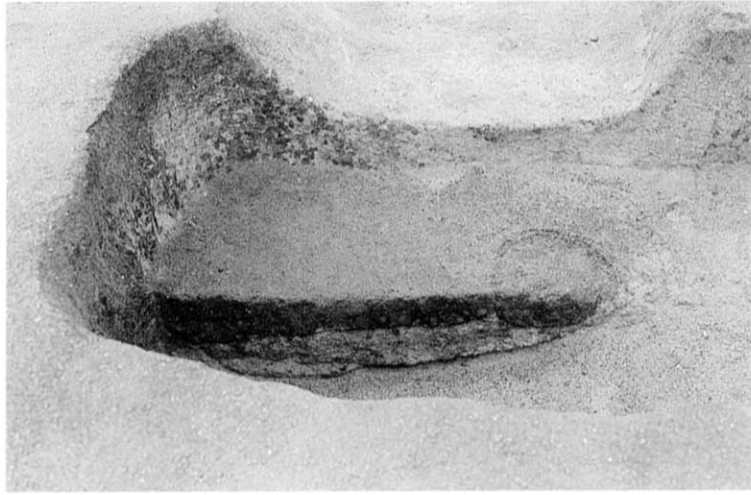
2 前田遺跡4次調査南部（右が北）



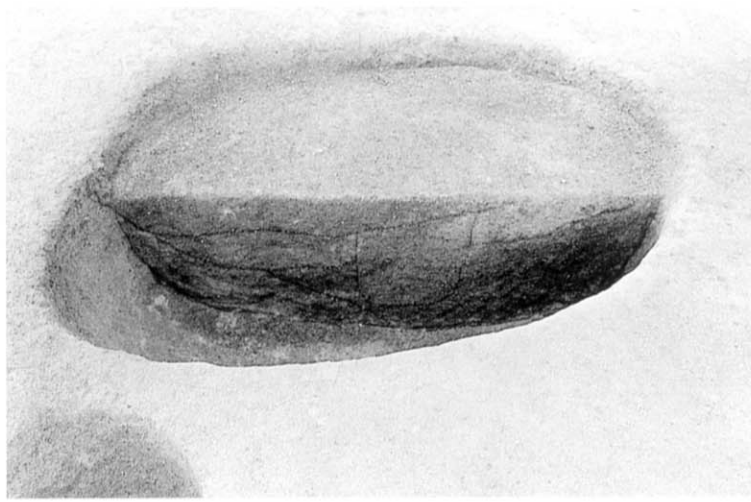
1 前田遺跡4次調査中部（右が北）



2 前田遺跡4次調査南部（右が北）



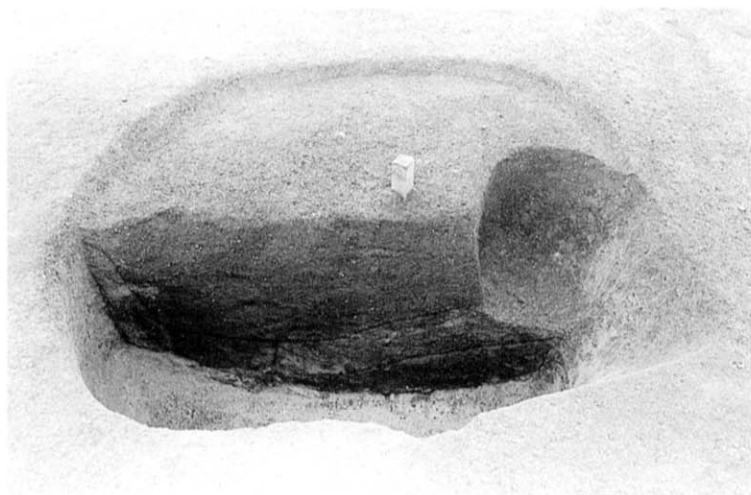
1 4SB050a



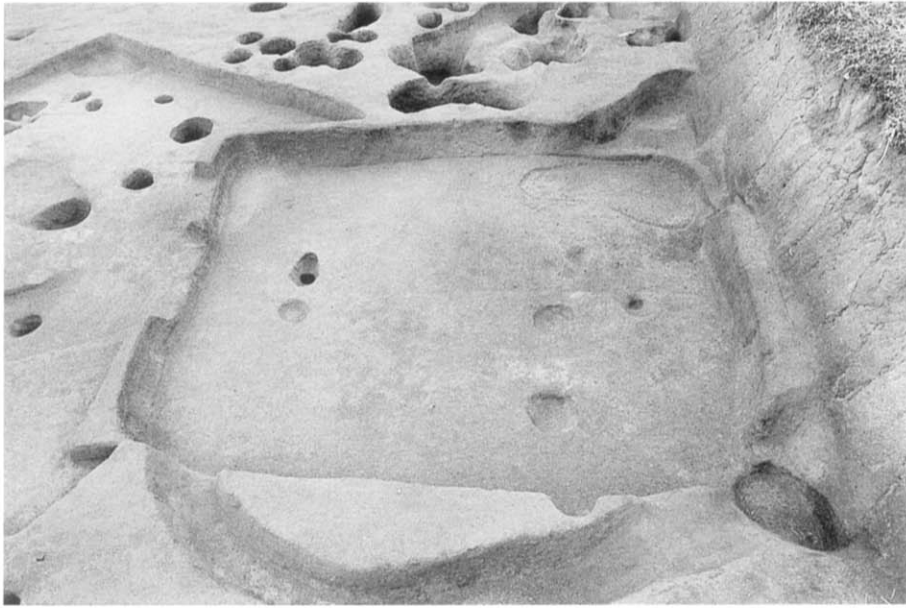
2 4SB050b



3 4SB050c



4 4SB050d



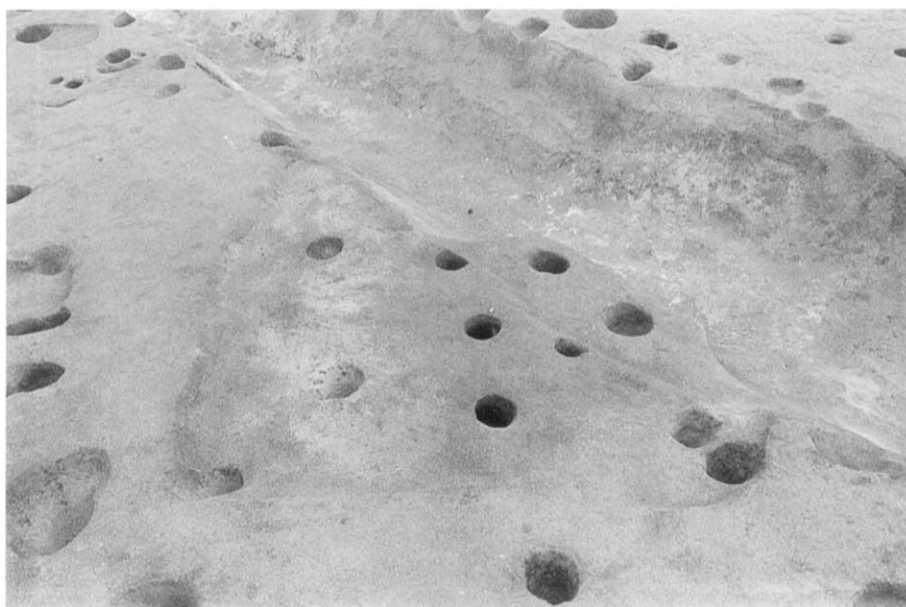
1 4SI025



2 4SI025



3 4SI035



1 4SI060



2 4SI080



3 4SI080



1 4SI120



2 4SI090、4SI120



3 4SI140



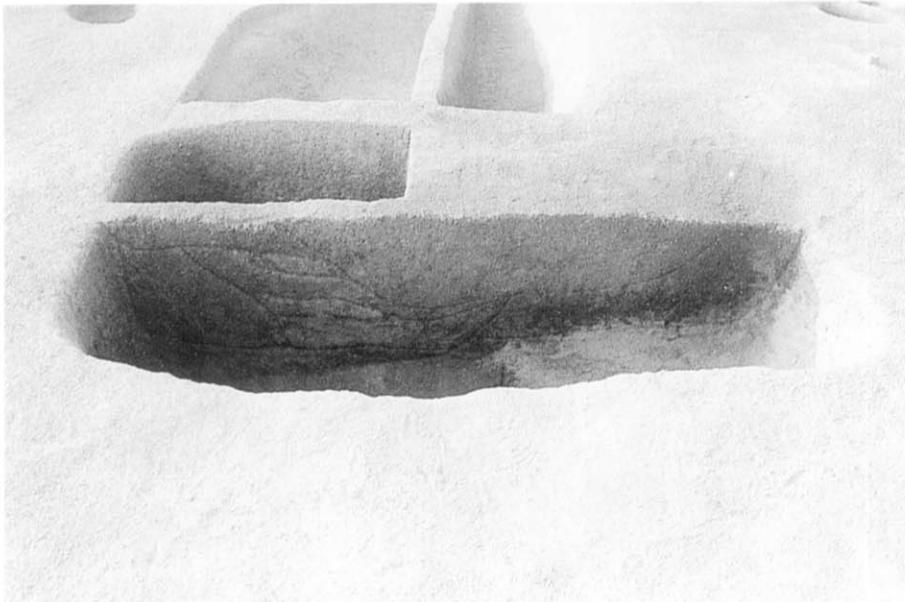
1 4SI140



2 4SI150



3 4SI180



1 4SB050a、4SK045



2 4SK055



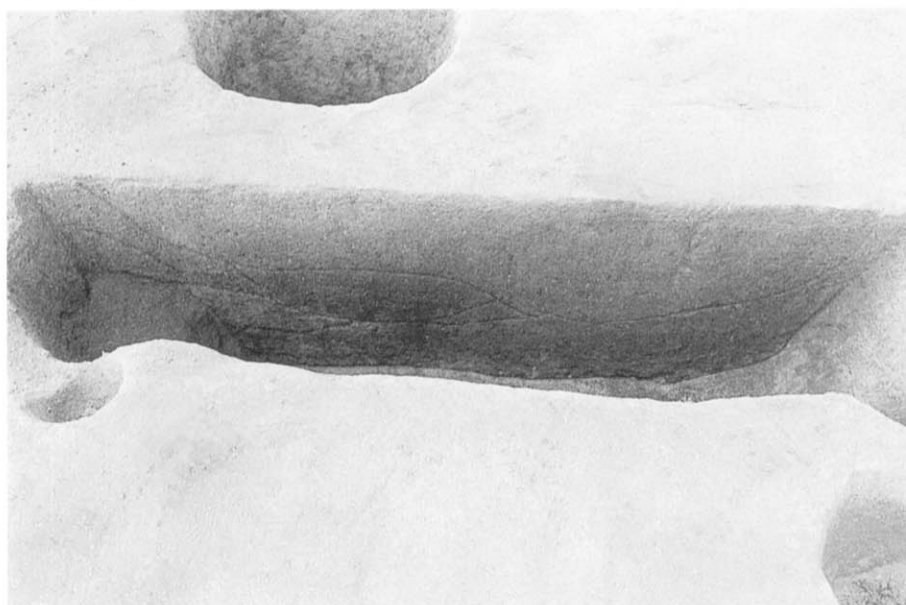
3 4SK055



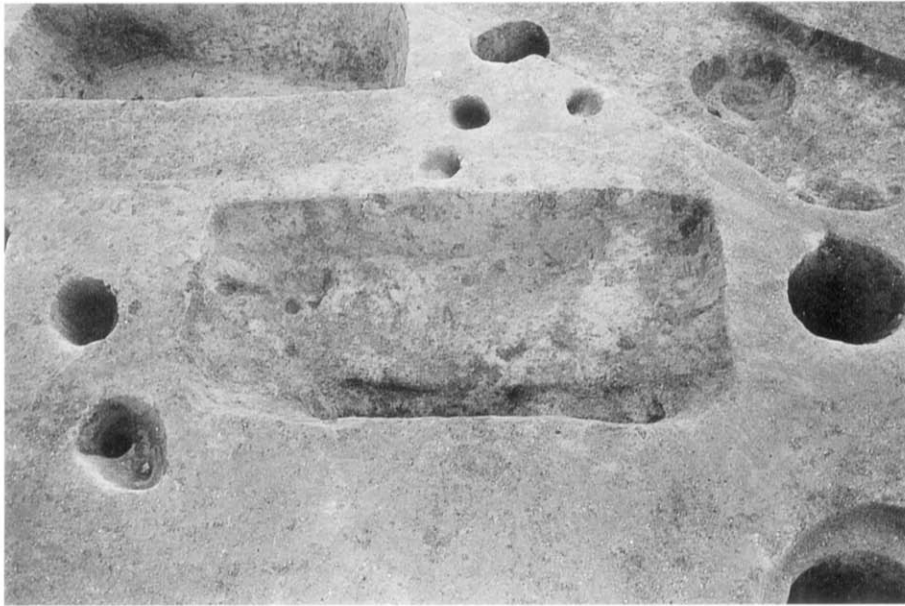
1 4SK074



2 4SK074



3 4SK075 (東から)



1 4SK085 (北から)



2 4SK095 (南から)



3 4SK095



1 4SK105



2 4SK105



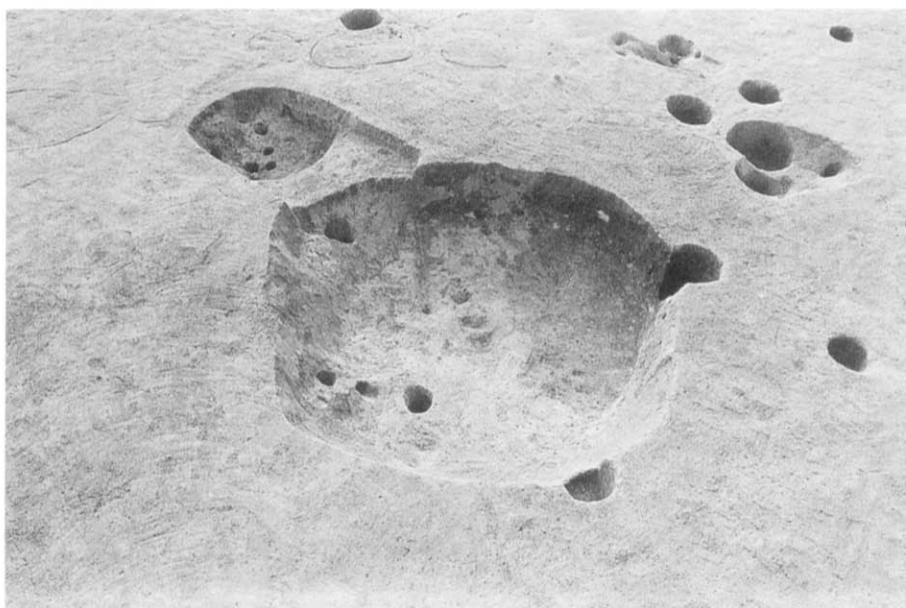
3 4SK105



1 4SK105土層堆積状況1



2 4SK105土層堆積状況2



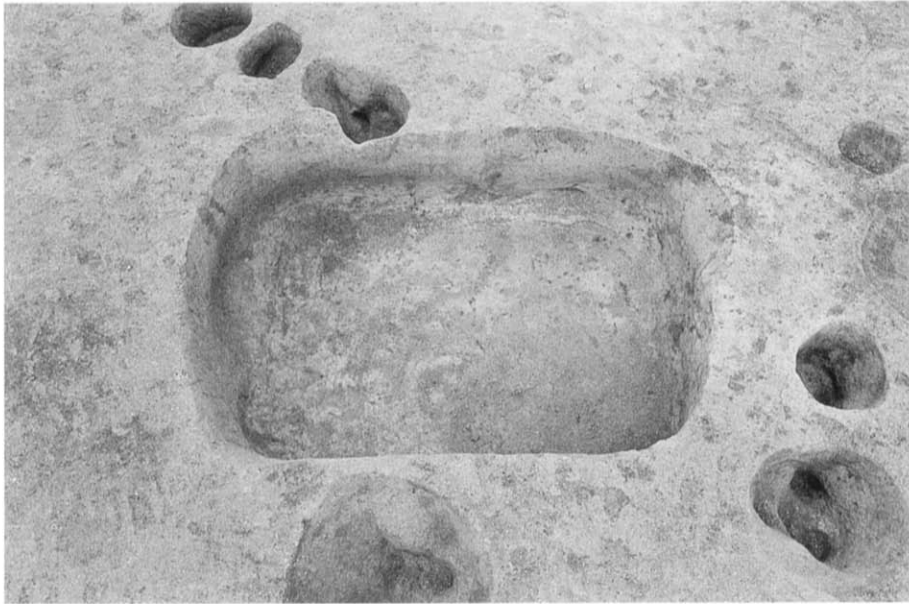
1 4SK107



2 4SK108



3 4SK108土层堆積狀況



1 4SK109 (南から)



2 4SK109土層堆積状況



3 4SK125土層堆積状況 (北から)



1 4SK111土層堆積状況（南から）



2 4SK111



3 4SK155土層堆積状況



1 4SK170、4SK175



2 4SK170



3 4SK170



1 4SK181



2 4SK181土層堆積状況



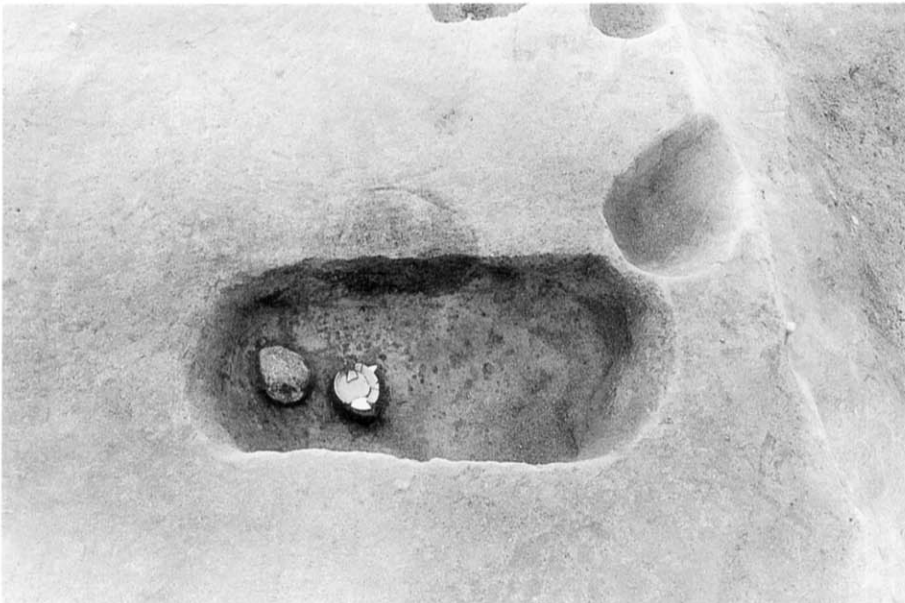
3 4SK182



1 4SK190



2 4SK190土層堆積状況



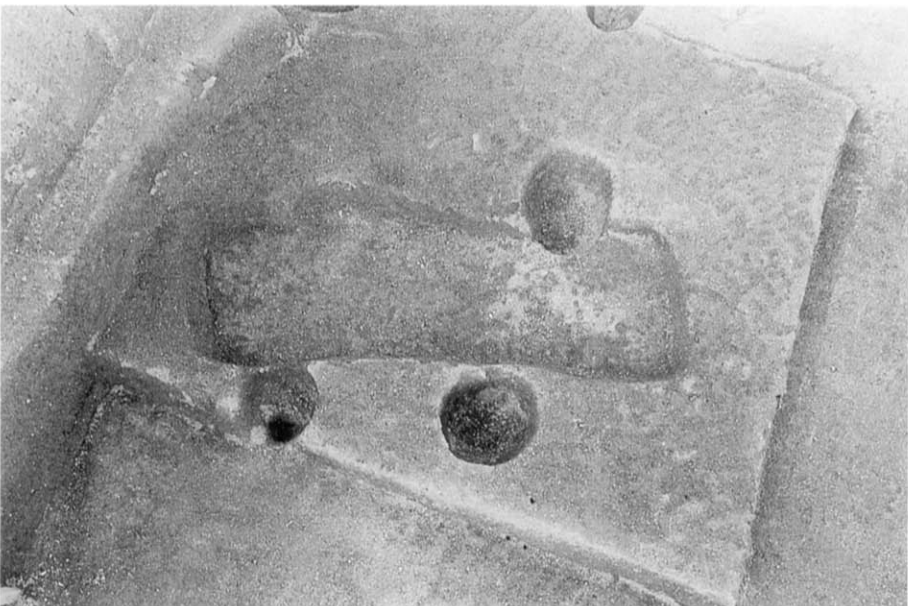
3 4ST065



1 4ST115



2 4ST115遺物出土状況



3 4ST115完掘時



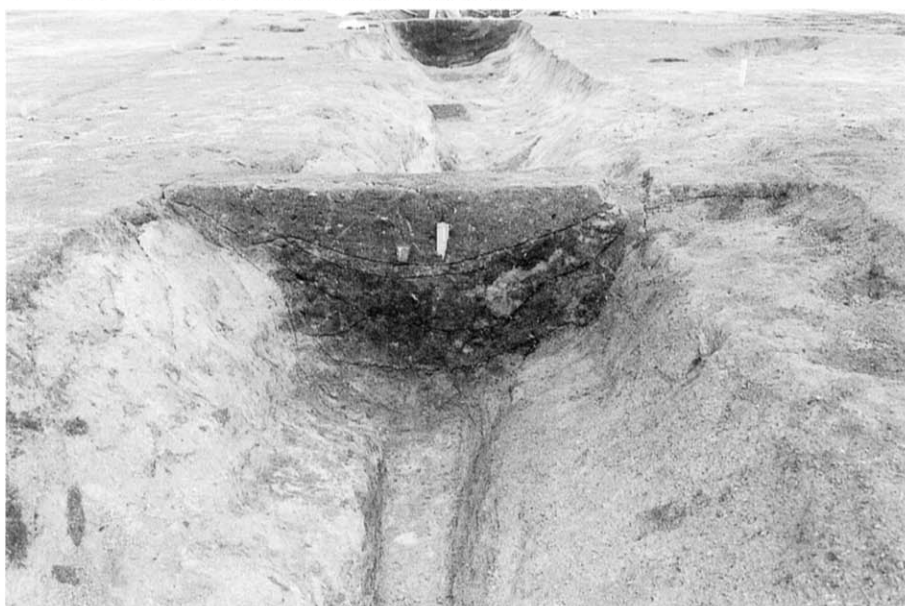
1 4SD001、4SD030 section3土層堆積状況（南より）



2 4SD001、4SD030 section2土層堆積状況（南より）



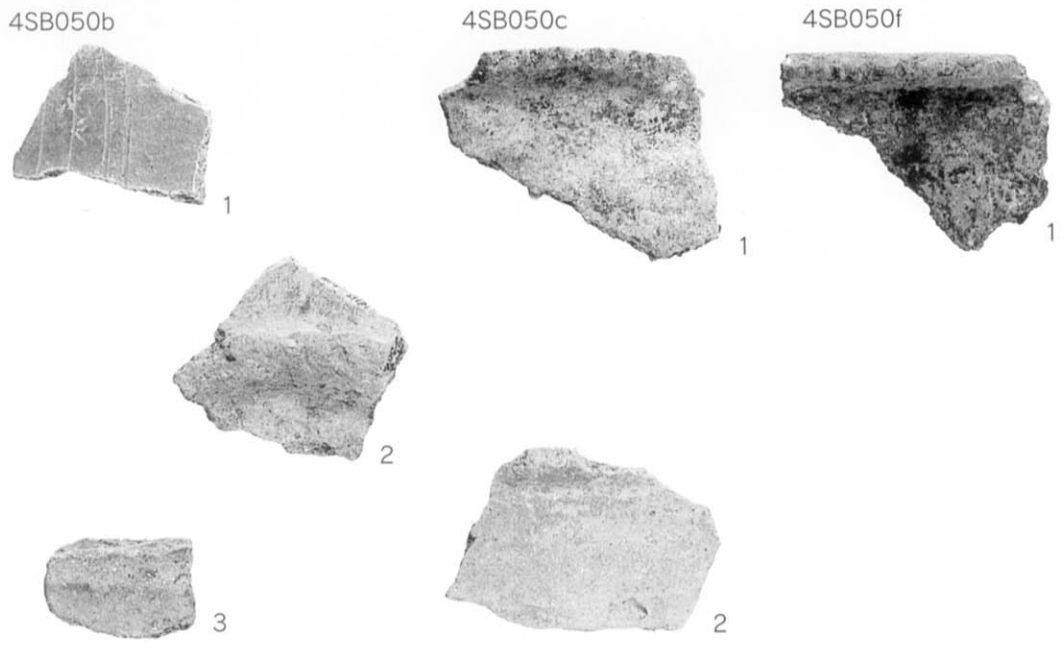
1 4SD100土層堆積状況（南より）



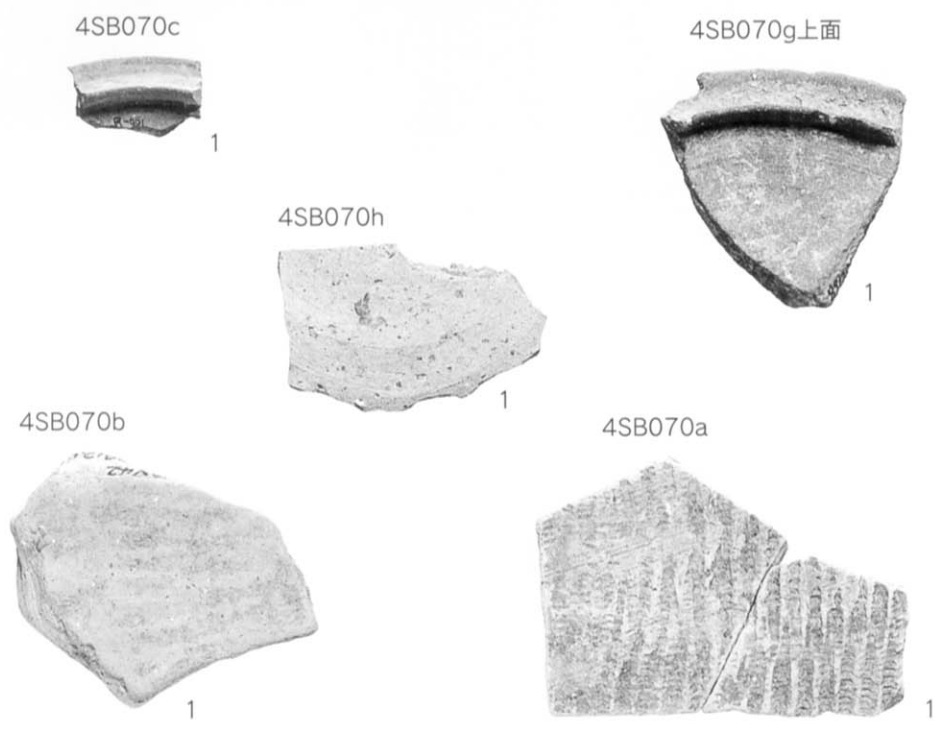
2 4SD100土層堆積状況（南より）



3 4SD100土層堆積状況（東より）



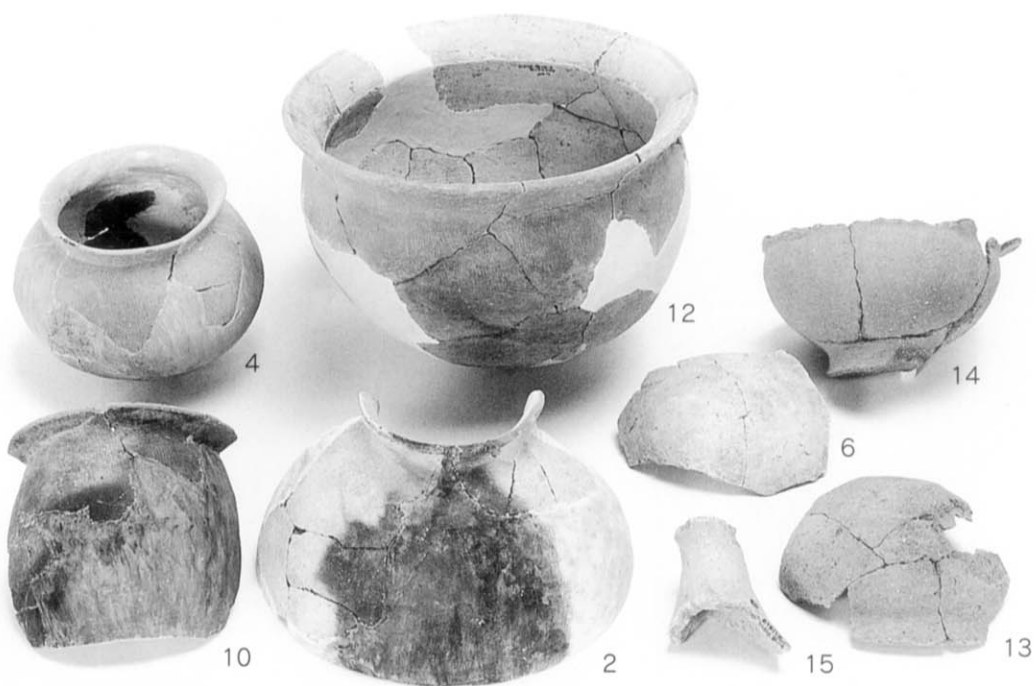
1 4SB050b・c・f出土遺物



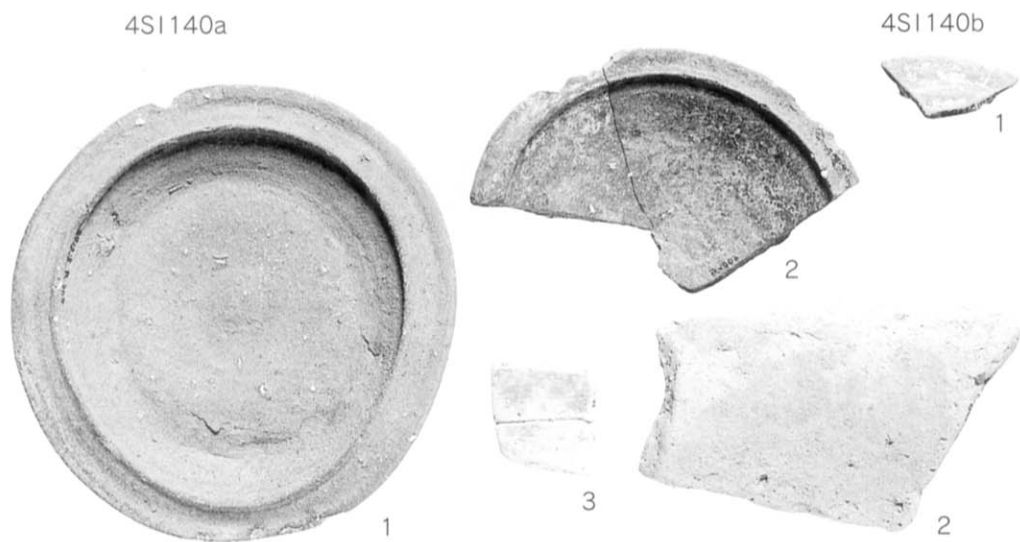
2 4SB070a・b・c・g上面・h出土遺物



1 4SI090出土遺物



2 4SI120出土遺物



1 4SI140a・b出土遺物



2 4SI140a・b出土遺物（裏面）

4SI150暗灰土

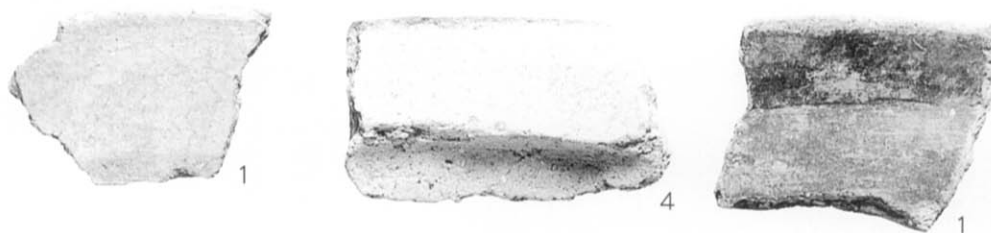


1 4SI150暗灰土・4SI150c出土遺物

4SI035灰褐土

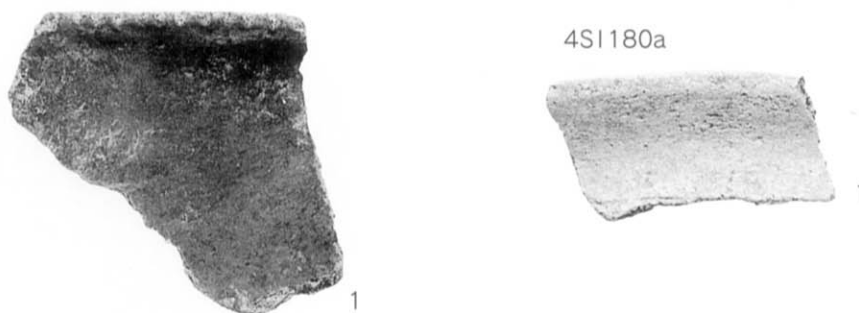
4SK095

4SK105

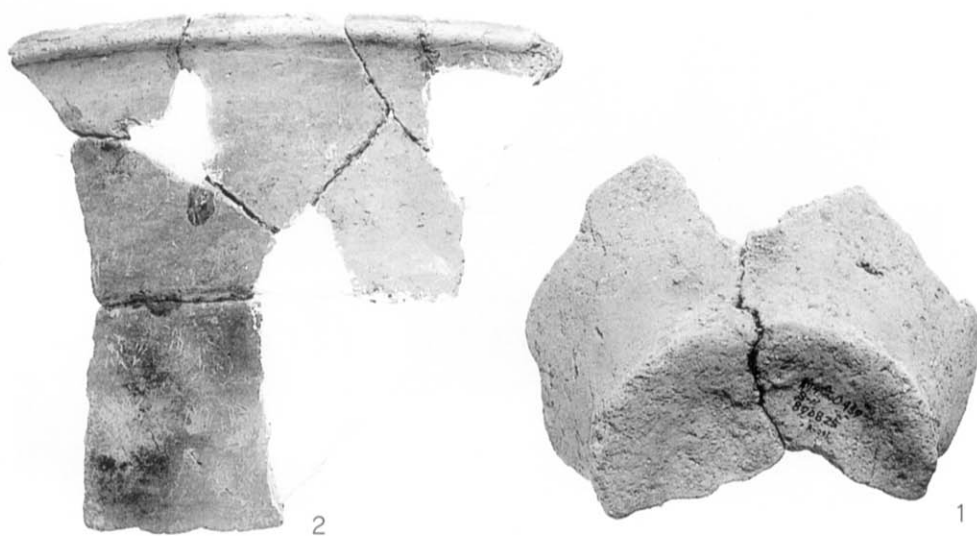


4SI180

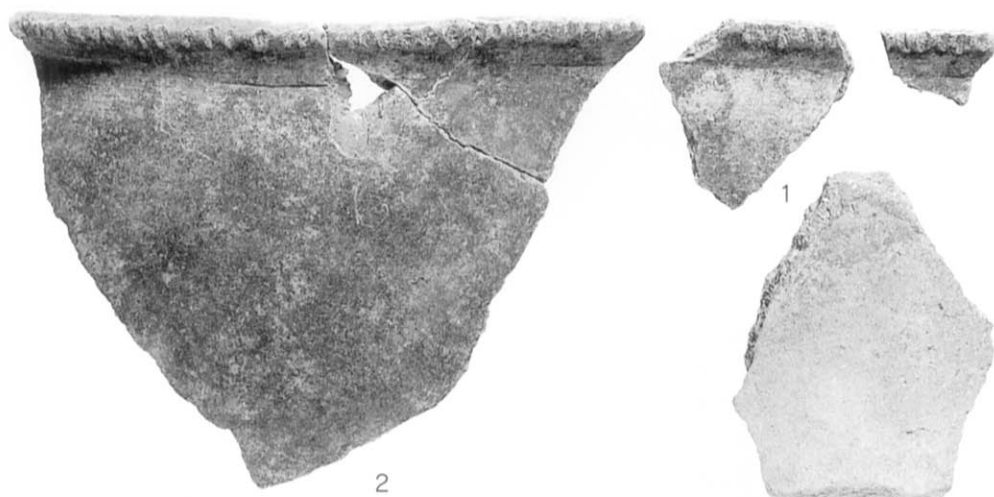
4SI180a



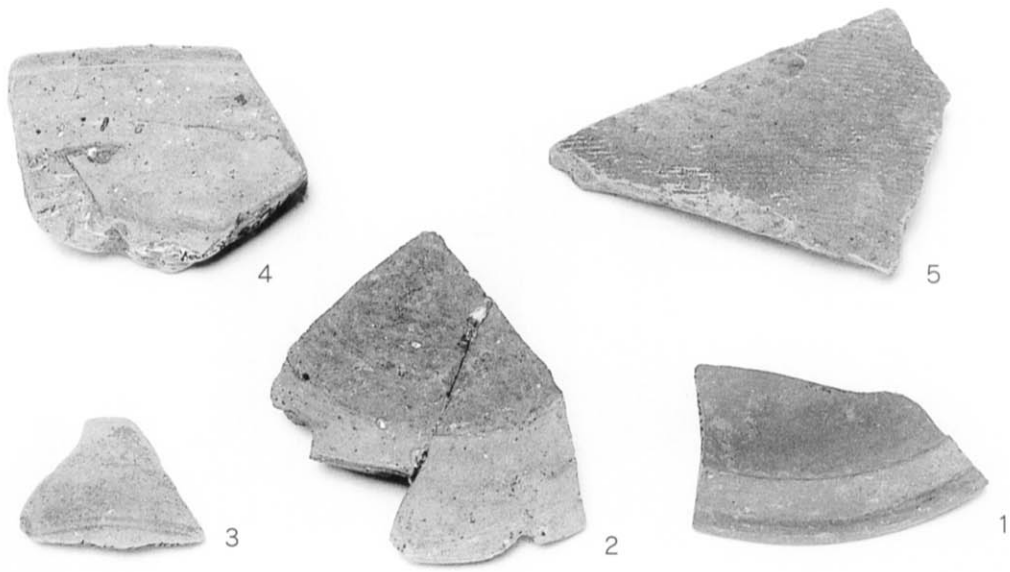
2 4SI035灰褐土、4SI080、4SI180a、4SK095、4SK105出土遺物



1 4SK011出土遺物



2 4SK055出土遺物



1 4SK107出土遺物



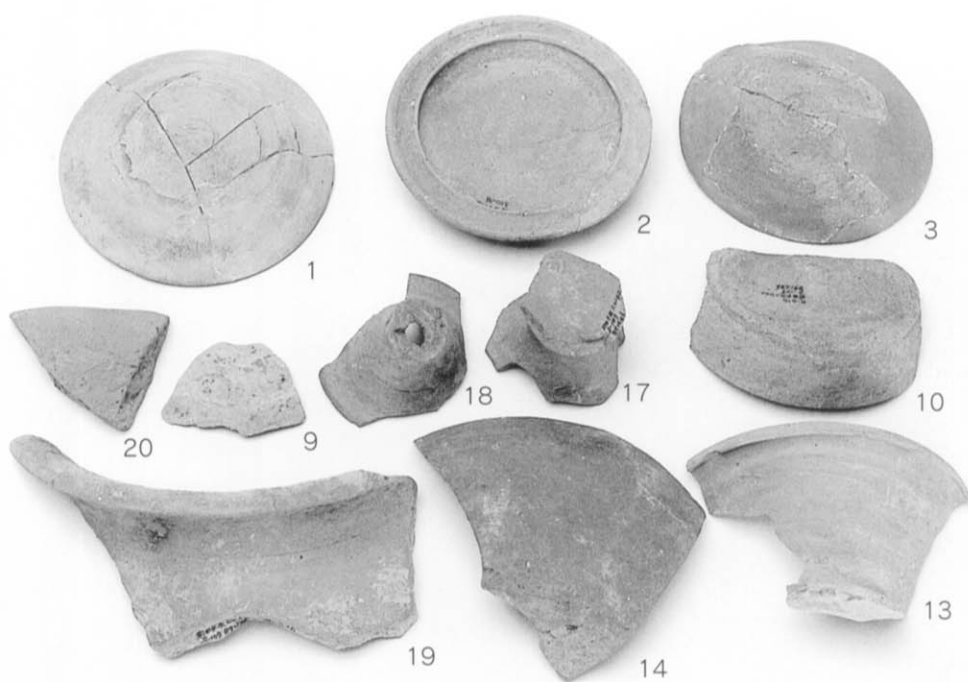
2 4SK108出土遺物



1 4SK111黑灰土出土遺物



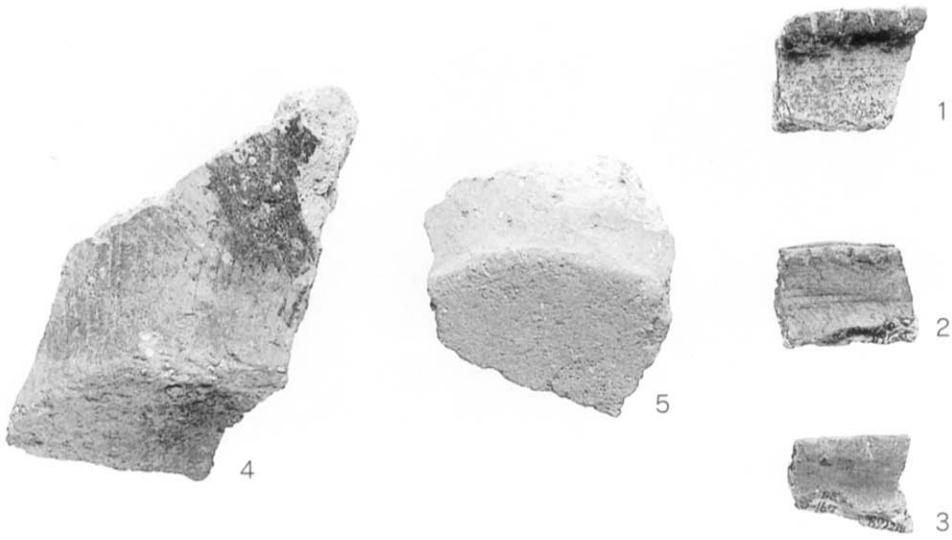
2 4SK111黑灰土出土遺物（裏面）



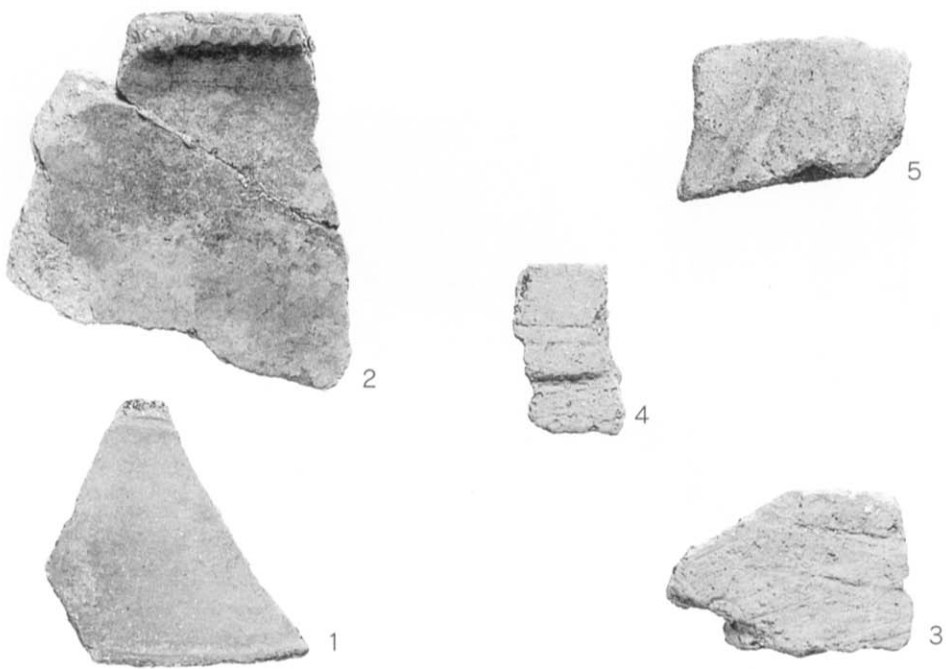
1 4SK109出土遺物



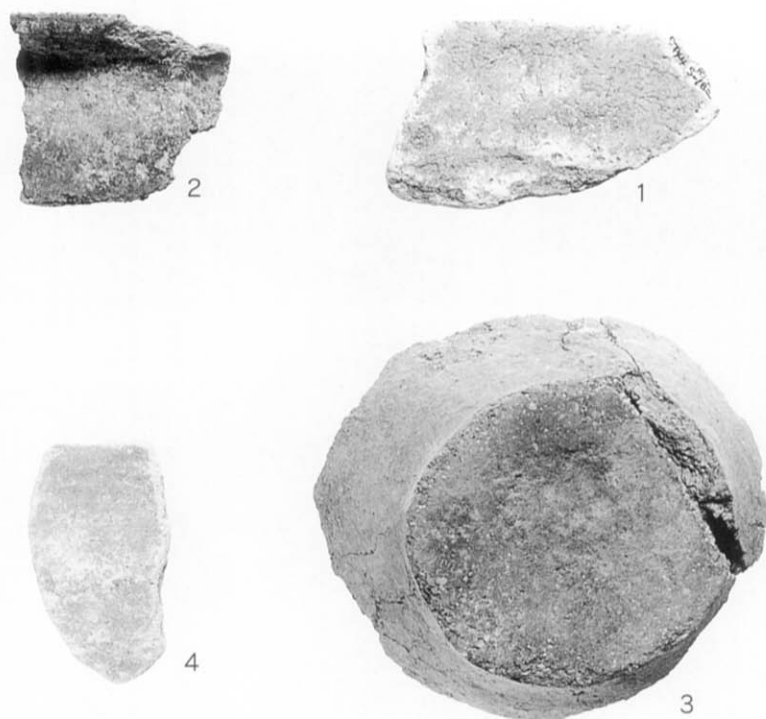
2 4SI150暗灰土出土遺物



1 4SK160出土遺物



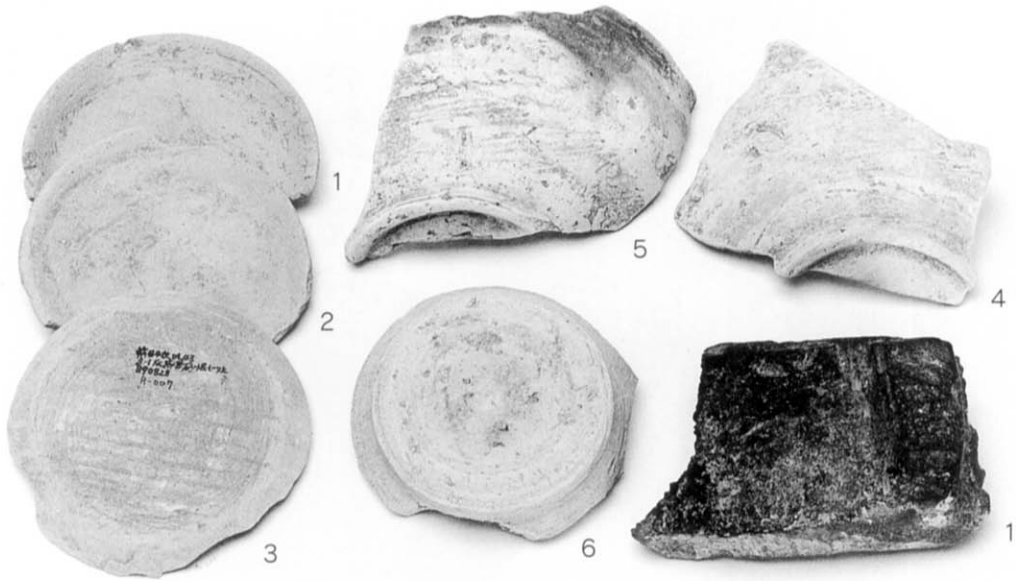
2 4SK170出土遺物



1 4SK182出土遺物



2 4ST065出土遺物



1 4SD001灰茶色砂混土



※土色名ナシは暗茶土

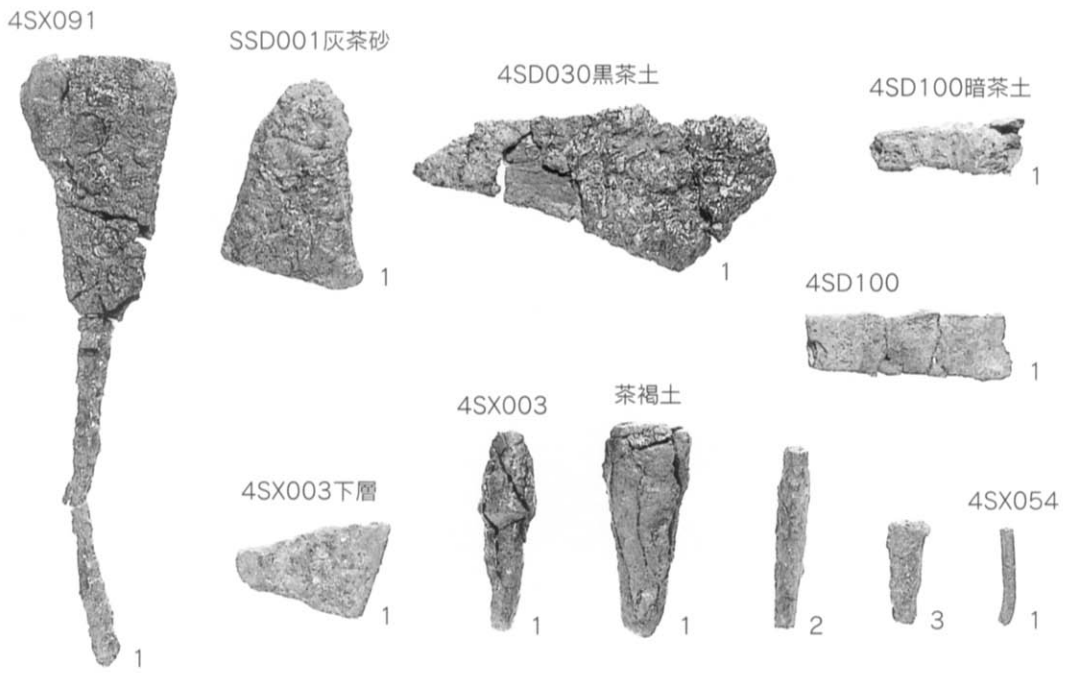
2 4SD100暗茶土・100茶色土・100黒色土・100黒灰土出土遺物



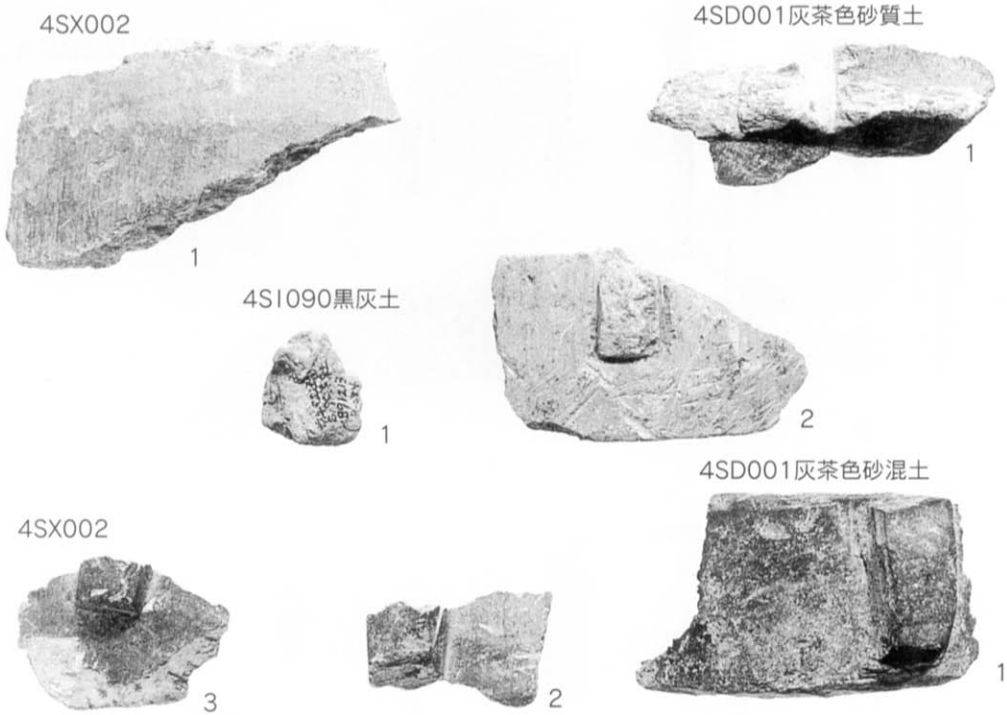
1 4SX106出土遺物



2 4SI080c、4SK109・111茶褐土、4ST115、4SD001灰茶色砂混土・100灰茶色砂質土出土金属製品



1 4SD001 灰茶砂、4SD030 黑茶土、4SD100 暗茶土、4SX003 · 003 下層 · 054 · 091、茶褐土出土金属製品



2 4SI090 黑灰土、4SD001 灰茶色砂混土 · 001 灰茶色砂質土、4SX002 出土石製品



1 茶褐土出土石製品



2 4ST115出土遺物



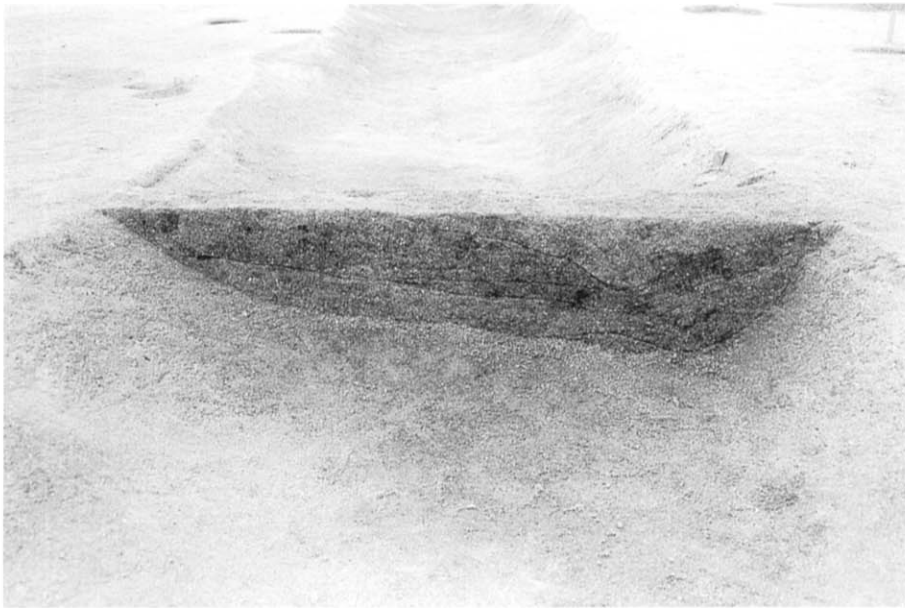
1 前田5次全景 (南より)



2 前田5次西半部



3 5SD100 (南より)



1 5SD001 (南より)



2 5SD100 (南より)



3 5SD100 (北より)



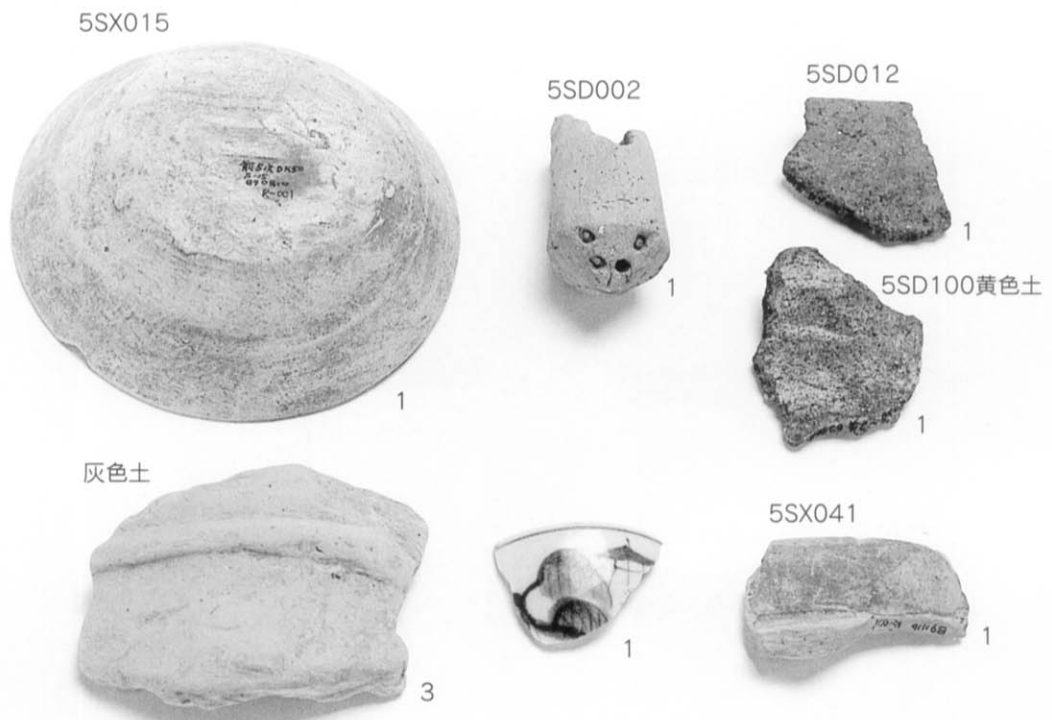
1 5SD002出土遺物



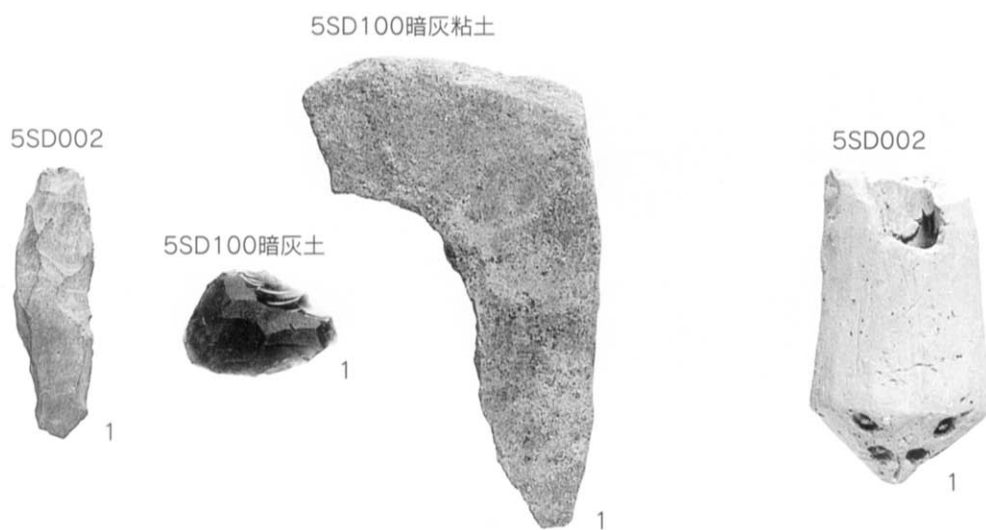
2 5SD100暗灰土出土遺物



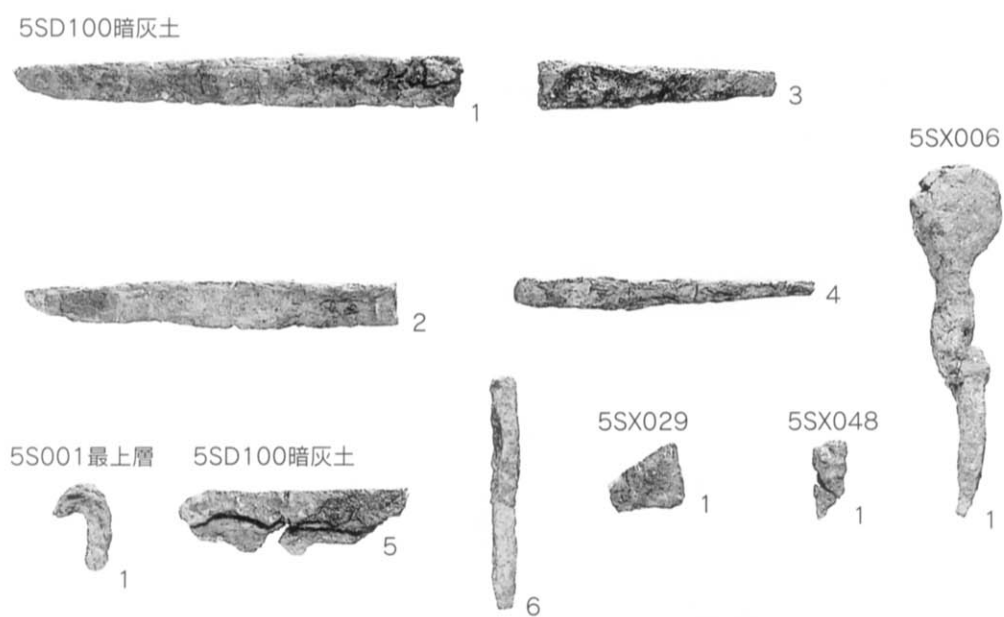
1 5SD001最上層、5SD100暗灰粘土出土遺物



2 5SD002、5SD100黄色土、5SX012·015·041、灰色土出土遺物



1 5SD002、5SD100暗灰土、5SD100暗灰粘土出土石製品



2 5SD001最上層、5SD100暗灰土、5SX006・029・048出土金属製品



1 前田遺跡6次調査全景（東側、右が北）



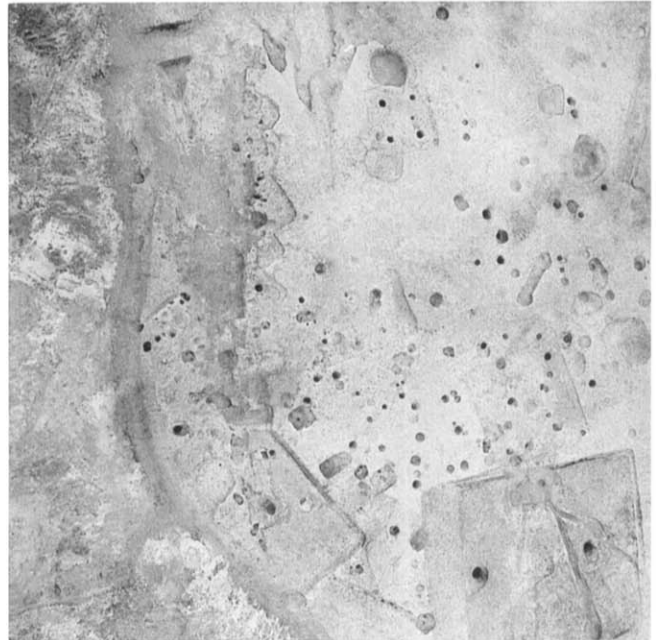
2 前田遺跡6次調査全景（西側、上が北）



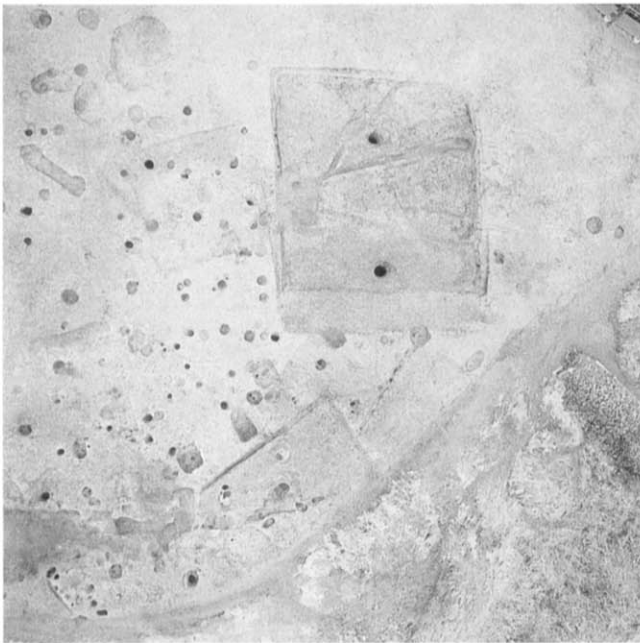
3 6次調査俯瞰（調査区中央付近、右が北）



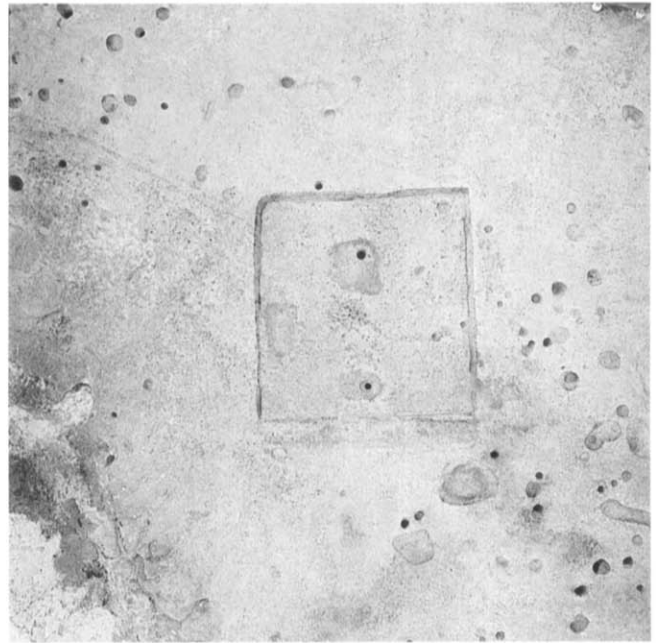
1 6次調査東部 (下が北)



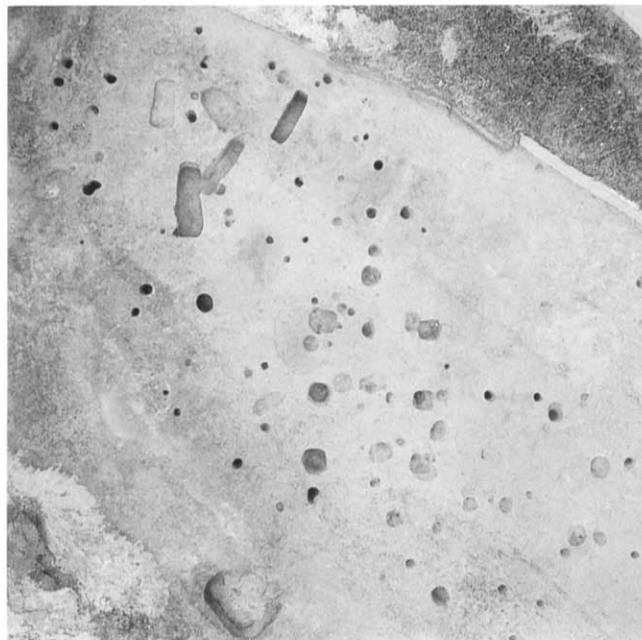
2 6次調査中部 (下が北)



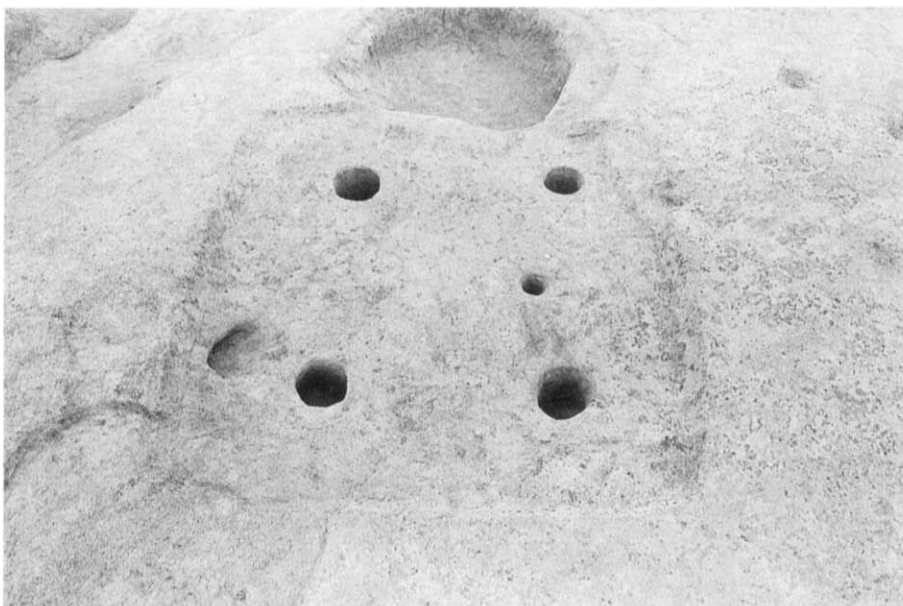
3 6次調査中部 (右が北)



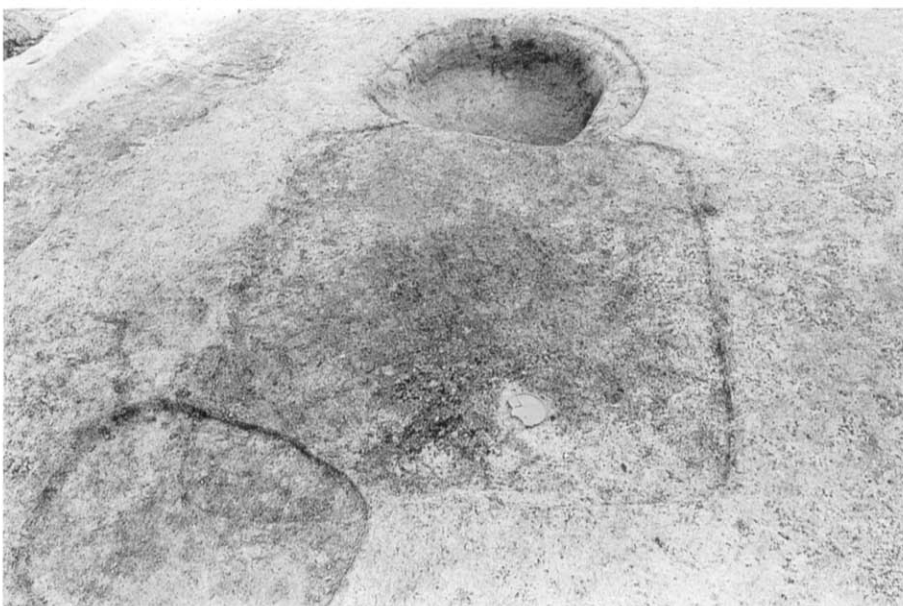
4 6次6S1040 (右が北)



5 6次調査西部 (右が北)



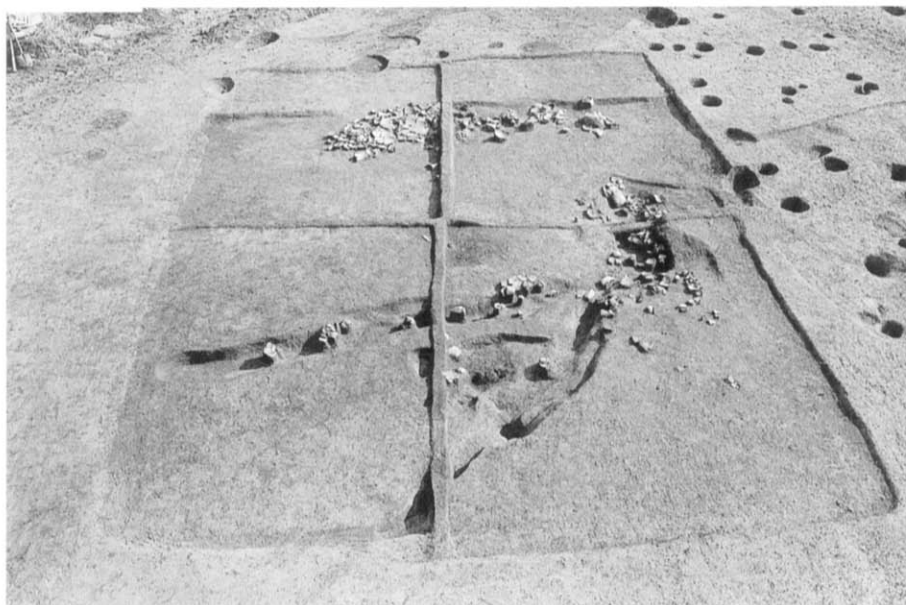
1 6SI007、6SK008



2 6SI007、6SK008



3 6SI030



1 6SI030検出時



2 6SI030主柱穴上遺物出土状況



3 6ST030完掘時



1 6SI040、6SK041

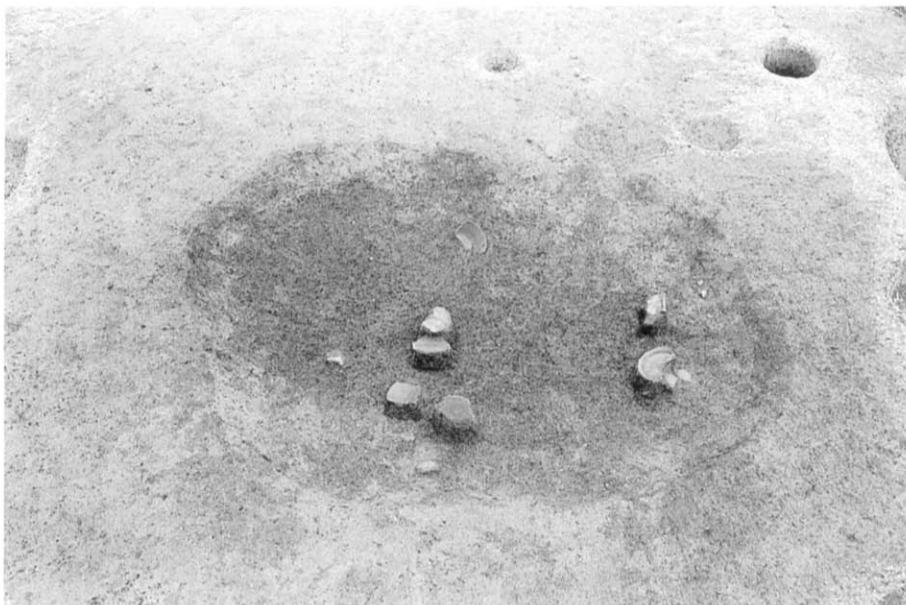


2 6SI035



3 6SK008





1 6SK017



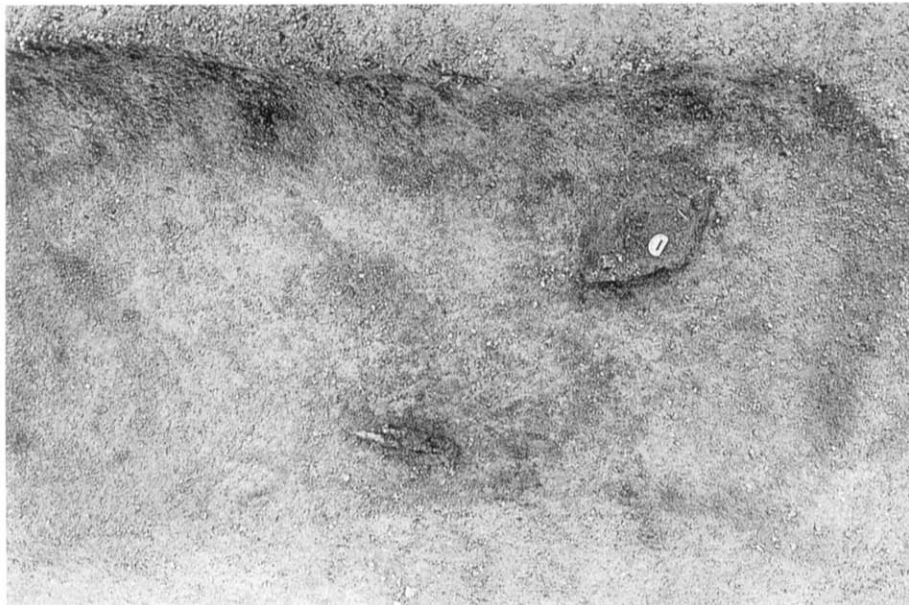
2 6SK025



3 6SK025土層



1 6ST001



2 6ST001遺物出土状況



3 6ST001土層



1 6ST005,010



2 6ST005,010



3 6ST020



1 6SI030土器溜まり出土遺物



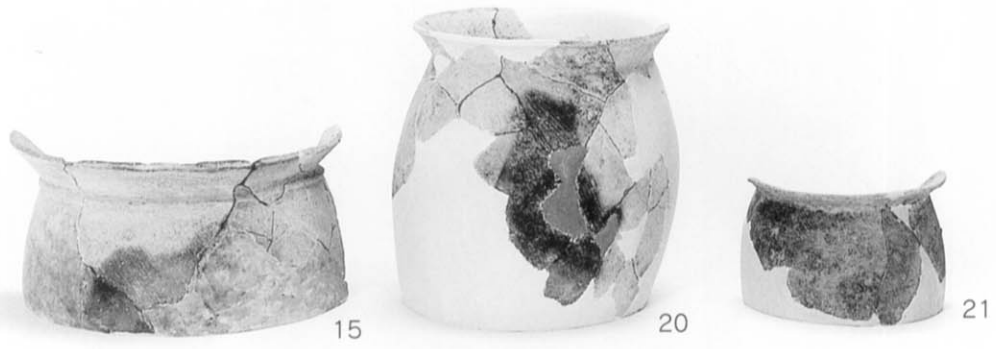
2 6SI030土器溜まり出土遺物



1 6SI030土器溜まり出土遺物



2 6SI030土器溜まり出土遺物



1 6SI030土器溜まり出土遺物



2 6SI030土器溜まり、6SI030茶褐土出土遺物



1 6SI030茶褐土出土遺物



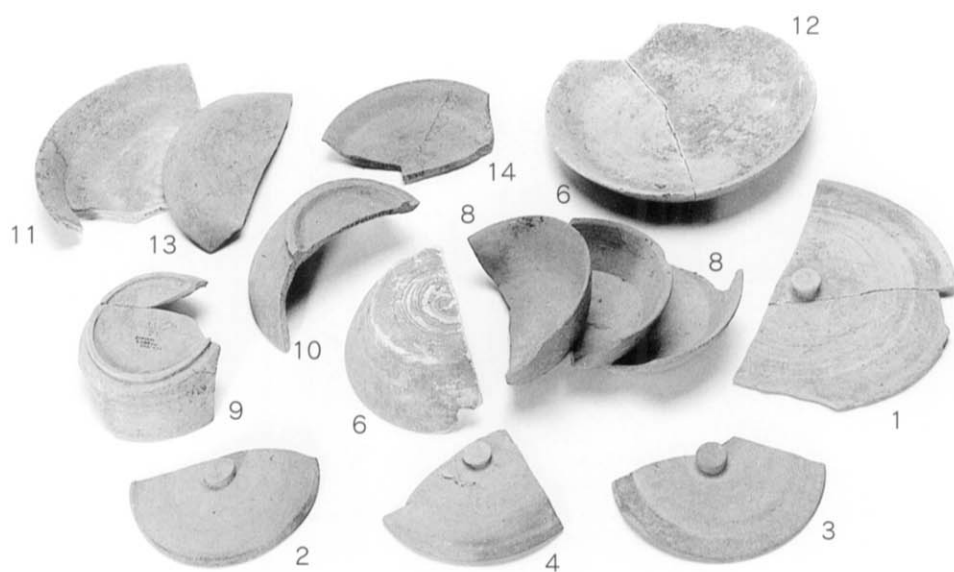
2 6SI030・6SI030土器溜まり出土遺物



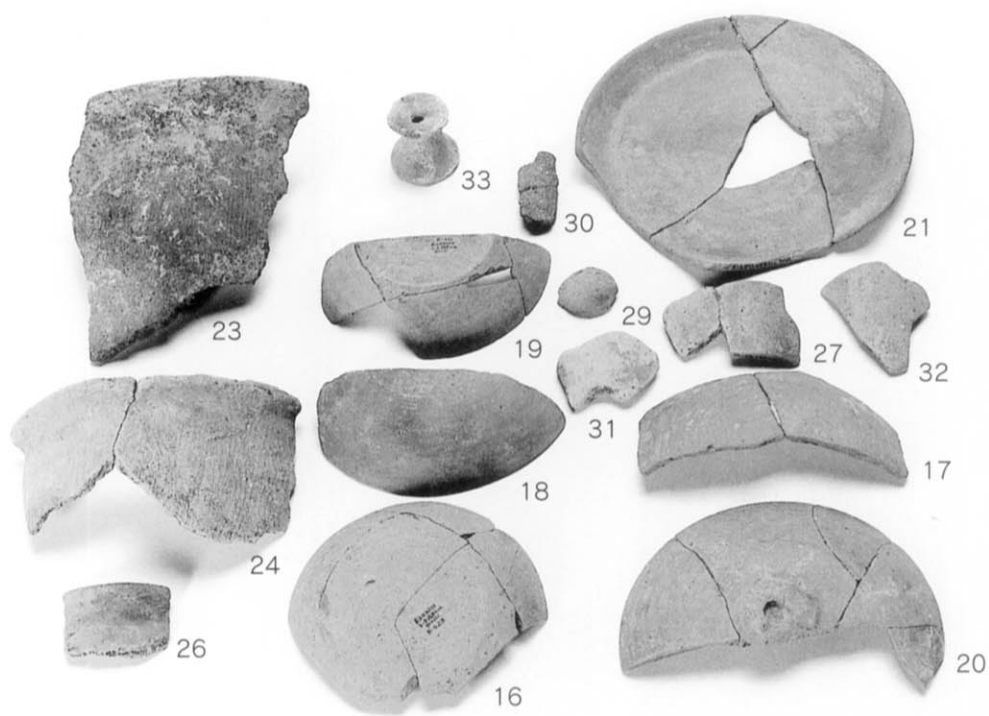
1 6SI040灰褐土出土遺物



2 6SI065出土遺物



1 6SK008暗茶褐土出土遺物



2 6SK008暗茶褐土出土遺物

6SK025暗茶褐土



22

6SK025暗灰砂



1

1 6SK025暗茶褐土、6SK025暗灰砂出土遺物



10

2 6SK041茶褐土出土遺物



1 6ST010出土遺物



2 6ST010出土遺物（裏面）



1 6SD003出土遺物



2 6SD003出土遺物（裏面）



1 6SD063、6SX069、6SX077出土遺物



2 6SX046出土遺物

6SI030茶褐土



6SK008灰褐土



6SK008灰褐土



6SK008暗茶褐土

6SK008灰褐土

6SK008暗茶褐土

6SK008暗茶褐土

6SK008暗茶褐土



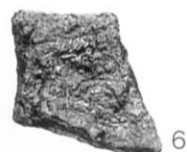
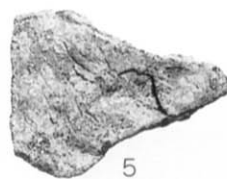
6SK008暗茶褐土



1 6SI030茶褐土、6SK008灰褐土、6SK008暗茶褐土出土金属製品

6SK017茶褐土

6SK025暗茶褐土



6SK025茶褐砂質土

6SK032

6SK033



6ST001



6ST001

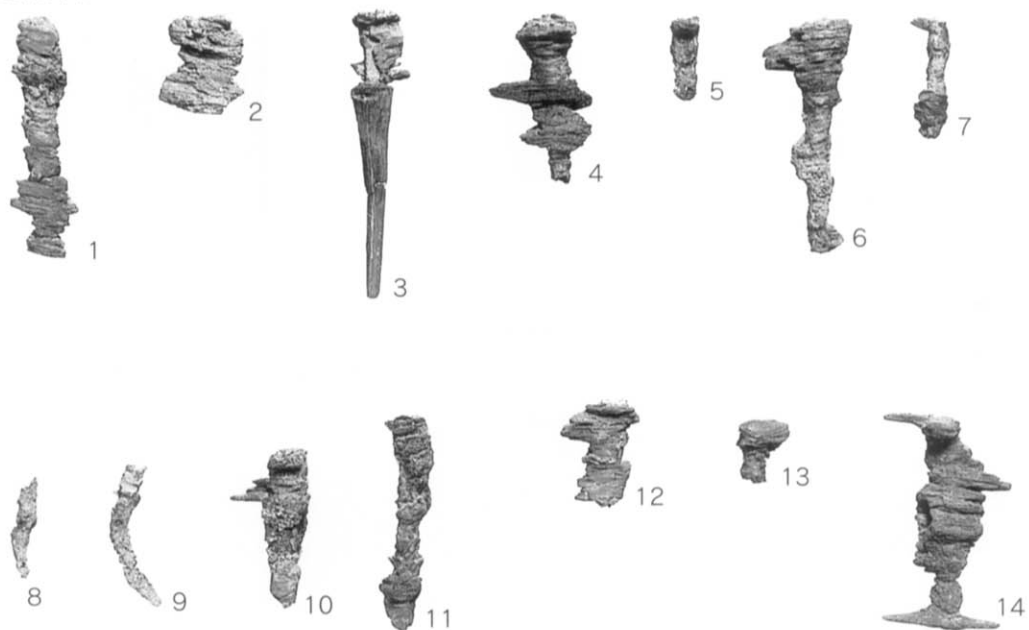


6ST001



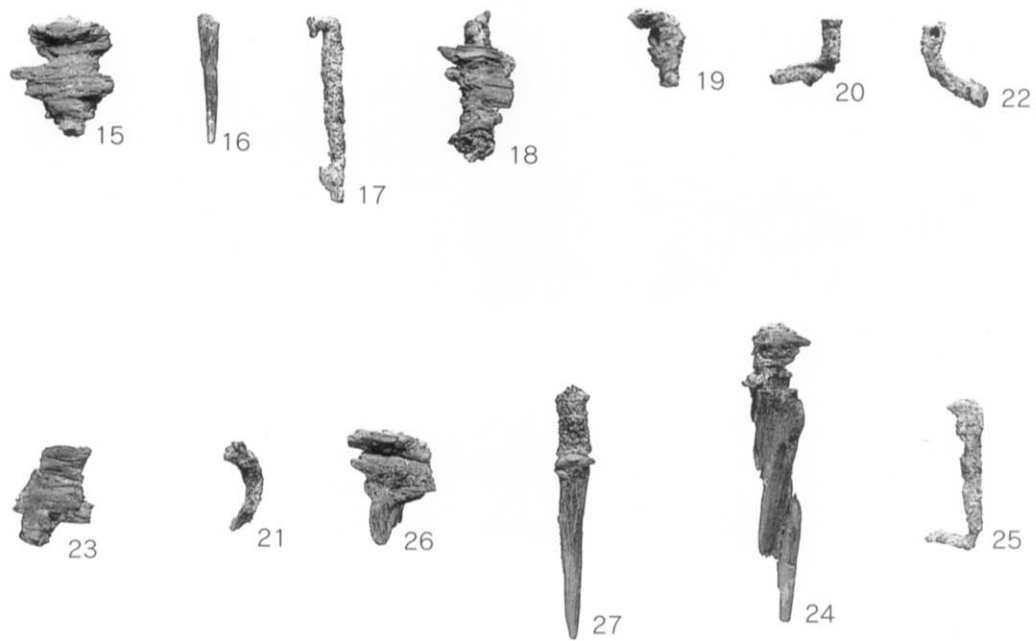
2 6SK017、6SK025暗茶褐土・025茶褐砂質土、6SK032・033、6ST001出土金属製品

6ST010

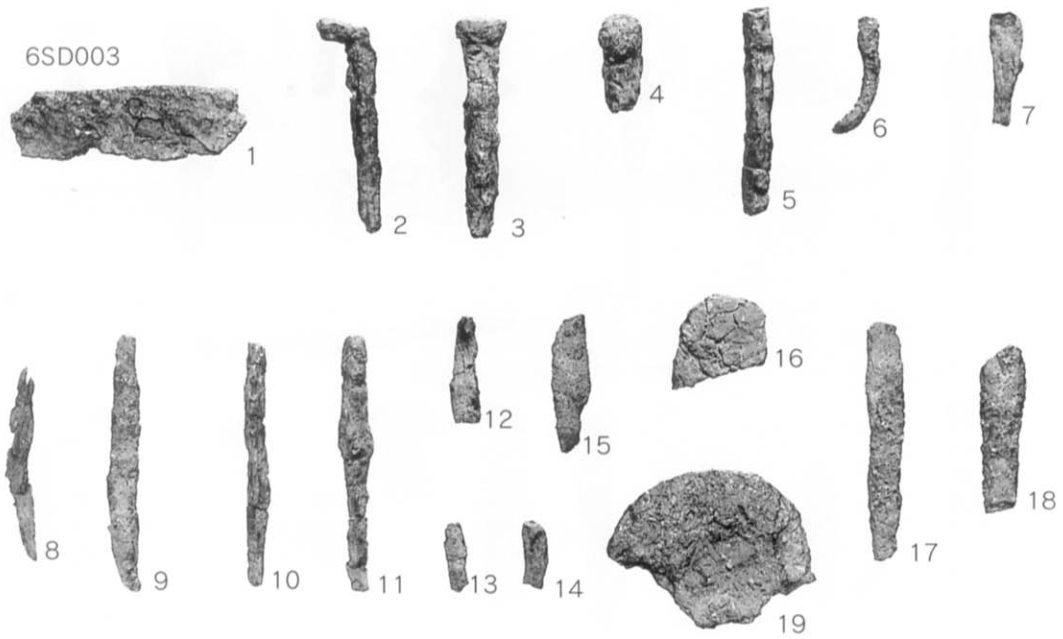


1 6ST010出土金属製品

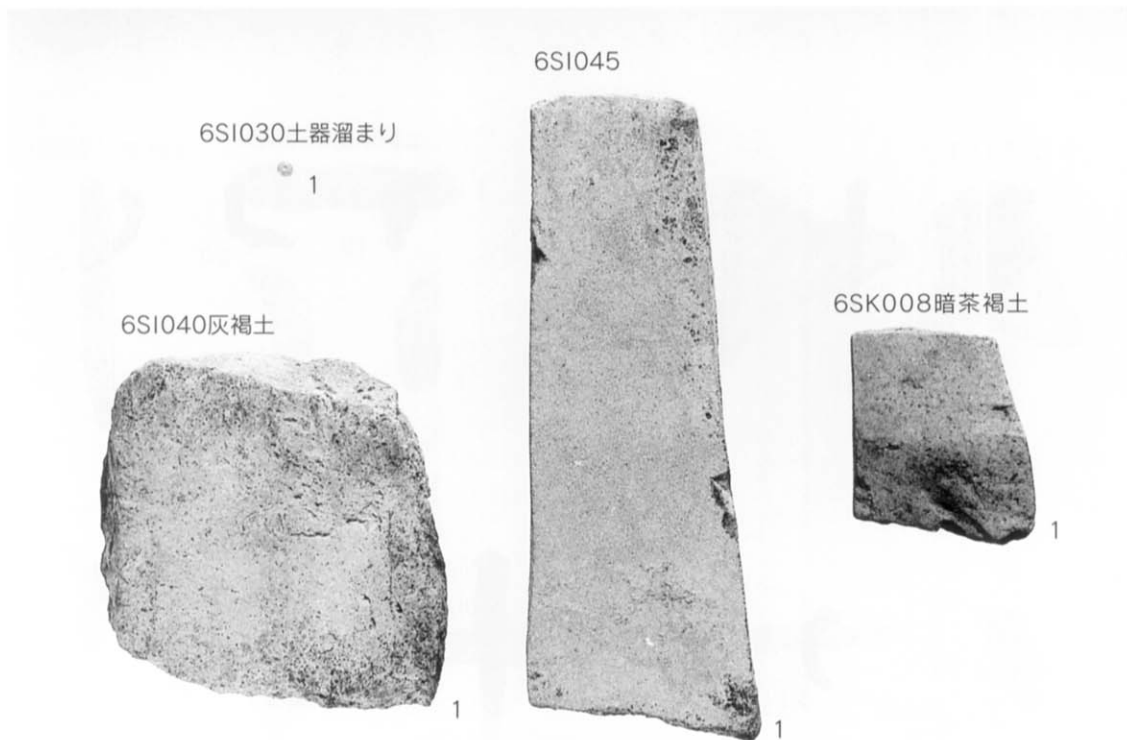
6ST010



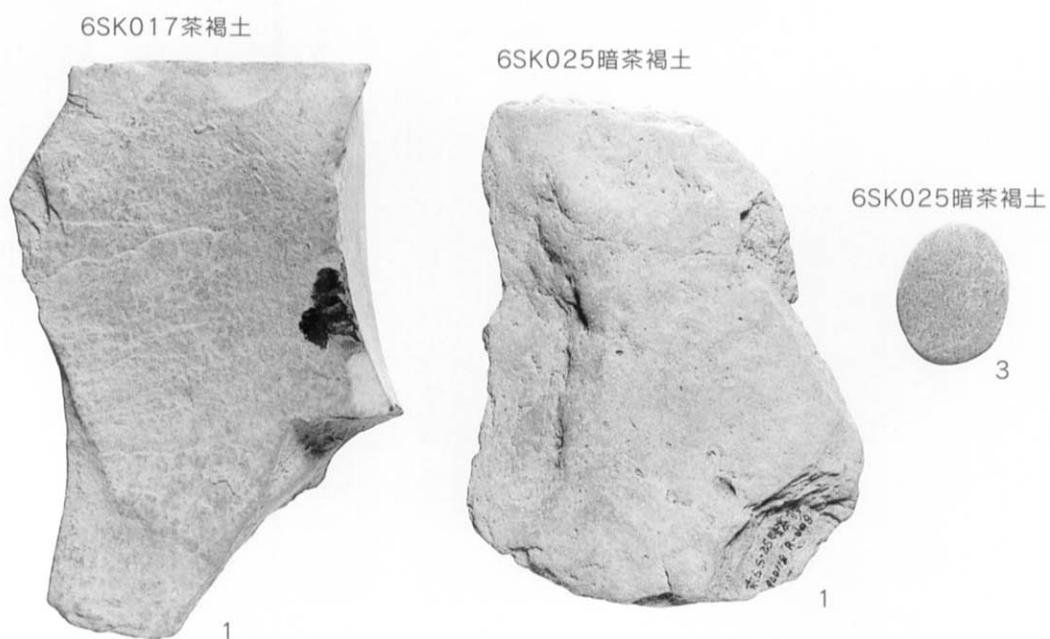
2 6ST010出土金属製品



1 6SD003出土金属製品



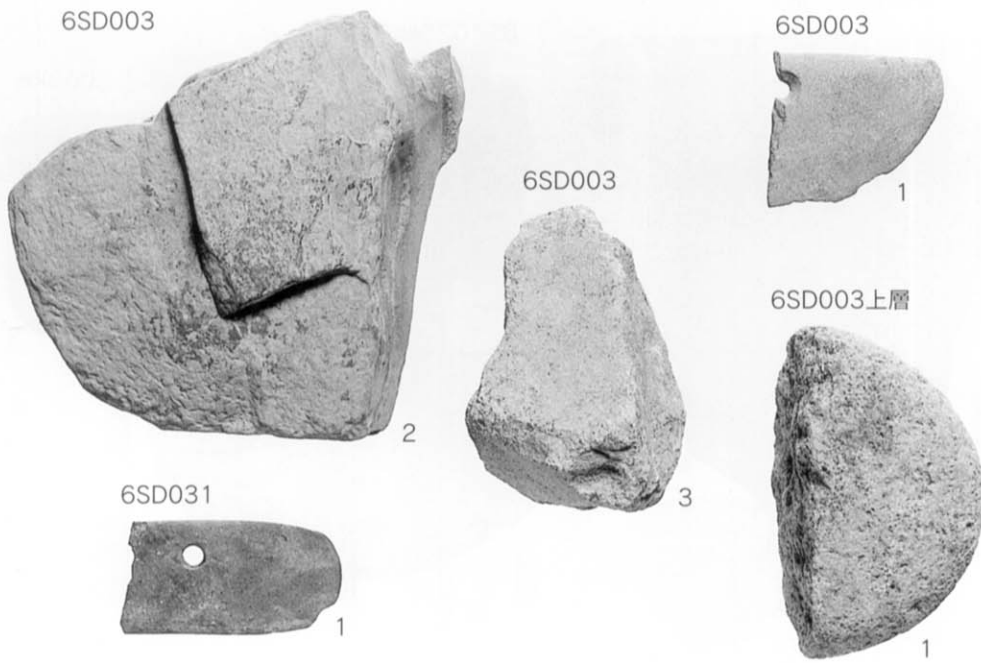
2 6SI030土器溜まり、6SI040灰褐土、6SI045、6SK008暗茶褐土出土石製品



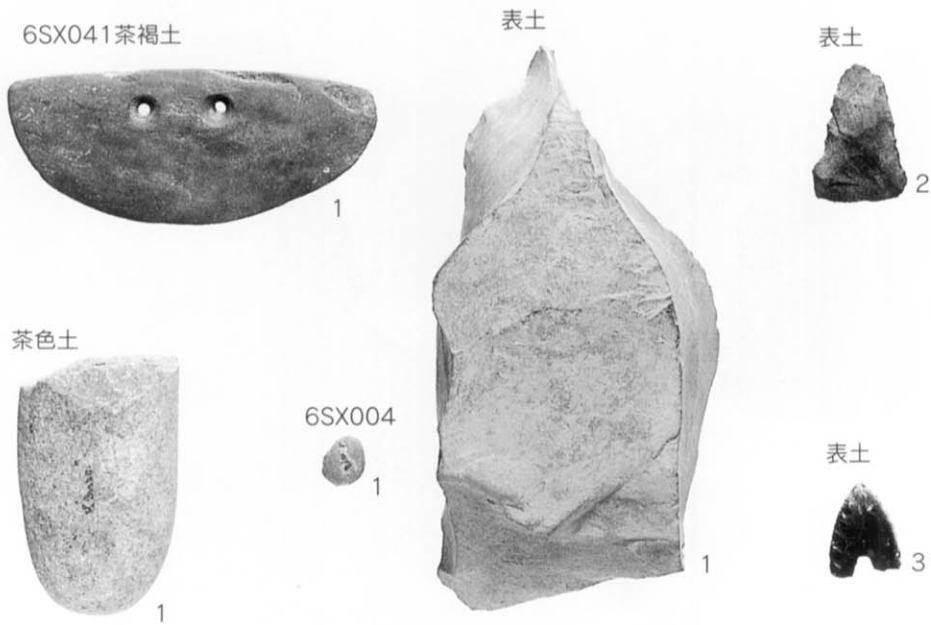
1 6SK017茶褐土、6SK025暗茶褐土出土石製品



2 6SK025暗茶褐土出土石製品



1 6SD003上層、6SD003、6SD031出土石製品



2 6SX004、6SX041茶褐土、茶色土、表土出土石製品

報告書抄録

ふりがな	だざいふ・さのちくいせきぐん								
書名	太宰府・佐野地区遺跡群14								
副書名	前田遺跡第4, 5, 6次調査								
シリーズ名	太宰府市の文化財								
シリーズ番号	63集								
編著者	山村信榮								
編集機関	太宰府市教育委員会								
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号								
発行年月日	2002(平成14)年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
まえだいせき	太宰府市			56040.000	-46420.000	19890803	19900205	4340	区画整理事業
前田遺跡	大佐野452他	402214							
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物			特記事項		
殿城戸遺跡 第7次	集落	弥生、古墳、奈良、 中世	掘立柱建物、竪穴式住居 墳墓、溝、古代官道	弥生土器 須恵器	古式土師器 石器	土師器 硯 鉄製品 瓦	官道は鴻臚館と太宰府を結ぶ		

太宰府市の文化財 第63集

太宰府・佐野地区遺跡群14

前田遺跡4・5・6次調査

平成14(2002)年3月

編集 太宰府市教育委員会

発行 〒818-0198

福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1

印刷 株式会社 三光

〒812-0015

福岡県福岡市博多区山王1丁目14-4

印刷仕様；

画像スクリーン線数 250線

アルミPS版使用

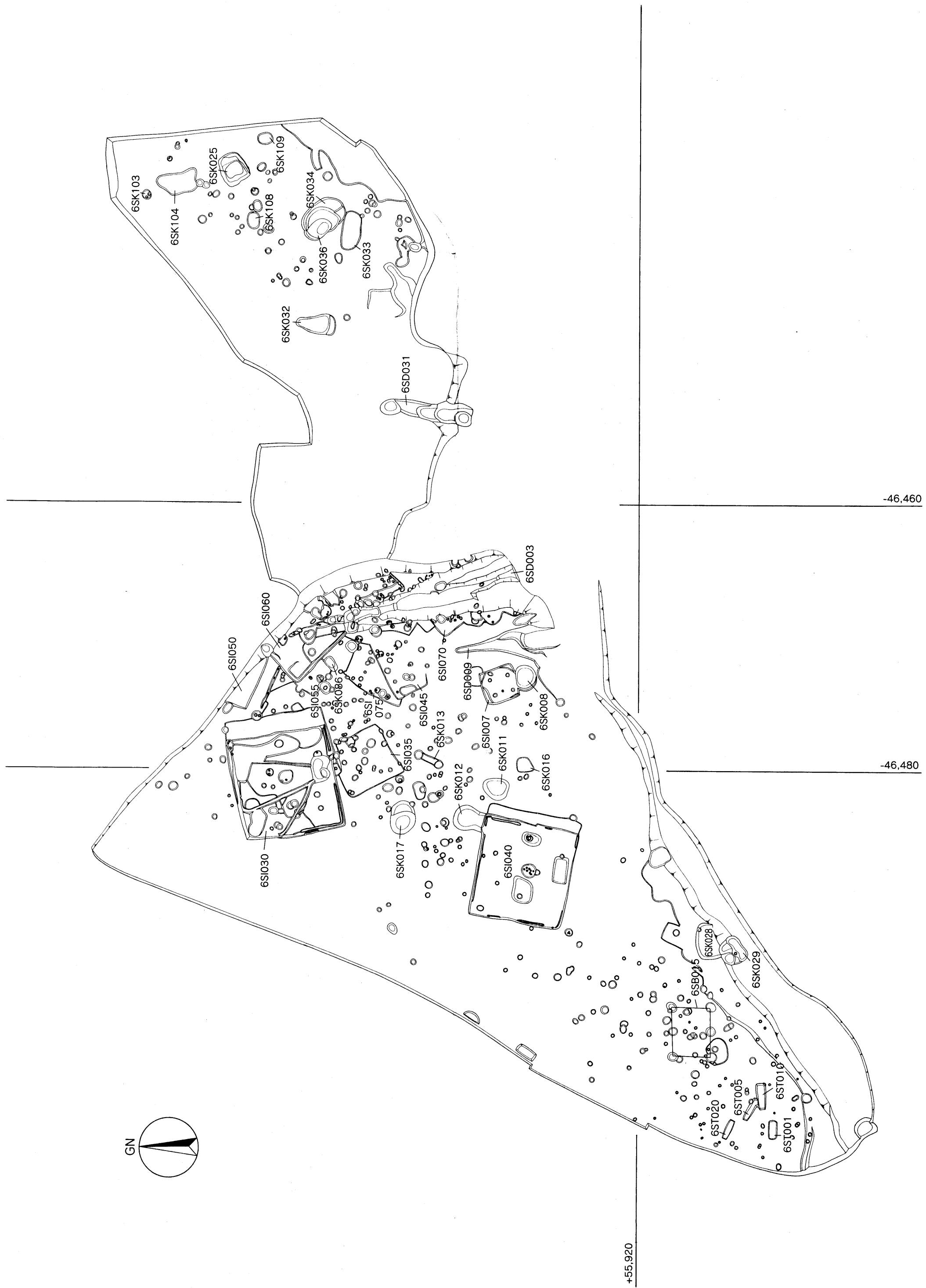
CD-ROM仕様；

Macintosh/Windowsハイブリット版

画像データ書き込みはAcrobat Reader 4.0を使用



付図2 前田5次全体図 (1/250)
 『太宰府・佐野地区遺跡群14』 2002年 太宰府市教育委員会



付図3 前田6次調査遺構全体図 (1/250)
 『太宰府・佐野地区遺跡群14』 2002年 太宰府市教育委員会